

弁天内湖を中心とした
小中の湖（しょうなかのこ）に関する調査研究
- ヒアリング調査を中心として -

松尾 さかえ

環境計画学科環境社会計画専攻において学士（環境科学）の学位授与の資格の
一部として滋賀県立大学環境科学部に提出した研究報告書

2005 年度

承認

指導教員

1. 研究の背景

滋賀県の近江八幡市と安土町、能登川町の周辺には、かつて「大中の湖」「西の湖」「小中の湖」と呼ばれる内湖が存在した。しかし、これらの内湖の大部分は戦中戦後の食糧増産計画に基づく干拓によって消え、現在は大中の湖や小中の湖のそれぞれ一部と西の湖が残っているのみである。

特に小中の湖は1942年、内湖としては滋賀県で最初に干拓されたと言われている。そのため内湖であった当時のことを知る人々の高齢化が進んでいる。また、干拓前の小中の湖のことを記した公の資料はほとんど存在しない。このままでは、かつての小中の湖の様子を知ることがますます困難になっていくと予想される。

2. 研究の目的・意義

本研究の目的は、ヒアリング調査や文献調査などによって干拓前の小中の湖の姿や同内湖周辺における当時の人々の暮らしを明らかにし、干拓によって私たちが失ったものを探り、この研究によって明らかになったことを資料として残すことである。

本研究によって、かつての小中の湖の姿を記録に残すことができれば、干拓前の小中の湖の様子を知る上での貴重な資料になると考えられる。

3. 研究方法

本研究では以下のような方法で調査・研究を行う。

- ・ 小中の湖の様子が記された文献を収集する
- ・ 小中の湖の写真を収集する
- ・ 小中の湖に関する新聞記事を収集する
- ・ 小中の湖の当時の様子を知っている人々へのヒアリング調査を実施する
- ・ 上記の調査から明らかになった小中の湖の姿を項目ごとに整理する

4. 本研究でいう小中の湖

本研究で言う「小中の湖」とは、地元の人々が「弁天内湖（べんてんないこ）」（または「弁天湖（べんてんうみ）」）と「伊庭内湖（いばないこ）」と呼んでいた範囲を合わせたものである（図1参照）。（ここでいう伊庭内湖とは、現存する伊庭内湖と異なるので注意が必要である。）

ただし、本研究では弁天内湖を中心に調査を実施し、伊庭内湖についてはわかった範囲でまとめることにする。

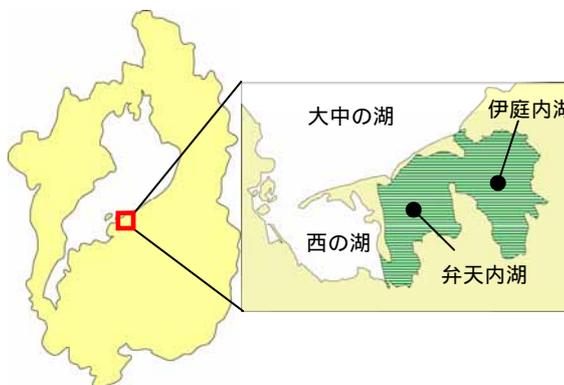


図1 小中の湖の位置と研究対象範囲（横線部）

5. 調査結果

(1) 文献資料の収集

小中の湖や同内湖干拓工事に関する文献や資料を収集した。収集の対象期間は干拓前の昭和初期から干拓工事完成までとした。その結果、「琵琶湖干拓史」や「滋賀県の地名」など全部で23件の文献と資料を収集することができた。また関連した新聞記事を35件収集することができた。その他、ヒアリングの際にヒアリング対象者から「きぬがさ百話」や「葎の詩」などの文献を5件収集することができた。また、小中の湖に関する写真としては17点を収集することができた。

(2) ヒアリング調査

本研究では安土町下豊浦と能登川町伊庭在住の、のべ17人（14人）に対してヒアリング調査を実施した。14人中12人が下豊浦の住人となり、下豊浦に偏った結果となった。能登川や北須田、南須田の住人に対するヒアリング調査は実施できていない。

以下、文献調査とヒアリング調査の結果、明らかになった干拓前の小中の湖の姿と同内湖周辺の人々の暮らしの様子をまとめる。

(3) 小中の湖の物理的諸元

位置・大きさ

小中の湖は、琵琶湖の東岸のほぼ中央部に位置し、表面積は342.1 ha、西の「西の湖」と北の「大中の湖」とともに、かつて琵琶湖周辺で最大の内湖群を形成していた。内湖のほぼ中央には南から突起した安土山があり、この安土山によって小中の湖は西の「弁天内湖」と東の「伊庭内湖」に二分される形になっていた。

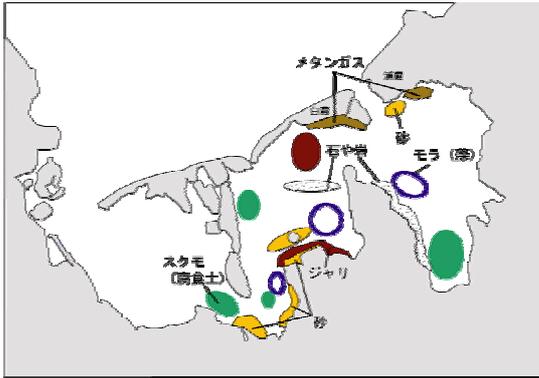


図2 小中の湖の湖底環境

水質と湖底環境

小中の湖の水質は、舟の上から湖底を覗くと泳いでいる魚や湖底の貝や小石、生えている藻が見えるくらいきれいだった。

小中の湖の湖底は、集落に近い石垣や湖岸付近が砂や砂利で、それ以外はほとんど泥地だった。また、「スクモ」と呼ばれる腐食土が堆積しているところと「モラ」または藻がとれるところが弁天内湖には数箇所、伊庭内湖は全域に渡って存在した。また、メタンガスの発生している場所もあった(図2参照)。

小中の湖は全体的に浅く、深い場所で2m、浅い場所では60~70cm くらいの水深だった。

弁天内湖には「弁天島」と呼ばれる離れ小島があった。弁天島にむかう途中には急に深くなっている所があり、下豊浦の人々はそこを「ツボ」と呼んでいた。

風向き

弁天内湖に吹く風は夏と冬とで違っていた。夏の朝は南西の風が吹き、夕方からは北東の風へと変わった。冬の初めには、西風が吹く。この西風は、3日から一週間後には北風へと変わる。これを「北返し」と下豊浦では呼んでいた。北返し風のはともきつく、北返し吹くと雪が降った。他にも、夜にだけ吹く西風があり、それを「夜西(よにし)」と呼んでいた。

一方、伊庭内湖には北風がよく入った。

(4) 小中の湖および周辺の自然環境

流入河川と切り通し

小中の湖に流入していた主な河川としては、下豊浦と伊庭のヒアリング対象者たちが「安土川」「北出川」「妙金剛寺川」と呼んでいた3本の川があった(図3参照)。

また、切り通しと呼ばれた内湖をわかつ砂洲の切れ目としては、図3に示すように3箇所があった。このうち、巴の切り通しには「中の江」、苔の切り通しには「コケ」という名前がついていた。下豊浦の人が西の湖へ行くときには、江ノ島と巴の間にある2つの切り通しを使っていた。また、大中の湖へ出るときはこれら切り通しから一度西

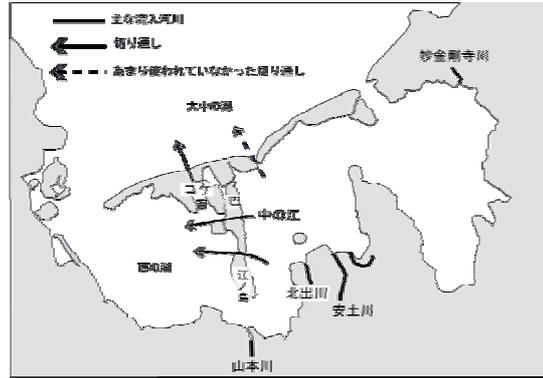


図3 小中の湖の主な流入河川と切り通し

の湖に出て、それから「コケ」を通って行ったという。

内湖生態系

弁天内湖の周辺と伊庭内湖の周囲にはヨシが群生していた。また、ヨシ島にある田んぼの周辺には、いたるところに木陰を作るための柳の木が植えられていた。水中ではコウガイモやホテイアオイを、伊庭の集落を流れている伊庭川ではバイカモを見ることができた。

内湖は水鳥の生息地や魚の生育の場としての機能を果たしていたことから、小中の湖でも様々な鳥や貝、魚を見ることができた。見ることでできた鳥類としては、ヒアリング対象者からオオヨシキリやキジ、バン、カイツブリなど38羽を確認することができた。

貝類としては、ヤマトカワニナやモノアラガイ、オオタニシ、マシジミ、セタシジミ、イシガイ、ササノハガイ、イケチョウガイ、メンカラスガイ、マルドブガイ、ドブガイの11種類を確認することができた。ただし、これ以外にもタニシ科のナガタニシとヒメタニシ、イシガイ科のオバエボシガイとマツカサガイ、オトコタテボシガイ、タテボシガイも小中の湖にいた可能性が高い。

魚類はナマズやハゲギギ、カネヒラ、アブラボテなど27種類の魚を確認することができた。他にも「ウロリ」と呼ばれていたヨシノボリの稚魚が春から夏にかけて小中の湖に入ってきていたようである。

(5) 小中の湖周辺の人々の暮らしと生業

弁天内湖と伊庭内湖の境界

弁天内湖は下豊浦の集落に、伊庭内湖は伊庭と能登川、北須田、南須田の集落に属しており(図4参照)、境目であった安土山の地先には、両内湖の境界を示す簾が張られていた。

この場所のことを下豊浦の人々は「フナゴシ」と呼んでいた。フナゴシには簾は張られていたが、その上部は切られており田舟が通れるようになっていた。そのためそう呼ばれていた。

この「フナゴシ」について下豊浦のヒアリング対象者は「コイの養殖をしていたため、下豊浦の

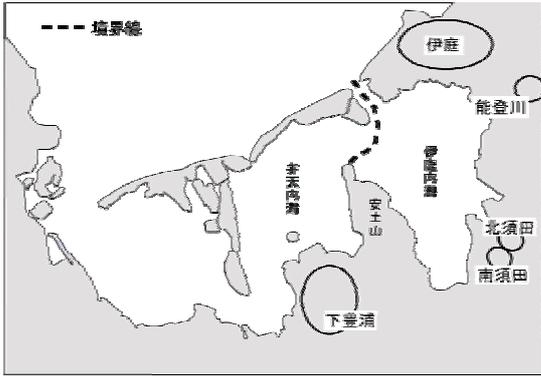


図4 弁天内湖と伊庭内湖の境界と周辺の集落

漁師は伊庭内湖には入れなかった」と記憶している。ところが、伊庭でのヒアリングではそのことを確認することができなかった。おそらく、コイの養殖をしている伊庭内湖に下豊浦の漁師が入れば、コイを盗みに来たのではないかと警戒されることを恐れて、下豊浦の漁師が自分たちで行かないように心がけていたのではないだろうか。

小中の湖につながる水路と田舟

下豊浦と伊庭の集落の中には、水路と川が縦横に走っていた。特に、伊庭は昔、伊庭氏が城を構えた時に城堀として水路が作られたことから、水路が基盤の目のように走っていた。そのため田舟は生活の必需品であり、どの家でも2~3艘を持っていた。特に伊庭には、500艘もの田舟があり湖東第一を誇っていたという。伊庭の人たちは田舟を水路につくられたカワトという場所に停めていた。

内湖周辺の漁業

下豊浦で漁師をしていたヒアリング対象者から聞いたことを中心に、小中の湖での漁業の一年を表1にまとめる。

小中の湖では1月にタタキ漁とヨシ巻き漁、漬柴漁が営われていた。

魚の勢いが強くなる3月頃には、タタキ漁と方法がよく似ている「ネバイ」を行う。

魚の産卵期である5月になったら、ヨシの端の浅瀬で産卵する魚の通り道にタツベやモンドリを仕掛ける。

初夏(7月)から8月には竹の筒を沈めて、主に大中の湖や西の湖でウナギをとっていた。

秋(9月~10月)になったら春に行っていたネバイを再開する。そして、11月頃になると、またタタキ漁を始める。他にも、田んぼが終わるお正月前には「貝引き」といって貝をとっていたという。

表1 漁業の一年

1月	2月	3月~4月	5月~6月
タタキ漁		ネバイ	タツベ(梅雨まで)
ヨシ巻き漁			モンドリ(梅雨まで)
漬柴漁			
7月~8月	9月~10月	11月~12月	
ウナギつかみ	ネバイ	タタキ漁	

漁業としては、表1に示したものの以外にも魩やヒガイとりなど一年中できた漁もあった。他にも「禁漁区」と呼ばれ、漁をしてはいけない区間が弁天内湖にはあった。前述したように伊庭内湖ではコイの養殖をしていた。

小中の湖の漁法ごとの主な漁場を図5に示す。

小中の湖周辺でとれた天然資源

小中の湖の湖底ではスクモと呼ばれる腐食土やモラ(藻)、メタンガスなど天然資源をとることができた。

スクモは夏(8月)の朝から田舟に乗って「スクモとり」に行った。とってきてはおむすびぐらいの大きさに丸めて、田んぼの際にあった石垣の上に並べて干しておく。その乾いたものを冬に代用燃料として使っていた。

「モラとり」または「藻とり」は、8月のまだ朝の暗い時からお昼くらいまでとりに行っていた。田舟が沈みかけるくらいたくさんとり、石垣の中段に作ってある藻塚に積み上げる。そして冬まで寝かせて腐らせ、春先に田んぼや畑に肥料としてまいたという。この「モラとり」または「藻とり」は当時「採藻競技」(モラとり競技)が行われるほどであった。

小中の湖周辺に住む人々の水利用

小中の湖周辺に住んでいた人々は直接小中の湖から水を汲んだりしなかった。各家庭に井戸があり、そこから水をくみ上げて使用していた。しかし、下豊浦の井戸水は甘かったのに対して、伊庭の井戸水は金気が多かった。そのため、なかには隣同士で共有していた井戸もあったという。

使い終わったお風呂のお湯などをそのまま川に流して捨てるということは決してなかった。使い

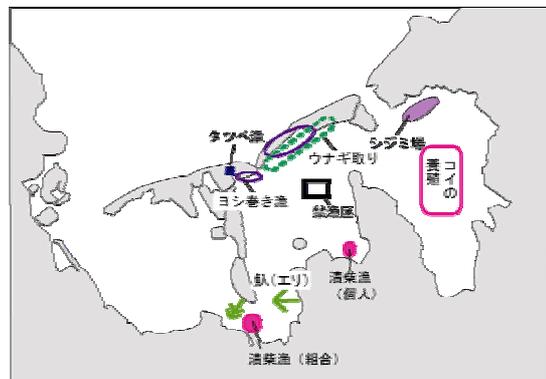


図5 小中の湖の漁法と漁場

終わったお風呂のお湯は下肥を薄めるのに使われていた。そして、お湯で薄めた肥を畑や田んぼに肥料として使っていた。

小中の湖にまつわる伝説

安土山の岬を「獅子鼻」という。ここには「獅子鼻の亡霊」という伝説があった。それは、安土城が炎上したときに内湖に飛び込んで自害した人たちの火の玉が出る、というものだった。そのため舟を漕ぐのに使っていた竹竿は、竹の節ぎりぎりで切るのではなく、節から少し間をとって切ったものを使っていた。それには理由があり、火の玉が出た時には火の玉を竿の中に入れて手でふたをする。すると火の玉は消えるというのだった。

小中の湖の祭事

弁天内湖にあった弁天島には福島弁才天が祭ってある。下豊浦の集落では毎年8月1日に「千日会（せんいちえ）」が行われていた。この日は田舟に乗って弁天島までお参りに行く。正式には弁天島の周りを舟で3周してから島にあがる。しかし、実際にはあまり守られていなかったという。

自分で田舟を持っている人は、親戚を呼んで島の周りに舟を停め、舟の上で当時ご馳走だったカシワやウナギのすき焼きをして楽しんだ。当時、すき焼きはご馳走で「カシワのジュンジュン」と呼ばれ、カシワが中心のすき焼きだった。

小中の湖周辺に住む人々の知恵

獅子鼻の先に「千石岩」と呼ばれる岩があった。下豊浦の人々は、この岩の見え方を目安にして、その年が豊作か不作かを予想したという。岩が隠れてしまうほど内湖の水位が高いとその年は水害。岩がよく見えすぎるくらい水位が低いときは干ばつ。丁度岩の先が見えるか見えないかくらいの水位だと豊作の年、というように。

また、伊庭の集落には冬場の漁に出かけるときに天候を予想するいくつかのことわざがあった。例えば、大雪が降ると「大雪の百日あとに大雨がくる」といって、魩や漁具の準備をした。大雪から百日目ごろの春、梅雨も重なり大雨の季節で、湖から川や田んぼへ魚が産卵にあがってくる。そのころは「伊吹山に帯をするような白い雲が山をまくと、一尺みずがでる」とも言われた。そして、漁がさかんになると「朝にじはみの竿もて」といわれていた。

小中の湖での子どもたちの遊び

小中の湖周辺に住んでいた子どもたちは主に水泳と貝つかみ、魚つかみをして遊んでいた。他にも1930年頃の冬に一度だけ湖面全体が凍ったことがあった。その時は湖面の上を長靴をはいてスケートをし、江ノ島まで歩いて行った子どももいたという。それ以外でも家の近くの水路で、トオシ（篩）を持って小エビすくいやタニシとりをして遊んでいた。

表2 考えられる小中の湖干拓の流れ

昭和17年	昭和18年	昭和19年
小中の湖干拓の計画	着工 (県営)	2月：琵琶湖干拓が正式に開始 8月：小中の湖の地鎮祭と起工式
昭和20年	昭和21年	
5月：排水開始 7月：田植（一部）	6月：農林省直轄に転換 7月：入植、9月：竣工	

(6) 小中の湖の干拓

小中の湖干拓の工事着工・完成した年について

小中の湖干拓の工事着工と竣工の年は、文献によって記述がさまざまである。

さまざまな文献や資料、当時の新聞記事を調査した結果、総合的に推察した小中の湖の干拓工事の流れは表2の通りである。

1942年（昭和17年）に干拓工事の計画が立てられ、翌年滋賀県で初めての干拓工事として着工、そして1946年（昭和21年）に竣工した。

小中の湖の干拓工事の様子

小中の湖の干拓工事には、県内外の学徒動員や食糧増産隊、勤労奉仕隊、また、地元の人々や伊庭にあった捕虜収容所のオランダ兵と朝鮮から徴用として連れてこられた多くの人たちが関わっていた。

干拓工事では、まず小中の湖を取り巻くヨシ原の砂州（島）を堤防でつなぎ、内湖全体を囲む堤防を築き、ポンプで排水をしたという。弁天締切堤防は昭和18年の末頃に、伊庭洲締切堤防は昭和18年末から昭和19年頃に完成したとヒアリング対象者は記憶している（図6参照）。



図6 小中の湖の干拓平面図

Research about Shounakanoko mainly on Bentennaiko

Mainly on hearing investigation

Sakae Matsuo Ide laboratory

1. The background of the research

There were "Dainakanoko" and "Nishinoko", "Shounakanoko" at Omihachiman-city and Azuchi-cho, Notogawa-cho in Shiga. However, most inner lake disappeared because the reclamation was performed for production schedule of food. The small portion of "Dainakanoko" and "Shounakanoko", and "Nishinoko" stays now.

In particular It is said that Shounakanoko was reclaimed first in Shiga in 1942. Therefore, people that knowing a figure before a reclamation progress aging. And, the document about Shounakanoko before a reclamation is not left. In this situation it becomes difficult to know Shounakanoko.

2. The purpose and meaning of the research

The purpose of this research investigates an aspect of Shounakanoko when it was a internal lake. And, I investigate aspect of a living of the people who lived around then Shounakanoko. In addition, it is to leave the thing that became clear as a document by this research.

I think that the result of this research becomes a valuable document when we want to know an aspect of Shounakanoko before development.

3. The investigation and research method

In this research, investigation and research were done by the following methods.

A: Collection the documents and news story which a state of Shounakanoko was written down

B: Collection the photograph of Shounakanoko

C: Collection the news story which a state of Shounakanoko was written down

D: Hearing investigation to people who know the then of Shounakanoko

E: Arrange a figure of Shounakanoko which became clear from the investigation mentioned above

4. The object range of this research

"Shounakanoko" to mean in this research is the range that local people called

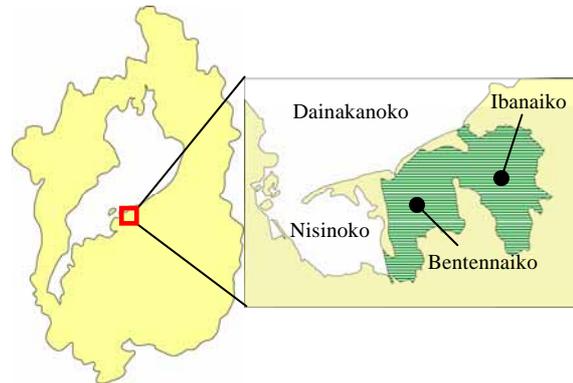


Fig.1 The investigation object range (underline)

"Bentennaiko" and "Ibanaiiko". But I carry out investigation mainly at Bentennaiko in this research and shall gather it up about Ibanaiiko in the range that I understood.

5. The aspect of Benntennaiko at every season

The roach went up in Bentennaiko in spring. When it was the time of the rainy season, the number of fish increased. The rainy season is the time that is the busiest for a fisherman. The fishery of this time was "Tatube" and "mondori".

In summer, children swam in the lakefront and played. The child who cannot swim had taught swimming from senior student. The child who could swim attached a board to a chest and swam in Bentennaiko. Children enjoyed "Rod jump" in the island.

Rice reaping begins in a rice field around Bentennaiko in autumn. People who has rice field in east of Mt. Azuchi passed "Funagosi" and went to a rice field. It was said that a fireball haunted around " Funagosi ". So, People were scared of pass late at night.

When the wind is west, the people understood that it was winter. The west wind turned into north wind one week later from 3rd. The people at Simotoyora called it "Kitagaesi". When "Kitagaesi" blew, it snowed.

目次

第1章	序論	1
1-1	研究の背景	1
1-2	研究の目的	1
1-3	研究の意義	1
1-4	調査・研究方法	2
1-5	研究で言う「小中の湖」	2
	参考文献	3
第2章	内湖について	5
2-1	内湖の定義	5
2-2	機能	5
2-2-1	内湖本来の機能	6
2-2-2	内湖の利用に関わる機能	7
2-3	干拓の歴史	7
	参考文献	11
第3章	調査方法と結果の概要	13
3-1	調査の流れ	13
3-2	文献収集	13
3-3	新聞記事収集	18
3-4	写真収集	20
3-5	マトリックス表の作成	20
3-6	ヒアリング調査	21
3-6-1	ヒアリング方法	21
3-6-2	ヒアリング調査の対象者	21
	参考文献	23
第4章	小中の湖の物理的諸元	27
4-1	位置・大きさ	27
4-2	湖底環境	27
4-3	水質	29
4-4	風向きと波の高さ	29
4-5	気温	30
	参考文献	31

第 5 章	小中の湖周辺の地名	33
5-1	小中の湖周辺地域の呼び名と小中の湖の呼び名	33
5-2	小中の湖周辺の集落	34
	参考文献	35
第 6 章	小中の湖およびその周辺の自然環境と景観	37
6-1	小中の湖の景観	37
6-2	流入河川と切り通し	37
6-3	湖内生態系	38
6-3-1	小中の湖周辺で見ることのできた植物	38
6-3-2	小中の湖で見ることのできた動物	39
	参考文献	43
第 7 章	小中の湖周辺の人々の暮らしと生業について	45
7-1	弁天内湖と伊庭内湖の境界	45
7-2	小中の湖周辺の港と航路	46
7-3	小中の湖につながる水路と田舟	48
7-4	内湖周辺地域の生業（農業・ヨシ産業・漁業）	49
7-4-1	小中の湖周辺の農業	49
7-4-2	内湖周辺のヨシ産業	50
7-4-3	内湖周辺の漁業	52
7-4-4	その他の生業	57
7-5	小中の湖周辺でとれた天然資源	58
7-6	小中の湖周辺に住む人々の水利用	58
7-7	小中の湖にまつわる伝説	59
7-7-1	獅子鼻の亡霊	59
7-7-2	苔の大蛇	59
7-8	小中の湖の祭事	59
7-9	小中の湖周辺に住む人々の知恵	60
7-9-1	千石岩	60
7-9-2	天気のことわざ	60
7-10	小中の湖での子どもたちの遊び	61
7-11	料理	63
7-12	季節ごとの弁天内湖の姿	63
	参考文献	65

第 8 章	小中の湖の干拓	67
8-1	小中の湖の干拓工事に関する文献調査	67
8-2	小中の湖干拓の工事着工・完成した年について	74
8-3	小中の湖の干拓工事の様子	77
	参考文献	79
第 9 章	論議と考察	81
	謝辞	85

図表目次

図 1-1	弁天内湖	3
図 1-2	伊庭内湖	3
図 1-3	本研究で対象とする範囲(小中の湖)	3
図 2-1	内湖の機能の分類	6
図 2-2	琵琶湖周辺の主な内湖の位置	9
図 4-1	小中の湖の位置	27
図 4-2	小中の湖の湖底環境	28
図 4-3	小中の湖の水深	29
図 4-4	小中の湖の風向きと波の高さ	30
図 5-1	小中の湖と周辺地域の呼び名	34
図 5-2	小中の湖周辺の集落	35
図 6-1	小中の湖の主な流入河川と切り通し	38
図 6-2	小中の湖周辺のヨシ地と神さん柳の場所	39
図 6-3	特によく見ることができた魚類と貝類の場所	43
図 7-1	弁天内湖と伊庭内湖の境界	46
図 7-2	八幡通いと太湖汽船の航路	47
図 7-3	伊庭のカワトの名称	48
図 7-4	ヨシ巻き漁(上から見た図)	53
図 7-5	漬柴漁(上から見た図)	54
図 7-6	小中の湖の漁法と漁場	57
図 8-1	小中の湖の干拓平面図	78
表 2-1	琵琶湖周辺の主な内湖	10
表 3-1	小中の湖周辺の集落と小中の湖に関する文献	14
表 3-2	小中の湖と琵琶湖周辺内湖の干拓に関する文献	14
表 3-3	干拓以前の小中の湖についてまとめられている資料	15
表 3-4	内湖全般についてまとめられている文献	15
表 3-5	その他の文献	16
表 3-6	滋賀県公報で見つけられた文章	16
表 3-7	滋賀県行政文書総目録で見つけたもの	17
表 3-8	地元で収集した資料	18
表 3-9	小中の湖に関する新聞記事	19
表 3-10	選定した項目	20
表 3-11	ヒアリング対象者	22
表 6-1	小中の湖にいたと推察される鳥類	40

表 6-2	小中の湖にいたと推察される貝類	41
表 6-3	小中の湖にいたと推察される魚類	42
表 7-1	下豊浦における農業の一年	49
表 7-2	ヨシ産業の一年	51
表 7-3	漁業の一年	52
表 8-1	小中の湖の干拓工事に関する各種文献の記述	68
表 8-2	小中の湖干拓に関する新聞記事	71
表 8-3	文献資料と新聞記事を基にして作成した小中の湖干拓年表	75
表 8-4	推察した小中の湖干拓の流れ	77
写真 4-1	湖面が凍った時の弁天島 (1930 年頃)	31
写真 7-1	弁天島の竿	62
写真 7-2	弁天島の竿で遊ぶ子ども	63

第1章 序論

1-1 研究の背景

滋賀県の近江八幡市と安土町，能登川町の周辺には，かつて「大中の湖」「西の湖」「小中の湖」と呼ばれる内湖が存在した．内湖とは，琵琶湖周辺に点在する小さな湖沼のことを言う¹⁾．

かつての内湖は人々の暮らしと密接に結びついていた．周辺に暮らしていた当時の人々は，内湖で遊び，魚やスクモ（腐食土）をとって生計を立てていた²⁾．しかし，これらの内湖の大部分は戦中戦後の食糧増産計画に基づく干拓によって消え，現在は大中の湖や小中の湖のそれぞれ一部と西の湖が残っているのみである．

特に小中の湖は1942年，内湖としては滋賀県で最初に干拓されたと言われている³⁾．そのため内湖であった当時のことを知る人々の高齢化が進んでいる．また，干拓前の小中の湖のことを記した公の資料はほとんど存在しない．このままでは，かつての小中の湖の様子を知ることがますます困難になっていく．そのため一刻も早く記録に残すことが求められている．

1-2 研究の目的

本研究の目的は，ヒアリング調査や文献調査などによって干拓前の小中の湖の姿や同内湖周辺における当時の人々の暮らしぶりを明らかにし，干拓によって私たちが失ったものを探り，この研究によって明らかになったことを資料として残すことである．

1-3 研究の意義

本研究によって，かつての小中の湖の姿を記録に残すことができれば，干拓前の小中の湖の様子を知る上での貴重な資料になると考えられる．

1-4 調査・研究方法

本研究では以下のような方法で調査・研究を行う。

- ・ 小中の湖の様子が記された文献を収集する
- ・ 小中の湖の写真を収集する
- ・ 小中の湖に関する新聞記事を収集する
- ・ 小中の湖の当時の様子を知っている人々へのヒアリング調査を実施する
- ・ 上記の調査から明らかになった小中の湖の姿を項目ごとに整理する

1-5 研究でいう「小中の湖」

本研究で言う「小中の湖(しょうなかのこ)」とは、地元の人々が「弁天内湖(べんてんないこ)」(または「弁天湖(べんてんうみ)」)(図 1-1)と「伊庭内湖(いばないこ)」(図 1-2)と呼んでいた範囲をあわせたものである(図 1-3)。ここで言う伊庭内湖とは、現存する伊庭内湖と異なるので注意が必要である。

ただし、本研究では弁天内湖を中心に調査を実施し、伊庭内湖についてはわかった範囲でまとめるものとする。



図 1-1 弁天内湖



図 1-2 伊庭内湖



図 1-3 本研究で対象とする範囲（小中の湖）

参考文献

- 1) 西野麻知子, 浜端悦治: 内湖からのメッセージ 琵琶湖周辺の湿地再生と生物多様性保全, サンライズ出版 (2005)
- 2) 滋賀県率大学環境科学部環境フィールドワーク委員会: 環境フィールドワーク 2 報告書, まちづくりと環境情報 (2004) (2005)
- 3) 琵琶湖干拓史編さん委員会編: 琵琶湖干拓史, 琵琶湖干拓史編纂事務局 (1970)

第2章 内湖について

本章では内湖の定義と機能や役割について述べ、最後に滋賀県の内湖全般の干拓の歴史についてまとめる。

2-1 内湖の定義

内湖とは湖の湖岸の陸側に存在する小湖沼の総称である。水深が1~2 m と浅く、平底であるという特徴をもつ¹⁾。「内湖からのメッセージ」によれば「本来琵琶湖の一部であった水域が、砂洲や砂嘴、浜提あるいは川から運ばれた土砂等によって琵琶湖と隔てられ、独立した水塊となったが、水路等で琵琶湖との水系が繋がったままの水域」²⁾と定義されている。つまり内湖とは、琵琶湖（本湖）から独立した附属湖であり、本湖と開水路で繋がっている水域とすることである¹⁾。

内湖の成因としては、本体となる湖が前方にあり、背後には湖岸や浜提ができるための丘や山、また、砂や石を湖岸へ運んでくれる河川が必要である¹⁾。上記の定義に従えば日本では琵琶湖周辺にしか内湖は存在しないと言われている³⁾。滋賀県では、「内湖」に対して、琵琶湖そのものを「外湖」や「本湖」と呼んでいる⁴⁾。

2-2 機能

近年、内湖そのものの存在が環境に与える効果や、人間活動にとっての意義などが再評価されるようになり、内湖の機能についての調査が行われるようになってきた⁵⁾。

内湖の機能は、大きく二つに分けて説明することができる。まず一つは、存在そのものが何らかの役割を果たすことで発揮される内湖本来の機能であり、もう一つはその水面を中心とした利用を通して発揮される機能である⁶⁾。内湖の機能を分類したものを図 2-1 に示す。

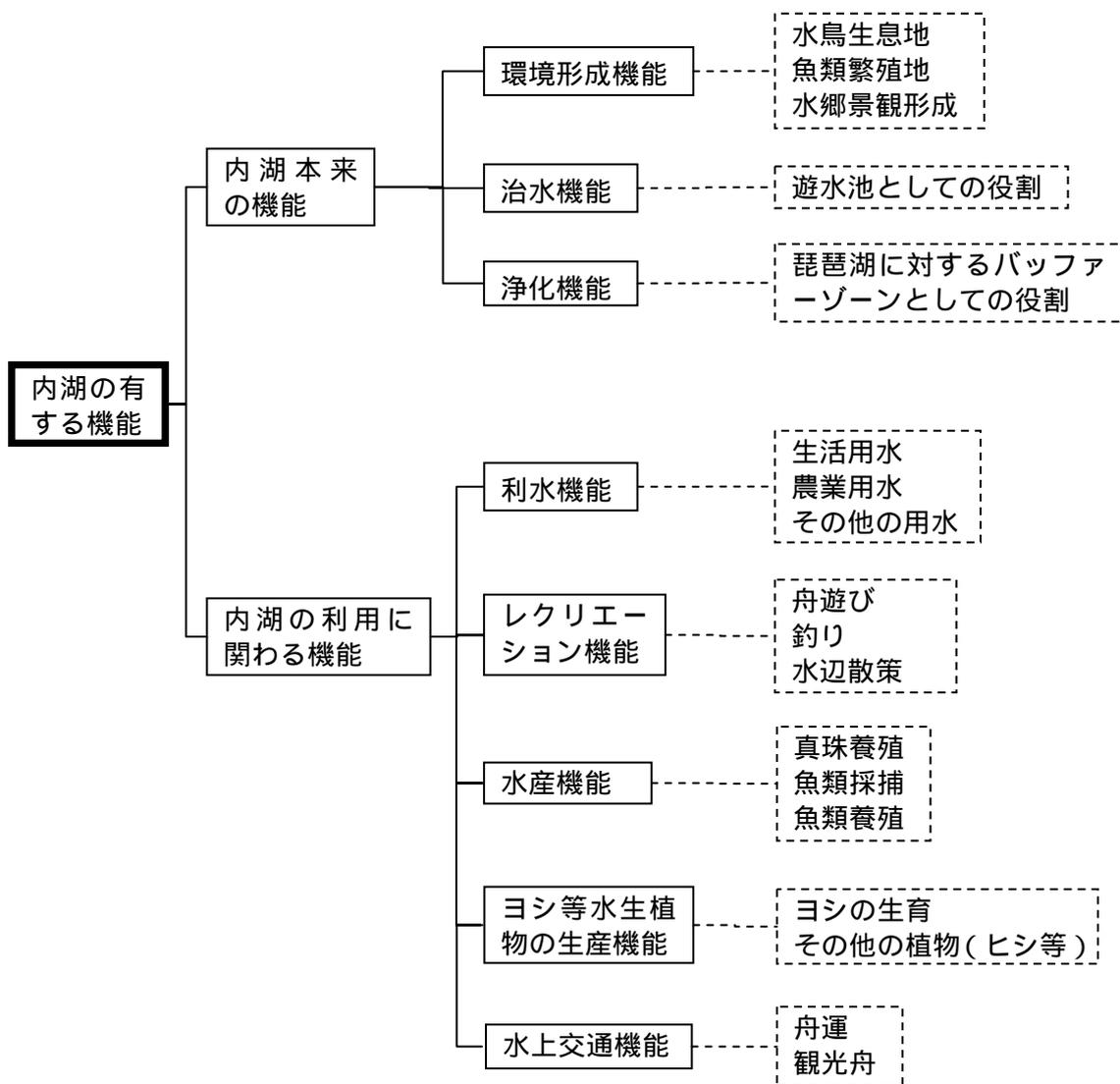


図 2-1 内湖の機能の分類⁶⁾

2-2-1 内湖本来の機能

内湖そのものの存在がもつ機能として、まず、生物の生育の場としての機能（環境形成機能）がある。

内湖は本湖である琵琶湖に比べて波浪の影響が少ない。波が穏やかなこともあって水鳥の生息や休憩の場所として適地である。また、静穏な環境を好む植物の生育に適している。一方、閉鎖された小さな水域のため水温変化が激しく、そのため高温や低温に耐久性のある植物が生育することが考えられる。¹⁾

他にも、湖底が泥質化しやすいため沈水植物群落の生育場所になる可能性が高い。¹⁾

他方、内湖は水深が浅いことから栄養塩も豊富である。そのため、湖産魚類の産卵場や稚魚・幼魚の生育場として適している。⁶⁾

また、内湖の流出口は最深部よりも浅いことが多い。そのため本湖である琵琶湖が濁水になっても一定の水位を保つことができる。その結果、生物の避難場所としての機能を果たすことができる¹⁾。逆に本湖が増水してしまっても遊水池として沿川地域の浸水被害を軽減するという治水能力もあると言われる⁶⁾。

他にも、琵琶湖との係わりから考えられる機能として水質浄化機能がある。内湖が琵琶湖に流入する河川の最下流域において汚濁物質の沈殿池、あるいは酸化池としての機能を果たすことにより、琵琶湖に流入する汚濁物質を削減することができると考えられている。これは琵琶湖からみると流入河川からの汚濁負荷に対するバッファゾーンとして内湖が機能することを意味する。ただし、水質浄化機能の程度は流入河川負荷や内湖の容量などの諸条件に応じて異なる⁶⁾。そのため、内湖の浄化機能には限界があり、一概に浄化機能があるとは言えないとの説もある¹⁾。

2-2-2 内湖の利用に関わる機能

内湖周辺で暮らす人々にとって内湖は日常生活に密接した存在であった。特に上下水道が整備されていなかった時代には、飲み水などの生活用水を提供する場であった。近年ではあまり見られなくなったが、内湖の水は農業用水としても利用されていた。また、内湖で繁殖していた水草類や湖底の泥を肥料として利用していた時期もあった⁶⁾。他にも、魚釣りや子どもの遊び場、自然観察の場など、人と自然とが触れ合うことのできる場としての機能も有しており、その重要性が近年、再認識されつつある⁶⁾。

一方水産面では、戦後まもなくは、真珠養殖やコイの養殖場として利用されており、琵琶湖の水産業の中で大きな比重を占めていた。さらにヨシを中心とした水生植物の生産の場でもあったことから、ヨシ簾などヨシを製品化し、産業として成り立たせている地域も見ることができた。⁶⁾

内湖周辺の農地へは田舟を利用して接近する方法しかなく、内湖やその周辺の水路（クリーグ）は重要な舟運の場ともなっていた。

2-3 干拓の歴史

内湖の干拓は古くから行われてきた。江戸時代には低湿地での新田開発の一環として干拓が進められた。しかし、その当時は、内湖全体を干拓するというものではなく、湖辺域の一部を開田するというものであった¹⁾。

明治時代に入ると、内湖の干拓が民間で計画されるようになる。日本干拓株式会社が1916年（大正5年）に事業に着手しようとしている。しかし、湖岸部落の反対にあい実現しなかった⁷⁾。他にも、「滋賀県史」⁸⁾によると、1926年（大正15年）に県会議長が国の土地利用調査で干拓の適地と認められた中の湖の干拓に反対する意見書を知事に提出している。また1927年（昭和2年）には琵琶湖治水会も反対書を内務大臣に提出している。このように、内湖の干拓は古くから計画されていたが、なかなか着手されることはなかった。

その後、1929年（昭和4年）にも全国主要湖沼干拓候補地実地調査が開始され、再び干拓推進への機運が盛り上がったが、諸般の事情により干拓実施は一時低迷した⁸⁾。しかし、1941年に第2次世界大戦がおこり食糧事情が悪化すると、農地造成や食糧増産が必要に迫られ、ついに、干拓工事が着工されることになった⁸⁾。

内湖としては先ず、小中の湖が最初に着工されたようである。ただし、小中の湖の工事着工年については文献によって記述がさまざまである。詳しくは第8章で述べるが、恐らく1942年（昭和17年）に小中の湖干拓の計画が決定し、翌年県営事業として着工されたものと考えられる。

「琵琶湖干拓史」⁹⁾によると、その後、1944年（昭和19年）4月から農地開発営団の手によって正式に琵琶湖の干拓事業が始められている。同年、40余の内湖のうち10箇所の干拓が着手された。同文献によれば「このうち農地開発営団の手で米原町入江内湖（305.4 ha）彦根市、松原内湖（73.3 ha）近江八幡市、水葦内湖（201.3 ha）の3地区を施工、一方あとの7地区、小中の湖（342.1 ha）、繁昌池（33.8 ha）、野田沼（39.8 ha）、大郷内湖（13.7 ha）、塩津内湖（16.8 ha）、貫川内湖（16 ha）、四津川（19.9 ha）を農林省が滋賀県に施工を委託した」⁹⁾となっている。1947年（昭和22年）9月には農地開発営団が施工していた入江内湖、松原内湖、水葦内湖の3地区と、県に委託していた小中の湖、合わせて4地区は農林省によって引き継がれ、直轄工事として干拓が実施されている⁹⁾。

その後さらに、大中の湖、塩津娑婆内湖、曾根沼、早崎内湖、津田内湖が干拓され、1971年に内湖の干拓は終了した。

約三十年間にわたって干拓された内湖の数は、一部干拓も含めて16にのぼる。干拓によって内湖はかつての面積約2,895.6 haがわずかに374.3 haに減少した⁵⁾。

干拓事業が始まったのは戦時中であったことから、資材や労働力の不足で干拓工事は難行した。しかし、内湖は淡水湖であったことから塩抜きをする必要がなく、干拓完成後すぐに作付けができたため食糧増産の面では大きな効果をあげた。しかし、最大の干拓事業であった大中の湖の干拓が完成する頃には、国の農業政策が増反から減反に大きく方向転換し、内湖の干拓はその目的を失うことになる⁵⁾。

図2-2と表2-1に琵琶湖周辺に存在する主な内湖および、干拓された内湖とその位置を示す。

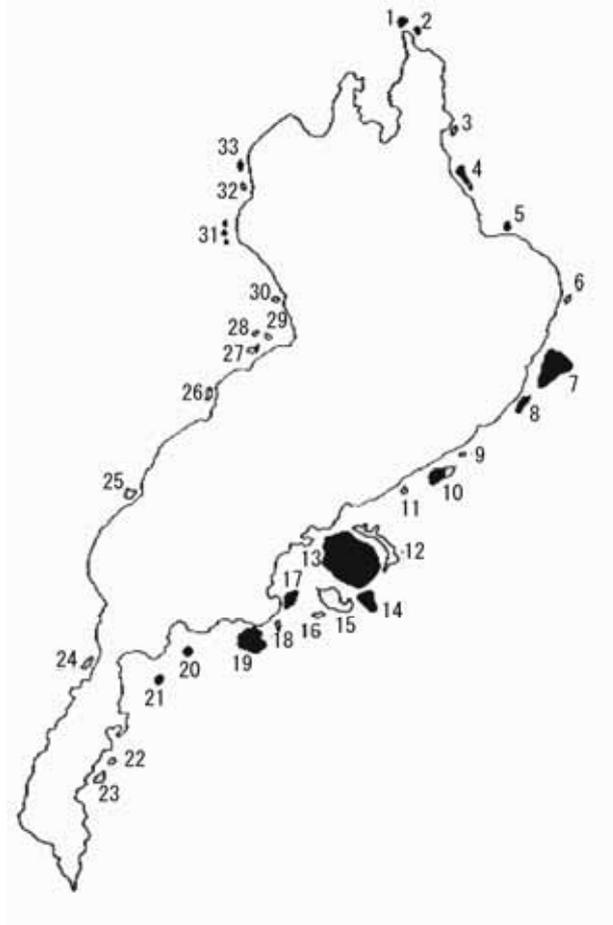


図 2-2 琵琶湖周辺の主な内湖の位置⁵⁾

表 2-1 琵琶湖周辺の主な内湖⁹⁾

	内湖名	面積(ha)	位置	干拓事業
1	塩津内湖	16.8	伊香郡西浅井町	県営, 1944 ~ 1951
2	塩津娑婆内湖	16.4	伊香郡西浅井町	県営, 1959 ~ 1963
3	野田沼	6.2	東浅井郡湖北町	
4	早崎内湖	91.9	東浅井郡湖北町, びわ町	県営, 1964 ~ 1971
5	大郷内湖	13.9	東浅井郡びわ町	県営, 1944 ~ 1951
6	浜須賀沼	2.4	坂田郡近江町	
7	入江内湖	305.4	坂田郡米原町	国営, 1944 ~ 1967
8	松原内湖	73.3	彦根市	国営, 1943 ~ 1947
9	野田沼	15.0	彦根市	
10	萱根沼	87.0	彦根市	県営, 1963 ~ 1968
11	神上沼・矢場沼	7.2	彦根市	
12	伊庭内湖	49.0	神崎郡能登川町	
13	大中の湖	1145.0	近江八幡市, 蒲生郡安土町, 神崎郡能登川町	国営, 1964 ~ 1968
14	小中の湖	342.1	蒲生郡安土町, 神崎郡能登川町	県営, 1942 ~ 1947
15	西の湖	221.9	近江八幡市, 蒲生郡安土町	
16	北の庄湖	15.8	近江八幡市	
17	津田内湖	119.0	近江八幡市	国営, 1967 ~ 1971
18	北沢沼	4.9	近江八幡市	
19	水荃内湖	201.3	近江八幡市	国営, 1944 ~ 1947
20	野田沼	39.5	野洲郡中主町	県営, 1943 ~ 1951
21	繁昌池	33.8	守山市	県営, 1944 ~ 1951
22	志那中内湖	2.5	草津市	
23	平湖	13.4	草津市	
24	堅田内湖	7.9	大津市	
25	小松内湖	7.8	滋賀郡志賀町	
26	乙女が池	8.9	高島郡高島町	
27	四津川内湖	19.9	高島郡安曇川町	県営, 1944 ~ 1951
28	五反田沼	1.2	高島郡安曇川町	
29	十ヶ坪沼	2.0	高島郡安曇川町	
30	菅沼	2.8	高島郡新旭町	
31	今津沼	?	高島郡今津町	
32	浜分沼	5.4	高島郡今津町	
33	貫川内湖	16.0	高島郡今津町	県営, 1944 ~ 1951

注) ■ : 干拓された内湖, □ : 一部干拓された内湖

参考文献

- 1) 西野麻知子, 浜端悦治: 内湖からのメッセージ 琵琶湖周辺の湿地再生と生物多様性保全, サンライズ出版 (2005)
- 2) 西野麻知子, 浜端悦治: 内湖からのメッセージ 琵琶湖周辺の湿地再生と生物多様性保全, p.41, サンライズ出版 (2005)
- 3) 佐野雄一: 「津田内湖に関する調査研究」 - 記憶に残る津田内湖 - , 2001年度滋賀県立大学環境科学部環境計画学科卒業論文
- 4) 長命寺湾・西の湖環境保全協議会: 内湖の果たす役割について (2000)
- 5) 倉田亮: 内湖 - その生態学的機能 - , pp.46-54, 滋賀県琵琶湖研究所所報 (1983)
- 6) 滋賀県土木部河港課: 琵琶湖周辺湖保全対策基本計画 (1996)
- 7) 能登川町高校町史研究委員会: 能登川町史, 能登川町 (1976)
- 8) 滋賀県史編さん委員会: 滋賀県史 昭和編 第3巻, p.121, 滋賀県 (1976)
- 9) 琵琶湖干拓史編さん委員会編: 琵琶湖干拓史, p.47, 琵琶湖干拓史編纂事務局 (1970)

第3章 調査方法と結果の概要

本章では本研究で行った調査の方法と調査結果の概要について述べる。

3-1 調査の流れ

本研究では、最初に小中の湖に関する文献を県内数箇所の図書館において収集した。また、特に小中の湖の干拓工事に関する情報を得るために新聞記事の検索・収集と滋賀県公文書の閲覧を行った。

上記文献調査で予備知識を得た後、地元住民14人に対するヒアリング調査を実施した。それと同時にヒアリング対象者から小中の湖に関する写真や資料などの収集を試みた。

また、調査によって明らかにする項目のマトリックス表を作成し、ヒアリング調査などで分かったことを同マトリックス表に随時埋めていく方法をとった。同時に地名や漁をしていた場所など、調査で分かった場所を白地図に書き込んでいった。これらを繰り返し行った。

3-2 文献収集

本研究では、最初に小中の湖に関係する文献の収集を試みた。収集のために訪れた図書館と博物館は本学図書館と滋賀県立図書館、滋賀県立琵琶湖博物館内の図書館、安土町立図書館、能登川町総合文化センター、安土城考古博物館の6館である。収集する文献などの対象期間は、干拓前の昭和初期から干拓工事完成までとした。

まず、小中の湖周辺の集落と小中の湖そのものに関する記述のある図書としては、表3-1に示す3件を収集することができた。

表 3-1 小中の湖周辺の集落と小中の湖に関する文献

No	書名	概要	本研究に関する記述	発行年
1	能登川町史 ¹⁾	能登川町の歴史や地理的環境, 干拓, 大中の湖遺跡などがまとめられている.	小中の湖を含む中の湖の成因に関する記述あり.	1976
2	角川日本地名大辞典 25 巻 ²⁾	滋賀県の古代・中世, 近世, 近現代の地名や川, 山などの自然の地名, 道路, 河岸などの人文地名, 字・小字, 地域の通称などがまとめられている.	小中の湖周辺の集落と, 当時の小中の湖様子に関する記述あり.	1978
3	滋賀県の地名 ³⁾	日本全国のさまざまな地名をとりあげ, その地域の歴史, 文化, 生活などがまとめられている.	安土町, 能登川町のなかに, 下豊浦村, 伊庭村, 能登川村に関する記述あり.	1991

小中の湖を含む, 内湖の干拓事業については, 表 3-2 に示す 9 件の文献を収集することができた.

表 3-2 小中の湖と琵琶湖周辺内湖の干拓に関する文献

No	書名	概要	本研究に関する記述	発行年
1	滋賀県市町村沿革史 第 3 巻 ⁴⁾	近江八幡市, 蒲生郡の 4 町, 八日市市, 神崎郡の 3 町, 愛知郡の 4 町 1 村, 彦根市, 犬上郡の 2 町 1 村の歴史, 人口・戸数の変化, 産業の動向などがまとめられている.	開拓についてまとめられている部分に, 小中の湖の干拓に関する記述あり.	1964
2	琵琶湖干拓史 ⁵⁾	大中の湖, 津田内湖の干拓を中心に琵琶湖の干拓史がまとめられている.	干拓全般に関してまとめられている部分に, 小中の湖の工事着工と竣工に関する記述あり.	1970
3	滋賀県史 昭和編 第 3 巻 ⁶⁾	昭和初期から昭和 48 年末までの滋賀県の農業, 林業, 水産業全般などがまとめられている.	琵琶湖内湖干拓全般に関して, 起工までの経過, 事業実施の様子に関する記述あり.	1976
4	新しい土新しい人 ⁷⁾	(文献複写により該当部分のみ入手)	小中の湖の干拓工事の経過に関する記述あり.	1977
5	びわ湖周遊 ⁸⁾	(文献複写により該当部分のみ入手)	小中の湖の干拓に関して, 工事着工年や入植者に関する記述あり.	1980
6	滋賀県誌 ⁹⁾	滋賀県の地区を大津・湖西地区, 湖南地区, 彦根・湖東地区, 長浜・湖北地区に分けて地域の概要がまとめられている.	小中の湖の干拓工事の計画, 着工年, 工事に携わった人々に関する記述あり. さらに干拓地の排水路図も収録.	1983
7	滋賀県百科事典 ¹⁰⁾	滋賀県の歴史, 民俗, 地理, 地学, 生物, 政治などがまとめられている.	小中の湖が干拓される以前の景観に関する記述あり.	1984
8	滋賀県の歴史 ¹¹⁾	原始・古代からの滋賀県の歴史がまとめられている.	内湖干拓の作業に関わっていた人々に関する記述あり.	1997
9	明日の淡海 創刊号 ¹²⁾	内湖の干拓に触れながら, 内湖の存在意義についてまとめている.	琵琶湖内湖干拓全般に関する記述あり.	1999

小中の湖について安土町で行ったヒアリング調査の結果をまとめた資料としては表 3-3 に示す、本学フィールドワークの2つの報告集を収集できた。

表 3-3 干拓以前の小中の湖についてまとめられている資料

No	書名	概要	本研究に関する記述	発行年
1	環境フィールドワーク 2 報告集 ¹³⁾	小中の湖の湖底や生物、周辺に住む人々の暮らしの様子などがまとめられている。	干拓される前の小中の湖の様子に関する記述あり。	2004
2	環境フィールドワーク 2 報告集 ¹⁴⁾	小中の湖の景観や湖底の様子、生物、その他周辺に暮らす人々の生業などがまとめられている。	干拓される前の小中の湖の様子に関する記述あり。	2005

内湖全般について書かれている文献としては表 3-4 に示す 4 件を収集することができた。

表 3-4 内湖全般についてまとめられている文献

No	書名	概要	本研究に関する記述	発行年
1	滋賀県琵琶湖研究所 所報 ²¹⁵⁾	内湖全般の機能や琵琶湖内湖干拓の歴史がまとめられている。	内湖の機能、干拓の歴史に関する記述あり。	1983
2	琵琶湖周辺内湖保全対策基本計画 ¹⁶⁾	内湖の現状や歴史、機能、内湖保全対策などがまとめられている。	内湖の機能に関する記述あり。	1996
3	内湖の果たす役割について ¹⁷⁾	内湖とは、内湖の機能、そして西の湖のことがまとめられている。	内湖の機能に関する記述あり。	2000
4	内湖からのメッセージ 琵琶湖周辺の湿地再生と生物多様性保全 ¹⁸⁾	主に、生物多様性を中心にして内湖の役割や水質浄化機能がまとめられている。	内湖干拓の歴史、内湖の役割に関する記述あり。	2005

他にも、ヒアリング調査の参考として表 3-5 に示す 5 件の文献を収集した。

表 3-5 その他の文献

No	書名	概要	本研究に関する記述	発行年
1	びわ湖の漁撈生活 ¹⁹⁾	湖北の「南浜」「尾上」「川並」「塩津浜」「菅浦」の5地域の漁撈習俗の民俗調査の報告がまとめられている。その他、琵琶湖の魚も収録。	漁法に関する記述あり。	1979
2	びわ湖の專業漁撈 ²⁰⁾	「堅田」「沖島」漁撈習俗の民俗調査の報告がまとめられている。その他、琵琶湖の魚介類も収録。	漁法に関する記述あり。	1980
3	内湖と河川の漁法 ²¹⁾	昭和55年度に実施した内湖・河川を中心とした地域の漁撈民族調査の結果がまとめられている。調査地区は野洲川、西ノ湖、伊庭内湖、愛知川、天野川、安曇川の6地区。	西の湖の漁法に関する記述あり。	1981
4	伊庭の坂下し祭 近江の奇祭 ²²⁾	昔からの伊庭の祭がまとめられている。	坂下し祭、卯之時祭に関する記述あり。	1985
5	湖の魚・漁・食 淡海あれこれ商店街 ²³⁾	琵琶湖で行われている漁具漁法がまとめられている。	漁法、漁具に関する記述あり。	2000

また、滋賀県の公文書についても関係する文書の収集を試みた。滋賀県の古い公文書は滋賀県庁新館にある「県民情報室」で閲覧可能となっている。調査対象は、昭和15年から昭和22年までの「滋賀県公報」²⁴⁾と、「滋賀県行政文書総簿冊目録（明治元年～昭和20年）」²⁵⁾とした。

「滋賀県公報」に関しては、はじめに年度ごとの目録から「干拓」あるいは「内湖」をキーワードに閲覧し、同キーワードを含む公報が目録で見つかったら、同公報を確認するという方法をとった。各公報には大きく分けて県令、条例、訓令、告示、辞令の5項目が載っている。その結果、昭和19年から昭和22年の間の公報としては、内湖干拓に関する9件を見つけることができた（表3-6参照）。しかし、小中の湖に直接関係する公報はなく、琵琶湖干拓事業資金歳入歳出予算や琵琶湖干拓委員会規程など、琵琶湖干拓に関する予算や規程についての公報のみであった。

表 3-6 滋賀県公報で見つけられた文章

No	発行日	号	内容
1	昭和19年8月3日	号外	滋賀県琵琶湖干拓事務所設置規程
2	昭和19年9月13日	2026号	昭和十九年度滋賀県琵琶湖干拓事業資金
3	昭和19年9月13日	2026号	滋賀県琵琶湖干拓事業資金管理規則
4	昭和20年10月12日	2183号	昭和二十年度滋賀県琵琶湖干拓事業資金歳入歳出追加予算
5	昭和21年2月12日	2220号	昭和二十年度滋賀県琵琶湖干拓事業資金歳入歳出追加予算
6	昭和21年4月5日	2239号	昭和二十年度滋賀県琵琶湖干拓事業資金歳入歳出更正予算
7	昭和21年4月5日	2239号	昭和二十一年度滋賀県琵琶湖干拓事業資金歳入歳出追加予算
8	昭和21年8月12日	2286号	昭和二十一年度滋賀県琵琶湖干拓事業資金歳入歳出追加予算
9	昭和21年11月15日	2322号	琵琶湖干拓委員会規程

一方、「滋賀県行政文書総簿冊目録（明治元年～昭和 20 年）」に関しては、大分類「河川・港湾」の下にある中分類「公有水面埋立」と、大分類「農業」の下にある「土地改良」の中分類からさらに下の「干拓（事業計画書）」に収録されている件名を対象分類とした。それら分類に収録されている件名から「内湖」または「干拓」「埋立」をキーワードにして閲覧した。その結果、表 3-7 に示す 14 件の行政文書の件名を確認することができた。しかし、小中の湖に関する行政文書は見つけることができなかった。

表 3-7 滋賀県行政文書総目録で見つけたもの

No	件名	年月
1	琵琶湖干拓事業公有水面埋立免許申請ニ関スル件	昭和 19 年 3 月
2	内湖干拓ニ関スル公有水面埋立ノ内務大臣ニ稟伺方内示及ビ取計依頼	昭和 19 年 2-3 月
3	公有水面埋立免許申請書ニ添付スベキ図書提出ノ件照会	昭和 20 年 3 月
4	干拓工事ニ対スル免許申請方依頼	昭和 20 年 2 月
5	彦根市松原町琵琶湖干拓松原内湖公有水面埋立免許について	昭和 21 年 8 月
6	松原内湖干拓事業免許の件通牒：命令	昭和 21 年 7 月
7	野洲郡北里村・蒲生郡岡山村 水荃内湖公有水面干拓免許の図面について	昭和 21 年 9 月
8	水荃内湖公有水面埋立免許申請書作成 書類添付の件	昭和 21 年 9 月
9	高島郡百瀬村・川上村 貫川内湖公有水面干拓に依る事務処理について	昭和 21 年 9 月
10	公有水面埋立免許関係図書追加提出ニツイテ依頼 中之湖（蒲生郡島村）、四津川内湖（高島郡本庄村）、入江（東浅井郡大郷村）	昭和 21 年 10 月
11	公有水面埋立免許申請書提出について	昭和 21 年 8 月
12	復命書：彦根市松原町松原内湖ニ関スル件	昭和 19 年 10 月
13	神崎郡能登川町地先埋立譲渡ノ件	昭和 18 年 12 月
14	神崎郡栗見村地先 公有水面埋立工事計画変更ノ件 稟伺	昭和 16 年 11 月

また、ヒアリング時にも資料の収集を心がけた。その結果、ヒアリング対象者から表 3-8 に示す 5 件の文献や資料を入手することができた。

表 3-8 地元で収集した資料

No	書名	概要	本研究に関する記述	発行年
1	拓輝豊和 ²⁶⁾	小中の湖干拓で能登川町のきぬがさに入植してきた人々の入植時の排水工事、湿田での重労働、小中の湖の歴史がまとめられている。	小中の湖が干拓される以前の様子と干拓時の様子に関する記述あり。	1996
2	琵琶湖干拓小中の湖土地改良区 ²⁷⁾	小中の湖の干拓の概要がまとめられている。	干拓事業の経緯に関する記述あり。	不明
3	葭の詩 ²⁸⁾	小中の湖干拓で大字きぬがさ中州に入植してきた人々の干拓当時の思い出がまとめられている。	小中の湖の干拓後の湖底に関する記述あり。	1996
4	きぬがさ百話 ²⁹⁾	能登川西小学校周辺の昔の様子や伊庭内湖の様子がまとめられている。	小中の湖干拓以前の伊庭や能登川の様子が書かれており、漁業、生業、天気のことわざなどに関する記述あり。	1985
5	きぬがさ百話 ³⁰⁾	能登川西小学校周辺の昔の様子や伊庭内湖の様子がまとめられている。	小中の湖干拓以前の伊庭や能登川の様子が書かれており、漁業、生業などに関する記述あり。	1987

3-3 新聞記事収集

小中の湖が干拓された当時に関係する、新聞記事の収集を試みた。

新聞記事の検索には、先ず神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ³¹⁾の「新聞記事文庫」を利用した。同デジタルアーカイブでは明治末から昭和 45 年までの東京発行の新聞 20 社と関西発行の新聞 14 社、外地・旧植民地発行の新聞 10 社、その他地方発行の新聞 7 社を記事の内容を含めて検索することができる。しかし、同デジタルアーカイブでキーワードを「弁天内湖 干拓」「弁天湖 干拓」「安土 弁天」「蒲生 干拓」「近江 干拓」「中の湖 近江」「中之湖」「小中之湖」「小中の湖」「干拓 滋賀」「干拓 中湖」「食糧増産 滋賀」「安土 干拓」「琵琶湖 干拓」「滋賀 入植者」として検索したが、小中の湖干拓に関する記事は確認することができなかった。

滋賀県立図書館には、1983 年以前の新聞がマイクロフィルムで保管されている（1983 年以降については同図書館の「新聞記事見出し検索」³²⁾で検索可能である）。同図書館に保管されている滋賀版のマイクロフィルムは、朝日、毎日、産経、読売、中日、読売・サンケイ・中日、滋賀、滋賀日、滋賀民報の 9 社である。しかし、小中の湖が干拓されたとされる昭和 17 年から残っているのは、朝日新聞滋賀版と滋賀新聞の 2 社だけであった。ただし、両社ともに中抜けをしている月日などがあり、すべて保管されているわけではない。第 8 章で後述するように小中の湖の干拓工事が始められたと言われる最も早い年月日が昭和 17 年 8 月で、また竣工について最も遅い年月日が昭和 22 年 3 月とされている³³⁾ことから、昭和 17 年の 8 月から昭和 22 年 3 月までの両新聞を調査対象とした。マイクロフィルムであるため、キーワードから検索することができず、1 枚ずつ確認していき、見出しに「内湖」や「干拓」という文字が出てきたら内容を読む、という方法をとった。その結果、

内湖干拓に関する記事を161件収集でき、そのうち小中の湖に関する記事を表3-9の35件収集することができた。

他にも、当時の新聞記事については安土町立図書館や能登川町総合文化センターに問い合わせたが、両施設とも開館して間もないことから、新聞記事を含む当時の文献は所蔵されていないとのことであった。

表3-9 小中の湖に関する新聞記事

No	記事見出し	年月日	新聞名	発行支社
1	採藻競技 八幡と安土とで ³⁴⁾	1942/8/19	滋賀	滋賀
2	琵琶湖を干拓し食糧産百萬石増産 注目すべき計画発表される ³⁵⁾	1943/5/28	滋賀	滋賀
3	琵琶湖干拓をどうする 干拓運河計画を中心の座談会 ³⁶⁾	1943/6/30	滋賀	滋賀
4	内湖干拓の大事業 食糧増産へ、けふ起工式 ³⁷⁾	1944/2/10	滋賀	滋賀
5	必勝増産へ晴の鍬入れ 干拓の第一期計画 ³⁸⁾	1944/2/11	朝日	滋賀
6	中之湖干拓事業地鎮祭 きふ安土村彦根神社で執行 ³⁹⁾	1944/8/19	朝日	滋賀
7	お米増産目標 琵琶湖干拓で増やす ⁴⁰⁾	1944/3/21	朝日	滋賀
8	中之湖干拓起工式 大前に誓ふ大事業完遂 ⁴¹⁾	1944/8/20	滋賀	滋賀
9	麗湖を食糧増産基地に 他県の学徒隊続々来援 ⁴²⁾	1944/12/6	朝日	滋賀
10	「干拓の歌」学徒らに普及 ⁴³⁾	1944/12/20	朝日	滋賀
11	琵琶湖干拓 来年こそ本格化の秋 ⁴⁴⁾	1944/12/29	朝日	滋賀
12	歴史的排水早くも開始 ここ二ヶ月で成否が決まるのだ ⁴⁵⁾	1945/5/18	滋賀	滋賀
13	ポンプは干拓の親 ⁴⁶⁾	1945/5/18	滋賀	滋賀
14	干拓へ角帽援兵 千六百の甲種農兵隊員も出動 ⁴⁷⁾	1945/6/12	滋賀	滋賀
15	植付けは共同作業で 経営責任者は地元市町村農業会 ⁴⁸⁾	1945/6/18	滋賀	滋賀
16	干上る中之湖 近く潮干狩を展開 ⁴⁹⁾	1945/6/23	滋賀	滋賀
17	田植えに学徒隊初出動 お米生産 一万四千七百石 六百十五町歩の干拓進捗 ⁵⁰⁾	1945/7/8	滋賀	滋賀
18	干拓地だより 湖底を見て熱意 二百町歩の田植 25日頃終わる ⁵¹⁾	1945/7/17	滋賀	滋賀
19	五百段歩完植だ 松原内湖干拓田 金田のヨイコも中ノ湖干拓田へ ⁵²⁾	1945/7/23	滋賀	滋賀
20	今月中に完植だ 中ノ湖干拓地の田植え進む ⁵³⁾	1945/7/26	滋賀	滋賀
21	折角の干拓 苗確保に全力を尽くす ⁵⁴⁾	1945/8/5	滋賀	滋賀
22	植付け後の萬全期す 琵琶湖干拓今年で打切り ⁵⁵⁾	1945/8/7	滋賀	滋賀
23	憂慮される干拓地 大郷内湖の築堤決潰 中ノ湖も刻々と増水 ⁵⁶⁾	1945/10/10	滋賀	滋賀
24	干拓を個人経営に 申込超過すれば敵各者を厳選 明春二月迄に仮分譲 ⁵⁷⁾	1945/12/4	滋賀	滋賀
25	干拓は国営に移管 ⁵⁸⁾	1946/1/19	滋賀	滋賀
26	二千拓地分譲決る ⁵⁹⁾	1946/3/27	滋賀	滋賀
27	干拓田の植付準備 安土二百七十町歩ー水荃百町歩 方水路完成で水害も防げる ⁶⁰⁾	1946/5/4	滋賀	滋賀
28	県下の干拓田 植付予定七百六十町歩 ⁶¹⁾	1946/5/17	滋賀	滋賀
29	琵琶湖干拓は国営 仕事は現在のままで ⁶²⁾	1946/6/19	滋賀	滋賀
30	開拓 五十九万二千町歩 いよいよ琵琶湖干拓に本腰 ⁶³⁾	1946/6/22	滋賀	滋賀
31	干拓の田植終る ⁶⁴⁾	1946/7/28	滋賀	滋賀
32	新農村建設の意気 干拓●組合結成式 ⁶⁵⁾	1946/7/29	滋賀	滋賀
33	反當十俵は確乾糞 入植者の汗報いられ 干拓田の穂波豊か ⁶⁶⁾	1946/9/9	滋賀	滋賀
34	干拓田稔り豊か ⁶⁷⁾	1946/10/7	滋賀	滋賀
35	中之湖更に第二期工事 外湖千町歩を干拓 ⁶⁸⁾	1946/11/2	滋賀	滋賀

●部分はマイクロフィルムの画像が不鮮明で判別不能な文字

3-4 写真収集

写真収集としてはまず、滋賀県立琵琶湖博物館の画像（写真）データベース「湖と人のくらし写真アルバム」⁶⁹⁾で検索した。しかし「小中の湖」「弁天の湖」「伊庭内湖」「旧伊庭内湖」というキーワードで検索した結果、いずれのキーワードでもヒットした写真はなかった。「内湖」のキーワードではヒットした写真が数点あったが、いずれも干拓後の大中の湖や干拓前の津田内湖の写真などであった。

上記以外の収集方法としては、ヒアリング調査を行う際、対象者に写真を持っていないかどうか尋ねた。その結果、干拓以前の大中の湖と小中の湖、現在の小中の湖のポンプ場など合わせて6点の写真を収集することができた。

その他にも「環境フィールドワーク2 報告集」（2004, 2005）から本学のフィールドワークで実施した、小中の湖に関するヒアリング調査で収集されていた写真11点を入手することができた。

3-5 マトリックス表の作成

ヒアリング調査で明らかになった項目と未確認の項目を確認できるようにマトリックス表を作成した。

マトリックス表を作成するためには、まず、「びわ湖の漁撈生活1」と「びわ湖の専業漁撈2」を参考にして本研究の調査で明らかにする項目を選定した。両文献は琵琶湖や内湖に面した地域の漁業生活をまとめたものであり、本研究の調査内容に近いと考えたため参考にした。選定した項目を表3-10に示す。

マトリックス表は上記で選定した項目を1行目のセルに、1列目のセルにヒアリング対象者の氏名を入れて作成した。同表の該当のセルにヒアリング調査で明らかになった内容を随時埋めていくようにした。

表 3-10 選定した項目

カテゴリー	分類	要素
小中の湖	物理的諸元	大きさ、水深、水質、土質、湖底の地形、風向き、気温、波の高さ
	自然環境	景観、流入河川、湖内生態系、湖辺生態系
	周辺の地名	小中の湖の呼び名
小中の湖周辺の人々の暮らしぶり	生業	漁業、農業、ヨシ産業、その他の産業
	湖上交通	水路、港、航路、交易、境界
	言い伝え	伝説、知恵
	暮らし	年間行事、水位保持、水利用、遊び、天然資源、料理

3-6 ヒアリング調査

3-6-1 ヒアリング方法

本研究のヒアリング調査はすべて、安土町在住で東近江水環境自治協議会に所属している TM 氏に同席してもらいながら行った。調査中は話の内容が小中の湖のことを言っているのか、西の湖や大中の湖のことを言っているのか聞き分けるように心がけた。そして、明らかになったことをマトリックス表に埋めていくようにした。情報が不足している部分については後日再ヒアリングを行うなどして補った。また、地名や漁をしていた場所など、調査で分かった場所を白地図に書き込んでいき、完成後、一部ヒアリング対象者に確認をとった。なお、全てのヒアリング内容は録音した。

ヒアリング用の参考資料としては、当時の地形図や滋賀県に生息する生き物をまとめた本（自然観察シリーズ 6 冊）^{70)~75)}などを用いた。ヒアリングは同資料をヒアリング対象者に見てもらいながら行う資料提示型調査法を行った。その他にも、小中の湖にいた動物を聞くときには「琵琶湖干拓史」に載っている大中の湖の動植物を参考にして作成した表（科名と標準和名，方言）と，さらにはインターネットから収集したそれら動物の画像も見てもらいながら聞いていった。なお，動物の表は西の湖を調査している近畿大学農学部水産学科の藤田朝彦氏の協力を得て作成した。

3-6-2 ヒアリング調査の対象者

ヒアリング調査については，対象者を TM 氏に紹介してもらい，以下ののべ 17 人（14 人）に調査を実施した。ヒアリング対象者とヒアリング内容の概要を表 3-11 に示す。表に示すように，14 人中 12 人が下豊浦の住人で下豊浦に偏った結果となった。他の二人は伊庭の住人である。能登川や北須田，南須田の住人に対するヒアリングは実施できていない。なお 2005 年 11 月 28 日は下豊浦の 6 人を対象に集団ヒアリングを行った。

表 3-11 ヒアリング対象者

実施日	氏名	生まれた年	住んでいた集落	対象者データ	ヒアリング内容
2005/1/29	TK氏	1926年	下豊浦	1942年の時は16歳で、ヨシ業者だった	小中の湖の様子とともに、ヨシ田の年間の作業について聞いた
2005/1/31	OS氏	1925年	下豊浦	1942年の時は17歳で、漁師だった	干拓前の小中の湖の様子について、漁業を中心に聞いた
2005/2/1	NM氏	1925年	下豊浦	1942年の時は17歳で、農家だった	小中の湖の様子を聞くとともに、農業の年間の作業や伝説について聞いた
2005/3/18	ZK氏	1925年	下豊浦	1942年の時は17歳だった。安土町永町の地名や伝統などをまとめた「古伝雑録」著者の子息	下豊浦の昔の話を中心に聞いた
2005/4/21	ME氏	1923年	下豊浦	1942年の時は19歳で、農家だった	小中の湖の様子と、小中の湖周辺の人々の暮らしの様子を聞いた
2005/4/22	OY氏	1929年	下豊浦	1942年の時は13歳で、漁師の娘だった	小中の湖の様子のほか、当時の遊びや料理の話などを聞いた
2005/4/25	TH氏	1931年	下豊浦	1942年の時は11歳で、農家の娘だった	小中の湖周辺に住んでいた人々の暮らしの様子を中心に聞いた
2005/8/2	FM氏	1931年	伊庭	1942年の時は11歳で、当時お寺の息子だった	伊庭内湖全般の様子を聞いた
2005/8/3	MI氏	1922年	伊庭	1942年の時は20歳だった。しかし小中の湖を見たのは高等科を卒業するまでだった	伊庭内湖全般の様子を聞いた
2005/10/13	OS氏	1925年	下豊浦	1942年の時は17歳で、漁師だった	二度目のヒアリングとして年間の漁の様子について聞いた
2005/11/28	NK氏	1933年	下豊浦	1942年の時は9歳で、尋常小学生だった	小中の湖にいた動物についての集団ヒアリングを行った
2005/11/28	HK氏	1934年	下豊浦	1942年の時は8歳で、尋常小学生だった	小中の湖にいた動物についての集団ヒアリングを行った
2005/11/28	NY氏	1931年	下豊浦	1942年の時は11歳で、尋常小学生だった	小中の湖にいた動物についての集団ヒアリングを行った
2005/11/28	OR氏	1932年	下豊浦	1942年の時は10歳で、尋常小学生だった	小中の湖にいた動物についての集団ヒアリングを行った
2005/11/28	FT氏	1924年	下豊浦	1942年の時は18歳で、父親の漁を手伝っていた	小中の湖にいた動物についての集団ヒアリングを行った
2005/11/28	OS氏	1925年	下豊浦	1942年の時は17歳で、漁師だった	小中の湖にいた動物についての集団ヒアリングを行った
2006/12/28	MI氏	1922年	伊庭	1942年の時は20歳だった。しかし小中の湖を見たのは高等科を卒業するまでだった	二度目のヒアリングとして再度伊庭内湖全般の様子を聞いた

参考文献

- 1) 能登川町高校町史研究委員会：能登川町史，能登川町（1976）
- 2) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編：角川日本地名大辞典 25 卷，角川書店（1978）
- 3) 平凡社地方資料センター編：滋賀県の地名，平凡社（1991）
- 4) 滋賀県史町村沿革史編さん委員会：滋賀県史町村沿革史 第参卷，p.166，滋賀県市町村沿革史編さん委員会（1964）
- 5) 琵琶湖干拓史編さん委員会編：琵琶湖干拓史，pp.48-50，琵琶湖干拓史編纂事務局（1970）
- 6) 滋賀県史編さん委員会：滋賀県史 昭和編 第 3 卷，pp.121-127，滋賀県（1976）
- 7) 農業開発研修センター：新しい土新しい人，pp.21-25，青巧社（1977）
- 8) 藤岡謙二郎：びわ湖周遊，pp.189-198，ナカニシヤ出版（1980）
- 9) 滋賀県高等学校社会科教育研究会地理部会：滋賀県誌，地人書房（1983）
- 10) 滋賀県百科事典刊行会編：滋賀県百科事典，大和書房（1984）
- 11) 清水勝：図解滋賀県の歴史，pp.260-262，河出書房（1987）
- 12) 淡海環境保全財団：明日の淡海 創刊号（1999）
- 13) 滋賀県立大学環境科学部環境フィールドワーク委員会：環境フィールドワーク 2 報告書，まちづくりと環境情報（2004）
- 14) 滋賀県立大学環境科学部環境フィールドワーク委員会：環境フィールドワーク 2 報告書，まちづくりと環境情報（2005）
- 15) 倉田亮：内湖－その生態学的機能－，pp.46-54，滋賀県琵琶湖研究所所報（1983）
- 16) 滋賀県土木部河港課：琵琶湖周辺湖保全対策基本計画（1996）
- 17) 長命寺湾・西の湖環境保全協議会：内湖の果たす役割について（2000）
- 18) 西野麻知子，浜端悦治：内湖からのメッセージ 琵琶湖周辺の湿地再生と生物多様性保全，サンライズ出版（2005）
- 19) 滋賀県教育委員会編：びわ湖の漁撈生活，滋賀県文化財保護協会（1979）
- 20) 滋賀県教育委員会編：びわ湖の專業漁撈，滋賀県文化財保護協会（1980）
- 21) 滋賀県教育委員会編：内湖と河川の漁法（1981）
- 22) 伊庭祭保存会編：伊庭の坂下し祭 近江の奇祭，能登川町・伊庭祭保存会（1985）
- 23) 滋賀県立琵琶湖博物館編：湖の魚・漁・食 淡海あれこれ商店街，滋賀県立琵琶湖博物館（2000）
- 24) 滋賀県：滋賀県広報
- 25) 滋賀県総務部総務課編：滋賀県行政文書総簿冊目録 明治元年～昭和 20 年（1983）
- 26) きぬがさ城東区 50 周年記念事業実行委員会：拓輝豊和（1996）
- 27) 琵琶湖干拓小中の湖土地改良区
- 28) 中州開村五十周年記念誌編集委員会編：葭の詩，大字きぬがさ中州（1996）
- 29) 中川眞澄：きぬがさ百話（1985）
- 30) 中川眞澄：きぬがさ百話 2（1987）

- 31) 神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ：新聞記事文庫
<<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/index.html>>, 2005-11-2
- 32) 滋賀県立図書館：滋賀県関係新聞記事見出し検索
<http://www.library.pref.shiga.jp/NSIGLIB/search.inp_cond>2005-11-2
- 33) 琵琶湖干拓史編さん委員会編：琵琶湖干拓史, p.47, 琵琶湖干拓史編纂事務局（1970）
- 34) 滋賀新聞, 1942-8-19
- 35) 滋賀新聞, 1943-5-28
- 36) 滋賀新聞, 1943-6-30
- 37) 滋賀新聞, 1944-2-10
- 38) 朝日新聞（滋賀）, 1944-2-11
- 39) 朝日新聞（滋賀）, 1944-8-19
- 40) 朝日新聞（滋賀）, 1944-3-21
- 41) 滋賀新聞, 1944-8-20
- 42) 朝日新聞（滋賀）, 1944-12-6
- 43) 朝日新聞（滋賀）, 1944-12-20
- 44) 朝日新聞（滋賀）, 1944-12-29
- 45) 滋賀新聞, 1945-5-18
- 46) 滋賀新聞, 1945-5-18
- 47) 滋賀新聞, 1945-6-12
- 48) 滋賀新聞, 1945-6-18
- 49) 滋賀新聞, 1945-6-23
- 50) 滋賀新聞, 1945-7-8
- 51) 滋賀新聞, 1945-7-17
- 52) 滋賀新聞, 1945-7-23
- 53) 滋賀新聞, 1945-7-26
- 54) 滋賀新聞, 1945-8-5
- 55) 滋賀新聞, 1945-8-7
- 56) 滋賀新聞, 1945-10-10
- 57) 滋賀新聞, 1945-12-4
- 58) 滋賀新聞, 1946-1-19
- 59) 滋賀新聞, 1946-3-27
- 60) 滋賀新聞, 1946-5-4
- 61) 滋賀新聞, 1946-5-17
- 62) 滋賀新聞, 1946-6-19
- 63) 滋賀新聞, 1946-6-22
- 64) 滋賀新聞, 1946-7-28

- 65) 滋賀新聞, 1946-7-29
- 66) 滋賀新聞, 1946-9-9
- 67) 滋賀新聞, 1946-10-7
- 68) 滋賀新聞, 1946-11-2
- 69) 滋賀県立琵琶湖博物館 : 画像 (写真) 資料データベース
<<http://www2.lbm.go.jp/scripts/STrieve.exe?USER=GUEST&PW=GUEST>>, 2004-11-15
- 70) 滋賀県中学校教育研究会理科部会編 : 滋賀の魚・図解ハンドブック, 新学社 (1987)
- 71) 滋賀の理科教材研究委員会 : 滋賀の水草・図解ハンドブック, 新学社 (1989)
- 72) 滋賀県小中学校教育研究会理科部会 : 滋賀の水鳥・図解ハンドブック, 新学社 (1994)
- 73) 滋賀県小中学校教育研究会理科部会 : 滋賀の水生動物・図解ハンドブック, 新学社 (2000)
- 74) 滋賀の理科教材研究委員会 : 滋賀の両生類・は虫類, ほ乳類・図解ハンドブック, 新学社 (2001)
- 75) 滋賀県小中学校教育研究会理科部会 : 滋賀の水生昆虫・図解ハンドブック, 新学社 (2004)

第 4 章 小中の湖の物理的緒元

本章では，小中の湖の位置や大きさ，水深，湖底環境などの物理的諸元についてヒアリング調査の結果を中心にまとめる．

4-1 位置・大きさ

小中の湖は，琵琶湖の東岸のほぼ中央部に位置し，表面積は 342.1 ha¹⁾，西の「西の湖」と北の「大中の湖」とともに，かつて琵琶湖周辺で最大の内湖群を形成していた．内湖のほぼ中央には南から突起した安土山があり，この安土山によって湖は西の「弁天内湖」と東の「伊庭内湖」にほぼ二分される形になっていた（図 4-1）．

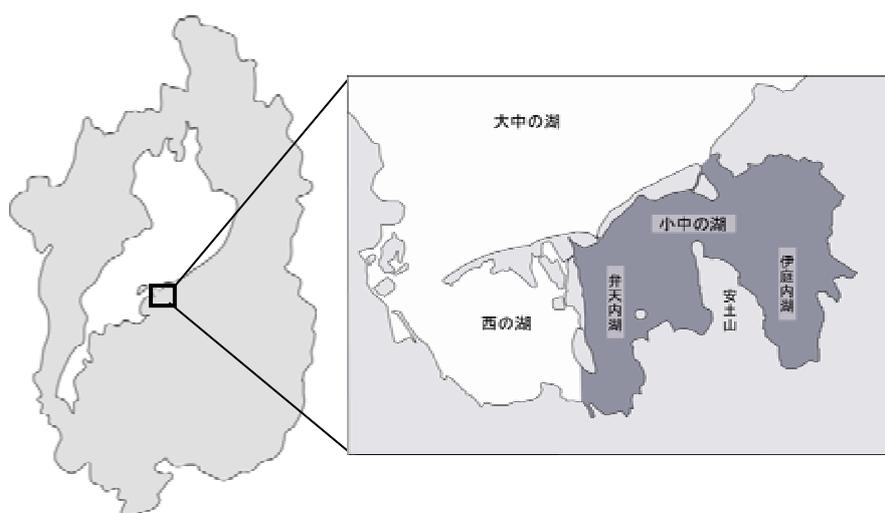


図 4-1 小中の湖の位置

4-2 湖底環境

小中の湖の湖底はほとんどが泥地であった．しかし，集落に近い石垣付近や岸寄りの湖岸は砂や砂利だった．また，「スクモ」と呼ばれる腐食土が堆積しているところが数箇所あった．その他，「モラ」または藻がとれるところが弁天内湖に数箇所，伊庭内湖には全域に渡って存在し，白葭や浦葭付近ではメタンガスの発生している場所もあった．図 4-2 に小

中の湖の湖底環境を示す．

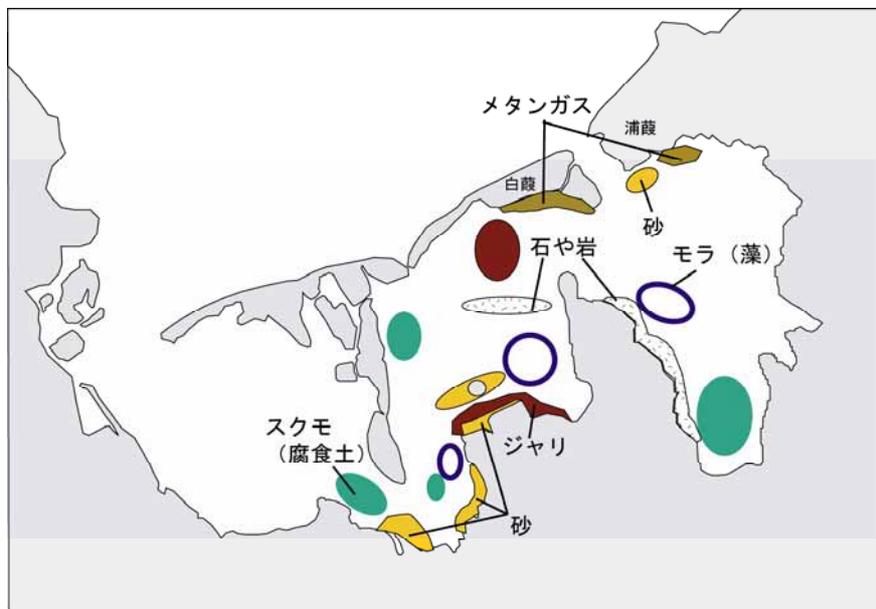


図 4-2 小中の湖の湖底環境（伊庭 2 人と下豊浦 9 人のヒアリング結果から著者が作成）

小中の湖の水深は全体的に浅く，深い場所で 2 m，浅い場所では 60～70 cm くらいだった．弁天内湖で深かったところは図 4-3 に示す 3 箇所．弁天島周辺は浅かった．

弁天内湖には「弁天島」と呼ばれる離れ小島があった．弁天島にむかう途中には深くなっている所があり，下豊浦の人々はそれを「ツボ」と呼んでいた．弁天島まで泳いで行くときには「ツボがあるから気をつけよ」と注意されたという．伊庭内湖には，極端に深くなっている場所というのではなく，中央に進むにつれて徐々に深くなっていた．

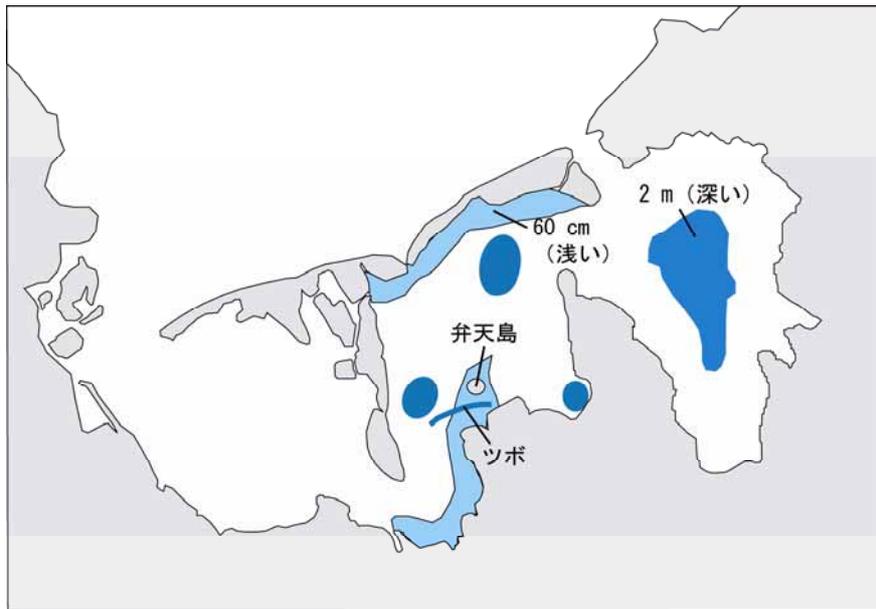


図 4-3 小中の湖の水深（伊庭 2 人と下豊浦 9 人のヒアリング結果から著者が作成）

4-3 水質

冬の風が強く吹いた日などは湖水が濁っていた。しかし、たいていは潜らずに舟の上から湖底を覗くと魚はもちろんのこと、湖底に生えている藻や貝、石が見えるくらい透明度が高かった。湖底まで見えるくらいきれいな水だったと、ヒアリング対象者全員が口をそろえて言う。

4-4 風向と波の高さ

小中の湖に吹く風は天候によってまちまちであった。しかし、弁天内湖に吹く風は夏と冬で明らかに違っていた。夏の朝は南西の風が吹き、夕方からは北東の風へと変わった。冬の初めには、まず西風が吹いた。この西風は、少し穏やかになった頃、3 日から一週間後にはきつい北風へと変わる。これを「北返し」と下豊浦では呼んでいた。北返しの風はとてきつく、北返しが吹くと雪が降った。

他にも、夜にだけ吹く西風があり、それを「夜西(よにし)」と呼んでいた。日中が穏やかな日でも夜中になると西風が吹く。だから漁師が夜中に網を仕掛ける時はよっぽど考えなければならなかったという。

一方、伊庭内湖には北風がよく入った。特に「神さん柳(かみさんやなぎ)」と呼ばれていた柳の木の辺りに吹く風が強かったとヒアリング対象者はいう。

波も大中の湖が一番高く，小中の湖でも伊庭内湖は高かった．弁天内湖はそれに比べると白波が立つときもあったが比較的穏やかだった．

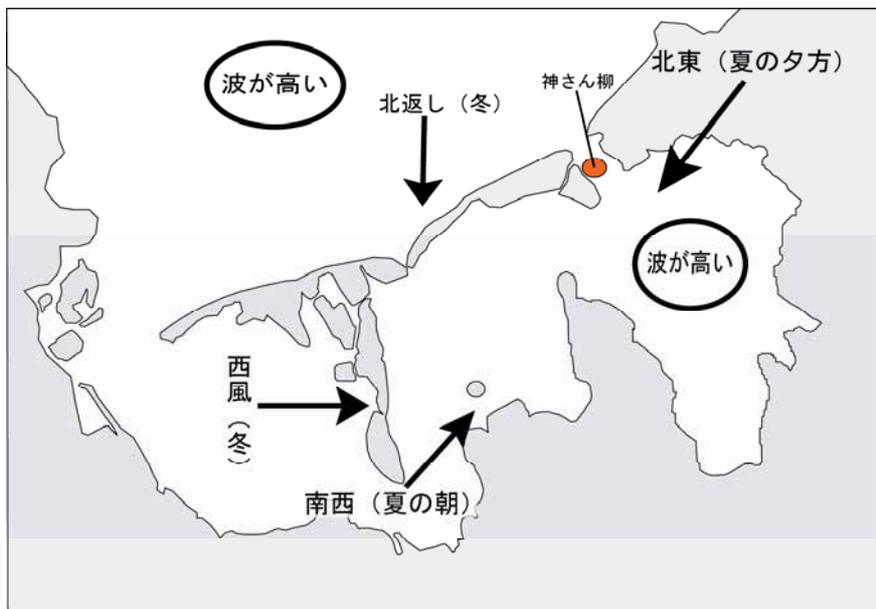


図 4-4 小中の湖の風向きと波の高さ（下豊浦 2 人のヒアリング結果から著者が作成）

4-5 気温

小中の湖は 1930 年頃の冬に一度だけ湖面全体が凍ったことがあった。子どもたちは凍りの上を歩いて江ノ島に渡った。子どもが乗っても割れないくらいの厚い氷が張っていたということである。それくらい当時の冬は寒かった。写真 4-1 は湖面が凍ったときの弁天島である。



写真 4-1 湖面が凍った時の弁天島（1930年頃）（著者がヒアリング時に入手した写真）

参考文献

- 1) 琵琶湖干拓史編さん委員会編：琵琶湖干拓史，琵琶湖干拓史編纂事務局（1970）

第5章 小中の湖周辺の地名

本章では小中の湖周辺にあった集落を示すとともに，同内湖の呼び名および周辺地域の地名についてヒアリング調査の結果を中心に述べる．

5-1 小中の湖周辺地域の呼び名と小中の湖の呼び名

小中の湖周辺に暮らす人々は安土山を境に小中の湖を二つに分けて呼んでいた．安土山の西側の内湖は，弁天島があったことから「弁天内湖」または「弁天湖（べんてんうみ）」と呼んでいた．一方，安土山の東側の内湖は集落によって異なる呼び方をしていた．例えば，下豊浦の人は伊庭の集落の内湖であるとの意味から「伊庭内湖」または「伊庭湖（いばうみ）」と呼んでいた．また，伊庭に住む人々は大中の湖を「伊庭内湖」と呼んでいたことから「能登川内湖」と呼んでいたり，伊庭の集落からみて北にあった大中の湖に対する呼び方として「ミナミノ（南の）」と呼んでいたりした．

昭和21年（1946年）の新聞記事によると，小中の湖が干拓された当時は，現在の西の湖と大中の湖，そして小中の湖を含めた範囲は「中之湖」と呼ばれていた¹⁾．また小中の湖の部分は「弁天内湖」または「弁天湖」，「伊庭内湖」または「伊庭湖」という名称で記載されている¹⁾．現在一般的に呼ばれている「小中の湖」という名称は1946年（昭和21年）までの新聞記事には登場しておらず，いつから使われるようになったのかは定かではない．おそらく，大中の湖が干拓される時に中之湖のその部分を「大中の湖」と呼び，すでに干拓されていた中之湖の一部をそれと呼び分けるために「小中の湖」と呼ぶようになったのではないだろうか．

小中の湖に関してはさまざまな呼び名が存在するが，本研究では安土山の西側を「弁天内湖」，東側を「伊庭内湖」と記載することにする．

その他，小中の湖周辺の主な地名を図5-1に示す．



図 5-1 小中の湖と周辺地域の呼び名
 (伊庭 1 人と下豊浦 9 人のヒアリング結果より著者が作成)

5-2 小中の湖周辺の集落

小中の湖の周辺には「伊庭」「能登川」「北須田」「南須田」「下豊浦」の 5 つの集落があった(図 5-2 参照)。1940 年(昭和 15 年)の国勢調査によると、当時の能登川村(現在の能登川と北須田、南須田、安楽寺を含めた範囲)の人口は 2110 人、伊庭村(現在の伊庭)は 2550 人、安土村(現在の安土町北西部¹¹⁾)は 6455 人であった。なお、図 5-2 の集落名は明治 22 年から現在までの大字名で、能登川村は明治 27 年から昭和 17 年まで、伊庭村は明治 27 年から昭和 17 年まで、安土村は明治 22 年から昭和 29 年まで存在した村の名称である。

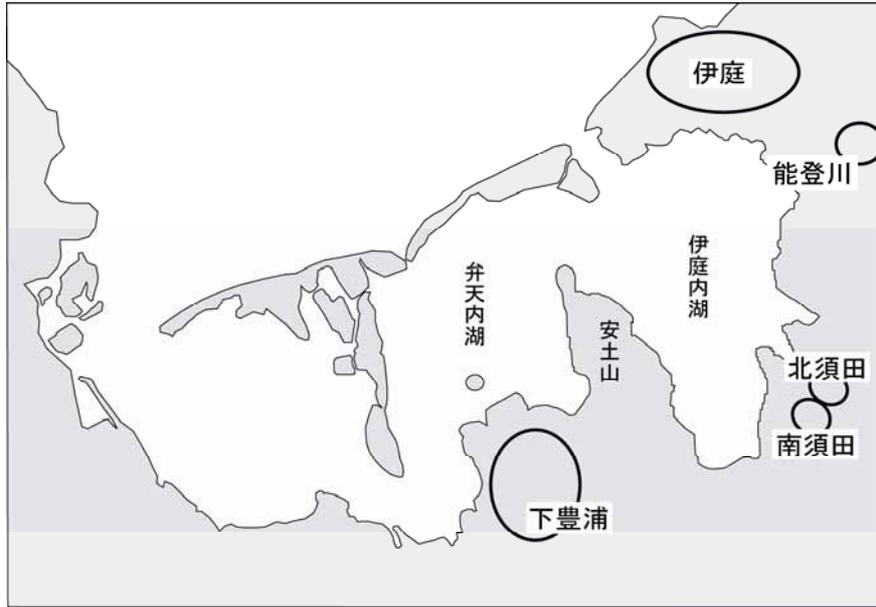


図 5-2 小中の湖周辺の集落（明治 28 年製版の地形図を参考に著者が作成）

参考文献

- 1) 滋賀新聞，1946-9-9

第6章 小中の湖およびその周辺の自然環境と景観

本章では小中の湖および周辺の景観と自然環境について、ヒアリング調査の結果を中心に述べる。

6-1 小中の湖の景観

まず、小中の湖の景観について、ヒアリング調査の結果を基に、描写すると次のようになる。

安土山に登り眼下を眺めると、目の前に広大な湖面が広がる。手前に見えるのが小中の湖、奥には大中の湖、そして左手には西の湖が広がっていた。小中の湖と他の2つの内湖との間には、伊庭川から運ばれてきた土砂で形成されたであろう砂州が横たわり¹⁾、砂州によって小中の湖と大中の湖、また小中の湖と西の湖に分かれていた。

小中の湖の穏やかな湖面は太陽の光を反射してきらきらと輝いていた。湖の周りにはヨシが生い茂り、あたかも取り囲んでいるかのように見える。そんなヨシ地の辺りではオオヨシキリやカイツブリをはじめとする水鳥の姿を見ることができた。

6-2 流入河川と切り通し

小中の湖に流入していた河川と小中の湖の切り通しを図6-1に示す。

小中の湖に流入していた主な河川としては、下豊浦と伊庭のヒアリング対象者たちが「安土川」「北出川」「妙金剛寺川」と呼んでいた3本の川があった。ただし須田や能登川の人々にはヒアリングができていないため、図6-1に示した河川が小中の湖に注ぎ込む全ての河川と言うわけではない。

図に示すように安土川のすぐ隣にもう1本の川があった。この川は安土川の川上の田んぼへ水を送るときに利用していたという。安土川を堰止めして川の流れを止め、そして、その川の水をポンプで安土川に流して安土川の水位をあげ、さらに安土川の川上の方でポンプを使って田んぼへ注いでいた。しかし残念ながらその川の名称はヒアリング調査で確認することはできなかった。

また、小中の湖には「切り通し」と呼ばれる、西の湖や大中の湖につながる砂洲の切れ目が、江ノ島と巴の間や、苔の辺りに3箇所あった。このうち2箇所には呼び名がついており、巴の切り通しは「中の江」、苔の切り通しはそのまま「コケ」と呼ばれていた。下豊浦の人が西の湖へ行くときには、江ノ島と巴の間にある2つの切り通しを使っていた。ま

た、大中の湖へ出るときはこれらの切り通しから一度西の湖に出て、それから、「コケ」を通っていたという。

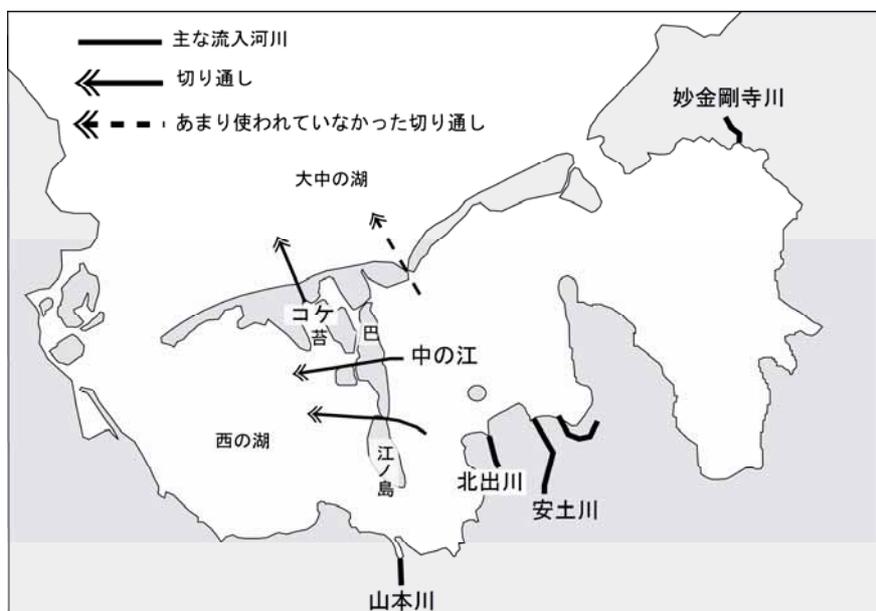


図 6-1 小中の湖の主な流入河川と切り通し

(河川については伊庭の 1 人と下豊浦の 2 人，切り通しについては下豊浦の 3 人のヒアリング結果より著者が作成)

6-3 湖内生態系

6-3-1 小中の湖周辺で見ることのできた植物

弁天内湖の周辺では、白葎、芦刈、高島、江ノ島の辺りにヨシが生えていた。一方、伊庭内湖では、周囲を取り囲むようにヨシが群生していた。伊庭内湖には「猫ヨシ」と呼ばれていたヨシ島があった(図 6-2)。

小中の湖周辺では、ヨシが生えていた場所は「ヨシ地(よしじ)」または「ヨシ原」、島になっている所は「ヨシ島(よしじま)」と呼ばれていた。

また、江ノ島や巴などのヨシ島にある田んぼの周辺には、いたるところに木陰を作るための柳の木が植えられていた。田仕事に来た人々はその木陰で休んだり、子どもを寝かせたりしていたという。多くあった柳の木の中に一本だけ「神さん柳(かみさんやなぎ)」という名前と呼ばれていたものがあった。

他には、湖の内ではコウガイモやホテイアオイを見ることができた。また、伊庭の集落

を流れている伊庭川ではバイカモが見られたという。

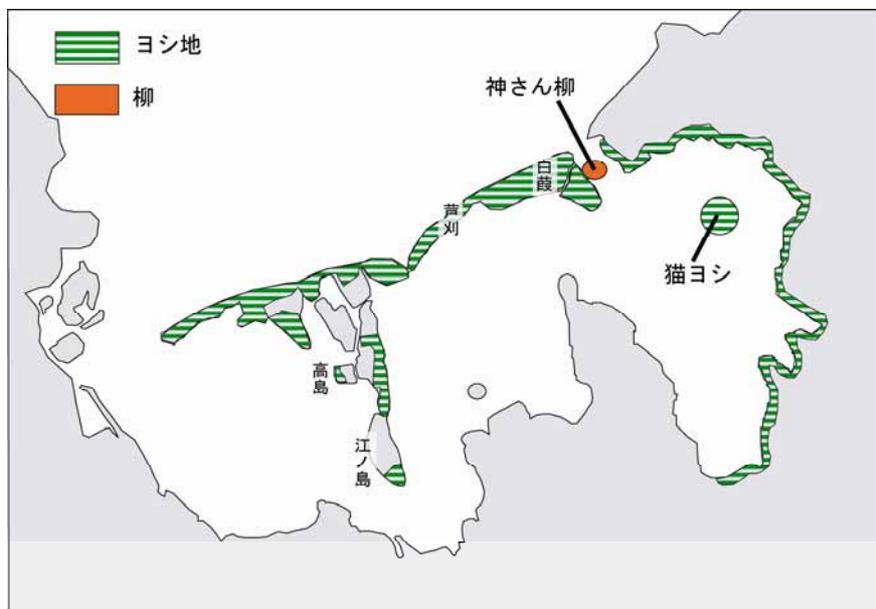


図 6-2 小中の湖周辺のヨシ地と神さん柳の場所
(伊庭の 2 人と下豊浦の 4 人のヒアリング結果より著者が作成)

6-3-2 小中の湖で見ることのできた動物

内湖は水鳥の生息地や魚の生育の場としての機能を果たしていたことから，小中の湖でも様々な水鳥や貝，魚を見ることができた．伊庭の 2 人，下豊浦の 7 人に対するヒアリング調査の結果から，当時いたであろうと推察することのできた鳥類と貝類，魚類をそれぞれ表 6-1 と 6-2，6-3 に示す．

表 6-1 小中の湖にいたと推察される鳥類

科名	標準和名	方言
カラス科	ハシブトガラス	カラス
	ハシボソガラス	カラス
ムクドリ科	ムクドリ	
ハタオリドリ科	スズメ	
ホオジロ科	ホオジロ	ホオシロ
ヒバリ科	ヒバリ	
セキレイ科	セグロセキレイ	
	キセキレイ	
メジロ科	メジロ	メシロ
モズ科	モズ	
ウグイス科	ウグイス	
	オオヨシキリ	ヨシキリスズメ
ツグミ科	ツグミ	
ヒヨドリ科	ヒヨドリ	
ツバメ科	ツバメ	
カラセミ科	カワセミ	
フクロウ科	フクロウ	
ハト科	キジバト	ハト
クイナ科	バン	
	オオバン	
キジ科	キジ	
タカ科	トビ	トンビ
カモ科	マガモ	アオクビ
	カルガモ	
	コガモ	
	ハシビロガモ	
	ホシハジロ	ハジロ
	キンクロハジロ	ハジロ
サギ科	アオサギ	
	チュウダイサギ	
	チュウサギ	
	コサギ	
	アマサギ	
	ササゴイ	
	ゴイサギ	
ウ科	カワウ	
カイツブリ科	アカエリカイツブリ	
	カイツブリ	

地元の人がヨシキリスズメと呼んでいたオオヨシキリは、春から夏にかけてヨシ地だけで見ることができ、ヨシに巣を作っていた。また、ヨシ地ではキジも巣を作り、卵を産み子育てをしていた。ヨシ業者を営んでいたヒアリング対象者によると、キジはヨシキリスズメと違い、巣がどこにあるかを絶対に見せなかったという。端に近づくとタッタッと他の場所へ移動してからパッと飛び立つのだった。

一方、カイツブリはヨシ地など水辺に巣を作り、ホテイアオイの近くでよく見かけるこ

とができた。カイツブリには「カイツブリ、カイツブリ お前の家が焼けたるぞ 早いんで水かけよ」という遊び歌があったという。子どもたちがこの歌を歌うと、カイツブリはドボンと水中に潜った。

他にも、漁師はサギが魚を狙う様子を見て、魚がどこにいるのかを見ていた。ヒバリは5～6月にかけて、田んぼや麦畑で見ることができた。モズは秋に、ヒヨドリは冬に見ることができた。また、ハジロは琵琶湖の波がきつい西風の時に内湖に入ってきていたという。

表 6-2 小中の湖にいたと推察される貝類

科名	標準和名	方言
カワニナ科	ヤマトカワニナ	ジナ
モノアラガイ科	モノアラガイ	
タニシ科	オオタニシ	タニシ
シジミ科	マシジミ	シジミ
	セタシジミ	
イシガイ科	イシガイ	
	ササノハガイ	
	イケチョウガイ	オトコガイ
	メンカラスガイ	カラスガイ、ドブガイ
	ドブガイ	アオガイ、ドブガイ、ダブガイ
	マルドブガイ	牛の目玉

貝類については、集団ヒアリングを行った下豊浦の人々は、ドブガイとカラスガイの区別を明確にしておらず、泥地でとれる黒い貝をドブガイやダブガイと呼び、黄色かった貝はカラスガイと呼んでいた。

漁師をしていたヒアリング対象者によれば、土質が違うためか、小中の湖でとれる貝と西の湖でとれる貝、大中の湖でとれる貝は貝殻の色から身の色まで全部違っていたという。小中の湖ではダブガイのような大きい貝が多い。一方、西の湖の貝は真っ黒で身が大きく、みんなに喜ばれていた。そのため、貝とりには西の湖へ行くことが多かったという。大中の湖の貝は上品な貝で、貝殻が薄く、黄色がかっており身が小さかった。

タニシは小中の湖にもいたが西の湖の方が多かった。少なかったのはササノハガイだった。マシジミは浅瀬で砂地のところに、セタシジミは泥地のところにいた。

しかし、集団ヒアリングに参加した近畿大学農学部水産学科の藤田朝彦氏によると、琵琶湖水系の記録や対象者の認識の程度から、その他にもタニシ科のナガタニシとヒメタニシやイシガイ科のオバエボシガイとマツカサガイ、オトコタテボシガイ、タテボシガイも小中の湖にいた可能性があるという。しかし、これらの貝がいたかどうかは十分には確認できなかった。

表 6-3 小中の湖にいたと推察される魚類

科名	標準和名	方言
ナマズ科	ナマズ	
ギギ科	ハゲギギ	ギギ
ドジョウ科	ドジョウ	ドンジョ
	シマドジョウ	
	アユモドキ	ウミドジョウ
コイ科	カネヒラ	ボテ, イロボテ
	アブラボテ	ボテジャコ
	イタセンバラ	イロボテ
	ニゴイ	
	ホンモロコ	モロコと呼んでいた
	スゴモロコ	
	カマツカ	
	ビワヒガイ	ヒガイ
	ゼゼラ	
	モツゴ	イシモロコ
	ウグイ	
	オイカワ	ハイジャコ, ハイ
	ハス	
	ワタカ	ワタコ
	コイ	
フナ		
ウナギ科	ウナギ	
メダカ科	メダカ	
タイワンドジョウ科	タイワンドジョウ	
	カムルチー	ギャング
カジカ科	カジカ	
ハゼ科	ドンコ	ドチマン

魚類としては、浅瀬には地元の人がボテジャコと呼んでいたタナゴ類やビワヒガイなど、深みにはコイやフナが沢山いた。5月の産卵期にはナマズやフナが群れて田んぼなどに上がってきた。フナでは、ゲンゴウロウブナやギンブナ、ニゴロブナが内湖のどこにでもいた。コイはヤマトゴイ（養殖品種）とマゴイがいたという。また、フナの稚魚は「ガンゾウ」と呼んでいた。春から夏にかけては、地元の人が「ウロリ」と呼んでいた魚があがってきた。ウロリとは「原色淡水魚類検索図鑑」²⁾によると、ヨシノボリ類の後期仔魚または稚魚のようである。

ヨシ地にはワタコと呼ばれたワタカをたくさん見ることができた。一方、ウグイ等はあまり見ることができなかつた。アユモドキはウナギの筒にウナギと一緒に入っていた。ハイジャコと地元の人が呼んでいたオイカワはメスをメズシにした。

小中の湖における漁業については第7章で詳しく述べる。

特によく魚類と貝類を見ることができた場所を図6-3に示す。

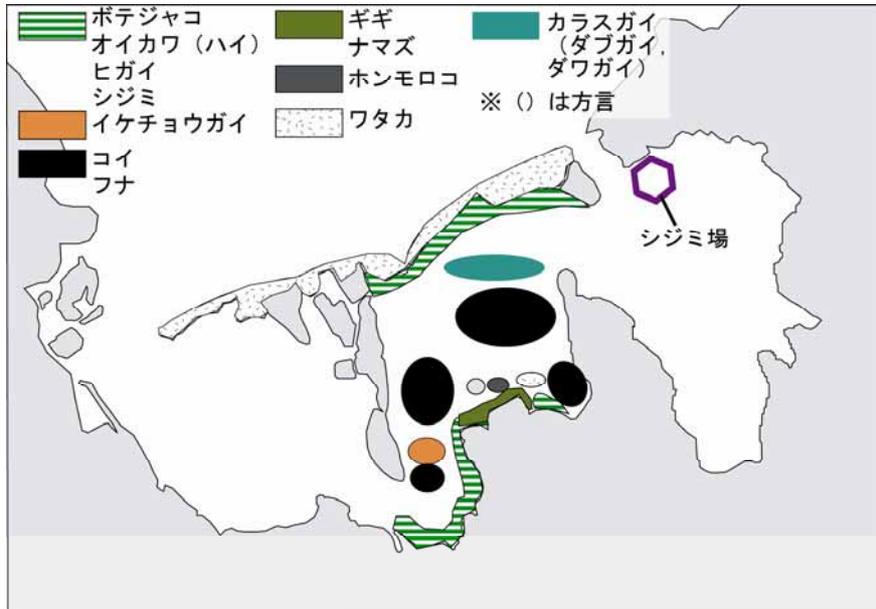


図 6-3 特によく見ることができた魚類と貝類の場所
 (下豊浦 7 人のヒアリング結果より著者が作成)

参考文献

- 1) 能登川町高校町史研究委員会：能登川町史，能登川町（1976）
- 2) 原色淡水魚検索図鑑，北隆館（1963）

第7章 小中の湖周辺の人々の暮らしと生業について

本章では、小中の湖とその周辺に暮らしていた人々との関わりについて、ヒアリング調査で明らかになったことを中心にまとめる。

7-1 弁天内湖と伊庭内湖の境界

小中の湖は図 7-1 に示すように、弁天内湖と伊庭内湖にわかれており、弁天内湖は下豊浦の集落に、伊庭内湖は伊庭と能登川、北須田、南須田の集落に属していた。

違った集落に属していたからであろう、弁天内湖と伊庭内湖の境である安土山の地先には両内湖の境界を示す簾が張られていた。この場所のことを下豊浦の人々は「フナゴシ」と呼んでいた。簾は張られていたが、その上部は切られており田舟が通れるようになっていたためそう呼ばれていた。下豊浦の人々が田舟を使って安土山の東側にある田んぼへ行く時は、そこを通過して伊庭内湖に入っていたという。

この「フナゴシ」について下豊浦のヒアリング対象者は「伊庭内湖ではコイの養殖をしていたため、下豊浦の漁師は伊庭内湖に入れなかった」と記憶している。ところが、伊庭のヒアリングではそのことを確認することができなかった。「境界はあったが自由に行き来することができた」と伊庭のヒアリング対象者は答えている。おそらくは、コイの養殖をしている伊庭内湖に下豊浦の漁師が入れば、コイを盗みに来たのではないかと警戒されることを恐れて、下豊浦の漁師が自分たちで行かないように心がけていたのではないだろうか。

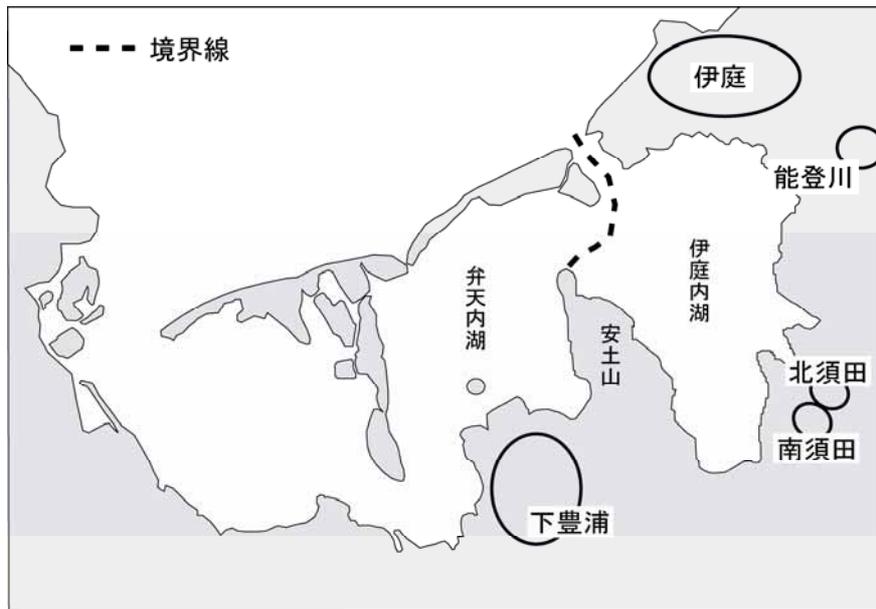


図 7-1 弁天内湖と伊庭内湖の境界

(境界については伊庭 1 人と下豊浦 2 人のヒアリング結果から，また周辺集落の位置については明治 28 年製版の地形図を参考に著者が作成)

7-2 小中の湖周辺の港と航路

小中の湖周辺の港としては，地元の人たちが「伊庭の金比羅浜」「浜能登川」「豊浦港」と呼んでいた港が図 7-2 に示す場所にそれぞれあった。

「滋賀県の地名」¹⁾によると，江戸時代の能登川村には「能登川湊」，下豊浦村には「豊浦湊」という港があったという。また当時，能登川村は伊庭村の一部だったため「能登川湊」は「伊庭湊」とも呼ばれていたようである。おそらく，これら江戸時代の「能登川湊」と「豊浦湊」は，昭和のはじめに地元の人たちがそれぞれ「浜能登川」と「豊浦港」と呼んでいた港のことだと考えられる。しかし，ヒアリング調査で地元の人が「伊庭の金比羅浜」と呼んでいた港に関しては「滋賀県の地名」には記述がなかった。江戸時代にはなかった港なのかもしれない。「伊庭の金比羅浜」と呼ばれていた港がいつできたのかは，明らかにすることができなかった。

ヒアリング調査を行った伊庭の人の証言によると，伊庭の金比羅浜には西江州から柴や石などの物資が運ばれてきていたという。ただし，この周辺の当時の物資の集積場は近江八幡であった。伊庭からは「八幡通い」というぽんぽん船が近江八幡に向って出ており，近江八幡に買い出しに行く人々はこの舟を利用していたという。伊庭の金比羅浜を出たぽんぽん船は大中の湖を通り，円山から北之庄沢を経て八幡堀に入る航路をとった。ただし，風がきつい時などは一度小中の湖に入り，「中の江」と呼ばれる切り通しを通過して西の湖に

出て、そして八幡堀へと向かった（図 7-2）。

一方、能登川の「浜能登川」には「柴舟」と呼ばれていた、柴や割り木、炭など燃料を積んだ、田舟より少し大きい中舟が入ってきていたという。しかし、どのような航路で浜能登川に入り、そしてどのように出て行ったのかについては確認できていない。

ヒアリング対象者から確認できたのは浜能登川に入ってきていたといわれる太湖汽船の航路である。浜能登川から出た太湖汽船には、伊庭内湖に入り、豊浦港と常楽寺港に寄って八幡口を通って行く航路と、大中の湖へ出る航路の二通りあった（図 7-2）。しかし、ヒアリング対象者は、太湖汽船が港に入ってきたところを直接見たわけではなく、聞いた話だという。太湖汽船については「資料集 滋賀県の交通史」²⁾によると明治 20 年前後までは能登川と常楽寺に入ってきたことがわかっている。

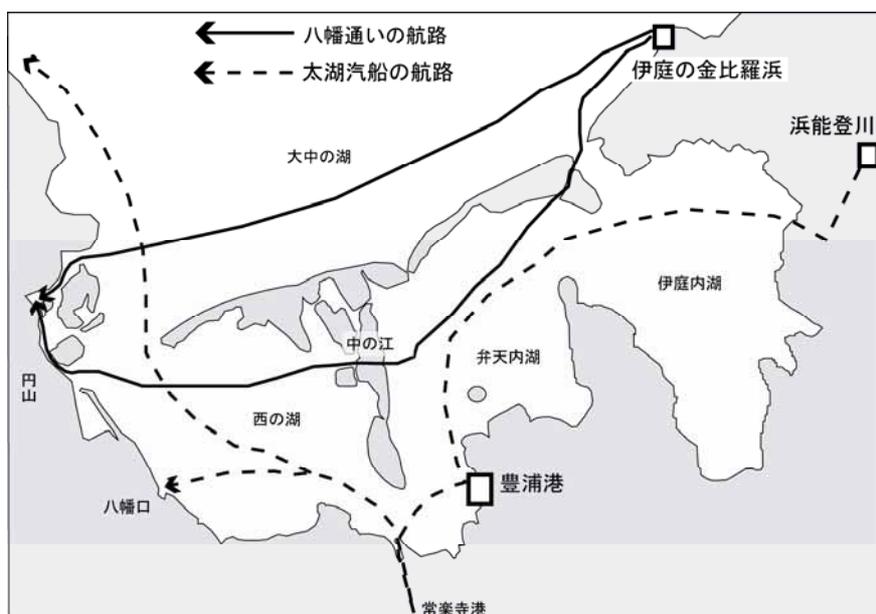


図 7-2 八幡通いと太湖汽船の航路

（八幡通いの航路については伊庭 1 人，また太湖汽船の航路については下豊浦 1 人のヒアリング結果から著者が作成）

7-3 小中の湖につながる水路と田舟

小中の湖周辺にある下豊浦と伊庭の集落の中には水路と川が縦横に走っていた。特に伊庭は、昔、伊庭氏が城を構えた時に城堀として水路が掘られたことから、水路が集落の中を碁盤の目のように走っていた。そのため田舟は生活の必需品であり、どの家でも 2~3 艘の田舟を持っていた。「きぬがさ百話」³⁾によると伊庭には、500 艘もの田舟があり、湖東第一を誇っていたという。

伊庭の人たちは田舟を水路につくられたカワトという場所に停めていた。伊庭のカワトは水を汲むためだけのものではなく、他に田舟を止めたり、舟に荷物を積み下ろしたりするためにも利用されていた。カワトは 1~2 軒の家の一つずつあった。

伊庭のカワトには呼び名があった。川に突き出た形のものを「デガワト」、川端にある道や家の敷地中に入り込んだ形のものを「ウチガワト」、また、階段が一つしかないものを「カタガワト」、二つあるものを「リョウガワト」と呼んでいた。川から道路を挟んだ家では、家の中にまで川の流れを引き込んでいたところもあり、引き込んだ川につくられたカワトを「イリガワト」と呼んでいた。図 7-3 に伊庭のカワトの名前と絵を示す。

また、伊庭の人々の田んぼは、村の中を流れる川の川上のほうにあった。収穫物のある時などは田舟で行っていたが、田舟は二人がかりで引っ張り、川上の田んぼまで上げていたという。このとき、二人のうち一人は舟を引っ張り、もう一人は水路の縁に当たらないように竹の竿で舟を押しした。

一方、下豊浦でも江ノ島や巴などの離れ小島にある田んぼへは田舟で通っていた。

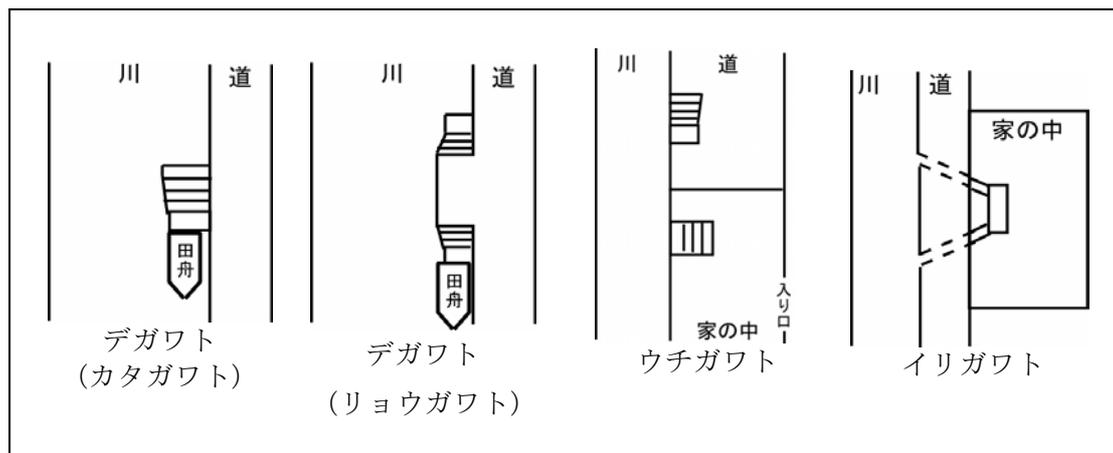


図 7-3 伊庭のカワトの名称 (伊庭 1 人のヒアリング結果から著者が作成)

7-4 内湖周辺地域の生業（農業・ヨシ産業・漁業）

7-4-1 小中の湖周辺の農業

下豊浦の人々は田んぼを集落の中だけでなく、江ノ島や巴などの離れ小島と安土山の東側の梅ヶ谷や祇園さん、小山田の方にももっていた（地名は第5章図5-1を参照）。ただし、安土山の東側の田んぼへは、収穫などの荷物が多い時だけ田舟に乗って向かったという。それ以外は「小山田越し」と言い、安土山を越えて歩いて通っていた。

下豊浦のヒアリング対象者から確認した農業の一年の流れを表7-1に示す。

表7-1 下豊浦における農業の一年

1月	2月	3月	4月	5月	6月
藁仕事		苗床こしらえ（苗代）			
青物（あおも）売り		種まき（3月下旬～4月上旬）			
		田を掘り返す（3月下旬～5月末まで） 田植え（5月末～6月）			

7月	8月	9月	10月	11月	12月
草取り	モラとり（8月末～9月）		稲刈り（10月10日～11月）		

表に示すように、1月から2月にかけては藁仕事の時期だった。家の中で縄綱（なわな）や俵編みなどを行っていた。また、船着場の近くには藁小屋があり、冬はそこで青ネギや人参を洗っていた。小屋の中には水路から水を引き込んであり、寒い日には氷が張っていた。竹で編んだ「ミザラ」と呼ばれるものを敷き、その上に藁で編んだムシロを敷いて、座りながら作業していた。洗った青ネギや人参は近江八幡や八日市の方へ「青物（あおも）売り」といい、売りに行っていたという。

田植の準備が始まるのが3月だった。田んぼでは、その一部分を区切ってきれいにして苗代（なわしろ）づくりが始まる。苗床の準備ができたなら3月下旬から4月上旬にかけて種モミをまく。苗が生長してきたら5月末から6月にかけて田植えをする。一方、苗代に種モミをまいたころから田植までの間に田んぼを「大ズキ」という大きな鋤で掘り返す。苗代が終わった頃に、大ズキで掘り返した土を三つ鋤（みつくわ）でさらに細かく砕く。そして目の細かい四つ鋤（よつくわ）でならす。この作業が大変だったとヒアリング対象者は話している。刃が三つ付いている鋤を「三つ鋤」、四つ付いているものを「四つ鋤」と呼んでいた。

夏場は草取りである。草取りは田んぼの中を「クルマオシ」という除草機を押していく。最初は縦押しで、次は横押し、そして最後にもう一回縦に押す。クルマオシが終わると、最後に手で草を取るのだが、かがんで草をとるために「水面に太陽が反射して暑いので泣

けた」という。

草取りが終わった後しばらくが、田んぼに一番手間のかからない時期になる。その時期に「モラとり」や畑にネギの植え付けをした。藻のことをモラといい「モラとり」とは湖底の藻を泥と一緒にすくい上げることをいう。ちなみに下豊浦での「モラとり」は、伊庭では「藻とり」と呼んでいた。

すくい上げたモラは乾かし、畑や田んぼの肥料にした。下豊浦では、とってもいい時期というのは決まっておらず、夏からお盆過ぎ頃にかけて湖底から藻があげられた。しかし、伊庭では8月1日までは禁止となっており⁴⁾、とり始めてもよい時期が決まっていたようである。

モラは、まだ朝の暗い時から朝食をはさんでお昼くらいまでとりに行った。田舟が沈みかけるくらいたくさんとり、石垣の中段に作ってある藻塚に積み上げる。そして冬まで寝かして腐らせ、春先に田んぼや畑に肥料としてまいたという。この「モラとり」または「藻とり」は当時「採藻競技」⁵⁾（藻とり競技）が行われるほどであった。

そして秋、10月10日頃から稲刈りが始まる。当時は手で刈り取っていたため時間がかかった。12月頃までかかることもあったという。

刈り取った稲は束にして、「ハサ」に掛けて乾かす。稲がきれいに乾いたら、夕方、露が降りるまでにハサから降ろし、丸く積んでおく。乾いた稲はまだ朝の暗いうちから「カンテラ」（油の入ったガラスの灯火）をぶら下げて脱穀した。そして、太陽が出てきたらまた稲刈りをする。その繰り返しだった。

脱穀した稲は天日干しにした。乾いたモミを「唐箕（トウミ）」という風を送る木製の機械に上から落とす。すると小さいゴミや泥は風で飛ばされ、きれいになったモミがでてくる。そして、今度はモミを「籾摺り（もみすり）」というモミガラをとる機械にかけた。

出てきた玄米は、1月や2月に作った俵の中へ計って入れ、閉じた。すると、16貫（約60kg）の重さの俵ができた。それを売りに行ったのだとヒアリング対象者はいう。

7-4-2 内湖周辺のヨシ産業

第6章でも述べたように小中の湖の周辺にはヨシが群生していた。そのため周辺の集落にもヨシを生業としていた人々が多くいた。大中の湖や西の湖、小中の湖周辺にヨシ業者が50～60軒もあったという。

ヒアリング調査によると、当時は田んぼよりもヨシ地からあがる収入の方が高かった。田んぼの収入を1とするとヨシ地は3くらいだった。下豊浦で一番大きなヨシ地は宮さん（活津彦根神社）のヨシ地だった。現在は「白葎（しらよし）」という地名になっているが、昔は「宮葎（みやよし）」と呼ばれていた。10町ほどの広さがあったという。ヨシ地は田んぼに比べてあまり手入れをする必要がない。それでも収入がよかった。そのため、宮さ

んは裕福で、宮さんの世話役をしていると、ご馳走を出してくれるのでよく太ったという。
下豊浦で確認することのできたヨシ産業の一年の流れを表 7-2 で示す。

表 7-2 ヨシ産業の一年

1月～2月	3月	4月～8月	9月～12月
刈り子によるヨシ刈り	ヨシの調整	ヨシの出荷（京都の祇園祭，大阪の天神祭りくらいまで）	在庫整理，来年の仕事の準備
	出荷の準備		
	20日頃からヨシ地を焼く		

ヨシ産業の一年は、刈り子によるヨシ刈りから始まった。特に刈り始める時期は定まっていなかったが、大体1月の大寒頃から始めたという。この大寒の頃から2月の中頃までがヨシ刈りに最適期だった。2月のヨシは完熟しており、色合いや光沢、品質が一番いい。それに比べて1月はまだ少し青みが残っており、3月では皮がはじいてしまい商品にならなかった。

「ヨシの調整」といい3月は、細いヨシと太いヨシとを選び分け、大阪や京都、名古屋、金沢に送るための選別をした。近江のヨシは品質が良く、京都の一流所はみんな近江のヨシから作ったヨシ簾（ず）を使っていたという。

近江ヨシが高級品に使われていた理由は、きれいで細さもあり、年月がたっても変色せず模様が色あせないからだった。特に安土のヨシの特徴は、夏の障子や衝立として室内で使う限り、葉を取り除いた痕の白い部分が永い年月がたっても茶色く変色しないことだ、とヒアリング対象者はいう。

そのようにして4月まで出荷の準備をした。また、3月の末から4月中旬までの20日ほどの期間にヨシ地を焼いた。焼く時期によってヨシの成長は異なる。3月の20日頃に焼くと太いヨシが、4月に焼くと細いヨシが多くなる。遅すぎて、30cmも伸びてから焼いていてはヨシは生えないという。

そして、4月から8月の京都の祇園祭、大阪の天神祭りくらいまではヨシの出荷だった。それが終わると9月から12月にかけて在庫整理や来年の仕事の段取りに入る。その間、来年の分を各地の間屋や簾店が買いに（予約をしに）来たという。

7-4-3 内湖周辺の漁業

小中の湖には琵琶湖からたくさんの魚が遡上してきた（第6章参照）。

以下、下豊浦で漁師をしていたヒアリング対象者から聞いたことを中心に、小中の湖での漁業の一年をまとめる（表7-3参照）。

表 7-3 漁業の一年

1月	2月	3月～4月	5月～6月	7月～8月	9月～10月	11月～12月
タタキ漁		ネバイ	タツベ（梅雨くらいまで）	ウナギつかみ	ネバイ	タタキ漁
ヨシ巻き漁			モンドリ（梅雨くらいまで）			
漬柴漁						

小中の湖では1月にヨシ巻き漁が営まれていた。ヨシ巻き漁という漁は琵琶湖でも行われている⁶⁾。しかし、琵琶湖でのヨシ巻き漁は6月の産卵期なのに対して小中の湖の周辺の内湖では12月から2月にかけて、魚がヨシ地にあがってくる寒い時期に行われていた。内湖でのヨシ巻き漁は遠浅のヨシ地でないとできなかった。また、遠浅のヨシ地でも砂地ではできなかった。砂地のヨシ地だとヨシの密度が低く、魚が寄ってこなかったからだ。しかし、弁天内湖には砂地ではない遠浅のヨシ地は少なかった。

ヨシ巻き漁では、漁をする前日にヨシ地に行き、魚がいることを確認する。確認したら翌朝道具を積み、5人ほどの組で3～4艘の舟に分かれ、ヨシ地に向かった。ヨシ巻き漁には多くの道具を必要とする。そのため誰でもができる漁ではなかった。道具を持っている人が中心になり、組をくんで行っていた。ヨシ巻き漁の方法を図7-4に示す。

ヨシ地に着いたら、最初に魚が逃げないようにヨシと湖の境目に100mくらい網を張る。そして、網の両端を垂直に簾で仕切ってしまう。その後、簾の片側からヨシ地の中の魚を反対側の簾に向かって追っていき、魚を追った後に切り網を張っていく。これを数回繰り返す。8畳よりも少し広いくらいの場所にまで魚を追い込んだら、外側の網と簾のすき間の明るいところにツボをこしらえる。最後にその8畳の広さのヨシを刈り取る。それからツボの中の魚をすくい上げたり、ツボに入らなかった魚を四手網（四つ網と呼んでいた）でとったりした。

ヨシ巻き漁でとれた魚は主にワタカ（方言ではワタコ）やゲンゴロウブナだった。同じ場所で年に2回くらい漁を行った。1回の漁でだいたい150貫（約600kg）くらいとれたという。

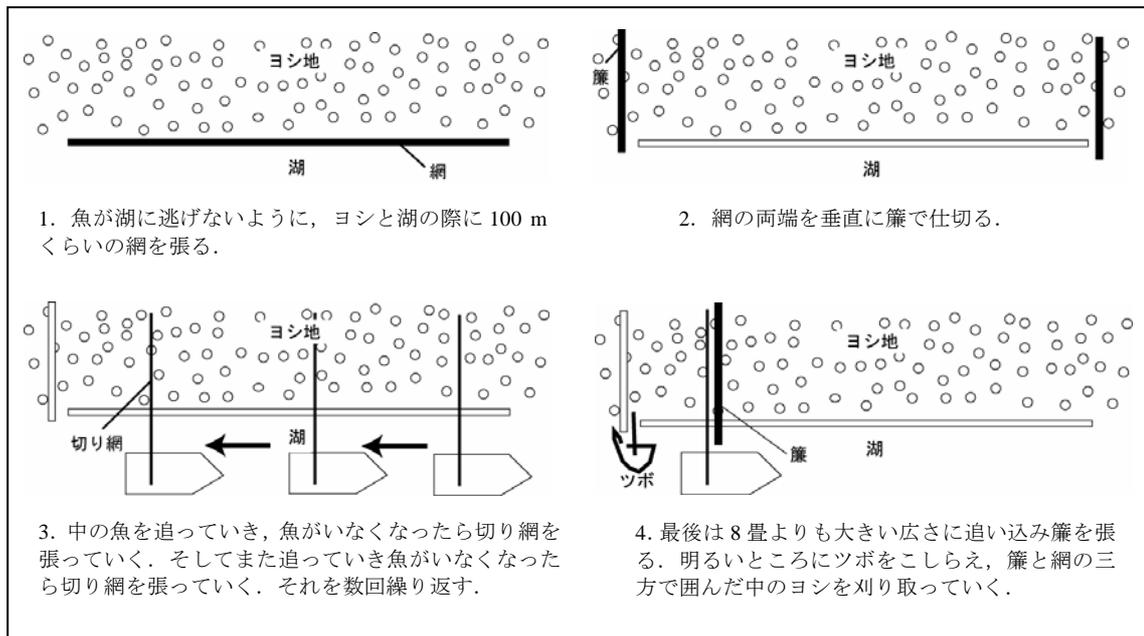


図 7-4 ヨシ巻き漁（上から見た図）
（下豊浦 1 人のヒアリング結果から著者が作成）

ただし漁には「漁間（りょうまん）」という言葉がある。漁間とは、漁には大漁のときも不漁のときもあるという意味だ。何を、いつ、どこでとればよいか。それを見極めるのが漁師の腕、匠の技だったとヒアリング対象者はいう。

また 1 月には漬柴漁も行ってた。漬柴漁は年に 1 度、お正月の時期にだけ行ってた。漬柴のことを「寝屋」とも呼ぶ。柴を 200 束ほど結び、一年中水の中に浸けておき、冬になったらあげるといふものだ。だいたい 5 軒くらいで組をくんで行った。漬柴漁の方法を図 7-5 に示す。

まず、田舟 4 艘で出かけ、柴の四方を取り囲み、4 枚の簾を張る。4 枚の簾のうちの 1 枚だけは、魚を舟にあげやすいように水面から一尺ほどの高さにする。他の 3 枚は水面から 2 尺ほどの高さである。それから簾の一角の外側にツボを作る。そして、中の柴をすくい上げて舟越しに隣の場所に沈める。移した所が次の年の漬柴漁の場所となる。

柴をあげるのには、一本鍬と二本鍬を使った。ただし一本鍬は 2 つ使用する。二つ並べた一本鍬の方に二本鍬を使って柴を寄せ、一本鍬と二本鍬とで挟んで引き上げる。このように、先に柴をあげてしまってから四手網や投網で魚をつかまえた。

漬柴漁で一番多くつかむことができたのは、テナガエビだった。次はギギやナマズが多かった。他にも地元の人がボテジャコとよんでいたタナゴ類がとれた。

ただし漬柴漁は一日中天気がよくないとできなかった。風が吹く日は寒すぎて、舟上での作業を続けられなくなるからだ。だから天候の良い日を選んで行ってた。

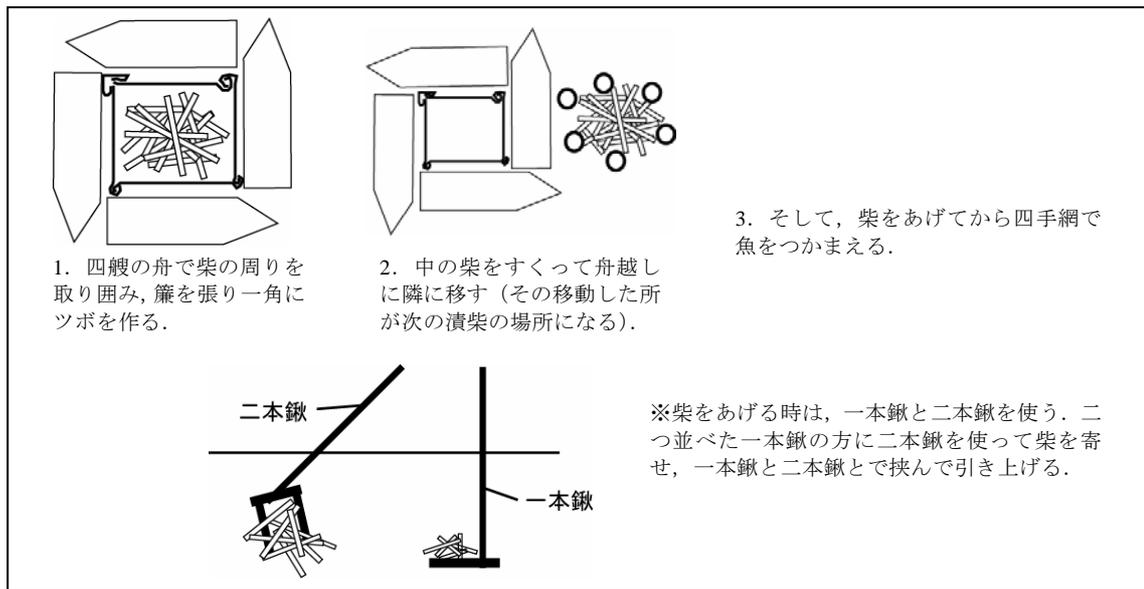


図 7-5 漬柴漁（上から見た図）
（下豊浦 1 人のヒアリング結果から著者が作成）

冬、湖が荒れた後に出るのがタタキ漁だった。冬の湖は北風などが吹いてよく荒れる。冬眠している魚たちは、嵐になると水が濁ってくるため自然に水面へと浮いてきた。もし、水が澄んでいたら小糸が見えてしまい魚は逃げる。だから水が濁っているうちに漁をする。場所はどこでもできたが、荒れ方によっては魚の集まる場所が違った。漁師たちは長年の経験から、西風がきつくて濁った場合はどういう所に魚が集まるのか、などが分かったという。

漁の方法は、「小糸」と地元の人が呼んでいた目の粗い刺し網（1尺に7つの目があるもの）を70mほど張る。そして竹の竿の先にラッパのようなものがついている「追い金」（地元では「ガバン」と呼んでいた）を使って小糸に魚がつくように追う。荒れた後の2日から3日間は漁に出ることができた。

とれた魚は、大きな魚が多い。主にフナやコイだった。1日に7~8回行うことができた。1回あげると5~6匹くらいとれた。大中の湖に比べたら小ぶりだったがそれでも、2月頃が一番寒いときは1匹が10kgくらいのコイがとれた。

タタキ漁とよく似ていたのがネバイだった。3月頃になると魚の勢が強くなってタタキの網ではなかなかとれない。ネバイは魚を追うのではなく、夜に小糸をつけておいて朝にあげるものだ。水が濁ってなくても魚をとることができたため、毎晩でも仕掛けに行くことができた。しかし、風が吹くと魚ではなく、藻で網がいっぱいになる。そのため風があまりきつくない日の夜に仕掛けに行った。

3月の下旬くらいからは産卵にあがってきたホンモロコがよくとれた。ホンモロコをと

するためには網の目の細かい小糸にかえてネバイをしていた。他にはフナにコイ、ナマズ、ギギなどをとることができた。しかし、ナマズは商品価値がなくその場で捨てていた。一方、ギギは安い値ではあるが売れるため、持って帰っていた。

「特別採法」という期間が4月から5月の間にあった。これは小中の湖周辺には住んでいない人たちが県の許可を得て特別に小中の湖で貝引きをしてもよい期間のことだった。

魚の産卵期である5月になったら一雨あるごとに、魚が琵琶湖から上がってきた。漁師にとっては一番忙しい時期だった。そんな時期の漁法のひとつにタツベ漁があった。タツベとは竹で編んだ籠のような仕掛けである。ヨシの端の浅瀬で産卵する魚の通り道によく仕掛けた。仕掛けるときは一回に30~40個ほど沈める。タツベの中には、エサとしてシジミなどを割って入れた。他にもモンドリなどの仕掛けによって5月のヨシ地に産卵にあがってくる魚をとっていた。

初夏(7月)には竹の筒でウナギをとった。竹筒は新しい物よりも、よく使い込み、皮が薄くなったくらいの方がウナギがよく入った。前日の昼間に筒を水に浸けておき、次の日の朝3~4時ごろに筒をあげに行く。筒の中にはエサとしてシジミを入れた。エサのシジミは小さくつぶしてしまっではいけない。つぶしてしまうとウナギがすぐに食べ終わって、筒から出て行ってしまう。だから、つぶす時には貝殻に小さな穴が開くくらいでやめておく。そうすると食べるために時間がかかり、ウナギが長時間筒の中に入っていた。そのため、つかまえたウナギは口の周りが血だらけになっていたとヒアリング対象者はいう。

竹の筒は4列に並べ、全部で200本を水中に沈めた。沈めるときには風向きを考えて筒が西風に横向きにならないようにした。真っ直ぐ筒の先を風に向かって沈めると、あげるときもあげやすい。舟も曲がることなく進むことができ仕事しやすくなる。しかし、10本または7本に1匹しかとれなかったという。ただし、この漁は主に大中の湖や西の湖でやっており、小中の湖でやっていた憶えはあまりないとヒアリング対象者はいう。

ウナギとりを8月までやり、秋(9月~10月)になったら春にやっていたネバイを再開した。目の粗い小糸でコイやフナをとった。そして、11月頃になってきたら、再びタタキ漁を始めた。また、みんな田んぼが終わるお正月前には『貝引き』といって貝をとっていた。

魩やヒガイとりなど一年中できた漁もあった。魩には二種類あり、矢じりが二つ連なったものと、矢じりが一つだけのものがあった。矢じりが二つ連なっていた魩の先端の方は、フナやコイなどの大きい魚をとるために「粗目」といって目が少し粗い。もう一方の魩はモロコなど小さな魚をつかむために目が細かったという。

そのような魩のツボの中には競り上がってくるくらい魚がたくさん入っており、まるで白銀のようだったとヒアリング対象者はいう。それを3回くらいに分けてすくうと、舟の8分目まで魚でいっぱいになった。

また、とれる場所は少なかったが、ヒガイもとっていた。ヒガイは石垣でないととるこ

とができず、網も短い網（30 cm くらい）でないととれない。そして深い所よりも浅い所の方がよくとれた。しかし、石が多くある所だったため風が吹くとすぐ網が破れてしまった。そのため、風のない晩にたまたま仕掛ける程度だったとヒアリング対象者はいう。

漁業の一年の流れは以上だが、それ以外にも「禁漁区」と呼ばれ、漁をしてはいけない区域が弁天内湖にあった。また、伊庭内湖ではコイの養殖をしていた所やシジミ場があった。

ヒアリング調査で確認することができた小中の湖の漁法ごとの主な漁場を図 7-6 に示す。

伊庭にも漁師を生業としていた人が多くいた。伊庭のヒアリング調査では漁業については聞きだすことができなかつたが、昔の伊庭周辺のことをまとめられている「きぬがさ百話」⁷⁸⁾には少しだけ漁のことが記載されている。以下は「きぬがさ百話」を参考にしてまとめた伊庭の漁業である。

冬の魴漁では守山の木の浜からアミコを雇って魴を作っていた。アミコとは何なのかははっきりと明記されていないが、おそらく漁に使う網を作る人のことだろう。他には「カチグリ漁」と呼ばれる漁法があった。カチグリ漁とは、二艘の舟にそれぞれ三人ずつ乗り、長さ 30 m ほどの網をうち、二手に分かれて漕ぎ出す。そして、「ガバン」という道具で水面をたたいて魚を追い立て、舟を寄せ、網を引き寄せるといふものだ。この作業を一晩に百回近く繰り返していた。この漁は伊庭内湖一面でやっていたと下豊浦のヒアリング対象者は記憶している。

カチグリ漁でとれた魚はコイやフナ、ヒガイ、ワタカだった。また、冬から春先にかけては、ネズリ網といって中央が袋状になっている網を使う「ネズリ漁」が行われていた。網を「ヒ」という桶にくくり、網を沈めながら右まわりで舟をまわして魚を囲み、元のところにもどる。そして舟の後ろにあるデデというロクロで網を引き上げ、袋の中の魚をあげる、というものであった。

また、下豊浦のヒアリング対象者によると、夏になると伊庭の人は大中の湖で「灯漁（とぼしりょう）」という漁をしていたという。「灯漁」は 6 月か 7 月頃の夜にカーバイドを持って舟で出かけ、押し網で魚をとるといふものだ。押し網のコツは魚の尻尾にドンと当てるように網を沈めることだった。網が尻尾に当たると魚は逃げようとして押し網の袋の中に入った。

他にも伊庭では下豊浦と同様に、漬柴漁（文献では「柴漬」となっている）や貝引き漁、ウナギとりの竹筒漁、タツベ漁が行われていた。

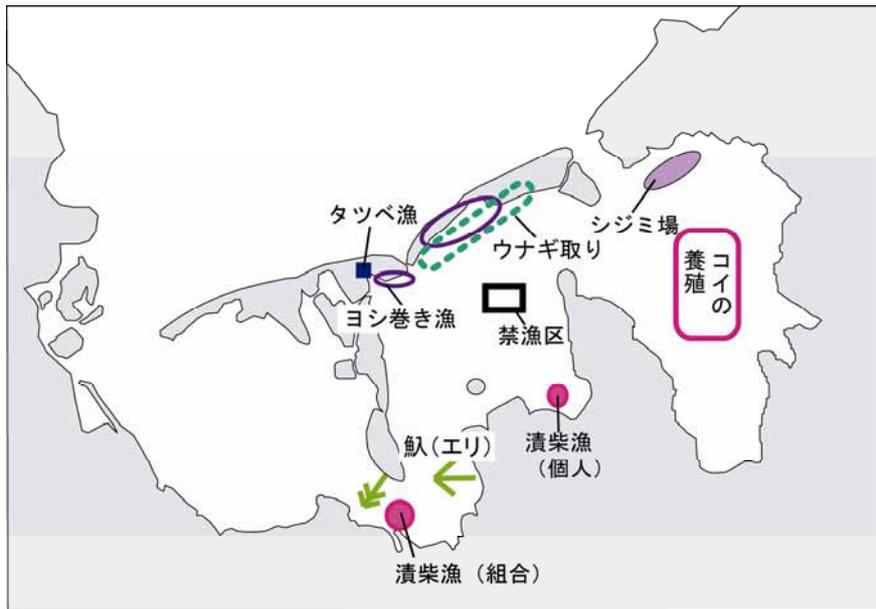


図 7-6 小中の湖の漁法と漁場

(伊庭 1 人と漁師を含む下豊浦 3 人のヒアリング結果から著者が作成)

7-4-4 その他の生業

小中の湖周辺の集落では農業，ヨシ産業，漁業以外の生業も営まれていた。

「きぬがさ百話」によると伊庭には、「伊庭はよりぐしゃ」と言われるほどさまざまな商売の人がいた⁹⁾。伊庭のヒアリング対象者も、伊庭には商売屋がたくさんあり、料理屋（仕出屋）が 4 軒，菓子屋と呉服屋，酒屋が 3 軒ほど，電気屋も 1 軒，豆腐屋も 2～3 軒くらいあったと記憶している。

それ以外にも「布海苔屋」を営んでいる人がおり⁹⁾，布海苔の原料である海草を北海道や三重県から仕入れていた。仕入れてきた海草は選り分けて水につける。そして、木枠を置いたムシロにうちつけ、しばらく干す。乾いたら束ねて切って売り歩いていた⁹⁾。他にも田舟の大工をしている人もいたようだ¹⁰⁾。木は山で買い、一寸ほどの厚さにして田舟を造っていた。使用していた木は主に松やヒノキだった。マキも水に強いことから舳先の部分に使用していたという。

7-5 小中の湖周辺でとれた天然資源

小中の湖ではスクモやモラ（または藻）、メタンガスなどの天然資源をとることができた（図 4-1 参照）。

小中の湖の中には「スクモ」と呼ばれる腐食土がとれる所が数箇所あった。スクモがとれる場所は、大昔の埋没林が腐敗したものが堆積している泥地だった。スクモは夏から秋にかけて田仕事がひと段落した時期に田舟に乗って朝からとりに行く。とってきてはおむすびくらいの大きさに丸めて、田んぼの際にあった石垣の上に並べて干しておく。その乾いたものを冬に代用燃料として使っていた。このスクモは小中の湖だけでなく琵琶湖周辺の他の内湖でもとることができた。

伊庭ではスクモをとりに行く場所が村から遠かった。そのため、ついでに2~3軒分とってくるなど、近所同士で助け合っていた。

他にも、湖底の藻を泥と一緒にすくい上げて、乾かし、畑や田んぼの肥料にしていた。それを、下豊浦では「モラとり」伊庭では「藻とり」と呼んでいた（詳しくは7-4-1参照）。モラをとるのに特に決まった場所というものはなかった。みんな自分の田んぼから近いところにとりに行っていた。また、とりすぎたり、けんかなど争いごともなかった。

上記以外にも小中の湖ではメタンガスが発生していた場所が数箇所あった。なかにはそれを燃料として利用していた人もいたそうだが、出る量はそれほど多くなかったという。

7-6 小中の湖周辺に住む人々の水利用

小中の湖周辺に住んでいた人々は小中の湖の水を直接使うことは少なかった。各家庭には井戸があり、そこから主にお風呂、洗濯、料理の水をくみ上げていた。また、井戸を冷蔵庫代わりにして、紐をつけた桶に食糧を入れ井戸の中につるしていたこともあった。しかし、下豊浦の井戸水は甘かったのに対して、伊庭の井戸水は金気が多かった。そのため、なかには隣同士共有して使っていた井戸もあったという。一部、湖に面した家では湖水を利用してヒアリング対象者はいう。

使い終わったお風呂のお湯などはそのまま流して捨てるということは決してなかった。下豊浦では使い終わったお風呂のお湯は一度湯殿に溜め、そして湯殿が一杯になったら、湯殿のお湯で下肥を薄めて肥を増やし、それを畑の肥料として使っていた。伊庭では、使い終わったお風呂のお湯は直接トイレに流れ込むようになっていた。そしてお湯で薄めた肥を畑の肥料として使っていたという。

7-7 小中の湖にまつわる伝説

ここではヒアリング調査で収集した小中の湖にまつわる2つの伝説を紹介する。

7-7-1 獅子鼻の亡霊¹¹⁾

安土山の岬を獅子鼻（ししばな）といった。

昔、安土城が炎上した時、北風が吹いていた。城にいたお姫様や女中たちは火から逃れようと、城から北の獅子鼻の方へ逃げた。ところが獅子鼻から先は湖でこれ以上逃げようがない。追っ手に捕まるくらいならと、みんな岬から湖に飛び込んで自害してしまった。それから、獅子鼻では火の玉が出るようになったという。

下豊浦の人が田舟で伊庭内湖側にある田んぼへ行った時、夜遅くなると火の玉が出るため、そこを通過して帰ってくるのが恐かったという。そのため舟をこぐために使っていた竹竿は、竹の節ぎりぎりでは無く、節から少し間をとって切ったものを使っていた。それには理由がある。火の玉が出た時には火の玉を竿の中に入れて手でふたをする。すると火の玉は消えるというのである。

7-7-2 苔の大蛇

昔、苔（地名）に人をさらって悪いことをする大蛇がいたという。どうにかして退治しなくてはと、豊浦の平井（地名）に住む伴平太夫（バンヘイダイウ）という勇敢な人が槍を持って退治に行った。格闘の末、槍が大蛇の目に刺さった。しかしそれから、伴家の人々は代々、目を患うようになってしまった。何とか供養しなくてはということで、伴家では「苔穴大明神」として祠を建てて大蛇を祀った。それからは誰も目を患わなくなったという。今でもこの苔穴大明神は、下豊浦活津彦根神社の境内の表入り口左にある愛宕さんの祠に、恵比寿、金毘羅、天神、津島の神々とともに合祀されている。

7-8 小中の湖の祭事

伊庭の集落では5月の初めに数日間に及ぶ祭りが行われていた。昔と少し変わっているところもあるが、現在も受け継がれている祭りである。「伊庭の坂下し祭」¹²⁾を読むと、数日間に及ぶその祭は、内容によってそれぞれの祭りに名前がつけられている。なかでも「降神祭」「卯之時祭」が有名で、「降神祭」は「坂下し祭」とも言われ、織山の頂上にある織峰三神社の神輿を降ろす祭りである。

「降神祭」は、急な坂を下るため、けが人や死人がでたこともあったと伊庭のヒアリン

グ対象者は言う。「卯之時祭」は、昔は午前4時に行われた祭礼で5基の神輿を舟に乗せて村の中を通り郷頭野へ向かう、というものだった。この時、神輿を乗せるのに使用していた舟は丸子船で、白部（白王）や円山などから借りてきたという。ただし、1935年（昭和10年）からは舟から陸上の移動に変更されている。

一方、弁天内湖にあった弁天島には福島弁才天が祭られていた。下豊浦の集落では毎年8月1日の弁天さんの命日に「千日会（せんにちえ）」が行われていた。この日は田舟に乗って弁天島までお参りに行く。田舟を持っていない人は地元の青年団が出した田舟に乗って参った。正式には弁天島の周りを舟で3周してから島にあがるそうだ。しかし、実際にはあまり守られていなかったという。

自分で田舟を持っている人は、親戚を呼んで弁天島の周りに舟を止め、舟の上で当時ご馳走だったカシワやウナギのすき焼きをして楽しんだ。カシワ中心のすき焼きを「カシワのジュンジュン」といった（湖北地方全体ですき焼きを「ジュンジュン」と呼んだ）。

この「千日会」は伊庭内湖側の人たちには直接関係がなかった。しかし、伊庭に住む人たちは毎年ではないが、千日会の日弁天島に行き参っていたこともある。また、その時には、竿飛を見物したものだとい庭に住むヒアリング対象者は回想している。

7-9 小中の湖周辺に住む人々の知恵

ここでは、ヒアリング調査によって収集できた、小中の湖周辺に暮らした人々の知恵について述べる。

7-9-1 千石岩¹³⁾

獅子鼻の先に「千石岩」と呼ばれる岩があった。当時はヨシ原の中に見え隠れするような状態で、舟で近くを通るとやっと見えるくらいだった。下豊浦の人々は、この岩の見え方を目安にその年は豊作か不作かを予想したという。

岩が隠れてしまうほど内湖の水位が高いとその年は水害。岩が見えすぎるくらい水位が低いときは干ばつ。ちょうど岩の頭が見えるか見えないかくらいの水位が最もよく、その年は豊作というように。その岩を見て「今年は千石とれる」と言ったことから千石岩と名づけられた。

7-9-2 天気のことわざ

「きぬがさ百話」¹⁴⁾によると、伊庭には、特に冬場の漁に出かけるときに天候を予想するいくつかのことわざがあった。

大雪が降ると「大雪の百日あとに大雨が来る」といって、魷や漁具の準備をした。大雪から百日目ごろの春、梅雨も重なり大雨の季節となる。湖から川や田んぼへ魚が産卵にあがってきた。また同じ頃「伊吹山に帯をするような白い雲が山をまくと、一尺みずがでる」とも言われた。そして、漁がさかんになると「朝にじはみの竿もて」といわれていた。ただし「朝にじはみの竿もて」の意味は「きぬがさ百話」には書かれておらず、どういう意味なのか明らかにすることができていない。

これら以外にも以下のようなことわざがあった。

「寒い冬の夜のひとつ光は強風になり、湖があれる」

「夕くれのいなびかりがすると、夜の湖は夕だちにあう」

「ちぎれの黒くもは、強い風がふく」

「一月から五月まで、北に黒い雲が出たら湖があれる」

「三月、四月はとつ風がふき、湖があれる」

「寒い朝に伊吹山が見えるときは天気がよい」

「朝虹は、遠のしするな」

一方、下豊浦の漁師たちの間には、特にことわざのようなものはなかった。長年の経験とカンから天候を予想していたという。

7-10 小中の湖での子どもたちの遊び

小中の湖周辺に住んでいた子どもたちは、湖岸では、砂地になっているところを選んで遊んでいた。下豊浦に住んでいた子どもたちは特に「まんすけの浜」辺りが主な遊び場だった。

下豊浦の子どもも伊庭の子どもも内湖での主な遊びは、泳ぎと貝つかみ、魚つかみだった。泳ぎと言ってもただ泳いでいただけではない。上級生が下級生に泳ぎ方を教えたり、入江にあった船着場で「航空母艦」と言っ、田舟をひっくり返して船底を飛び込み台にし、湖に飛び込んだりしていた。特に下豊浦の男の子たちは泳げるようになると、頭の上にパンツや服などを紐でくくりつけて板を胸に当てて弁天島まで泳いでいった。また、子どもたちだけで田舟に乗って弁天島に行くこともあった。弁天島では「竿飛」をして楽しんだ（写真 7-1 と 7-2 参照）。

「竿飛」とは、弁天島から湖に突き出ている大きな竿（木材）の先から湖に飛び込むというものだ。「竿から飛び込めなかったら男ではない」と言われたという。この竿飛は下豊浦の子どもだけでなく、伊庭の子どもたちも親に舟で連れてきてもらい遊ぶこともあった。

貝つかみは湖底の貝を足で探り、潜ってとっていた。貝は湖底に垂直に立っていたため足で探ることができた。女の子は、舟の上から湖底の貝をめがけてヨシの茎を差し込む「貝

釣り」をした。他にも、浅瀬でスコップを使って泥と一緒にかき、トオシ（篩）にかけてシジミをとったり、貝引きをしたりしていた。

魚つかみは下豊浦でも伊庭でもされており、主に石垣付近でギギなどをとっていた。ギギは鋭いとげを持っていて、つかむとよく刺され、痛かったとヒアリング対象者たちはいう。ギギ以外にもウロリと呼ばれるヨシノボリの稚魚やカニもとって遊んでいた。

他にも冬になると湖面が凍ったことがあり、その時は湖面の上を、長靴をはいてスケートをして、江ノ島まで歩いていった子どももいたようだ。

それ以外でも家の近くの水路で、トオシ（篩）を持って小エビすくいやタニシとりをして遊んだ。とったタニシはゆでて食べた。エビは大根と炊くと美味しかったとヒアリング対象者は言う。



写真 7-1 弁天島の竿¹⁵⁾



写真 7-2 弁天島の竿で遊ぶ子ども¹⁶⁾

7-11 料理

小中の湖でとれた魚や貝などの主な調理方法には以下のようなものがあった。

川や水路でとったエビは大根と一緒に煮たり，天ぷらにした。貝は湯がいたり，人参と一緒に煮た。ウナギは蒲焼にするかすき焼きにした。ギギは開いてくしに刺し蒲焼にするか，黒焼きにした。ナマズは生きたままを鍋に入れて煮た。煮あがると頭を箸でつまみあげて，身をほぐした。その後，味噌をいれるのだが水が多いと味噌汁に，少ないと味噌炊きになった。ナマズは白身でとても美味しかったという。

他にもコイやワタカ（地元の人はワタコと呼んでいた）のお造り，「ジャコ汁」というコイの味噌汁などがあった。

7-12 季節ごとの弁天内湖の姿

最後に，これまでに明らかになったことをもとに，季節ごとの弁天内湖の姿を描写する。

春，菜種が咲く頃になると，弁天内湖には外湖（琵琶湖）からホンモロコが産卵のために遡上してきた。ホンモロコが内湖に姿をみせると，漁師たちは夜に小糸を水面につけておき朝にあげる「ネバイ」を弁天内湖一面に仕掛ける。ネバイの小糸ではホンモロコの他

に、フナやコイ、ナマズ、ギギなどをとることができた。

また、この時期になると、小中の湖周辺の田んぼでは苗代づくり、ヨシ地ではヨシ原が焼かれている光景を見かけることができた。

梅雨の時期になると、ホンモロコを筆頭に、一雨ごとに魚の数が増えた。漁師にとって一番忙しい時期になる。この時期の漁法はタツベやモンドリでヨシ地の近くで浅瀬のところに仕掛けていた。

夏、ヨシ地ではオオヨシキリがヨシに巣を作っている姿を見ることができた。田んぼでは稲が生長し、炎天下の中、人々は草取りに追われていた。草取りが終わり、田んぼに手間がかからない時期になると今度は、朝早くから田舟に乗って内湖へ出る。内湖へ出て、「モラとり」が行われた。田舟が沈みかけるくらいまで「モラ」を乗せては、石垣に用意してある藻塚へ積み上げる。「モラとり」以外にも「スクモとり」も行われていた。スクモを冬に代用燃料として使う準備をするのだった。

湖岸では子どもたちが泳いで遊んでいる姿を見かけることができた。泳げない子は上級生から泳ぎを教えてもらう。泳げる子は頭に服とパンツを紐でくくりつけて、胸に板をあてて弁天島まで泳いだ。同島では「竿飛」をして楽しむ子どもたちの姿があった。

8月1日になると弁天島では「千日会（せんいちえ）」と呼ばれる祭が行われた。下豊浦の人々は田舟に乗ってお参りに行く。この日は親戚を呼んで、田舟の上で「カシワのジュンジュン（カシワのすき焼き）」を食べて楽しんだ。弁天島の周りは田舟が取り囲みにぎやかだった。

秋になると、弁天内湖周辺の田んぼでは稲刈が始まる。この時期に田んぼへ向かう人々はみんな田舟に乗って行った。安土山の東側に田んぼをもっている人はフナゴシを通過してむかう。火の玉がでるため夜遅くにそこを通過して帰るのが恐かった。

西風が吹くと冬になったことがわかる。西風は、少し穏やかになったと思ったら、3日から一週間後にはきつい北風へと変わった。これを「北返し」と下豊浦では呼んだ。北返しの風はとてもきつく、北返しが吹くと雪が降るのだった。一番寒いときには湖面が凍ったことがあるという。そのときには、長靴をはいてスケートをしたり、歩いたりして遊んでいる子どもたちの姿を見ることができた。

参考文献

- 1) 滋賀県の地名, 平凡社 (1991)
- 2) 田中慶希: 資料集滋賀県の交通史 (1995)
- 3) 中川眞澄: きぬがさ百話, p.110, 1985
- 4) 中川眞澄: きぬがさ百話, p.122, 1985
- 5) 滋賀新聞, 1942-8-19
- 6) 琵琶湖の魚と漁具・漁法, p.35, 滋賀県立琵琶湖博物館 (2000)
- 7) 中川眞澄: きぬがさ百話, pp.110-116, 1985
- 8) 中川眞澄: きぬがさ百話 2, pp.200-204, 1987
- 9) 中川眞澄: きぬがさ百話, p.108, 1985
- 10) 中川眞澄: きぬがさ百話 2, p.208, 1985
- 11) 西孫兵衛: 安土山獅子鼻の亡霊に付いて (平成 12 年)
- 12) 伊庭祭保存会編: 伊庭の坂下し祭, pp.54-131, 伊庭祭保存会, 滋賀県神崎郡能登川町伊庭 (1985)
- 13) 西孫兵衛: 千石岩 (平成 12 年)
- 14) 中川眞澄: きぬがさ百話, pp.72-74, 1985
- 15) 滋賀県立大学環境科学部環境フィールドワーク委員会: 環境フィールドワーク 2 報告書, まちづくりと環境情報 (2005)
- 16) 滋賀県立大学環境科学部環境フィールドワーク委員会: 環境フィールドワーク 2 報告書, まちづくりと環境情報 (2004)

第8章 小中の湖の干拓

本章では小中の湖の干拓工事の歴史と概要について述べる。

8-1 小中の湖の干拓工事に関する文献調査

小中の湖の干拓は一般に昭和17年に着工し、22年に竣工したと言われている。しかし、本研究において、関連の文献を収集していく中で、文献によって着工年や竣工年に関する記述がさまざまであることが明らかになった。そのため、小中の湖干拓工事の着工年と竣工年を明らかにするために、特に、同内湖干拓工事に関する資料を追加で収集することとした。

干拓工事に関する記述がある文献や資料としては、滋賀県開拓事業概要¹⁾と滋賀県市町村沿革史²⁾、琵琶湖干拓史³⁾、滋賀県史⁴⁾、能登川町史⁵⁾、角川日本地名大事典⁶⁾、滋賀県誌⁷⁾、滋賀県百科事典⁸⁾、滋賀県の地名⁹⁾、拓輝豊和きぬがさ50年のあゆみ¹⁰⁾、小中の湖土地改良区¹¹⁾の11件を、新聞記事としては、昭和17年から昭和22年の朝日新聞の滋賀版と滋賀新聞から21件を収集することができた。収集した文献と新聞記事の該当箇所の記述をそれぞれ表8-1と表8-2に示す。

なお、同じ調査目的で昭和15年から昭和22年までの「滋賀県公報」¹²⁾と明治元年から昭和20年までの「滋賀県行政文書総簿冊目録」¹³⁾も閲覧したが、小中の湖の干拓工事に関係する記述は見つけることができなかった（第3章表3-6と表3-7参照）。

表 8-1 小中の湖の干拓工事に関する各種文献の記述（下線は著者）（1）

文献名	内容	発行年																																																						
滋賀県開拓事業概要 ¹⁾	<p>昭和7年頃から琵琶湖を干拓すると云う輿論が起り始め、以來これについて種々研究を重ねられていたのであるが諸種の事情によって具体化するに至らず、戦争たけなわとなるや食糧増産の必要に迫られ、昭和18年度において初めて着工する運びとなった。その地區数は10ヶ所、面積は1,000町歩余である。</p> <p>この事業は當時農地開発法に基づき設立された農地開発営団と県とが実施に當つたのであるが、この難事業は学徒動員、食糧増産隊、農兵隊その他各種勤勞奉仕隊等の勞力奉仕によるものが多く、その苦難は言語に絶するものがあつた。</p> <p>終戦直後の昭和20年11月9日閣議決定によつて緊急開發事業實施要領が公布されたので、この干拓事業もその適用を受け國策の一環として繼續されたのである。</p> <p>一方県の行政機構もこれ等に備えて、昭和19年7月に新しく經濟部に干拓總務課、干拓技術課を設置し、20年8月には干拓課、21年2月には開拓課と改變された。</p> <p>昭和18年度以降26年度末までの結果は次の通り。</p> <p style="text-align: center;">昭和18年度農地造成開墾地區（單位町）</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">地區名</th> <th rowspan="2">地區面積</th> <th colspan="2">入植計画</th> <th colspan="4">土地利用區分</th> <th rowspan="2">計</th> <th rowspan="2">備考</th> </tr> <tr> <th>入植計画</th> <th>増反</th> <th>田</th> <th>畑</th> <th>計</th> <th>其他</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>中之湖</td> <td>342</td> <td>128</td> <td>271</td> <td>298</td> <td>—</td> <td>298</td> <td>44.2</td> <td>342</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>農林省直轄建設工事は、小中の湖、松原水壘、入江の4干拓地區及び大中の湖干拓地區、愛知川沿岸開拓地區の2地區で、前者は工事完了し、後者は昭和27年度着手となっている。幹線道路、用排水施設工事等で県營建設工事等で県營建設工事は、繁昌、野田、大郷、塩津、貫川、四津川の6干拓地區である。</p> <p style="text-align: center;">直轄及県營干拓建設工事業費年度別一覽表</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">地區名</th> <th rowspan="2">地區面積</th> <th rowspan="2">開墾計画面積</th> <th rowspan="2">總事業費</th> <th colspan="2">同上年割</th> </tr> <tr> <th>22年度迄</th> <th>23年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>中之湖</td> <td>342</td> <td>町 田 298.0 畑 —</td> <td>千円 219,380.7</td> <td>千円 207,518.9</td> <td>千円 10,077.2</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th colspan="4">同上年割</th> <th rowspan="2">27年度以降</th> </tr> <tr> <th>24年度</th> <th>25年度</th> <th>26年度</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>千円 1,784.6</td> <td>千円 —</td> <td>—</td> <td>千円 219,380.7</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	地區名	地區面積	入植計画		土地利用區分				計	備考	入植計画	増反	田	畑	計	其他	中之湖	342	128	271	298	—	298	44.2	342		地區名	地區面積	開墾計画面積	總事業費	同上年割		22年度迄	23年度	中之湖	342	町 田 298.0 畑 —	千円 219,380.7	千円 207,518.9	千円 10,077.2	同上年割				27年度以降	24年度	25年度	26年度	計	千円 1,784.6	千円 —	—	千円 219,380.7	—	1952
地區名	地區面積			入植計画		土地利用區分						計	備考																																											
		入植計画	増反	田	畑	計	其他																																																	
中之湖	342	128	271	298	—	298	44.2	342																																																
地區名	地區面積	開墾計画面積	總事業費	同上年割																																																				
				22年度迄	23年度																																																			
中之湖	342	町 田 298.0 畑 —	千円 219,380.7	千円 207,518.9	千円 10,077.2																																																			
同上年割				27年度以降																																																				
24年度	25年度	26年度	計																																																					
千円 1,784.6	千円 —	—	千円 219,380.7	—																																																				
滋賀県市町村沿革史 ²⁾	<p>安土町の北方に横たわる湾状の中之湖は、大中之湖とその南に接する小中之湖に分かれているが、このうち小中之湖が太平洋戦争期の昭和一七年に食糧増産の一端をになつて干拓されることになった。当初は県營の事業として築堤に着手したが、二〇年には農林省の事業となり、揚水が開始された。承水講の堀さくには一般住民および米兵の捕虜も従事して、同年にはすでに湖底の干上がった部分に最初の稲苗が植えられた。また二一年三月一五日に奈良県・岐阜県から集団入植があり、この年より区画が定められて二二年には一応の竣工をみたのである。</p>	1964																																																						

表 8-1 小中の湖の干拓工事に関する各種文献の記述（下線は著者）（2）

文献名	内容	発行年																								
琵琶湖干拓史 ³⁾	<p>琵琶湖の周辺には大小 40 余の内湖がありこれらの内湖は平均水深が 1 m 78 cm で、技術的にも容易に干拓出来ることから明治初年より計画されていたと云われており、大正 8 年には農務省の調査で干拓に最適地と認められたが其の後はいろいろの事情で実施の運びに至らなかったのである。しかしながら満州事変、支那事変を経て大東亜戦争が勃発し戦時食糧対策の一環として昭和 18 年県に琵琶湖対策審議会が設けられ、その結果 19 年 4 月から農地開発営団の手によって干拓事業が正式に始められたのである。</p> <p>40 余の内湖のうちもっとも容易な地区 10 ヶ所、面積約 (1,070 ha) に着手、このうち農地開発営団の手で米原町入江内湖 (305.4 ha) 彦根市、松原内湖 (73.3 ha) 近江八幡市、水莖内湖 (20/3 ha) の 3 地区を施工、一方あとの 7 地区、<u>小中の湖 (342.1 ha)</u>、繁昌池 (33.8 ha)、野田沼 (39.8 ha)、大郷内湖 (13.7 ha)、塩津内湖 (16.8 ha)、貫川内湖 (16 ha)、四津川 (19.9 ha) を農林省が滋賀県に施工を委託した。</p> <p>工事の方は戦争中のことで労務者、資機材の不足を克服して着々と進捗し不憚ながらも作付が出来相当な増産効果を挙げたのである。昭和 22 年 9 月には営団が施工していた入江、松原、水莖の 3 地区と県に委託していた小中の湖地区、計 4 地区を農林省が引き取り直轄工事を実施、同時に全般的内湖の干拓計画を再検討され更に大中の湖 (1,137 ha) が加えられ、計 11 地区総面積約 (2,310 ha)、米作増産量 (65 千石) を目標に以来鋭意工事を順調に進展し昭和 26 年 3 月までには大中の湖地区を除く前述の 10 地区は完成を見るに至ったのである。</p> <p style="text-align: center;">琵琶湖周辺干拓事業概要</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>地区名</th> <th>面積</th> <th>着工年</th> <th>完成年</th> <th>事業費</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>野田沼</td> <td>39.5 ha</td> <td>18 年 4 月</td> <td>26 年 3 月</td> <td>5,572 千円</td> <td>県委託</td> </tr> <tr> <td>松原内湖</td> <td>305.4</td> <td>19 年 4 月</td> <td>22 年 3 月</td> <td>49,713</td> <td>営団</td> </tr> <tr> <td>小中の湖</td> <td>342.1</td> <td>17 年 8 月</td> <td>22 年 3 月</td> <td>33,754</td> <td>県委託</td> </tr> </tbody> </table>	地区名	面積	着工年	完成年	事業費	備考	野田沼	39.5 ha	18 年 4 月	26 年 3 月	5,572 千円	県委託	松原内湖	305.4	19 年 4 月	22 年 3 月	49,713	営団	小中の湖	342.1	17 年 8 月	22 年 3 月	33,754	県委託	1970
地区名	面積	着工年	完成年	事業費	備考																					
野田沼	39.5 ha	18 年 4 月	26 年 3 月	5,572 千円	県委託																					
松原内湖	305.4	19 年 4 月	22 年 3 月	49,713	営団																					
小中の湖	342.1	17 年 8 月	22 年 3 月	33,754	県委託																					
滋賀県史 ⁴⁾	<p>昭和一六年一月県営内湖干拓費の予算措置が講ぜられ、翌年八月小中の湖干拓が工を起こした。続いて一〇内湖が選ばれ、入江・松原・水莖の三内湖は農地開発営団が担当し、<u>小中の湖・野田沼・繁昌池・及び大郷・塩津・四津川・貫川の各内湖は農林省の委託に応じて本県が施工することとなり、一八年度初め先ず野田沼干拓が着工され、続いて翌年度初めまでには全地区が工事に着手した。そして一九年二月に松原内湖で起工式が挙げられ、干拓遂行の氣勢が盛り上がった。</u></p> <p style="text-align: center;">琵琶湖干拓地区一覧表</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>地区名</th> <th>面積</th> <th>事業費</th> <th>着工</th> <th>完成</th> <th>入植</th> <th>増反</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>小中の湖</td> <td>ha 342.1</td> <td>千円 33,754</td> <td>年月 17.8</td> <td>年月 22.3</td> <td>戸 139</td> <td>戸 360</td> <td>県受託及び 国営</td> </tr> </tbody> </table>	地区名	面積	事業費	着工	完成	入植	増反	備考	小中の湖	ha 342.1	千円 33,754	年月 17.8	年月 22.3	戸 139	戸 360	県受託及び 国営	1976								
地区名	面積	事業費	着工	完成	入植	増反	備考																			
小中の湖	ha 342.1	千円 33,754	年月 17.8	年月 22.3	戸 139	戸 360	県受託及び 国営																			
能登川町史 ⁵⁾	<p>本町と安土町との間にあるびわ湖の内湖のうち最大の大中之湖（最大水深二・七メートル）、さらにその内部にある小中之湖（最大水深二・五メートル）の干拓計画は古く、明治時代から民間で計画され大正五年（一九一六）日本干拓株式会社が事業に着手せんとしたが、漁場と採藻場を失う湖岸部落の反対にあった。その後、昭和七年（一九三二）県会の議決により、内務、農林両大臣あて申請されたが、ようやく戦時中の食糧増産の国策に基づいて実施の運びとなり、まず中之湖の干拓が農地開発営団（団長は知事）の手で昭和一九年（一九四四）遂行された。しかし労働力、資材ともに不足したので、動員学徒・捕虜まで使用し、昭和二一年（一九四六）には農林省の直轄事業に転換され、失業対策、食糧増産対策の二面から、悪条件を克服して強力に推進された。昭和二三年（一九四八）には三四二町の干拓を一応に完成し、耕地二九八町を造成、一部を西之湖として湖水のまま残した。</p>	1976																								
角川日本地名大辞典 ⁶⁾	<p>戦時中の食糧増産政策にそって、昭和 17 年に計画され、翌年より工事開始、同 21 年に干陸した。工事には学徒動員（八日市中学校・福井師範学校）・捕虜・外国人労務者や地元住民の勤労奉仕隊などが従事した。当初の国営事業が県委託の形で、主に人力によって行われ、昭和 19 年には一部で水稲の仮植えがなされた。</p>	1979																								

表 8-1 小中の湖の干拓工事に関する各種文献の記述（下線は著者）（3）

文献名	内容	発行年																
滋賀県誌 ⁷⁾	<p>戦争中の食糧増産政策にそって、昭和 17 年に計画され、翌年より工事が進み、21 年干陸した。干拓工事には学徒動員（八日市中学校・福井師範学校）、捕虜、外国人労務者や地元住民の勤労奉仕隊などが従事した。当初の国営事業が<u>県委託の形で</u>、人力によっておこなわれた。<u>翌 19 年には 1 部で水稻の仮り植え</u>がなされた。全面積は 300 ha で、安土、能登川にまたがり、能登川 160 ha、安土 140 ha と、大中の湖干拓以前においては琵琶湖最大の干拓地であった。</p>	1983																
滋賀県百科事典 ⁸⁾	<p>伊庭内湖と弁天内湖が干拓されて小中之湖干拓地となったが、湖底は最深部でも 2.5 m 程度の浅い湖であった。<u>干拓事業は 1942 年（昭和 17）に着工、47 年（昭和 22）に完成</u>したが、工事とともに弁天島付近の微高地を中心に湖底から縄文早期より須恵器にいたるないが期間の遺物が出土し、この地の開発の古いことをしめした。その後の水位変動で水没したが、いままた干拓された。小中之湖干拓地の総面積は 342 ha、入植民家は 135 戸である。近年大中の湖も干拓されたが、小中之湖干拓地からは 22 戸の農家が大中の湖へ再入植した。かつて多くの内湖が水をたたえ、独特の水郷景観で知られたこの付近一帯は、現在では西ノ湖をのこして田地と化し、新しい歴史をひらこうとしている。</p>	1984																
滋賀県の地名 ⁹⁾	<p>大中の湖と中州で隔てられていた小中の湖は、最新二・五メートルのほどの内湖で、<u>昭和一七年に着工、同二二年完成</u>の干拓事業により消滅、景観のみならず内湖の有した浄化作用や魚類の産卵場所を奪った。</p>	1991																
拓輝豊和きぬがさ 50 年のあゆみ ¹⁰⁾	<p>本地区は、織田信長の居城であった安土山を三方から囲む伊庭内湖及び弁天内湖と称する琵琶湖の内湖の一つであって、古く明治時代に干拓を計画した人もあったそうだ。<u>干拓工事は、昭和 17 年太平洋戦争中</u>、3 万の兵を養う米の生産を目的として着手されたものである。</p> <p>昭和 19 年 7 月県の干拓総務・同技術課の設置、同年 8 月琵琶湖干拓事務所の開設によって実施体制の強化が図られたが、このとき戦局はすでにきびしく、特に労力と資材の不足が、工事遂行の最大の隘路となっていた。そこで、工事要員の不足を補うため、近隣町村の勤労奉仕隊及び京都・兵庫・三重・岐阜・富山・新潟・静岡の各県と北海道からの学徒動員や、新潟・岩手・青森各県の食糧増産隊の出動、さらに交戦国捕虜（オランダ・米・英・豪の約 300 人）の使役等が行われた。<u>昭和 20 年には内湖の周辺が干陸</u>になったので、近隣町村から出役して田植が行われた。</p> <p>昭和 20 年 11 月「緊急開拓事業実施要領」の制定と共に戦後開拓の幕開けとなり、戦時中の工事もこれに引き継がれ、<u>昭和 21 年の春に干陸を見た</u>。小中之湖・野田沼・繁昌池・及び大郷・塩津・四津川・貫川の各内湖は、当初農林省の委託で県が施工したが、戦後になって農地開発営団閉鎖に伴い、中の湖、松原、入江及び水茎の四地区を国営に編入する工事分担の調整があった。このため蒲生郡安土町小中之湖干拓地内に、農林省琵琶湖干拓事業所が設置（昭和 46 年 10 月廃止）され、能登川出張所が能登川町大字伊庭に置かれた（昭和 24 年頃廃止）。</p> <p style="text-align: center;">滋賀県の干拓地一覧表</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>地区名</th> <th>面積</th> <th>着工</th> <th>完成</th> <th>事業費</th> <th>入植</th> <th>増反</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>中之湖</td> <td>ha 342.1</td> <td>昭和 17 年 8 月</td> <td>昭和 22 年 3 月</td> <td>千円 33,754</td> <td>戸 139</td> <td>戸 360</td> <td>県受託地 戦後国営</td> </tr> </tbody> </table>	地区名	面積	着工	完成	事業費	入植	増反	備考	中之湖	ha 342.1	昭和 17 年 8 月	昭和 22 年 3 月	千円 33,754	戸 139	戸 360	県受託地 戦後国営	1996
地区名	面積	着工	完成	事業費	入植	増反	備考											
中之湖	ha 342.1	昭和 17 年 8 月	昭和 22 年 3 月	千円 33,754	戸 139	戸 360	県受託地 戦後国営											
小中の湖土改区 ¹¹⁾	<p>本地区は織田信長の居城の在った安土山を、三方から囲む伊庭内湖及び弁天内湖と称する琵琶湖の内湖の一つであって、古く明治時代に干拓を計画した人もあった。<u>昭和 17 年太平洋戦争中</u>、米の増産を目的として、干拓事業に着手されたものである。戦争中のこととして工事要員の不足を補うため近隣町村の勤労奉仕隊及び学徒動員並びに交戦国捕虜の使役等が行われた。昭和 20 年には湖の周辺が一部干陸となったので、近隣町村から出役して田植が行われ始めた。</p> <p>終戦後は、食料増産対策緊急開拓事業に引き継がれ、<u>昭和 21 年春干拓された</u>。この干拓事業は初めは県に委託で行われていたが、終戦後は国営となり琵琶湖干拓小中の湖事務所を安土町大字下豊浦に又同能登川出張所を能登川大字伊庭に置かれた。（支所は 24 年頃廃止された）</p>	不明																

表 8-2 小中の湖干拓に関する新聞記事（下線は著者）（1）

No	記事見出し	概要	年月日	新聞名	発行支社
1	内湖干拓の 大事業 食 糧増産へ、 けふ起工式 ¹⁴⁾	<p>毎年米六万石麦一万石を増産し決戦下國策事業として懸案の琵琶湖干拓事業地鎮祭ならびに起工式は今日午前十時から彦根市縣立総合運動場で農商大臣代理溝口耕地課長，農地開発営団理事長村上龍太郎氏，同営団，中村名古屋事務所長，菊池知事その他官民代表多数列席して行はれる，事業の内容は湖辺に散在する六十有余の内湖三千三百十カ町歩の中まづ第一期工事として總工費千三百余萬円で四十箇所の内湖を干拓し，昭和二十年度までに千九百二十町歩の水田を造成せんとする</p> <p>六十有余の内湖三千三百十カ町歩の中まづ，第一期工事として總工費千三百余萬円で四十箇所の内湖を干拓し，昭和二十年度までに千九百二十町歩の水田を造成せんとする</p> <p>内湖干拓地予定地 蒲生郡...岡山村南津田，島村中ノ庄津田内湖（一一七〇）島村●●，八幡村北ノ庄内湖（四五．二）島村，八幡町，金田村，安土村，中之湖（七〇〇．八）</p> <p>干拓計画は内湖の状態により多少の差異があるが一般計画としては内湖を●●する承水溝を設け外周からの悪水は内湖に流入せしめず直接外湖に流出せしめて干拓区域内の排水は排水機により排除するが承水溝は一面附近の既耕地や開田の灌溉用水源として灌溉期間中は常に一定水位を保持せしめ，用水に不足する場合は外湖水域は干拓地内の湧水を注入せしむる施設をなし灌溉排水に支障のないやう期している</p>	1944/2/10	滋賀	滋賀
2	必勝増産へ 晴の鍬入れ 干拓の第一期計画 ¹⁵⁾	<p>琵琶湖周辺に散在する大小六十有余の内湖および沼，通船路のうち次の四十ヶ所を第一期計画として干拓することとなった旨県から発表した</p> <p>神崎郡能登川町，中之湖（七百）</p>	1944/2/11	朝日	滋賀
3	中之湖干拓 事業地鎮祭 きのふ安土 村彦根神社 で執行 ¹⁶⁾	<p>蒲生郡安土，神崎郡能登川両町村に跨る中之湖の干拓事業地鎮祭は菊池知事，松永●●部長ら出席して十八日午前十時半から安土村活津彦根神社で行はれ</p> <p>中之湖は総面積千八百町歩琵琶湖周辺にある百近い内湖のうち一番大きい内湖で第一期工事として本年度中に内湖中の伊庭内湖，弁天内湖台計三百五十町歩を干拓第二期工事で約三百五十町歩を干拓するが場合によっては第二期工事で千八百町歩全部を一気に干拓しようと意気込んでいる。</p>	1944/8/19	朝日	滋賀

●部分はマイクロフィルムの画像が不鮮明で判別不能な文字

表8-2 小中の湖干拓に関する新聞記事（下線は著者）（2）

No	記事見出し	概要	年月日	新聞名	発行支社
4	中之湖干拓起工式 大前に誓ふ大事業完遂 ¹⁷⁾	最初に計画に若干の修正を加へ目下施工中の松原、曾根、野田内湖の外、新たに中之湖以下十三ヶ所を加へた神崎郡能登川町および蒲生郡安土村にまたがる中之湖干拓工事の地鎮祭および晴れの起工式は昨十八日午前十時から菊池琵琶湖開発事業協議会長、以下松原経済部長、関係係官、地元●係有志など多数列席して安土町活津彦根神社内で執行され、官民協力してこの大事業完遂を大前に誓つたのである 中之湖の第一期計画事業としてはまづ本年度と明年度に三百五十町を開田化するにあるが、これによって年々米一万石、麦千五百石の増収が約束されており、第一期計画完了後における増収の約二割に相当する、したがって之が●業費も百七十四万四千余円が計●され、期間中に於る労力は延人員は二十五万五千余人と算定されている。特にこの中でも学徒動員による勤労作業はもつとも重視されすでに決定した、本年八月から十二月末までの学徒動員数は師範膳所中、八日市中学、紳農の四校で五万二千六百五十人が干拓工事に登場することとなり、来月末までには合計約十万人の学徒が出勤する予定で全く学徒の聖汗によつてこの大事業の大半が完成されると云つても過言ではなく、すでに来る二十一日からは先発隊として紳農生百六十名が出勤待機している、工事は十二月までは主として承水溝その他の土木作業を行ひ、承水溝のみでも総延長五軒に及ぶ大事業である、更に翌年一、二月は排水作業、三月以降は干拓造成圏の地均作業に重点をおき、来年の秋にはお米一万石が増収さうといふ	1944/8/20	滋賀	滋賀
5	麗湖を食糧増産基地に他県の学徒隊続々来援 ¹⁸⁾	食糧増産基地造成の琵琶湖干拓へ十五日來県する岩手県、石川県を先陣に岩手、青森、新潟、石川の四県食糧増産隊合計千二百名が来援、本県の食糧増産隊百五十名も五日から中之湖へ出勤、県内外の少年農兵が相呼鷹して鋤を揮ふ。 滋賀師範百名は十日から中之湖へ出勤、京都師範二百名、福井師範百名、石川師範百名は十日來県、中之湖で協力するほか三重師範百五十名、岐阜師範百五十名、富山師範百名、大阪師範百名、奈良師範百三十名、愛知第一期師範八十名、同第二同百五十名も相次いで來県、各干拓地へ分散出勤し、和歌山、滋賀両青年師範校生も出勤して食糧増産隊は各二十日間、師範学徒は二日間奉仕作業に闘魂を燃やす	1944/12/6	朝日	滋賀
6	琵琶湖干拓来年こそ本格化の秋 ¹⁹⁾	かくて第一期事業の対象として選ばれた三十九内湖、水田造成千九百二十町歩のうち水田造成面積三百五十町歩といふ県下最大の内湖中之湖はじめ繁昌池入江（大郷村）南浜、九十石三斗、貫川、四津川七内湖は県の手で水葦、入江（米原町）両内湖は農地開発営団の手で新たに工事を開始	1944/12/29	朝日	滋賀
7	歴史的排水早くも開始ここ二ヶ月で成否が決まるのだ ²⁰⁾	十一内湖中最も大きい中之湖はすでに十六日から歴史的な排水を開始、四津川内湖も近日中に排水を始めるほか大部分の干拓地は工事が大体順調に進んでおり、●●町歩の干拓はもう一押し	1945/5/18	滋賀	滋賀
8	干拓へ角帽援兵 千六百の甲種農兵隊員も出勤 ²¹⁾	県下十一の干拓地では是が非でも田植に間に合わせ、増産基地としてお役にたてようと関係者が火の玉になつて工事の完成へ●●●しているが十大日大谷大学生五十名と二十日に京大生百名が水葦内湖干拓へ来援するのをはじめ今月中に龍谷大学生百名が貫川、大阪商大一年生が中之湖、神戸経済大学一年生六十名が塩津内湖へ今計三百六十名の角●●隊が来援、増産の一点を指して承水路の整備、湖底地均しなど土工作業に●を●熱を捧げるほか七月一日からは千六百名の県中●農兵隊員が出勤干拓へ農魂を發揮する	1945/6/12	滋賀	滋賀

●部分はマイクロフィルムの画像が不鮮明で判別不能な文字

表8-2 小中の湖干拓に関する新聞記事（下線は著者）（3）

No	記事見出し	概要	年月日	新聞名	発行支社
9	干上る中之湖 近く潮干狩を展開 ²²⁾	蒲生郡安土村では中之湖の排水による湖の幸魚貝類六千●の収穫を目指し連日連夜の排水に努力を続けていたがようやく減水、湖底を見せ始めたので去る八日には同村学童を●してシジミ拾ひを開始、相当な収穫を得、干拓戦士や村民の食膳を振はしていたところその後また増水を見、一時中止を止むなくされたが排水作業はこれ位にはひるまず、さらに勢を●て依然排水に全力をかけ続行しているため完成までには再び学童を出動させ●●●●の確保へ内湖の一大湖十狩を展開、魚貝類絶ざらへに●●し、この●●●●近く交代する干拓学童のお土産にするほか同村増産農家の食膳に供する	1945/6/23	滋賀	滋賀
10	田植えに学徒隊初出動 お米生産 一万四千七百石 六百十五町歩の干拓進捗 ²³⁾	干拓用ポンプの据付もほとんど終わりすでに四津川干拓は去る一日先陣を切って田植を行ったが、引き続き他の九干拓地も次の日割りで地元農業会指導のもとに学徒、女子青年団員が田植えを行う 中之湖…九日	1945/7/8	滋賀	滋賀
11	干拓地だより 湖底を見て熱意 二百町歩の田植25日頃終わる ²⁴⁾	中之湖は去る九日●●知事参列のもとに田植式を挙げ増産へ●●しく議定したが、この中之湖は伊庭、弁天二つの内湖に分かれ弁天内湖には住中の八幡航路があつて本年度にはこの深い航路の排水は困難とみられ、従って現在では約百町歩が利用面積とされ、一方ほとんど減水して全面に植付可能とみられる伊庭内湖の百町歩と合わせて中之湖干拓地は今年二百町歩を青田うつ美田にしようとする百馬力の排水モーター二基に希望を託している	1945/7/17	滋賀	滋賀
12	五百段歩完植だ 松原内湖干拓田 金田のヨイコも中ノ湖干拓田へ ²⁵⁾	蒲生郡金田鍋氏校では中ノ湖干拓田の田植えに協力して、初等科六年以上が連日交代で出勤	1945/7/23	滋賀	滋賀
13	折角の干拓苗確保に全力を尽くす ²⁶⁾	今年二百町歩の植付を約束されていた中ノ湖干拓地はその後の排水も順調に進み、現在湖底は予定以上の植付可能面積を●はしみるからに肥沃な●●は一粒でも獲りたいと希ふ農魂をかきたてている。ところが十分に用意していたはずの苗が植付期の●延で分ケツ低調を見越して本数を多く植えねばならぬため苗不足にならうといふ低位の湖底約八十町歩がそのままのこされた	1945/8/5	滋賀	滋賀
14	憂慮される干拓地 大郷内湖の築堤決潰 中ノ湖も刻々と増水 ²⁷⁾	連日の降雨で工事設備未完の琵琶湖各干拓地は心配されているが、東浅井郡大郷内湖は九日午前九時ごろ築堤の一部約五米が決壊した、またここ二、三日一般に水位も高まり中でも最も大きい蒲生郡中ノ湖は浸水程度も大きく、なほ増産しているため●●されている	1945/10/10	滋賀	滋賀
15	干拓を個人経営に申し込みすれば適格者を厳選 明春二月迄に仮分譲 ²⁸⁾	國家的事業として発足した琵琶湖干拓は終戦後の食糧事情からみて急速に完成をはからねばならぬがこの目的完●のためには一刻も早く個人経営に移して労務国策に寄興せしめるとともに将来健●な●●を買寄せしめることが最も緊要なので縣では干拓田●分基本方針を決定し、目下施行中の各地区共その干拓主要工事完成期限を明年三月の目●●もとに促進化に●怠努力しその完成をはかる一方本措置によつて各干拓田とも仮分譲を明年二月までに行ふことになった	1945/12/4	滋賀	滋賀

●部分はマイクロフィルムの画像が不鮮明で判別不能な文字

表8-2 小中の湖干拓に関する新聞記事（下線は著者）（4）

No	記事見出し	概要	年月日	新聞名	発行支社
16	二千拓地分譲決る ²⁹⁾	琵琶湖干拓地の分譲方針発表とともに各干拓地の干拓面積を統える分譲希望申込があり県では慎重に適●者を査定しているが十一千拓地のうち次の二千拓地の假分譲が決定した、何れも本年植付可能面積である 中ノ湖...二百五十町歩を四百一人へ	1946/3/27	滋賀	滋賀
17	県下の干拓田 植付予定七百六十町歩 ³⁰⁾	増産面に大きく脚光をあびて登場した琵琶湖干拓地も昨年ようやく全地区で三百二十七町歩を植えつけたものの昨秋の稀有の被害でたいした収穫をみるにいたらなかったが、その後整備工事も進捗しかつ中之湖ほか五地区は個人への假分譲をすませ他は地許農業会などの手でそれぞれ植付けることになったので、いづこも増産熱をたかめことしことそはと大はりきりで苗代準備を開始した。	1946/5/17	滋賀	滋賀
18	琵琶湖干拓は國營仕事は現在のままで ³¹⁾	琵琶湖干拓の國營が決定したが今後の工事施工方針は縣民の關心●であり國營なるがゆえに地許の民意を無視されはせぬかが●●されていたので柴野知事はこれに対し本省と交渉の結果だいたい次の如く取り決めが行はれ、十八日これを発表した。 縣ならびに農地開發營団でやつてきた現行の干拓事業は國營でやるが仕事そのものは現在のまま縣ならびに營団に委託して貰って継続する、つぎにこんご直轄工事として行はれる●國營のものも形式は國がやるが實質的には縣委託同様として施工されるから地許のよき民意は設計でも工事の苦情でも國との諒解のもとに知事が責任をもつことになった	1946/6/19	滋賀	滋賀
19	干拓の田植終る ³²⁾	琵琶湖干拓地の田植は昨今ほぼ完了し総植付面積約五百九十町歩に達した、反平均六俵とみて、かつての湖底から約三万五千四百俵が浮かび上がるといふもの、また水稻の植付けられぬ乾陸に甘●を●●した面積は水葦内湖など約六十町歩がある、各干拓地の水稻面積次の通り 中之湖...二三〇〇	1946/7/28	滋賀	滋賀
20	新農村建設の意気 干拓●組合結成式 ³³⁾	中ノ湖干拓伊庭内湖入植者の●組合の結成式は二十六日午後二時から能登川西校で開催	1946/7/29	滋賀	滋賀
21	反當十俵は確乾賞 入植者の汗報いられ 干拓田の穂波豊か ³⁴⁾	中ノ湖干拓第一期工事は完成し入植者は既に組織を結成して増産に励んでいる 中ノ湖は外湖、伊庭湖、弁天湖西湖にわかれ第一期工事として伊庭弁天の二湖を経費約四百万円で完成、耕地約三百五十町歩、全体をやれば二千町歩純耕地が千七百町歩になるが明年後には國營で害湖に着手すると思ふ、西湖は条件が悪く施工しないだらう、第一期工事は昭和十九年九月に着手、菊池前々知事の発案が●行に移されたもの	1946/9/9	滋賀	滋賀

●部分はマイクロフィルムの画像が不鮮明で判別不能な文字

8-2 小中の湖干拓の工事着工・完成した年について

表 8-1 と 8-2 の文献資料および新聞記事の該当箇所の記述を基に、干拓工事に関する主要な出来事の年表を作成すると表 8-3 のようになる。以下、表 8-3 を中心に見ながら、小中の湖の干拓工事の着工年と竣工年を総合に推察していく。

表8-3 文献資料と新聞記事を基にして作成した小中の湖干拓年表

	滋賀県開拓事業概要 (1952)	滋賀県史町村沿革史 (1964)	琵琶湖干拓史 (1970)	滋賀県史 (1976)	能登川町史 (1976)	角川に本地名大辞典 (1979)	滋賀県誌 (1983)	滋賀県百科事典 (1984)	滋賀県の地名 (1991)	干拓農和きぬがさ50年のあゆみ (1996)	小中の湖土地改良区 (不明)	新聞記事
昭和16年				予算措置								
昭和17年		小中の湖が干拓されることになった (県営)	小中の湖着工 (8月) 県委託	小中の湖着工 (8月)		小中の湖の干拓を計画	小中の湖の干拓を計画	小中の湖着工	小中の湖着工	小中の湖着工 (農林省の委託で県が施工)	小中の湖着手	
昭和18年	内湖として初めて着工 (農地開発営団と県で実施)			農林省委託で県が施工する		工事開始	工事進む (国営事業が県委託)					
昭和19年			内湖干拓工事が正式に開始 (農地開発営団)	松原内湖で起工式が挙げられる	中之湖遂行 (農地開発営団)	一部仮植え	一部仮植え					2月：琵琶湖干拓地鎮祭・起工式 8月：中之湖地鎮祭・起工式 9月：着手
昭和20年	国策の一環として継続	農林省の事業になる揚水開始一部田植								周辺干陸田植	周辺一部干陸田植	5月：排水開始 6月：湖底見える 7月：田植 (一部除く)
昭和21年		集団入植			農林省の直轄事業に転換	干陸						6月：国営 (県委託) 7月：入植 9月：工事完成
昭和22年		竣工	農林省の直轄工事实施 (小中の湖) 完成 (9月)	完成 (3月)			干陸			干陸 (春)	干拓 (春)	
昭和23年					干拓完成			完成	完成			

まず、新聞記事は当時の最新のニュースを伝えていることから、新聞記事を基本として干拓の流れを見ていくことにする。そうすると次のような流れになる。

昭和 19 年 2 月に琵琶湖干拓の地鎮祭と起工式が彦根市で行われ、本格的に琵琶湖干拓事業が農地開発営団と農林省から県への委託によって開始された。そして彦根での地鎮祭と起工式から半年遅れた 8 月に小中の湖干拓工事の地鎮祭と起工式が挙行されている。小中の湖の干拓工事は農林省から県への委託によるとある。小中の湖では翌年 5 月には排水が開始され、7 月には一部田植ができる状態にまでになった。さらに昭和 21 年には農林省直轄事業となり、9 月には干拓工事が竣工した。

着工後の流れは 1964 年発行の「市町村沿革史」と竣工年（「市町村沿革史」では昭和 22 年竣工）以外は一致している。よって、着工後から竣工までの流れは新聞記事の通りだと考えられる。

一方、工事着工年に関しては、入手できた資料の中で最も発行年が古い、1952 年発行の「滋賀県開拓事業概要」によると、「昭和 18 年に内湖の干拓が初めて着工する運びとなった」と書かれている³⁵⁾。小中の湖が滋賀県で初めて干拓された内湖であることは複数の資料が指摘していることから、同文献に基づく限り、小中の湖の工事着工は昭和 18 年と考えられる。しかし一方、何点かの文献が小中の湖の着工を昭和 17 年としている。このことから、昭和 17 年にも少なくとも干拓に関するなんらかの動きがあったものと推察される。以上のことから、昭和 17 年に小中の湖の干拓工事計画が正式に決定され、翌年に工事が開始（着工）され、昭和 19 年の琵琶湖干拓事業が正式に開始されたのをうけ、同年に正式な地鎮祭と起工式が挙行されたと考えることが最も自然な解釈だと思われる。計画と着工年に関しては、角川日本地名大辞典（1979）と滋賀県誌（1983）も同様の立場に立つ。

ただし、小中の湖の着工年に関しては、対象者の記憶があいまいで、ヒアリング調査では確認することができていない。また、上記資料で確認できたことをふまえて県の農政水産部農村振興課に小中の湖の着工年を確認したところ、県では内湖の干拓年に関しては「琵琶湖干拓史」と滋賀県史編さん委員会編の「滋賀県史」に準拠しており、それ以上のことはわからないとの回答であった³⁶⁾。

また、干拓工事の主体であるが、昭和 19 年に小中の湖の干拓工事が農林省の県への委託によって正式に開始されたことから、それまでの干拓工事は県主体の県営事業だったと推測される。「琵琶湖干拓史」によると、農地開発営団が琵琶湖干拓事業を昭和 19 年に正式に開始したことが書かれており、続いて「40 余の内湖のうちもっとも容易な地区 10 ヶ所、面積約 (1,070 ha) に着手、このうち農地開発営団の手で米原町入江内湖 (305.4 ha) 彦根市、松原内湖 (73.3ha) 近江八幡市、水莖内湖 (201.3 ha) の 3 地区を施工、一方あとの 7 地区、小中の湖 (342.1 ha)、繁昌池 (33.8 ha)、野田沼 (39.8 ha)、大郷内湖 (13.7 ha)、塩津内湖 (16.8 ha)、貫川内湖 (16 ha)、四津川 (19.9 ha) を農林省が滋賀県に施工を委託した。（中略）昭和 22 年 9 月には農地開発営団が施工していた入江、松原、水莖の 3 地区と、県に委託していた小中の湖地区、計 4 地区を農林省が引き取り直轄工事とし

て実施」³⁾とある。そのことから、小中の湖の干拓工事は県営で始められたものが、昭和19年に農林省の委託として県が引き継ぐことになり、さらに戦後には農林省直轄事業となったものと考えられる。

以上のことから総合的に推察した小中の湖の干拓工事の流れは次の通りである（表 8-4 参照）。

昭和17年に小中の湖の干拓計画が決定され、翌年滋賀県で初めての内湖干拓事業として県営で着工された。昭和19年になると正式に琵琶湖干拓工事が開始されることになり、2月に地鎮祭と起工式が合わせて行われた。それと同時に小中の湖を含めた10ヶ所の内湖の干拓計画が正式に発表され、小中の湖は農林省から県への委託事業として工事が継続されることになった。同年8月には、正式な干拓事業として、小中の湖の地鎮祭と起工式が行われている。翌年5月には排水が開始され（それまでは堤防作りだったと推察される）、7月には一部で田植ができるころまで工事は進行した。戦後の昭和21年には、農林省直轄の国営事業という形で継続されることになった。同年7月には一部で入植が始まり、そして9月に工事が完成した。

ただし、昭和18年に滋賀県で初めて干拓工事が開始されたとすれば、当時の新聞に載っていてもおかしくないのだが、昭和17年から18年の新聞には、小中の湖の干拓に関する記事を見ることができなかった。したがって干拓工事の本当の着工年については、最終的な確認ができていない。

表 8-4 推察した小中の湖干拓の流れ

昭和17年	昭和18年	昭和19年	昭和20年	昭和21年
小中の湖干拓の計画	着工 (県営)	2月：琵琶湖干拓正式に開始（小中の湖：農林省が県に委託） 8月：小中の湖の地鎮祭と起工式	5月：排水開始 7月：田植（一部）	6月：農林省直轄に転換 7月：入植 9月：竣工

8-3 小中の湖の干拓工事の様子

小中の湖の干拓工事には実に多くの人が関わっていた。起工式の時点では延25万5千人の人員が予想とされており、戦時中ということもあり、労働力としては特に学徒動員への期待が大きかったようである¹⁷⁾。学徒動員としては、県内以外にも北海道や新潟、岩手、青森など県外からの動員もあった¹²⁾。その他には食糧増産隊や勤労奉仕隊が出動した¹²⁾。

ヒアリング調査では、干拓工事の労働者としては、40歳以上で戦争に行かなかった地元の人や高等小学校を出たての徴兵年齢（18歳）に達していない人、伊庭の捕虜収容所のオランダ兵や朝鮮から徴用として連れてこられた人たちがいたと聞いている。捕虜に関しては「干輝農和きぬがさ50年のあゆみ」¹²⁾によると、オランダ、米、英、豪の約300人が干

拓工事に動員されたという。

小中の湖干拓の工事途中の工程などについては新聞記事や文献で確認することができなかったが、ヒアリング調査によると、小中の湖を取り巻くヨシ原の砂洲（島）をつなぐように、まず内湖全体を取り囲む堤防が築かれた。弁天締切堤防は昭和18年の末頃に、伊庭洲締切堤防は昭和18年末から昭和19年頃に完成したとヒアリング対象者は記憶している。

堤防は周囲の土を盛って作ったり、活津彦根神社の土を持って行って作ったりしたという。現在、下豊浦の集落の中を流れる南出川はもともと堀のようなものだったが、当時堤防のために土を持って行ったために川になったとヒアリング対象者は記憶している。土を堤防の場所まで運べるように弁天締切堤防付近の湖岸はトラックが通れるようになっていた。堤防に穴を空けて家がない朝鮮の人が寝泊りしていたこともあったという。スクモ地で作られていた堤防は、燃えたことがあった。他にも、下豊浦の松原という所には連れてこられた朝鮮人たちの飯場（はんば）があったり、また、伊庭の金比羅の所には捕虜収容所があった。

堤防の完成後、ポンプによる排水が開始された。排水は下豊浦の1箇所だけで行っていた（堤防や排水場を図8-1で示す）。

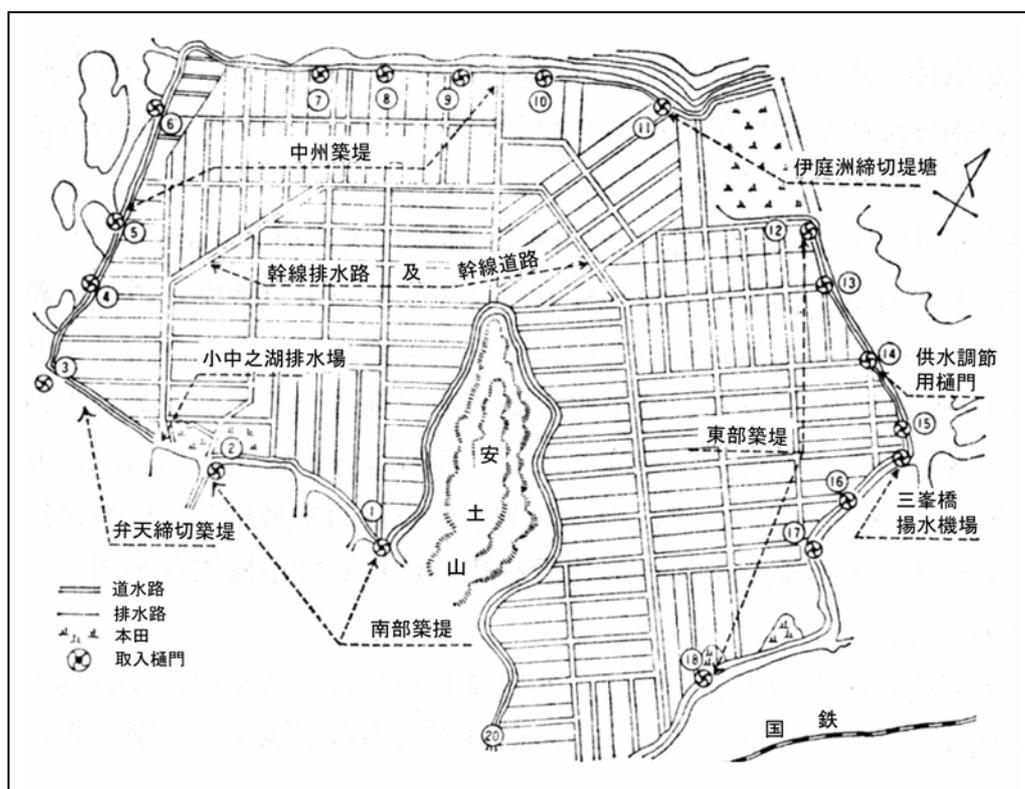


図 8-1 小中の湖の干拓平面図⁹⁾

小中の湖の排水に関しては、ヒアリング対象者の話によると、当初、小中の湖の排水路は大中の湖の干拓が完成した後、大中の湖の排水路とつなげて排水を琵琶湖へ出す予定だったという。しかし、つなげられることはなく、現在も小中の湖干拓地の排水は西の湖へと排水されている。

内湖干拓の排水に関しては、昭和19年2月10日付の滋賀新聞で「干拓計画は内湖の状態により多少の差異があるが一般計画としては内湖を●●する承水溝を設け外周からの悪水は内湖に流入せしめず直接外湖に流出せしめて干拓区域内の排水は排水機により排除する（後略）」¹⁴⁾（●部分はマイクロフィルムの画像が不鮮明で判別不能な文字）とありヒアリング内容と一致する。このことから、当時は内湖干拓に関する排水は直接外湖（琵琶湖）に流すよう計画されており、小中の湖も大中の湖の干拓工事が完成した暁には、大中の湖の排水路とつなげて琵琶湖に出す計画を立てていたのではないかと考えることができる。

参考文献

- 1) 滋賀県農地部開拓課：滋賀県開拓事業概要（1952）
- 2) 滋賀県史町村沿革史編さん委員会：滋賀県史町村沿革史 第参巻，p.166，滋賀県市町村沿革史編さん委員会（1964）
- 3) 琵琶湖干拓史編さん委員会編：琵琶湖干拓史，p.47，琵琶湖干拓史編纂事務局（1970）
- 4) 滋賀県史編さん委員会：滋賀県史 昭和編 第3巻，p.121，滋賀県（1976）
- 5) 能登川町高校町史研究委員会：能登川町史，pp.337-338，能登川町（1976）
- 6) 角川日本地名大辞典，角川書店（1979）
- 7) 滋賀県高等学校社会科教育研究会地理部会：滋賀県誌，p.132，地人書房（1983）
- 8) 滋賀県百科事典刊行会編：滋賀県百科事典，p.395，大和書房（1984）
- 9) 平凡社地方資料センター編：滋賀県の地名，p.645，平凡社（1991）
- 10) きぬがさ城東区50周年記念事業実行委員会：拓輝豊和きぬがさ50年のあゆみ，p.74，（1996）
- 11) 琵琶湖干拓小中の湖土地改良区，p.7
- 12) 滋賀県：滋賀県広報
- 13) 滋賀県総務部総務課編：滋賀県行政文書総簿冊目録 明治元年～昭和20年（1983）
- 14) 滋賀新聞，1944-2-10
- 15) 朝日新聞（滋賀），1944-2-11
- 16) 朝日新聞（滋賀），1944-8-19
- 17) 滋賀新聞，1944-8-20
- 18) 朝日新聞（滋賀），1944-12-6
- 19) 朝日新聞（滋賀），1944-12-29

- 20) 滋賀新聞, 1945-5-18
- 21) 滋賀新聞, 1945-6-12
- 22) 滋賀新聞, 1945-6-23
- 23) 滋賀新聞, 1945-7-8
- 24) 滋賀新聞, 1945-7-17
- 25) 滋賀新聞, 1945-7-23
- 26) 滋賀新聞, 1945-8-5
- 27) 滋賀新聞, 1945-10-10
- 28) 滋賀新聞, 1945-12-4
- 29) 滋賀新聞, 1946-3-27
- 30) 滋賀新聞, 1946-5-17
- 31) 滋賀新聞, 1946-6-19
- 32) 滋賀新聞, 1946-7-28
- 33) 滋賀新聞, 1946-7-29
- 34) 滋賀新聞, 1946-9-9
- 35) 滋賀県農地部開拓課：滋賀県開拓事業概要, p.1, (1952)
- 36) 滋賀県農政水産部耕地課 企画調整担当：小中の湖干拓の着工と竣工時期について
2005-12-16, 私信

第9章 論議と考察

本研究の目的は、ヒアリング調査や文献調査などによって干拓前の小中の湖の姿や同内湖周辺における当時の人々の暮らしぶりを明らかにし、干拓によって私たちが失ったものを探り、この研究によって明らかになったことを資料として残すことであった。

調査の結果、明らかになった主要な点は以下の通りである。

小中の湖の姿としては、弁天内湖の湖底環境や夏と冬の風向、切り通しの位置などの物理的諸元を部分的に確認することができた。また、弁天内湖および同内湖周辺で見ることができたと推察される鳥類と魚類、それに下豊浦と伊庭の集落で呼ばれていた小中の湖の呼び名を確認することができた。

小中の湖周辺に住む人々の暮らしぶりとしては、下豊浦と伊庭の水路や田舟などの湖上交通の一部を明らかにすることができた。また、下豊浦での農業やヨシ産業、漁業などの一年の流れをまとめることができた。他にも、下豊浦での祭事や調理方法を聴き取ることができ、伝説や知恵などの言い伝えは4点を収集、そして、弁天内湖周辺の地名、弁天内湖と伊庭内湖の境界などを記録に残すことができた。

しかし、一方では明らかにすることができず課題として残ったものも多い。

自然環境として小中の湖の湖内生態系(動物)を集団ヒアリングで確認しようと試みた。集団ヒアリングには「琵琶湖干拓史」に載っていた大中の湖の動植物を参考にして作成したリストと、インターネットから収集した写真とを用いて行った。しかし実際に調査を行ってみると、ヒアリング対象者が写真だけで動物の名前を確認するのは困難だということが分かった。特に貝類は写真だと大きさや形がわからないようだった。同集団ヒアリングは近畿大学農学部水産学科の藤田朝彦氏と共に行っており、同氏から専門的なアドバイスをもらうことができた。しかし、専門知識のない学生が写真だけで確認しようとするとヒアリング対象者の発言を間違えて理解してしまう恐れがあると感じた。今後、動植物の確認を行うときにはできるだけ実物を見てもらうなど、ヒアリング対象者が確認しやすい方法を検討していく必要があると思われる。

また、小中の湖周辺に住む人々の暮らしぶりを明らかにするために、湖上交通として港と航路を調査した。ヒアリング調査の結果、伊庭と能登川、下豊浦の集落にはそれぞれ「伊庭の金比羅浜」「浜能登川」、「豊浦港」と呼ばれていた港があったことが明らかになった。そのうち「浜能登川」と「豊浦港」が古くからあったことは文献で確認することができた。しかし「伊庭の金比羅浜」がいつから存在するのか確認することができなかった。また、浜能登川に寄っていたとヒアリング対象者が記憶している柴舟の航路も確認できていない。今後明らかにしていく必要がある。

他には、小中の湖干拓工事の着工と竣工の年である。一般に言われている小中の湖の工事着工と竣工はそれぞれ 1942 年（昭和 17 年）8 月と 1947 年（昭和 22 年）3 月である。しかし、調査していく中でこれらの年が文献によってさまざまであることが分かってきた。本論では、さまざまな文献や資料から最終的に 1942 年（昭和 17 年）に計画が立てられ、翌年工事開始、そして 1946 年（昭和 21 年）に竣工したと結論付けた。だが、この結論を裏付けるためには更に調査を行う必要がある。

最後に、本研究では伊庭と下豊浦の 2 つの集落しかヒアリング調査を行うことができなかった。そのため情報に偏りができてしまい、小中の湖の自然環境の一つである流入河川や、伊庭内湖全体の湖底環境を明らかにすることができていない。他にも小中の湖周辺に住む人々の生業であるヨシ業者と漁業、農業、また、暮らしの様子である祭事と料理に関して下豊浦でしか確認できていない。本研究で行うことができなかった能登川と北須田、南須田でのヒアリング調査が今後の課題として残る。

小中の湖は戦中戦後の食糧増産計画の一環として干拓された。小中の湖干拓は果たして良かったのか、悪かったのか。小中の湖を干拓したことによって私たちが得たものと失ったものはなんだろうか。

内湖を干拓して得たものは、干拓の目的でもある食糧だった。内湖は干拓後すぐに作付けができ食糧増産に大きく貢献した。

一方、本論でもまとめたように、干拓によって生物の生息地としての内湖の機能や周辺に暮らしていた人々の内湖に関わる生業など生活の一部を失ってしまった。

上記のように得たものと失ったものを比べてみると、小中の湖の干拓の善悪を単純に言い切ることができない。当時は一刻も早く食糧を増産する必要があった。そのため、最も簡単に食糧を増産する方法として内湖の干拓を選んだことは決して間違った選択だったとは思えない。食糧難の当時において、内湖干拓は正義であった。また、現在内湖の役割や機能が見直されているが、それも内湖が干拓されたことで、逆に内湖について見直す機会を得ることができたと考えることもできる。

だが、当時は正義だったとはいえ、やはり失ったものは大きい。失ったものをなんとか取り戻さなければならぬが、失われたものを取り戻すことは簡単でない。しかし、これ以上失わないようにすることは可能なのではないだろうか。

例えば、現存する内湖を守ることがその一つだと考える。ただし、単に残すことだけが環境保護ではないと私は考える。本研究で確認することができたように「モラとり」や「スクモとり」など、内湖は人々の生活と密接に関わっていた。内湖が果たす機能と役割は、人間が内湖に関わることで機能していたのではないだろうか。干拓以前の小中の湖の水質は湖底が見えるくらいきれいだったという。それは、当時の人々が湖底からスクモやモラを取ることで、藻などと一緒に湖底に溜まっていたヘドロがすくい上げられ、内湖全体が浄化されていたと考えることができる。その意味では、現在残っている内湖は確かに保護

されてはいるが、内湖本来の姿そのものが保護されているとは言えない。

以上のことから、現存する内湖を内湖本来の姿に近い形で保護することが必要であり、そのためには、できる限り人の手を加えるべきだと考える。また現在、一部のかつての内湖において、内湖復元が叫ばれているが、復元した内湖を十分に手入れできるかどうかを慎重に議論した上で復元するべきだと私は思う。

謝辞

本研究を進めるにあたり終始ご指導いただいた井手慎司助教授に深く感謝いたします。井手助教授のもとで学んだ一年半は、研究の難しさや大変さ、また、明らかになった時の喜びを感じることができました。卒業論文を制作した経験はこらからの自信に繋がると思っています。

本研究はヒアリング調査に協力していただける方なしにはできないものでした。ヒアリング調査を行うにあたりご協力いただいた多くの方々、常にヒアリング調査で同席してくださったTM氏、また、動物のチェック表の作成時に助言をくださった近畿大学農学部水産学科の藤田朝彦氏にこの場をかりてお礼申し上げます。

同じ研究室の先輩であり、いつも親身になって相談やアドバイスをしてくださった木村道德さん、平山奈央子さん。ともに努力を重ね、励ましあい、喜び合った石本貴之くん、中村敦子さん、二村昌輝くん、福江岬くん、望月毅瑠くん、米沢高明くん。彼らと同じ研究室で過ごすことができたことをとても幸せに感じます。ありがとうございました。

最後になりましたが、4年間の大学生活を共にすごした社会計画のみなさん、いつも元気を与えてくれる親友、そして、いつも応援してくれている両親と弟に感謝の気持ちを申し上げます。本当にありがとうございました。

松尾さかえ

Appendix



Appendix 目次

Appendix 1	ヒアリング結果	1
1-1	TK 氏ヒアリング結果	1
1-2	OS 氏ヒアリング結果	5
1-3	NM 氏ヒアリング結果	10
1-4	ZK 氏ヒアリング結果	19
1-5	ME 氏ヒアリング結果	21
1-6	OY 氏ヒアリング結果	28
1-7	TH 氏ヒアリング結果	40
1-8	FM 氏ヒアリング結果	50
1-9	MI 氏ヒアリング結果	54
1-10	OS 氏ヒアリング結果	59
1-11	MI 氏ヒアリング結果	69
Appendix 2	小中の湖マトリックス表	75
Appendix 3	参考 web ページ	93
3-1	琵琶湖博物館の画像(写真)データベース「湖と人の暮らし写真アルバム」	93
3-2	神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」	94
3-3	滋賀県立図書館「滋賀県関係新聞記事見出し検索」	95
Appendix 4	小中の湖写真集	96
4-1	小中の湖ポンプ場前	96
4-2	現在の小中の湖のポンプ場	97
4-3	江ノ島方向に向かって	97
4-4	安土山からみた大中の湖	98
4-5	弁天島	98
Appendix 5	文献から引用した写真	99
5-1	環境フィールドワーク 2 報告書(2004)	99
5-2	環境フィールドワーク 2 報告書(2005)	102
Appendix 6	小中の湖白地図	105
Appendix 7	動物確認表	106

Appendix1 ヒアリング調査結果

1-1 TK氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005年1月29日

対象者：TK氏

場所：TK氏宅

対象者データ：1926年生まれ。小中の湖があった当時から下豊浦のヨシ業者をしている。

ヒアリング概要：TK氏には、干拓前の小中の湖の様子とともに、ヨシ田の年間の作業について聞いた。

松尾「小中の湖が干拓される以前のこの辺りの地形について教えてください」

TK氏「昭和22年（小中の湖）と昭和43年に大中が干拓されるまで、この辺りの地形はほとんど変わっていない。ちょうどこの辺りの東江洲（ひがしごうしゅう：湖東）から西江洲（にしごうしゅう：湖西）にかけてが琵琶湖で一番膨らんでいるところ。湖の中央にあたる。西江州の方は比良山と琵琶湖との間にほとんど平地がなく、勾配が急で、水辺に植物がほとんど生えていない。だから魚が寄りついたり産卵したりするということがあまりなかった。それにくらべて、湖東の方は、鈴鹿から湖岸までがなだらかな地形で、湖も遠浅になっている。入り江もあり、水辺に植物が生えやすく、棲みやすかったのだろう。戦前の干拓の前は、外湖（がいこ）のほとんどの魚がこの辺りに寄ってきて産卵をしていた」

TK氏「この辺りの者は琵琶湖のことを外湖（がいこ）と言う」

松尾「外湖とは外の湖（うみ）。内湖（ないこ）に対して外の湖ですか？」

TK氏「そう。それに大中と弁天と西の湖をあわせたもの全体を『内湖』と呼んでいた」

TM氏「外湖（そとうみ）に対して内湖（うちうみ）やな」

TK氏「地元呼び名では『うちうみ』やね」

松尾「内湖はどれくらい水がきれいだったのですか？湖底まで見えましたか？」

TK氏「田舟の上でお弁当を食べた後に弁当箱を洗うと、水中に散らばったご飯粒を食べに小魚が集まってくる様子が見えた。舟から下を覗くと藻も見えた。それくらいきれいやった。水深はせいぜい2~3mくらいであまり深くなかった。湖底の貝もだいたい見えた。お祭りで貝を食べたいといったら舟でとりに行くんや。ヨシの先を尖らして、水中で開いている貝の口へもっていく。すると驚いた貝がヨシをはさんで口を閉じよる。潜らなくても貝を釣り上げることができた」

松尾「ヨシの生えていたところは何と呼んでいましたか？」

TK氏「ヨシの生えていたところはそれぞれ地名がついていたが、全てをひっくるめて『ヨシ田（よしだ）』と呼んでいた。土地が高いところは田んぼで、低いところはヨシ田と言うふうになっていた。ヨシが生えているところは、波が寄せてくると根元の土が洗われる。特に巴（地名）や江ノ島（地名）あたりは、西風といって波が荒く、昔に比べて元地（もとち）が半分くらいに減っている。逆に増えている所もあるが、これは現在も続いている」

TK 氏「(現在能登川町に) 須田というところがある。そこは昔、下豊浦の領で、下豊浦村字須田だったが、能登川に編入されてしまった」

TM 氏「安土山の東の方(伊庭の方)はずっと田んぼでしたか?」

TK 氏「ヨシ地(よしぢ)というほどのものではないけど、田んぼの水際の方が少しヨシ地だった。能登川領だったけど、安土山の東側の田んぼは安土(永町)の人の所有地だった」

TM 氏「下豊浦の人が舟にのって伊庭の方へ田んぼしに行っていた」

TM 氏「みんな田舟に乗って田んぼに行っていた。舟 2 艘に牛をまたがせて連れて行って田んぼをしていた。だからほんまに舟が必需品だった」

TM 氏「芦刈(地名)あたりのヨシ地にも行っておられましたか?」

TK 氏「うん行ってた。この辺りで一番大きかったのは宮さん(活津彦根神社)のヨシ地。現在は『白葭(しらよし)』という地名になってるけど、昔は『宮葭(みやよし)』と言って、10 町ほど広さがあった。宮世話になるとみんな太らはった」

TM 氏「何でかと言うと、昔は田んぼよりもヨシ地からあがる収入の方がうんと高かった。田んぼの収入を 1 とするとヨシ地は 3 くらい。それくらいヨシの方が高かった。宮さんは大きなヨシ地を持っていて裕福だった。それで宮さんの世話役をしていると、お宮さんをご馳走を出してくれるから、太ると言うこと」

TK 氏「田んぼやったら田植えなど苦労することが多いけど、ヨシ地はあまり手入れする必要がなく収入もよかった」

TK 氏「それと、ここの漁師の方は、昔は簡単に魚がつかめたという話をよくされる。ヨシ巻き漁なら、一回で 200 kg から 300 kg の魚がとれた。ワタコ(ワタカ)が主だった。ヨシ巻き漁は遠浅になっている所でやっていた。遠浅になっているところやなかったら魚がヨシの中に入って来よらん」

TM 氏「ヨシ地の辺りは砂地でしたか?」

TK 氏「砂地だった。遺跡(大中の湖南遺跡)のところを掘ってみたら、深さ 50~60 cm までが砂やった。その下はスクモで全部真っ黒。北風で砂が寄ってきて砂地になったのだろう」

TM 氏「おそらく愛知川辺りからの砂が大中の湖へ流れ込んできて、北風にあおられて南に打ち寄せられ、小中の湖との間に砂洲を造ったんやろう」

TK 氏「そういう遠浅の地形だったからヨシが水の中でも生えていた。その水中に生えているヨシの中へ魚がみんな入ってきた。魚つかみにも時期があった。北風がものすごく吹いた、あくる日か 2 日後くらい。シーンと静まりかえって寒気がきつくなつた時に、ヨシの中へ魚が入り込んでいる。魚のいるヨシを囲うて舟から手でつかまえた。一緒に行ったことがある。舟でヨシ地の中へぐっと入ると、ヨシがゆれる。その辺りに魚がいることがわかるんや。それを漁師の人がイジコ(藁で編んだ籠)いっぱい手でつかまえてはったわ」

TK 氏「とは言え、漁には『漁間(りょうまん)』といって大漁のときも、不漁のときもあり、安定していなかった。何を、いつ、どこでとればよいか、それを見分けるのが漁師の腕、匠の技やった」

TK 氏「湖辺(うみべ)の人は声が大きい人が多い。特に漁師は湖(うみ)の上で舟から舟に連絡をとるので、声を張り上げなくちゃならず、自然と声が大きかった」

松尾「ヨシ田ではどのようなことをされていたのですか？ 季節を追って、歳時記風に教えてください」

TK氏「1月から刈り子さんたちがヨシ刈りを始める。雪が1mも積もってたらあかんけど、少々の雪なら1月から刈り取りを始めた。刈り取りに一番良い時期が2月。2月はヨシが完熟していて、色合いや光沢、品質が一番いい。1月はまだ少し青みが残っている。3月では皮がはじいてしまうので、2月が一番いい。大寒から2月中頃までが最適期やった」

TM氏「ヨシの刈り始めは決めてはりましたか？ 暦の上でいつからやったとか」

TK氏「いつからというのは特になかったね。1月の大寒のころから」

TM氏「1月の大寒の頃から2月中頃までが最適期で、3月になるとヨシの皮がはじきよると」

TK氏「3月のヨシは皮がはじけて商品にならない。3月は『ヨシの調整』と言って、細いヨシ、太いヨシとを選び分ける。近江のヨシは品質が良く、京都の一流所はみんな、近江のヨシから作ったヨシ簾（ず）を使っていた。京都は美中心。近江のヨシ簾は夏の涼みと美の両方を兼ね備えていたから。他のところのヨシは暗渠に使うとか、屋根ぶきに使うとか、品質に関係のない要途に使っていた」

TM氏「とにかく良いヨシは京都を中心に名古屋の一部と金沢に出していた。中くらいのヨシは大阪とかに出していた。安土のヨシの特徴は、夏のヨシ障子、衝立、簾などのように室内で使う限り、葉を取り除いた痕の白い部分が、永い年月が経っても茶色く変色しないこと。ヨシの茶色の部分と白い部分を活かして、編みこむと粋な模様が創れる。それが京都の人には好まれた」

TK氏「良いヨシとはいわゆる高級品に使うヨシ。きれいなヨシ。細さもあるが、年月がたっても変色せず模様が色あせないヨシ。それが近江ヨシがきれいなヨシとされ、高級品に使われていた理由」

TK氏「湖北の人はアシとヨシは違うと言っていた。アシを混ぜて送ったら、なんでアシが入っているんやと言われて商売にならなかった」

TM氏「ヨシは売れるけど、アシは売れへんかった。アシも屋根ぶきの材料になら使えるんやけど」

TK氏「使えんことはないけど、(アシは)中に綿が入ってるから長持ちしない。仕事はしにくいわ長持ちはしないわ」

松尾「3月のヨシの調整と言うのは？」

TK氏「大阪に送ったり京都や名古屋、金沢に送ったりするための選別やな」

TK氏「3~4月は出荷の準備。3月の末から4月中頃までの20日ほどの期間にヨシ島（ヨシ地）を焼く」

TM氏「丁度そのころにヨシの新芽が出てくる。それも焼くことによって、刺激されて、わき芽がぐっと出てきて密度が高くなる」

TK氏「焼く時期も色々あって、3月の20日頃に焼くと太いヨシが、4月に焼くと細いヨシが多くなる。遅すぎて、30cmも伸びてから焼いてはヨシは生えない」

TM氏「4月の何日くらいまで？」

TK氏「20日では遅い」

TK氏「4、5、6月はヨシの出荷。8月中頃まで。だいたい京都の祇園祭、大阪の天神祭りが夏の最終出荷やね」

TM氏「それが終わったら翌年刈り取るまでは何もしないのかな？」

TK氏「在庫整理や次の仕事の段取りをする。それから、来年の分を各地の間屋や簾店が買いに（予約をしに）来る」

松尾「当時はヨシの販売だけをされていたんですか？」

TK 氏「ヨシの販売だけをやってた。昭和 40 年くらいまでは、安土と能登川と八幡にヨシ業者が 50～60 軒あったけど、今ヨシで生計を立てているのはうちだけになった」

松尾「ヨシ地ではどのような生き物が見られましたか？」

TK 氏「12月になるとヒヨドリなどの渡り鳥がシベリアから西の湖にやってくる」

TM 氏「ヨシキリ（スズミ）は 6 月くらいに飛んできて、ヨシの中で子どもを産んで育てて、それから、お盆の頃に南に帰っていく」

TK 氏「この付近ではヨシキリを『ヨシ原スズメ』とも言うてる」

TK 氏「キジもヨシ島の中にいた。ヨシ地の中で巣を作って、ヨシ地の中で卵を産んで子育てしよる。ただし、キジはスズメやらと違って、巣がどこにあるかを絶対に見せない。端にいくとタッタッと他の場所に動いてからパッと飛び立ちよる」

TK 氏「動物と言えば、梅雨前後の大雨の頃、琵琶湖や西の湖が増水して、ヨシ田やヨシ地が 50 cm ほど冠水することがあった。そんなときにはヨシ田に生息していた蛇や鼠がみんな大きな柳の木に登り、枝の上で仲良く水が退くまで過ごしている異様な姿を度々見た。今でも不思議なことやったなと思っている」

1-2 OS氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005年1月31日

対象者：OS氏

場所：OS氏宅

対象者データ：1925年生まれ。小中の湖があった当時、下豊浦の漁師だった。

ヒアリング概要：OS氏には、干拓前の小中の湖の様子について、漁業を中心に聞いた。

松尾「内湖のことを何て呼んでいましたか？」

OS氏「私たちは琵琶湖のことを『外の湖（そとのうみ）』、大中のことは『中の湖（なかのうみ）』と呼んでいた」

OS氏「西の湖は、安土の人は『西の湖』と呼んでいたが、八幡の人は『常楽寺湖（じょうらくじうみ）』と呼んでいた。今でもそう呼んでる。西の湖の周辺では常楽寺（地名）と言う在所が一番大きく、常楽寺の人の田んぼやヨシ地がたくさんあったから」

松尾「弁天の湖はなんと呼んでいたのですか？」

OS氏「色々な呼び方があった。今は小中の湖となっているけど、『大舟戸（おおぶなと）』とか『弁天内湖（べんてんないこ）』とか呼んであった。弁天さんのお堂があったからな」

TM氏「うちらは子どものころ、悪ガキと一緒にその辺の舟を借りて、弁天内湖に遊びに行ってた。弁天さんの岸よりの辺りがきれいな砂地やって、そこで泳ぎを覚えた。泳ぎを覚えたら、頭にパンツや服とか紐でくくって、板を胸に当てて弁天さんまで泳いで行く。そして『弁天さんの竿飛び』と言って、弁天島から突き出てる竿から飛び降りて遊んだんや。初めて竿を飛んだのが小学校3年生やった」

松尾「飛び込まないと男ではない、と言われていたんですね」

TM氏「そうそう」

OS氏「弁天内湖は平均して浅かったけど、弁天島に行くまでにツボと言って深いところがあった。ほんで、弁天さんまで泳いでいくのはいいけど、ツボがあるからよう考えよ、と言われてたもんや」

TM氏「でも上手にツボをよけたら、泳がなくても歩いて弁天島まで行けた」

松尾「伊庭内湖はどんな内湖でしたか？」

OS氏「白葎（地名）ってところがあるやろ？ そこら辺の田んぼは安土の者が作りに行ってる。伊庭内湖側の小山田（地名）や祇園（地名）さん、梅ヶ谷（地名）に田んぼがある下豊浦の家はたくさんあった。でも伊庭内湖は伊庭の集落の内湖で、伊庭の漁師さんがコイの養殖などをしてはったから、われわれ安土の漁師は入れなかったんや。弁天内湖と伊庭内湖を仕切るために、安土山の先端部のところに『舟越し（ふなごし）』と言って簀（す）が張ってあった。でも田んぼに行く人たちのために上の縄だけは切ってあって、舟で通れるようになってたんや」

TM氏「小中の湖の風向について教えてください」

OS 氏「その日の天候によってまちまち。でも、台風の際は例外として、夏の風と冬の風とは違った。夏は、朝は東西の風が、夕方には伊吹山の方から北東の風が吹く。だからうなぎとりの筒を沈めるときは、あげる時のことを考えて筒が風にふられることがないように、南西から北東の方向にそって沈めたものや」

OS 氏「この図（水の流れや波の荒さが描いてある）にある風の向きは西風やから冬の風や。西風は3日から1週間続いた後に北風にかわる。これを『北返し』と呼んで、北返しが吹くと雪がきた。冬は日中穏やかでも夜中になると『夜西』（強い西風）が吹くから油断すると言われていた」

松尾「内湖の周辺には水路とか、川とかありましたか？」

OS 氏「小中の湖が干拓される以前はたくさん川があった。川のそばの家はものすごく便がよかった」

OS 氏「昔は冬になると、今と違って寒かったから、川やらが全部凍ってしまう。そうするとスケートみたいなことができる。わんぱくな子たちは江ノ島まで氷の上を歩きよった」

OS 氏「それに、冬が一番寒い時が一番漁に適していた。大きな魚がつかめる時期やから、漁に行きとうてならんの。でも、氷が張ってて舟が出られへん。舟の舳先で氷をバンバン割りながら出て行くんや。そういう冬の寒気のひどい時には、大きな4kgや5kgのコイがつかめた。水温が高いと、魚に力があって、あんな細い糸にはかかりよらへんけど、1月2月やったら引っかかってもじっとしとる。そこを上手に網を絡めてあげるんや」

TM 氏「下豊浦あたりにワタカがたくさんいなかった？」

OS 氏「おそろしいくらいおった。川ではワタコがいくらでも釣れた感じ」

松尾「ワタコですか？」

OS 氏「この辺では『ワタコ』と呼んでいた。本名はワタカやけどね」

OS 氏「しかし、このワタコと言うのは、植物性タンパク質が好きで藻やらを食べる。ヨシの葉っぱでも食いよる。雨が降って田んぼが水につかるとワタコが田んぼへ上がってきて青葉（苗）を食べてしまいよった。この魚は約25～30cm くらいの大きいやつで、釣ろうとしたら、ヨシの柔らかいところを針につけてほいと投げ込むだけで釣れる。でも、小骨が多いし、植物性タンパク質を好む魚やから食べても美味しくなかった。塩焼きして食べたりしたくらいやな」

OS 氏「モロコはね、上手に波に乗ってヨシや柳の根っこに産卵に来よる。モロコをとるなら手でつかんだ方がうんと早かった」

TM 氏「それくらい豊かやった」

TM 氏「季節と魚について聞かせてください」

OS 氏「モロコ（本モロコ）は春の産卵のために小中の湖に来るけれど、他の季節には琵琶湖に帰ってて小中の湖にはいない。モロコ以外の魚は年中小中の湖にいた」

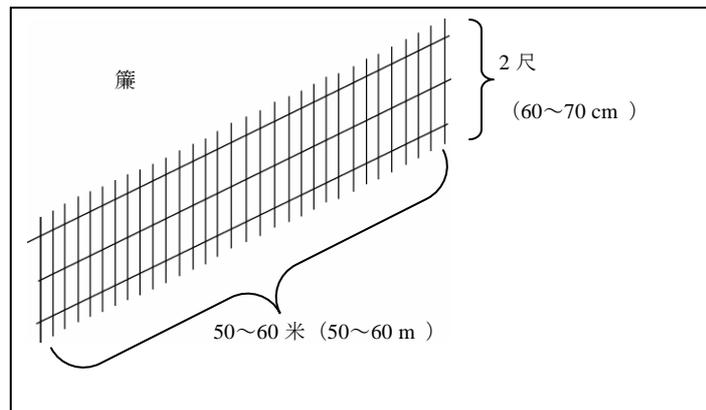
TM 氏「季節によって魚が棲むところが変わったりしましたか？」

OS 氏「産卵のために春から梅雨の時期にかけて、川や浸水した田んぼ、ヨシ地に遡ってくる魚がいた以外は、季節によって変わることはなかった。季節を問わず、ギギやナマズ、ヒガイは石垣の近くに、ワタコは水草のあるところやヨシ地の近くに、シジミは砂地にいた」

松尾「ヨシ巻き漁について教えてください」

OS氏「(琵琶湖の漁法をまとめた本では)夏の産卵期の魚をつかむ漁のことをヨシ巻き漁と書いてある。でも、この辺りのヨシ巻き漁は違うんや。不思議なことに、この辺りでは12月から2月にかけての寒い時に魚がヨシ地にあがってくる。だからこの辺りのヨシ巻き漁は寒い時期にやっていた」

OS氏「前の日にヨシ地に見に行ったら魚がいよつたら、あくる日の朝、5人ほどの組で3~4艘の舟に道具を積んでヨシ地に行く。ヨシ地に行ったら、魚が逃げないようにヨシ地と湖の境目のところ(ヨシと水の間)に2尺くらい簾をまっすぐに張るの。そして、その簾に垂直にもう一つ簾を張って、その簾は固定しておく。その固定した簾に対して反対側から順番に魚を追うて行く。



く。そして魚がいよらへんくなったら、切り網を竹の先につけて湖底からヨシ地に向かってずっと通す。網の上には浮きが付いてあるから下から網が張れる。仕切るんや」

TM氏「その切り網を固定していた簾のほうにどんどん動かしていくわけやな」

OS氏「そうやそうや。一度切り網で仕切ったら、今度はまたその辺にいた魚を追う」

松尾「どうやって追うんですか？ ばんばん水面をたたくんですか？」

OS氏「そうそう。舟の上からガチャガチャやっていると自然と魚は逃げていきよる」

松尾「切り網で追うていくんじゃないくて、切り網はそのままにして、舟の上から追うていくんですか？」

OS氏「そうや。切り網はそのままにしておく。切り網の上は舟が通れるから、魚を追えたらまた切り網を張る。そして10畳から20畳くらいの広さまで追い込んだら、切り網の外側に簾を立てる。そしてその中のヨシだけを刈り取ってしまう」

松尾「最終的には簾で三方を囲んでしまうんですね」

OS氏「そうそう。そして、その三方で囲んだ中のヨシだけを刈るの。そうやってから囲ったところの隅の方にツボをこしらえる。ツボとは魚が入ってきたら出られへんようになるところ。明るいところに魚が逃げていきよるから、明るいところにツボをこしらえる。そしてヨシを刈ったら後はツボから四つ網とかですくいあげる。そうすると、1回で150貫、600kgくらいとれた。ここでとれたフナはフナ鮠に使うニゴロフナではなく、幅の平たいゲンゴロウフナがほとんど」

松尾「フナが主にとれたんですか？」

OS氏「フナとワタカとコイかな。フナとワタカが一番多かった」

松尾「ヨシ巻き漁は限られた人にしかできなかったのですか？」

OS氏「そうそう。そもそも道具を持っている人がいなかった。色々な道具がいるし」

松尾「では、道具を持っていた人が中心になってやっていたのですかね？」

OS氏「そうやそうや。組合みたいに、7軒くらいで組を作ってね」

TM 氏「ヨシ巻き漁をやっていた場所は？」

OS 氏「遠浅になっているヨシ地でなかったらあかんかった。小中の湖ではほとんどしてなかった。白霞のところに小さいのが2、3箇所あったくらい。ほんで、こういう漁をしはる人は、同じところで年に2回くらい漁をした」

TM 氏「だいたい大中の方ですか？」

OS 氏「いやいや、中の湖（大中の湖のこと）はアカン。ヨシ巻き漁はほとんどが西の湖やった。大中の湖も遠浅にはなっていたけど、ヨシ巻き漁でとれるような魚はきよらへんかった。その代わり、安土の人はしてなかったけど、伊庭の人は大中の湖で『灯（とぼし）』と言って、6月か7月頃の夜に舟でカーバイドを持って出て、押し網で魚をつかむことをしてはった」

松尾「ガスで何をしはるんですか？」

OS 氏「カーバイトに火をつけて、その明かりで舟の上から湖を見ると、水がきれいやから湖底で魚がじっとしてるのが見えるの」

OS 氏「そんでこれやと思う魚がいたら、押し網でがばって押して揚げる。でも網に入ってると思ってあげてみても入っとらん。何でもかと言うたら、魚がそのままの場所にじっと動かないでいるから。押し網のコツは魚の尻尾にドンと当てるように網を浸けること。網が尻尾に当たると魚は逃げようとする、そして押し網の袋の中に入る」

松尾「それ以外の漁法はどんなものがありましたか？」

OS 氏「昔は魩（えり）が数ヶ所あった。二重になってる魩（矢じりが二つ連なった魩のこと）もあったな。先端の魩はフナとかコイとかの大きい魚をとるために、粗目といって目がちょっと粗い。もう一つの魩はモロコとか、小さな魚をつかむために目が細かった」

OS 氏「漬柴（つけしば）というのもあった。柴をだいたい200束くらい結うて、一年中水の中に浸けておいて、冬になったらあげる」

OS 氏「漬柴のことを『寝屋（ねや）』とも言うてた」

TM 氏「寝屋とは魚の寝床のことやな」

OS 氏「安土の人が5人ほどで組合をつくって、漬柴を大中の湖の4ヶ所くらいでしてたかな。それから、私個人も安土山の川尻の方でしてた」

TM 氏「貝引きは？」

OS 氏「貝引きは大中と西の湖全体でやってた」

松尾「小中の湖は？」

OS 氏「小中の湖でもしていたけど、少なかった。大きいダブ貝みたいなやつばかりしかとれへん。西の湖に行くと良い貝がたくさんとれた。ほんで西の湖へ行くことが多かった。西の湖の貝と大中の湖の貝とはぜんぜん違った。大中の湖でつかんだ貝は上品な貝で、貝殻が薄く、黄色がかっていて、身が小さかった。でも、西の湖にくると真っ黒の貝で、身が大きかった。西の湖の貝はゆでても身が大きいとみんな喜んでた」

OS 氏「西の湖にはイケチョウ貝もたくさんいた。でも、これをつかんで茹でても、身が大きいけど硬いから評判が悪い。だからあまりつかまえなかった」

TM 氏「漁の方法と季節の関係は？」

OS 氏「エリ漁は年中、漬柴は柴を漬けておくのは年中だけれども柴を挙げて漁をするのは冬、ヨシ巻き漁も冬、灯漁（とぼし）は6月か7月頃」

1-3 NM氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005年2月1日

対象者：NM氏

場所：NM氏宅

対象者データ：1925年生まれ。小中の湖があった当時、下豊浦の農家だった

ヒアリング概要：NM氏には、干拓前の小中の湖の様子を聞くとともに、農業の年間の作業や伝説について聞いた。

松尾「この辺りの内湖のことをなんと呼んでいましたか？」

NM氏「『弁天湖（べんてんうみ）』と呼んでいた。西の湖のことは『西湖（にしうみ）』、江ノ島（地名）の辺りから向こうを西湖と呼んでいた」

松尾「弁天湖と西湖を分ける明確な境目のようなものはありましたか？何か目印があったとか」

NM氏「境界というものは特になかった」

松尾「弁天湖の水質について教えてください」

NM氏「わしらの子どもの時には湖底まで見えた。そらきれいな水だった」

松尾「弁天湖に水の流れというのはありましたか？」

NM氏「極端に入ってきているとか、出ていっているとかの流れはなかった。けど、ヨシ田の田んぼのあるところ（芦刈から白葎にかけて）には所々、大中の方へ出られる切り通しがあった」

松尾「大中の湖と弁天内湖や伊庭内湖との間に航路があったと聞いたのですが」

TM氏「航路といえば、近江八幡の白王よりのところに、西の湖と大中の湖を仕切っていた砂洲の開口部があった。そこを『波口（ばくち）』と呼んでいた。その砂洲の先端部のあたりでシジミが沢山とれたので、円山や白王の人が波口を越えてそこに行ってた。でも、そこに行こうとすると、大中の湖からの波が荒くて大変やっただって言うてはった。その波口を越えて常楽寺港に汽船が入ってきたこともあると聞いている。また、昔、織田信長が物資を安土城へ運んだのは伊庭内湖側にあった城の搦め手からだったと聞く。信長は琵琶湖を物資の輸送の大きな動脈にしていた。昔は船で運んだ方が速くて大量の荷物が運べたので、船で琵琶湖から大中の湖に入ってきて、伊庭内湖を経て安土城への物資を調達していたよう。波が荒いと言っても外湖に比べると内湖の波はまだ静かやった。嵐が吹いたりしたら、琵琶湖の船がみんなこの辺りの内湖へ逃げ込むこともあったそう。また大中の湖から西の湖を経て常楽寺港へ向かう航路も近江源氏である佐々木氏の大きな物流のルートだった。そのような舟運の航路の役割をこの辺りの内湖はしていた。あと、小中の湖や西の湖から大中の湖へ田舟で出ていける狭い水路がヨシ地の砂洲に数ヶ所あった」

TM氏「弁天内湖より伊庭内湖の方が波が強かった？」

NM氏「強かったが、大中の湖ほどではなかった。大中の湖は、風のない日でも波が荒くて、よっぽどなことがない

と行けなかった。風のない日でも大中の湖へ出るのは恐かった」

松尾「当時、千石岩というのがあって、その岩を見て水害がおこることを見ていたと聞いたのですが」

NM氏「そうやそうや。千石岩が見えへんようになったら、水位が高くなったと言うこと。(千石岩が)よう見えたら干ばつや、と言うことになる。この岩が見えるか見えないうらやったら丁度いい。米がたくさん、千石くらいとれるわ、と言うことで千石岩と言われていた」

松尾「わざわざ舟に乗って千石岩を見に行っていたのですか？」

NM氏「千石岩の辺りを通して、伊庭内湖の田んぼへ行ってたん」

松尾「それで見るのができたんですね」

NM氏「そうそう。みんな田舟でね、弁天さんの前を通して田んぼへ行っていた。梅ヶ谷(地名)、祇園さん(地名)、小山田(地名)と言うところに田んぼがあった。祇園さんは、お宮さんがあったからそう呼んでた。昔は祇園さんに行くには、山越えをして行っていた。祭りのときは神輿をかついで山越えしてたんや。田んぼもみんな歩いて山越えして行ってた。安土山の西の方から東の方にある梅ヶ谷、祇園さん、小山田方面へ行ってた。収穫したりする時だけ舟で行ってたんや」

TM氏『『小山田越し』と言ってましたな』

NM氏「そうよ。『小山田越し』と言って、北原の手前から山を越えて田んぼへ行ってた」

松尾「内湖の水深について聞かせてください。浅かった所や深かった所などを憶えていませんか？」

NM氏「現在、やすらぎホールが建っているところは浅かった。あそこは昔水の下やった。浅かったもんやで、シジミがたくさんおったんやわ。スコップやらで泥と一緒にかいて、それを筈(とおし)という篩(ふるい)にあけてゆると泥が落ちて、貝やらが残りよる。たくさんシジミがとれた」

松尾「遊びながらとっていたんですか？」

NM氏「そうそう」

松尾「他に浅かったところはなかったですか？」

NM氏「弁天さんへ行く途中までが浅かった。でも弁天さんに近づくと深くなった。弁天さんへ泳いでいこうとして、途中でおぼれて亡くなった人もいた」

松尾「浅いところの水深は何 m くらいでしたか？」

NM氏「1 m もなかった」

松尾「では 60~70 cm くらい？」

NM氏「そうやな」

NM氏「わしらが子どもの時には、学校から帰ってきたら、田舟に乗って江ノ島付近まで泳ぎに行ってた」

松尾「子どもたちだけでですか？」

NM氏「そうよ、悪さしてな。田舟をひっくり返して、船底の上にみんな乗って、踏み台にして飛び込んだもんや」

松尾「他にどのような遊びをされていましたか？」

NM氏「水がきれいやったから、貝がたくさんおった。ヨシ地まで行って舟から湖底を見ると貝が口をあけているの

が見えるんや。その貝の口に先の尖らしたヨシをもって行く。そうすると、驚いた貝が口を閉じてヨシを噛みよる。噛みよったらしめたもので、釣り上げることができた。また、舟で出ればドボンと飛び込んで底を手で探る。それでたくさん貝をつかむことができた」

松尾「つかんだ貝は持って帰るんですか？」

NM氏「持って帰って、湯がいて食べた。美味しかった」

TM氏「人参と一緒に炊くと美味しいんやわ」

NM氏「昔から貝と人参と言ったらご馳走やった」

松尾「弁天島へ遊びに行っていましたか？」

NM氏「そうよ。弁天島にはね竿があったんや。島まで行ったら竿から飛び込んで泳いでた。竿では1年生から6年生までの子どもが遊んでいた。高学年の人は平気で飛び込むけど、低学年の者は恐くてたまらなかった。竿の上で、どうしようかとぐずぐずしていると、後ろからは、早よ行けと押してくる。するともう仕方ないから、落ちる。飛ぶんじゃなくて落とされる。そうして竿から飛び込むのやら、泳ぎやらを憶えたんやわ」

松尾「男の子だけですか？」

NM氏「男の子が多かった。女の子も泳いであったけど、竿から飛び込むということはなかった」

松尾「飛び込まなければ男ではない、と言われていたとか」

NM氏「そうやそうや」

松尾「どんな魚がいましたか？」

NM氏「前はな、ボテジャコと言うのがようけおった」

松尾「どの辺にいましたか？」

NM氏「一面にいた。深いところではなく、浅瀬まわりやな」

TM氏「ヨシ地の辺りもずっと浅くて砂地でしたよね？」

NM氏「そうそう。ヨシ地の縁（ふち）は浅かったな」

松尾「ボテジャコ以外には何がいましたか？」

NM氏「もう少し水の深いところに行くと、コイもとれたし、フナもたくさんおった。田んぼの縁には石垣があつてな、その石垣のところにはギギとナマズがたくさんおった」

松尾「江ノ島のあたりにはどんな魚がいましたか？」

NM氏「江ノ島の辺りはヨシ地やった。田んぼのなかにもヨシ地があった。ヨシ地にはワタコがたくさんいたな」

TM氏「ワタコの背びれのところには針があつてな、刺されると痛いねん」

TM氏「わしらが普通に見たのはボテジャコ、それからギギやハイ（ハヤ）」

松尾「ハイ？」

TM氏「ハヤのことを『ハイ』って言ってたな」

松尾「ハイはどの辺にいましたか？浅瀬ですか？」

TM氏「うん、浅瀬。ボテジャコなんかとよう一緒におった。浅瀬には『ヒガイ』という魚もおった」

松尾「田んぼの中に入ってきた魚とかは、いませんでしたか？」

NM氏「田んぼは低いところにあるから、大雨で内湖が増水すると、ワタコがよく田んぼに上がってきた。それで田んぼの稲を食いよる」

TM氏「ワタコは草を食べよるからな、田んぼ（稲）を全部食べてしまいよる。それに田んぼにはドジョウもたくさんいたな」

NM氏「ドジョウはちょっとした排水路みたなところにいたな。ドジョウもつかんだことがある」

TM氏「それから小さいエビも」

NM氏「シジミをとるのにも使っていた筈で、舟の上からモラ（藻）が生えてあるところをすくうとたくさん小さいエビが入りよった。モラだけどけて、家にもって帰って、それを食べたりとか」

松尾「藻のことをこの辺でも『モラ』と言うのですか？」

NM氏「ここらでは『モラ』と言っていた」

TM氏「藻のところのエビがついとった。それで、筈ですくうと簡単にとれた」

NM氏「それは女子がよくやっってはったで」

松尾「遊びではなくてですか？」

NM氏「遊びではなく、食べるためにな。大根と一緒に炊いたりよくしはったもんや」

TM氏「エビがだしになるわけやな」

松尾「エビとりをする場所はどの辺りでしたか？」

NM氏「排水路の大きいような、エガワと言う田んぼに通じる川や」

松尾「貝はどうやってとっていましたか？」

NM氏「縄の付いた『イザ』というものを舟から投げ込んで、それを『ロクロ』という道具を使って手繰り寄せる。イザで湖の底をかくことで貝や魚をとってたんやわ」

TM氏「『貝かき』と言ってはりました？」

NM氏「『貝引き』とか、『ジャコ引き』とか言ってた。同じような漁やが、ジャコと貝ではイザが違うねん。ジャコ引きのイザのほうが出ている刃が短かった。出すぎていると魚がみんな逃げよるで」

TM氏「ジャコ引きや貝引きはどこでもやってはりました？」

NM氏「どこでもやってた。大中まで出てやってはる人もいたけど、波が荒かったから、あまり多くはなかった」

TM氏「中の湖（大中の湖のこと）は大きかったでな。でも専門の漁師の人やったら別もんや」

松尾「鳥はどのようなのが見られましたか？」

NM氏「今でもたくさんいるけど、カモが多かった。あとはカイツブリやな」

松尾「特に見られた場所というのはありましたか？」

NM氏「やっぱり西の湖のヨシ地の辺りやな」

NM氏「ヨシの中に入れば『ヨシキリスズメ』と言って、甲高い声で鳴く鳥もたくさんいた。今でもたくさんいるけど」

松尾「弁天の湖の方のヨシ地にも見られましたか？」

NM 氏「そうそうそう」

TM 氏「見かける鳥は今とたいしてかわらん。ただ、カイツブリは今よりもっと多かったように思うけど」

NM 氏「もう少し大きな鳥なら、白サギがよくいよったな」

TM 氏「大きいアオサギもいよったな」

松尾「季節限定で見られた鳥はいました？」

NM 氏「サギは秋になるとたくさん来よる。そして、稲を踏みつけて、穂先をくちばしでしごいて食べよる」

NM 氏「ちょうど家の裏が船着場で、そこに藁小屋があった。その小屋の中で寒い時には、きばって張った氷を割って青ネギ（豊浦ネギ）を洗っていた。下にはミザラ（竹で編んだもの）を敷いて、その上に藁で編んだムシロを敷いて座って洗っていた」

松尾「水を小屋の中に引いていたんですか？」

NM 氏「そう。みんなそうしてた。（船着場の）端の方に藁小屋を建てて、寒い時期にはその中でネギ洗いしていた。そして今の近江八幡や八日市の方へ、『青物（あおも）売り』と言って、洗ったネギを売りに行くねん」

NM 氏「それと、ここらでは人参を作っていた」

TM 氏「この辺の名産は青ネギと金時人参」

TM 氏「モラかき話を少し聞かせてください」

NM 氏「藻（モラ）をとってきて田んぼや畑へ入れて肥料にしていた。モラをきばって畑へ入れていたから土がよく肥えて良いネギや人参がとれた」

NM 氏「イザのようなもの（『コマザライ』と言う）を舟から降ろして湖の底をかくねん。そうすると、藻がたまってくる」

松尾「泥も混じってますよね？ それも一緒に肥料としてまくのですか？」

NM 氏「泥も一緒やな。とってきたモラは舟からモッコで担ぎ上げて、藻塚に積み上げておく。するとだんだんとモラが腐ってきて、やがて泥ばっかりになりよる。それを細かく砕いて田んぼへ入れていた」

松尾「藻塚は一軒の家に一箇所と決まっていたのですか？」

NM 氏「家々でできた場所があった」

TM 氏「水際の石垣の途中に引出しみたいなところを作っておいて、モラを舟から揚げやすいようにしてあった（舟からはほうりあげるのに近い所にあった）」

TM 氏「（モラを）とって帰ってくる舟を見たら沈みそうで恐いくらいやった。中には水が入って引っくり返った人もいた」

松尾「モラという言葉は『モラとりに行く』というふうに使われるんですか？」

NM 氏「そうそう」

TM 氏「特にここが縄張りと言うのはないけど、自ずと誰がどこでとっているか分る」

松尾「自分の田んぼから近いところにとりに行っていた。大体、決まった場所があったんですね」

NM 氏「そうや」

TM 氏「みんな譲りおうていて、ケンカはなかった」

TM 氏「泥と藻を上げるということは、窒素やリンを吸いよったやつを上げることになるわな。そうすると水もきれいになるやろ。そしてモラの残ったところを見かきで湖底をならさる。そうするとまた、貝がわきよった。小中の湖と言う畑を耕すようにしていた。そこでまたいいもんが育ちよる。とっては育ち、とっては育ち、とすることで、むちゃくちゃにはとらなかった。上手に循環してはった」

NM 氏「昔は『スクモとり』というのもあった。スクモは西の湖の常楽寺の浜あたりでたくさんとれた」

松尾「弁天内湖の方にはなかったですか？」

NM 氏「そうやな、スクモはなかったな。西の湖の方が多かった」

NM 氏「スクモはモラと違って泥や。でも普通の泥ではなく、木が腐って泥と一緒にになったものや。それをとってきて乾かし、燃料としてコタツやらに使っていた」

TM 氏「それにしても不思議やった。炭化した大きな木も沈んでいた。水中に沈んで、半分炭化していたんやな。スクモは団子みたいに丸めて、軒下に並べておく」

NM 氏「昔は田んぼの際に石垣があった。その石垣の上に丸めては干した。それが乾くと貯蔵したんや」

松尾「何月頃にとっていたんですか？」

NM 氏「夏やな。夏から秋にかけてやったらよく乾く」

松尾「スクモをとる場所に特別な名前はないですか？」

NM 氏「『常楽寺浜』とか、『常楽寺地先』とかいわはった。でも逆に、モラがとれた場所には名前がなかった。あと、モラがとれるところ（湖底）は泥が多かった」

松尾「スクモがとれる辺りも泥ですか？」

TM 氏「そう、泥炭状の湖底やった」

TM 氏「モラとりとスクモとり、魚とり以外は小中へ出はったことはありませんでしたか？」

NM 氏「そんな感じやな」

TM 氏「ヨシ刈りはされなかった？」

NM 氏「若い時はしてなかった」

松尾「農業の一年の大きな流れを教えてください。どのような道具を使っていたのかも」

NM 氏「1月2月あたりはわら仕事やな。家の中で縄綱（なわなひ）とか、俵編みをしていた。もっと色々しはる人は、物を運ぶモッコとか、あと、『ドガ蓑（みの）』といって田んぼへ行くときのカッパとか、そういうのを藁で作ってはった。それからイチコ。『ツンダメ』という所もあるけど、ここらでは物を入れるものを『イチコ』と呼んでた。そのイチコも藁でこしらえていた」

TM 氏「イチコには米を入れたり、小さい子どもを農作業に連れて行くのに入れて行ったり、色々な使い方をしてた」

NM 氏「若い頃は、縄綱してくるわ、と言っては連れのところに行って、花札して遊んだりしていた」

NM 氏「3月になってくると、田んぼの植付けの準備で苗代（なわしろ）をつくる。苗床をこしらえることやな。苗床の準備ができたなら3月下旬から4月上旬にかけて種をまく」

TM 氏「田んぼの一部分を区切ってきれいにしてモミをまく」

NM 氏「だんだん苗が大きくなってきて、5月の末から6月にかけて田植えをする。また、3月下旬から5月の田植えをするまでに田んぼを掘り返さなあかん。それがなかなか大変やった。昔は『大ズキ』という大きな鋤で田んぼを掘り返した。大ズキで掘り返した土を三つ鍬（みつくわ）で細かく砕くねん」

TM 氏「刃が三つ付いてのを『三つ鍬』、四つ付いているのを『四つ鍬』と言っていた。大ズキでひっくり返して、土に寒の風にあてると虫が死による。そして苗代が終わった頃にたたいて、細かい土にして、そして目の細かい四つんば（四つ鍬のこと）でならず」

OS 氏「田んぼの土を掘り起こして乾かすと3kgほどの空気中の窒素が土の中へ吸収される。それで田んぼがよくできた。化学肥料がない時代の生活の知恵やね」

NM 氏「7月8月で一番辛いのは草取り。ほんまに泣けた。除草機で田の中をぐっぐっと押していく」

TM 氏「除草機の先に車がついていて、土をぐるぐると掻きよる」

NM 氏「そうすると、草も一緒にとれる」

OS 氏「ついでに酸素も土の中へ注入してくれよるで良かった」

NM 氏「この機械での草取りのことを『クルマオシ』と言う。それがすんだら、次は手で草を取る。かがむのもしんどいし、水面に太陽が反射して暑いので泣けた」

OS 氏「車は3回押すねん。1回は縦押しで、次は横押し、最後にもう一回縦に押す」

TM 氏「稲の根元に近い土は硬いからクルマオシも大変やった。モッコの作業や下肥持ちの作業も大変。そしてから草取り。草取りが一番しんどかった」

OS 氏「下肥と言えば、『湯殿』という風呂の水を溜めるところをこしらえてた。便所から下肥をとるときに、その水を混ぜるんや」

TM 氏「風呂の湯で下肥を増やしてたわけや」

NM 氏「8月1日には、弁天島で『千日祭』と言うのがあって、みんなでお参りにいった。そのときは『お客様』といって、親戚みんなを呼ぶねん。みんなで舟に乗って、舟の上に七輪を置いて、カシワのすき焼きなんかをしてん。このときは賑やかやった。弁天島には露店がたくさん並んだんや」

TM 氏「年頃の女の人は、舟に乗って弁天さんの周りにいはるわけや。そうしたら若い衆がいいかっこして竿飛びをする」

松尾「9月は？」

TM 氏「8月の終わりから9月にかけてはモラとりやわ」

OS 氏「朝暗いうちからやったな」

NM 氏「そうやそうや。朝暗いうちからや。ほんで一艘分とってきて、それから朝飯や。そしてまたとりにいかはる。昼までとらはる」

TM 氏「この時期は田んぼ（稲）に手がかからん時期なんや」

NM 氏「草取りをした後しばらくわな。その時期、9月には畑にネギ植えや。そりゃきばって植えてたもんや」

TM 氏「10月やったら何やった？」

OS 氏「10月の10日頃から田刈り（稲刈り）が始まる」

NM 氏「10月から11月にかけてやな」

OS 氏「12月にかかることもあった」

NM 氏「まだ稲刈りしてないのに雪が降って、雪の下になったこともあった。当時は手で刈ってたから時間がかかった。それから『ハサ』というのをこしらえて、それに束にした稲を掛けるんや」

TM 氏「稲がきれいに乾いたら、夕方露が降りるまでにハサから降ろして、丸く積んでおく。それを脱穀するんや。足でな」

NM 氏「昔はな、朝暗いうちから『カンテラ』と言う油の入ったガラスの灯火をぶら下げて稲扱き（いねこき）（脱穀）したんや」

NM 氏「それでまたお日さんが出てきたらまた稲刈りしなあかん。そういうことの繰り返しや」

TM 氏「そして脱穀した稲をイチコの中に入れて家に持って帰る。まだ、乾いてなかったら、天日干しして水分調整をする」

OS 氏「畳1枚くらいの、『筵』といって藁で編んだやつの上に広げて天日干しした。12時頃になったらひっくり返して、また広げる。4時か5時頃、遅くなるまでに入れてしまう」

TM 氏「『唐箕（トウミ）』と言う風を送る木製の機械があった。乾いたモミをそこへ上から落として、小さいゴミや泥を風で飛ばしながら、きれいになったモミを下で受けて取る。そして今度はモミを『籾摺り（もみすり）』というモミガラをとる機械にかけた。出てきた玄米を、1月や2月に作ってはった俵の中へ計って入れて閉じると、16貫（約60kg）の重さの俵ができる。それを今度は売りに行くわけや。戦前の自由な時には米相場が立って、買い付けに来はる。戦争中と戦後は、政府が全部高い値段で買い上げた。米穀国検査員が来て、品質によって1等2等と区別して買い上げる。それでやっとお米の方は終わりやな」

TM 氏「米代が国から払われる頃に合わせて、帳面につけてあったツケを取り立てに来はる人もいた。それで払えなかったら夜逃げしなあかんかったわけや」

OS 氏「2月と9月に取り立てに来はる。6ヶ月で一軒当たり、ツケが多い家でも12~13円や。金がなくても百姓は生活ができてん。米はあるやろ。あとは味噌や醤油さえあつたら、どうにでもなった」

TM 氏「おまけに内湖で魚もとれるわな」

OS 氏「寒い時には舟に乗らんでも魚がとれる方法があつたし。川でやったらエビやらをつかむことができた。貝はいくらでもいよるんやしね。そうゆう生活してたから金なんていらん」

TM 氏「果物も秋になったら柿がとれるやろ。渋柿は干すと甘い（干し柿）ができるやろ。それから秋には無花果、夏にはスイカがとれた。そりゃ、しんどかったけど、自分のペースで仕事ができる。豊かではなかったけど、それでも安心した、ゆったりした農村の暮らしがこの辺ではできた」

NM 氏「小中の湖がまだあつたときは牛を使って農作業はしていなかった。牛を飼ってからは、小山田の方へ山を越えて行っていた」

松尾「田んぼのまわりには、どんな植物が生えていましたか？」

NM 氏「ヨシ田のところはヨシが生えてた。田の縁にヨシが生えていて、田んぼの中まで出てきよるときがあつたけど、他の田では、特に目立ったものはなかったな」

松尾「動物はどのようなものがいましたか？ タガメとか」

NM 氏 「いなかったなあ。ミズスマシの大きなようなものがいて『ドロガメ』と呼んでた」

TM 氏 「モグラが悪さしてたな」

NM 氏 「モグラは特に畑を悪さしてた。なかなか捕まえることができなかったな」

TM 氏 「わりと田んぼには動物はいなかった。安土山には狐がいたりはしたけど、下りて来て悪さをしたことはなかったな」

NM 氏 「そうや、なかったな」

松尾 「メタンガスが発生していた所があったとお聞きしたんですが？」

NM 氏 「白霞辺りにあったな。そのガスを利用してはった人もいたけど、どんどん使うほどは出なかったな」

松尾 「伝説とかありましたか？」

NM 氏 『『獅子鼻』という岬に伝説があった。安土城が炎上した時に北風が吹いていたんや。城にいはったお姫様や女中が逃げようと、みんな北の獅子鼻の方へ逃げはった。ところが岬やから（そこから先に）行くところがあらへん。だからみんな岬から湖に飛び込んで自害はったという。それで、獅子鼻ではその後から、火の玉が出るようになった。伊庭の方の田んぼへ行った時は、あんまり夜遅くなると、そこを通過して帰ってくるのが恐かった。舟で使っていた竹竿は、竹の節のギリギリで切るのではなくて、節からすこし間とって切ったものや。それには理由があって、火の玉が出よった時に竿の中に入れてふたをすると消えよるんや」

TM 氏 「やんちゃすると、獅子鼻へ連れて行って置いていくぞって言われたんや」

松尾 「他にも何か伝説はありますか？」

NM 氏 「苔（地名）に大蛇がいたと言われていた。大蛇が人をさらって悪いことするんや。なんとかあれを退治せんとあかんとなって、ある勇敢な人が槍を持って退治に行かはった。その槍が大蛇の目に刺さったんや。それから、その人の家では代々、目を患わはってん。何とか供養せなと言って、家の庭に祠を建てて大蛇を祀らはった」

NM 氏 『『苔穴大明神』と言って祀ってあった。ところがその家が絶えてしまったのでここのお宮さん（活津彦根神社）の本殿のわきに移設した。そこにはたくさんの神様が祭られている。永町という在所には、恵比寿、金毘羅、天神、津島、愛宕神社がいてはって、苔穴大明神もみんなと一緒にお宮さんの恵比寿堂に祭られてある。親からは『エベ、コン、テン、ツ、アタ、コケアナダイミョウジン』と覚えてお参りせなあかんと教えられたもんや」

1-4 ZK氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005年3月18日

対象者：ZK氏

場所：ZK氏宅

対象者データ：1925年生まれ。昔からの下豊浦の様子を「古伝雑録」という本にまとめた人の息子。

ヒアリング概要：ZK氏宅には「古伝雑録」という本のコピー本を携えて訪れ、同氏には下豊浦の昔の話を中心に聞いた。

ZK氏「うちの親父さんが亡くなったのが昭和55年。亡くなる10年くらい前からこの『古伝雑録』を書き始めていた。この本には、豊浦の庄の地名とか、どういう謂われで豊浦と名づけられたのか、活津彦根神社のこととか、豊浦のことがみんな書いてはる。慶応3年の王政復興のころから昭和46年までの豊浦の歴史も書いてある」

TM氏「昔の村の行事なども、この本に載っていますか？」

ZK氏「そうや」

ZK氏「原本はうちにあるこれだけ。それをコピーして当時の十人衆とかに配った。下豊浦の事務所にも残しておいた。それで村に何冊か残っているわけや」

松尾「コピー本の方に昭和53年3月に出版って書いてありますが、原本の方もそうですか？」

ZK氏「ああ」

ZK氏「安土の歴史なら、他にも、ここの土地の人がまとめた『安土地名伝記』という本が安土の図書館にある」

ZK氏「安土と言う地名は、平安楽土の平安の『安』と楽土の『土』から名付けられた。安土城を造るときに信長が目加田山を安土山と言う名前に変えて、それとともに、目加田の人々を秦荘町の目方というところに移したわけや」

TM氏「平安楽土の国にしたいと思ったんやな」

松尾「大中の湖のことを何と呼んでいましたか？」

ZK氏「中の湖（なかのうみ）」

松尾「小中の湖のことは？」

ZK氏「『小中の湖』または『弁天湖（べんてんうみ）』やな。そして『伊庭湖（いばうみ）』。西の湖は『西の湖』と言ってた」

TM氏「子どもの頃、弁天内湖で魚とりとかしませんでしたか？」

ZK氏「してた。昔は小山田の方には舟でしか行けなかったんや。リアカーは後からできたからな。舟で行ったほうが、脱穀機とか家族も乗せれてよかった。でも風がきつうとき湖に出たら、舟が風で流されてしまう。だから、風で流されても帰ってこれるように川と川を堀でむすんであって、どこからでも戻ってこれるようになっていた」

ZK氏「小中の湖を干拓したとき、土が乾いてきたらメタンガスをだすんや。ゴミを集めてわざわざメタンガスを作

らんでも、小中の湖では昔から天然のメタンガスが出てた。いまだにまだガスをとって使ってはる家もある」

松尾「干拓する前から出ていたんですか？」

ZK 氏「そうや。安土山の先の辺りを『獅子鼻』と言うねん。なんでかと言ったら、切り立った崖になっていて、横からみると獅子の鼻のように見えたんや。昔はその辺で魼（エリ）をしてはった。魼を持ってはる人は竿をさして田舟でそこへ行った。ほんで、たくさんとれたと喜んで竿を湖に立てて一服しはる。昔はキセルや。たばこを吸うとカスがでるわな。カスがでたら魼のまわりの竹の筒のところでキセルをコンコンとたたく。そうすると竹筒の先からポーと火が出るわけや。そしたら、人魂が出よったと言ってびっくりしやる。安土城が焼けた時に、たくさんの女官が、殺されるくらいやったら死んだほうがましやと言って獅子鼻から内湖に飛び降りて死んだんや。その人たちの人魂が迷い火の玉となったという伝説や」

TM 氏「それは実はメタンガスやったんや」

松尾「キセルのカスに引火したんですね」

ZK 氏「千石岩の話は聞いている？ 豊浦の辺りは観音寺山からの分水と、内湖の水で稲作の水には困らなかったけど、琵琶湖の水位の上下によって不作も起こって、この岩が水面の上に見えるか見えないくらいの水位だったら米が千石取れると言われた。何でかと言ったら、岩の辺りの水が豊浦の全部の田んぼにつながっていて、千石岩辺りの水位がほどよいくらに安定してたら田んぼにも水がいく。田んぼに水がいったら稲もよく育つ。それで、この岩を見て『今年は千石取れるな』と言っていた」

1-5 ME氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005年4月21日

対象者：ME氏

場所：ME氏宅

対象者データ：1923年生まれ。小中の湖があった当時下豊浦で農家をしていた。

ヒアリング概要：ME氏には干拓以前の小中の湖の様子と、小中の湖周辺の人々の暮らしの様子を聞いた。

松尾「大中の湖は当時も『大中の湖』と呼んでいましたか？」

ME氏「中の湖（なかのうみ）」

松尾「では弁天の湖のことは？」

ME氏「弁天湖（べんてんうみ）」

松尾「では伊庭のほうは？」

ME氏「伊庭内湖」

松尾「西の湖のことは『西の湖』ですか？」

ME氏「西湖（にしうみ）」

松尾「弁天内湖は波が荒かったですか？」

ME氏「白波が立つこともあった」

TM氏「風が強かったけど、大中の湖と比べると穏やかやった。伊庭内湖も結構風は強かったですな？」

ME氏「うん強かったな」

TM氏「中の湖は、冬場は北西の風で、特に波が荒かったとちゃうかな」

ME氏「四国の人30人が西国巡礼のお参りにきた時、漁師がこの風は危ないから考えなあかんって言ってはったのに中の湖に出て、丸子船が遭難して、死んでるんや」

松尾「弁天内湖の水はきれいでしたか？魚とか藻まで見えましたか？」

ME氏「きれいやった。弁天さんの近くまで行って、太陽のきらきらした水面をうつむいて見たらすごく美しかった。ポテジャコが足にツンツンしにきたのが気持ちよかった」

TM氏「塩っけがあるのか、何かしらけどつつきにきよったな。足を浸けたら必ずと言ってもいいほどツンツンしにきた」

ME氏「ヌカエビが春先に、船着場におった。金通しですくうと、いっぱいとれた」

松尾「『金通し』って何ですか？」

TM氏「篩やな。金で作っているやつ。こっちは『通し』って言わはる」

ME氏「粉や穀物を入れて、振動することによって選別するんや」

TM氏「藻が生えているやろ？ そういったところをすくうのよ。藻に寄っているんやろな、そうするとエビがとれる

わけや」

ME 氏「ヌカエビと大根を一緒に炊いたのを朝飯のおかずに使っていた」

松尾「魚のことを季節を追ってお聞きしたいのですが、春は何がいましたか？」

ME 氏「フナやゲンゴロウブナとか... ワタコは初夏やな」

松尾「ワタコのことを『ワタコ』と言うのですか？」

ME 氏「うん、こっちが興奮してしまうくらいにワタコが波を蹴立ててやってくる。蜘蛛がヨシの葉っぱを上手に折ってその中に入ってる。その蜘蛛を取り出して、針に付けて水中にほるの。そうすると、とたんにガブッとくる。ものすごい勢いでつかめた。もっとも景気のいい魚やった」

TM 氏「音を立てて来ましたか？」

ME 氏「うん」

松尾「家の近くまでですか？」

ME 氏「うん、冬の漁法は『ヨシ巻き漁』や、その次は『漬柴漁』」

TM 氏「ヨシ巻き漁は一回にどれくらいとれたんですか？」

ME 氏「多かったら舟に1杯くらい」

TM 氏「100貫くらい？」

ME 氏「100貫じゃきかんやろ」

TM 氏「100貫目って言うたら400kgや、それじゃきかんやろう」

松尾「きかんやろうってことは、多いってことですか？」

TM 氏「もっと多いってことやな」

TM 氏「『魚善』と言う魚屋さんがあったんや、そこへ、とった魚を持って行って売らはる」

TM 氏「魚の間屋さんや」

ME 氏「冬はヨシ巻き漁が終わったら、漬柴漁。夏に柴刈をして、柴を杭で囲ってる中に放り込んでおくの。柴が浮いているから何やろうな、と思うけど、冬寒くなったら魚がそこに入ってきよる。ジャコやらが入っていい気分であるのを、柴ごと揚げてしまっって、漁をする。それが漬柴漁」

松尾「ジャコにはどんな種類がいましたか？」

TM 氏「ボテジャコとかハイ（ハヤのこと）とか、フナの小さいのは『ガンゾウ』と言ってたな。それから、小さいナマズやとか、ギギもおったな。ほんとにジャコやったな、そういう小魚ばかりやった」

TM 氏「お仕事は農業をしていたのですか？」

ME 氏「やっていた」

TM 氏「漁業はしていませんでしたか？」

ME 氏「漁師はやっていなかった」

TM 氏「舟は持っていましたよね？」

ME 氏「持っていた、田舟を2艘から3艘」

TM 氏「ほんまに家から出たらすぐ湖でしょ、そやからちょっと遊びに行こうかとなったら舟に乗って」

TM 氏「この辺で農業をやってあった人は、リクリエーションみたいな感じで、漁師さんに漁に連れて行ってもらった。あるいは何人か、同級生仲間で組みを組んで漬柴をやったりして遊んでた。それほど水が近かったって言うことやな。日常生活の中にあった」

松尾「子どものころはどのようなことをして遊んでいましたか？」

ME 氏「貝つかみ」

松尾「どのような貝をつかんでいたのですか？」

ME 氏「イケチョウ貝」

松尾「年中ですか？ 時期を問わず？」

ME 氏「時期は問わずやけど、主に8月から9月くらいが最盛期やった」

TM 氏「遊びでとってるもんやから、泳げる夏の頃でなかったらとりに行かなかったわけよ」

松尾「どの辺で貝つかみをされていたか？」

ME 氏「弁天湖一帯で」

松尾「自分たちで舟を出して？」

ME 氏「うん」

松尾「水泳とかよくお聞きするんですが」

ME 氏「やんちゃして泳ぎを覚えたんや。プールみたいにコースで覚えたんと違うで」

松尾「貝つかみはどのようにしてつかんでいたのですか？」

ME 氏「手つかみや」

松尾「潜ってですか？」

ME 氏「潜ってや」

TM 氏「足でまず底を探すんや。そうすると貝が底から出てるのが分かる」

ME 氏「そうやそうや」

TM 氏「底に刺さっているみたいに貝が立ってましたな？」

ME 氏「そうやそうや」

松尾「潜ってとれたと言うことは、そんなに深くなかったのですか？」

ME 氏「2 m から 2 m 50 くらい」

松尾「とって帰った貝はどのように調理されていたか覚えてますか？」

ME 氏「どうやったやろか... 夏場は大して美味しくなかった。冬場の貝は身が締まってて美味しかった」

ME 氏「今はコンクリートだけれど、昔は湖の縁は石垣積みやった。石垣の間に手をつっこんだらギギがつかめた。ギギは、竹の竿で糸にミミズを付けて垂らしてもガブツときた。それを持って帰って家で蒲焼にするねん」

ME 氏「涼しくなったら戦争ごっこしに安土山に行っていた」

松尾「その他はどのような遊びをしていましたか？」

ME 氏「竹馬」

松尾「竹は安土山からとってくるのですか？」

ME 氏「うん」

松尾「弁天島の竿飛はされましたか？」

ME氏「やっていた。怖かったな。悪がきの高等2年生の兄貴たちが、小学校の5年生までの子を竿の先の方に順番に並べて、少し離れたところでバウンドをつけて竿を揺らす。それで振り落とされる。それで度胸をつけて一人前になった。そこそこの時間になると、兄貴の連中は舟に乗って帰ってしまうの。そしたら弁天島に残された小学校の若年の子らは帰れないから泣いていた。いつまでたっても迎えにこない。兄貴たちは帰ってお寺の廊下で昼寝（甲羅干し）していた」

ME氏「竿飛で度胸をつけて、泳げるようになったんや」

松尾「冬場はどのような遊びをしていましたか？」

ME氏「スケートもあったな。内湖が凍ったら江ノ島まで行けたこともあった」

TM氏「ME氏の家の周りのことを聞いておくといい。ここのおうちなんかは湖に突き出ている感じがったから」

ME氏「そうですね。西のほうに隠居所があって、隠居所で寝転がりながらおばあさんが仕事しているのを邪魔をして... 夏は寝転びながら花火がみえた」

松尾「花火が揚がるんですか？」

ME氏「八幡に花火が揚がる。そうすると、うちの隠居所から寝ながら見えた」

松尾「花火が家の中から見えたんですか？」

ME氏「うちの家だけや。ほかの家では見られへん」

ME氏「夏場水害の時には、足元まで水がきてるから、ご飯粒をつけてボイとほったら、ポテジャコが釣れた」

松尾「では秋と春はどのような遊びをしていましたか？」

ME氏「秋は運動会があった。よく憶えているのが、運動会前になると遊ぶことがだんだん走ったり、飛んだりして競い合うようになっていたこと」

松尾「では湖にでるのではなく、この辺を駆け回っていたんですね」

TM氏「『てん鞠ほり』はしてはりませんでしたか？」

ME氏「野球は、われわれはしてなかったな」

松尾「『てん鞠ほり』ってなんですか？」

TM氏「野球のキャッチボールのことを『てん鞠ほり』って言うてたんや」

TM氏「近所の子と遊ぶのは、わりと男も女も一緒に遊んでましたな？」

ME氏「うん」

松尾「スケートとか女の子もしてはりましたか？」

ME氏「うん。女の子もしてた。男のような女の子やった」

TM氏「夏の水遊びしてはった時は弁天さんの方へ行きましたか？」

ME氏「行ってた」

TM氏「大中の方へは行ってた？」

ME氏「大中の方へは貝引き」

TM氏「大中のほうの貝引きはイケチョウ貝やね。そして弁天島の近くでとってはったのはカラス貝やとかダワ貝（ダブ貝）とかが多かった」

ME 氏「そうやったそうやった」

TM 氏「それから、漬柴はどのへんでしてはりましたか？」

ME 氏「どこでもしていた」

松尾「弁天湖の水を生活に使ってましたか？」

ME 氏「夏場は、川の水を汲んできて、日面のところにバケツを4つほど並べておくんや。そうすると水が熱くなる。それをお風呂に入れてた」

松尾「川の水をお風呂に使ってたんですか？ 内湖の水ではなくて？」

TM 氏「内湖の水よ。川といってもここは入り江やったから」

ME 氏「日向水やな」

TM 氏「それをお風呂に入れておくと焚物が少なくてすむやろ。そうすると、夏場なんかは、藁の2~3束も燃やしたらそれでお風呂が沸く」

松尾「お風呂は何で炊いていましたか？」

ME 氏「空豆の枝やったりとか、大豆の収穫した後の枝」

松尾「冬場は藁ですか？」

ME 氏「木の葉や。安土山に山の掃除に行く。それで枯れた松葉をイチコに入れて持って帰った」

松尾「とってもいい場所とか決まっていたか？」

ME 氏「どこでもいい」

TM 氏「気楽に入って、柴を刈り、落ちた木の葉をはいてイチコの中に入れて持って帰ってた。木の葉かきをした筋がついてて、山が公園みたいにきれいやった。見通しがよくて、山はチャンバラしたりすることができた広場やった。いくらでも山で遊んでたわけ」

松尾「洗濯物もお風呂と同じで川の水を使ってたんですか？」

ME 氏「洗濯物もみんな同じ。波打ち際でやっていた」

松尾「水洗い場は石の段になっていて川につながっていましたか？」

ME 氏「そうや。石段になっていた」

松尾「水洗い場は家の中に入っているような形になっていましたか？」

ME 氏「そういうのもあった」

松尾「外に出て、石段になっているところに降りて洗うのもあった？」

ME 氏「うん」

松尾「『スクモとり』をやっていましたか？」

ME 氏「やってた」

松尾「『スクモ』って言っていましたか？」

ME 氏「『スクモ』って言った」

松尾「どの辺でとっていましたか？」

ME 氏「スクモがとれる所は2箇所あった。大きい木が倒れていた。そこは昔原始林やったとか。スクモをとって乾かすと代用燃料になって、ずいぶん役に立った。何年掘っても同じくらいとれた。昔からとる場所はそこやった」

松尾「夏ごろにとって冬に使うってお聞きしたんですが、そうですか？」

ME 氏「そうや」

松尾「スクモを取りに行くときは『スクモとりに行く』って言っていましたか？」

ME 氏「言ってた」

松尾「スクモは産業になっていたってお聞きしたのですが？」

ME 氏「隣の部落の人がスクモを干して乾かして金槌でたたいて、それを練炭に混ぜ、崩れないように粘土で固定させたものを三ツ星練炭として売ろうとしてはった。でも、商品化する前にやめはった」

松尾「スクモと練炭を混ぜてはったんですね」

ME 氏「そのあとはイケチョウ貝の真珠会社」

松尾「真珠会社があったんですか？ 何社くらい」

ME 氏「『西の湖真珠』と『ちょうし真珠』の二つくらいかな」

松尾「ちょうし真珠の真珠筏はどの辺りにありましたか？」

TM 氏「ここの近く」

松尾「使われていたのは主に弁天内湖でとれた貝ですか？」

TM 氏「その時は小中の湖は干拓された後やった」

松尾「水があった時はしていなかった？」

ME 氏「干陸になってから。戦後すぐにできた感じ。ダブ貝を中の湖でとってきて、とってきた貝を川淵のところで大きななべで炊いて、貝の身をとってみると真珠色にブツと膨れてるところがあるねん。身をつまむと真珠だけがでてくる。それを春にきはる薬屋さんに売ってた。いくらくらいかといったら貝を炊くために買った割れ木代くらい」

TM 氏「そうやそうや。弁天内湖に水があった時も天然真珠はあったわ。わしらもようダブ貝をとってきた。それをヒントに、貝が真珠できるんやったらということで、戦後は真珠養殖をはじめはったんやと思う。真珠は今のような飾り物と言うよりは、薬の原料やった。おそらくカルシウムが多いんで、それで買い付けに来はったんやろね」

松尾「『モラとり』もやっていたんですか？」

ME 氏「やった。モラのところは泥やった。(土質が) やわらかい所やった」

TM 氏「やわらかい所でモラと泥を一緒にあげてた」

松尾「『モラとり』って言っていましたか？」

ME 氏「うん」

松尾「だいたい何月頃にとっていましたか？」

ME 氏「8月1日から9月いっぱいまで。9月1日からはスクモとり」

松尾「とったモラを乾かして畑に入れていたんですね」

TM 氏「田んぼにも入れていましたか？」

ME 氏「うん」

TM 氏「田んぼも畑も両方の肥料になってたんやね」

ME 氏「田んぼを一寸でも高く上げるために、ヘドロのようなしょうもないくずでも田んぼの中に放り投げてはった。昔の年寄りやしんどい目してはったんや」

TM 氏「そうやった。泥は重たいでしょ。それをかいて、あげて舟に乗せて、舟が沈みそうになるのを持って帰って、それを石垣の中段に出してた塚に放り上げて積んだりしてはった。自分の田んぼに近いところで塚を作って、冬くらいまで寝かして、腐らして、春先の田んぼをする前に肥料をやらなくてもいいように田んぼへまいて。畑ではねぎや人参を作ったりするための肥料にしていた。それで豊浦のねぎは美味しいのができた」

ME 氏「仕事はいくらでもあった。八日市のほうに布施という在所があるの。自分は、藁は貴重やと思ってへんかったけど、そこから荷車を引いてうちまできて、藁を買って帰らる。何でかと言ったら、布施では良い藁が取れへんかったから。うちの藁を買って持って帰って、藁を売ってはった」

TM 氏「この辺は豊かやったんやな」

ME 氏「そや。だから豊浦や」

松尾「藁も売り物になったんですね」

ME 氏「八日市から買いに来てはったくらいやで」

松尾「それは買い付けのために一軒一軒回っていたのですか？」

TM 氏「ルートができとったんやな。一回来はって良かったと思ったら、また来年も売ってや、というふうに」

松尾「それは物々交換でしたか？」

TM 氏「お金で売ってはったんや」

松尾「一軒が商売という形で売ってたんですか？ それとも周りの家も良い藁ができたから自分のところの藁も売ってください、と言う風に一軒の家を持ってきて売っていたのか？」

TM 氏「一軒対一軒の関係よな。それで市場がたつと言うことはなかった。この辺の田んぼは泥が多い田んぼやな。それよりも上の方の砂地と粘土と泥が適当に混ざった田んぼのほうがおいしいお米ができるわけ。ところが藁の育ちはこちらのほうがいい。長くて良い藁が取れる。上の方は背が低い。それで、ムシロ作ったり、イチコ作ったり、草履や蓑を作ったりする細工用にはこちらの藁が欲しい、と言うことで」

TM 氏「琵琶湖に大きな湖上交通があった。その航路として、伊庭の方にも港があった。それから豊浦港に来て、豊浦港から常楽寺港に寄って、常楽寺から八幡に行って、八幡から大津へ行くという航路が、鉄道が通るまであったらしい」

1-6 OY氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005年4月22日

対象者：OY氏

場所：OY氏宅

対象者データ：1929年生まれ。小中の湖があった当時、下豊浦の漁師の娘だった。

ヒアリング概要：OY氏には干拓以前の小中の湖の様子のほかにも、当時の遊びや料理の話などを聞いた。

松尾「小中の湖が干拓される直前はおいくつでしたか？」

OY氏「13か14歳くらいやね」

OY氏「内湖の水がきれいね。その頃は学校から帰ってきたら泳いでばかりいた」

松尾「どの辺で遊んでいましたか？」

OY氏「隣にまんすけさんの家があって、その家の前の浜、西の湖の船着場を『まんすけの浜』と呼んでましたんや。そこら辺が遠浅で砂地やったから、シジミとりや貝とりやらしながら、やんちゃして遊んでた。家に田舟があったから、4～5年生になると女の子ばかり4～5人で乗ってね」

松尾「女の子たちだけで田舟に乗って遊んでましたんですか？」

OY氏「そう。ほんまに小さい田舟やったからね、竿で行けましたんや。私は櫓もこげますねんけど、櫓は使わずに竿だけで泳ぐところまで行って。そして、服などは舟の中に置いて、みんなが水の中に入ってしまっただけ。海女さんがしはるみたいに頭から潜ってシジミをとって浮び上がって。そうやってしてたことを思い出すんですわ」

松尾「最初のシジミとりをしていた所と泳いでいた所は同じですか？」

OY氏「そう。でもその辺は土手の近く、陸に近いところは泥地になってて、深くて足がちょっとだけ入るんですわ。そこにはダブ貝といって大きな貝がいてね。それをヨシの先を食わしたり、潜ってとったりね。色んなことして、ほんまにやんちゃな娘でした」

OY氏「水深が浅いからほんとに小さい者ばかりでも4～5人で連なって遊びに行きますねん」

松尾「何歳から子どもたちだけで行ってたんですか？」

OY氏「5～6歳くらいからよ。昔は親がそんなにかまってくれはらへんやろ。夏休み前あたりやと、学校から帰ってくるとお父さんとお母さんが昼寝してはる。その間に着替えの下着と板切れを持って、それで泳ぎに行く。兄さんがいましたから、学校に上がる前までは兄さんらに舟で連れて行ってもらったり、たらいを持って行って、たらいの中に入れてもらったり、そんなんして小さいときから湖に出て遊んでましたねん」

松尾「大きいお兄さんが連れて行ってくれた？」

OY氏「大きいと言っても小学校5年か6年くらいですな」

松尾「学校から帰ってきたらすぐに行くんですか？」

OY氏「そう。鞆放り出して」

TM氏「男も女も一緒。ただ、一緒に泳いだ記憶がないのよね。どうしてはったんやろか」

OY 氏 『まんすけの浜』と、今の西の湖の江ノ島の南辺りに鯛がありましたんや。その近くでもよく泳いでた」

松尾 「弁天さんの近くでは泳がなかったんですか？」

OY 氏 「深かいし、岸から離れてて、舟に乗らんと行けんから、しょっちゅうは行かしません。いつも西湖（にしみ）の『まんすけの浜』あたりで、男も女もだいたい遊んでた。学校の6年生に上がるくらいになると弁天さんの方に舟を出せるようになりますけどね。やんちゃな子は4年生くらいから舟に乗って行ってたやろうけど、私らは波がものすごいからそこまで行く勇気があらしません」

松尾 「じゃあ、女の子たちはあまり弁天さんの方へは行かなかったんですか？」

OY 氏 「全然行きませんでした。湖の真ん中やから。石垣からあそこまでは子どもたちだけではよう行きませんでした」

松尾 「男の子たちはよく行ったとお聞きしているのですが」

OY 氏 「男の子たちは家の舟で出て行かはるんです。大きくならはったら泳いで行かはりましたけどな」

TM 氏 「私はよく石垣の辺りで泳いでたんや。そこは砂地できれいやったさかいに、そしてから板を胸に当てて、弁天さんへ泳いで渡った。ほんでから、弁天さんの竿飛が面白かった」

OY 氏 「私も上の兄が行くもんやから3年生くらいの時に行きました。竿の半分くらいまで出たけど、それ以上は進めんかった。私を跨いで皆抜かしていくんですわ。もう、怖いで落ちたらいかんなって言って下がったけどね」

松尾 「遊びのことをお聞きしたいんですけど。女の子たちは、水泳以外は何をして遊んでたんですか？」

OY 氏 「じゃんけんで陣取りとか」

TM 氏 「陣地取りですな」

OY 氏 「それとか、やじろべえと言うか、三角の絵をかいでケンパしましたわ」

松尾 「普通のケンケンパとは違うんですか」

OY 氏 「ちょっと違うな。『テビ』と言って石のべったんとしたのを投げる」

OY 氏 「テビをみんなポケットに入れてた」

TM 氏 「自分のを大事にしてたんよ」

松尾 「同じものを何度も使ってたんですか？」

OY 氏 「お寺の手洗い場の水で濡らして、コンクリートで磨って、ちょっとでも薄くて平べったくなるように、きれいにしてたんよ。それを、今日はケンパしよかって言ったら出して」

OY 氏 「それから『ジンジン上げ』って言って、二人が縄跳びを持って、段々と上げていき、それを飛び超える。紐が高くなってきたら、逆立ちして、足に紐を引っ掛けて超えるの。昔はそうやって体を動かして遊んでた」

OY 氏 「国取りっていうのかな。母艦、水雷とかしてたな」

TM 氏 「戦艦、巡洋艦、駆逐艦、水雷というように、やってたな。戦艦は大将で帽子を真っ直ぐかぶれるんや」

松尾 「帽子のかぶり方でわかるんですね」

OY 氏 「そうそうそう。水雷は後ろにかぶってな。そうやって水兵さんしてはった」

OY 氏 「母艦と水雷とがあたったらどちらが負けと思う？ 負けたほうが連れていかれるねん。それで、ながく生き残れたものが勝ちや」

TM 氏 「水雷は戦艦に勝つ。戦艦は巡洋艦に勝つ。巡洋艦は駆逐艦に勝つ。駆逐艦は水雷に勝つ。水雷は戦艦に勝つ」

...と言う様にまわっていくわけ。そういったのにぶつからんように」

松尾「ぶつかる、と言うのは、どうやったらぶつかることになるんですか？」

TM氏「つかむねん」

松尾「鬼ごっこみたいなものですね。つかまらないように上手く逃げ回って」

TM氏「そうそう。戦艦は巡洋艦をつかむねん」

松尾「では、戦艦の人は巡洋艦の人ばかりを追いかけるんですね」

OY氏「そうそう。それで大将（戦艦のこと）が前へ出ると大将よりも強いもんはないから皆引っ込むんですやろ。そうやって弱いもんから狙っていくわけよね」

TM氏「でも戦艦を狙いに水雷がきよるねん。戦艦は取られたらしまいやで。戦艦を巡洋艦や駆逐艦が守りよんねん」

松尾「女の子もそういう遊びをしてたんですか？」

OY氏「そう。女でもそんな遊びをしていた」

TM氏「一緒に遊んでた」

OY氏「女も男もなかったね。それに『面ない（目隠しのこと）』と言ってお寺の縁側で、両手を広げて当たったら捕まえて、そんなこともよくしてた」

TM氏「お寺の縁側が適当な大きさやねん。逃げやすいし、つかみやすい。ちょうど子どもの幅やねん。その縁側を鬼は目隠しをして両手を広げて端から歩く。それをすり抜けていくわけ」

松尾「面ない？」

OY氏「私らは『面々目くらの通り道』って言ってましたわ。鬼の腕に触らんように皆は鬼の後ろに逃げるの。背の低い子が鬼やったら、背の高い子は跨いだりしてね。そして、鬼さんこちらってして、皆が鬼の後ろに行かはずって言うともたこちらへ向いて鬼が来はるの」

TM氏「ほんで、つかまれた方が今度は鬼と交代や」

松尾『今日は面ないして遊ぼう』って言ってました？」

OY氏「面ないやね、そう」

松尾「これも女の子も男の子も問わず？」

OY氏「女も男も問わず。松の木登りも。みんなしたね」

TM氏『『どんま』はしはりませんでした？』

OY氏「どんま？」

TM氏「後ろの人が前の人の足と足の間に頭を入れて何人かが馬になって並ぶんや。その上に飛び乗っていくんやけど、その馬の先頭の人立ってて、その人のところまで行ってじゃんけんする」

松尾「詳しく教えてください」

TM氏「例えば10人で遊ぶとすると、一人は親（馬の先頭に立っている人）、残り4人が馬で、そして残りが乗る人という感じで分かれる。そして一人ずつ馬に乗って行くんやけど、馬になってる子は親の所に行かせまいとして暴れるわけや。そして、振り落とされたら、振り落とされた子は馬になって、親になつた子が今度は乗る側にまわる。振り落とされずに親のいる所までいけたら、親とじゃんけんをして親が勝ったら負けた子は馬の最後尾について、勝った親は今度は乗る側にまわる。そして親の足元で馬になつた子が今度は親になれる。」

松尾「男の子だけが遊んでたんですが？」

TM氏「男の子が主にやった。そやけど、元気のいい女の子は入ってたな」

松尾『『ジンジン上げ』って言うのは女の子だけですか？』

OY氏「男の子も入ってはった。とにかく、男も女も学年もなし。1年生から6年生まで、まだ幼稚園の子もみんないたら遊ぶ」

TM氏「どこかの家の前に広場があるとそこが遊び場になった。道も含めて」

松尾「ケンパも男の子もやってはったんですか」

OY氏「やってたよ。女の子だけがやってたのはお手玉だけくらいやね」

TM氏「そうそう。男の子はしなかった」

OY氏「お手玉のことを『おこんめ』って言うてたけどな」

松尾『『今日はお手玉しよう』って言うときは、『おこんめしよう』って言うてたんですか』

OY氏『『おこんめしようか』って言うてよ』

TM氏「女の子がせなんだ遊びに『赤パッチ』って言うのがあった。角に線が引いてあって（三角形になる）一人が線の中に立たされるんや。他の人は線の中には入ったらあかんねん。それで、外から軟式テニスのボールを、その子に向かって投げるんや。その子は皆が投げたボールを取ろうとする。それで、取られた子が今度は線の中に入らなあかんねん」

松尾「人数が多ければ多いほど集中攻撃になるんですね」

TM氏「首から下を狙ってね。男の子だけで『赤パッチしようか』って言うて。冬の寒い時に体を温めるためにするねん」

松尾「先ほど言われた、ケンパとかジンジン上げ、面ない、木登り、どんま、お手玉は年中ですか？」

OY氏「年中。日和が良かったらいつでもできるし」

松尾「冬だけにやった遊びとか、春だけにやったものは無いですか？」

OY氏「冬にだけやったのは『おこんめ』しかあらへんわな。折り紙とか」

松尾「男の子たちは冬になると、氷った湖面の上でスケートして江ノ島まで行っただけってのははりましたが、女の子たちはしなかったんですか？」

OY氏「女の子は縁にいることくらいはあったけど江ノ島まで行ったりはしなかったな。昔はものすごく凍ったで。私らはネギをとってきて、凍った川の上にネギの中側のぬるぬるしたやつを塗って、よく滑るようにして、そして箱に小さい子を乗せて氷の上を滑ってたことがあった」

松尾「水がきれいとおっしゃいましたけど、足元が見えたりしましたか？」

OY氏「澄んで足元まで見えた。湖底に小石やジャリがあるのがすっかり見えるの」

松尾「潜らずにですか？」

OY氏「潜らなくても。舟に乗ってても見えるんや」

OY氏『『今日は水泳の検定や』っていわはると、舟と舟とを50m離しておく。そうして、舟から舟の間で泳いでたんですわ』

松尾「遊びでですか？」

OY 氏「ううん。学校でや。2 回だけそれがあった」

TM 氏「両方に舟を置いてな。50 m プールですわな」

松尾「学校のプールではなく、わざわざ内湖に出てたんですか？」

OY 氏「学校にプールなんてありません。その時は泳ぎっていうのは、湖でしかなかった。湖がきれいやったからね」

松尾「青年団は女の子も入れるんですか？」

OY 氏「男女で」

松尾「いくつくらいから入らるんですか？」

OY 氏「高等 2 年の学校を卒業したら」

松尾「高等 2 年っていくつですか？」

OY 氏「今の中学校 2 年ですわ」

TM 氏「新制中学校ができる前の話やな」

OY 氏「尋常高等小学校と言ってね。6 年間小学校、後 2 年間は高学年で高等 1 年、高等 2 年で、そこまでですわ」

TM 氏「田舎の人は、ほとんどたいてい男も女も高等科が終わったら青年学校って言うのにかはったわ」

OY 氏「青年学校は兵隊さんにかはるまでやね。21 歳くらいで徴兵検査があるまで青年学校と言うのがあるんですわ。青年学校に行きながら、女も男も各町の青年団に入ってた。その時はラジオはあったけどテレビなんてありませんやろ？ だから町内のお年よりやら皆寄っていただいて慰労会するのに、皆が奮闘して『3 人男』とか色々と衣装装着して、お母さんのお嫁に持って来はった着物着たりして劇してた。女は女で踊りをしたり、そんなことをしてたんです」

TM 氏「演芸会があった」

OY 氏「どれも先生なしで。皆でやってた」

松尾「それはどこかで披露するためですか？」

OY 氏「そうではなくて、遊びやった。田んぼが終わった時期に皆にみてもらおうかって言って練習するんです」

松尾「皆というのは？」

OY 氏「おじいさんおばあさん、近所の人とか。村中の人とか、お寺や集会場に集まるとか、お宮さんの境内に集まるとかして。そして舞台とか準備して踊りますんや」

松尾「青年団にはいくつくらいまで入ってはるんですか？」

OY 氏「女の方は決まってませんわ。21 歳でお嫁入りしはる人もいはるし、23 でもお嫁にかはらへん人もいはるし。ただ、25 くらいまでお家にいはるって言うのが少なかったね」

松尾「男の方は？」

OY 氏「お嫁さんもらはるまで」

松尾「では、男の人も女の人もだいたい結婚するまで入っているということですね」

松尾「弁天祭りはいつ？」

OY 氏「8 月 1 日」

OY 氏「今でもまだしてはります。『千日会（せんにちえ）』って言いますねんわ。千日参ったくらいのご利益があるということ。昔は舟で行きますからよけいご利益があるように思いますやろ。そのお祭りの日は青年団が一日舟を出してはった。石垣の所に待ってはる人を乗せて、弁天さんに降ろしてきはったら、また空の舟で帰ってきて。弁天さんも拝んだら一服するところもあらしませんから、拝むだけ拜んで3人、4人くらい集まったら船頭さんが舟出して石垣のところまで乗せて戻ってくれはる。弁天さんへ運ぶときも、弁天さんから岸へ運ぶときもいっぱいやった」

松尾「千日祭の時には、親戚を呼んでご馳走を食べたとお聞きしているのですが？」

TM 氏「それは舟を持っている人。舟を持っている人は舟を出して、親戚乗せて、そして舟の上ですき焼きして食べたりしはった。舟を持ってない人なんかは青年団の人が渡し舟で渡してはった」

OY 氏「でも、この辺の人たちは皆お舟がありましたもんな」

OY 氏「湖の上ですき焼きをすると、あの家もこの家も出てきはって、にぎやかにしてはりましたよ」

TM 氏「かしわのすき焼きでしたな？」

OY 氏「その時分はかしわが主ですわ」

松尾「かしわ以外には何が入っていましたか？」

OY 氏「私の家は漁師をしましたから、かしわの代わりにウナギのすき焼きをするんですわ」

TM 氏「『ウナギのジュンジュン』って言ってたな」

松尾「『ウナギのジュンジュン』って何ですか？」

OY 氏「ウナギをそのまま白焼きで焼いて、それを切ってお砂糖とお醤油に漬けて、すき焼きと同じようにネギと玉ネギと入れて。そうするとね、美味しいんですね。うちは家でウナギをとってたから、夏のお盆に親戚を呼んだ時はウナギばかりでした」

OY 氏「父親が漁師をしましたから、夏になったら朝の3時、4時から『筒揚げ』言うてウナギの筒を揚げに行って、そしてとったウナギを毎日検査場に出しに行くんですわ」

松尾「『検査場』と言うのは、売りに出すために検査するところですか？」

OY 氏「そう。漁師がギャング（カムルチー）やらをとって持ってきたらと、検査場の人に『おっさん今日はギャングがとれたで』っていわはる」

TM 氏「カムルチーはどんな魚でも食べるからな。今のブラックバスみたいな感じ」

松尾「それも弁天内湖でとれたんですか？」

OY 氏「弁天の湖でとれた。干拓になってからでも外の湖ではとれてたけど」

松尾「どの辺でとれましたか？」

OY 氏「さあどうやろ？ 平均して全体なんでしょうね。ウナギなんかと全部一緒にとってたからね」

松尾「ウナギも全体でとれたんですか？」

OY 氏「ヨシのそばでね」

松尾「ウナギはどんな道具でとるんですか？」

OY 氏「竹の節を貫いた筒。そしてその両端に紐をくくりつけて三角形にする」

TM 氏「そして、そういうのが紐でいくつも連なっているわけ」

OY 氏「ヨシ地近くに生えている大きな草などに紐でちよいとくくりつけるだけの時と、シノベ（細い竹のようなも

の)を立てて一本だけする時とあるんです。これが揚げるのが大変ですねん。揚げる時に傾いたらウナギが出ますやろ」

TM氏「平行にすーっと揚げる」

OY氏「それは技術が必要なんです。ただ単に揚げるだけではあきませんやろ。三角になっている紐を持ってスーッと揚げてきたら途中に舟の中に網を置いて、傾いたときに網ですくうんです」

TM氏「なかには、竹筒の中に割ったシジミを入れて餌にしていたのもある」

松尾「お父さんが漁師さんだったということですが、よく一緒に漁に連れて行ってもらったりしましたか？」

OY氏「筒上げだとかだったら、舟の上で子どもが動いたらあかんから連れて行ってもらえへんかったけど、投網をしはる時は(魚つかみに)連れて行ってもらったことがある」

松尾「どんな魚がとれましたか？」

OY氏「コイやフナそれにワタカも、モロコもハスも色々とれました」

松尾「魚は小さいものが多かったですか？」

OY氏「いえいえ、大きいのがとれました。投網は網の目が大きいから小さい魚はとれないし。お盆前は夕方に漁に行きますねん。そうするとお月さんがきれいだね、お昼みたいに明るくてよく見えるの。そうやってよく連れて行ってもらったけどね」

松尾「どうして夜に出るんですか？」

TM氏「魚が寝とるんやと思う」

OY氏「昼は活発に動きますねん」

松尾「寝ているところをとるんですか？」

OY氏「寝かけていうか。まだ夕方は寝てないやろうけどね。ウナギはまだ朝の3時ごろで寝ぼけている間に行かんとして言うてよく行ってはりました。前のお日のお昼からシジミをたたいて、そのシジミを筒の真ん中に入れて、その筒を水につけますねん」

松尾「エサにするんですか？」

OY氏「エサにするんです。そのシジミの匂いでウナギが入るんですわ。筒は、舟の通らんような所へ仕掛ける。漁師さんは朝、湖を見はると今日は穏やかか、昼から風が出るとか分かったんです。父はよく、今日はおとなしいしよ。昼から風になるから今日もうやめるわ、とか言ってた。そんなもん今からわかるかい、って言うたことがあるけど、そうするとやっぱりお昼から風が吹きますねん。吹くと、小波がね...」

TM氏「投網漁はどのへんでやってはりました？」

OY氏「投網はだいたい大中で。お父さんが一人で元気でやってはったときは大中でね。大中のことを『外湖(そとうみ)』って言うてはった。よく外湖に行つてはったわ」

TM氏「ヨシ巻き漁はしていましたか？」

OY氏「ヨシ巻きもいかはった。私は連れて行ってもらったことがないけど」

TM氏「組をつくつてはりましたの？」

OY氏「組ではないんやけど、ヨシ巻き漁をしてはった人は少なかつたらしい。やり方を知つてはる人がね。それで、

お父さんはいくつかの組にも教えに行ってはった。私は魩かきはよう行ったんですねん」

松尾「『魩かき』って言うのは？」

OY氏「『魩かき』って言うのは、魩のところにつボがあって、魚を追うて行ってつボの中に入ったのを、上から大きな網ですくいますねん」

OY氏「魩の簾は竹の皮で編んでるんです。竹の外側。細く割って縄で編む。人の丈の倍くらいあったかな。立てて沈めはるから。それに魚が当たってついていけるように道をこしらえていって、そして端のところて巻かはる。舟は外からつボのところにいけるようにして。朝からいかはるんです」

OY氏「そうすると、つボの中にはいっぱい入った魚が生まれへんから真っ白、白銀のように泳いでる。競り上がってるの。それをすくわはる。3回くらいやると、あとはおいとこか、ってなる。かきまわすと網に当たって死んでしまいますやろ。真ん中をすくって、また真ん中に寄ってくるのを待って、また3回ほどすくう。舟の仕切りまで魚がいっぱいになった」

松尾「溢れてくるんですか。だいたいそれで何 kg くらいになったんですか？」

OY氏「大分あるわ。舟の8分目くらいあったから」

松尾「舟が沈みそうになるくらいですか？」

OY氏「そうよ。魚ばかり」

松尾「朝は何時くらいに出るのですか？」

OY氏「朝は8時くらい。魩に入った魚は逃げませんから」

松尾「特に季節別でみられた魚とかありましたか？」

OY氏「夏まわりはワタカでしたな。たくさんやった。そやけど、あれは上げたらすぐに死による。夏やったら早く色が変わるし、目も白くなるし。そやけど、フナとかに比べたら味はあんまり。生臭いねん。炊きようによってはどうもないねんけど。コイとフナは一年中ですし。モロコは冬から春やね」

TM氏「モロコは春やね。菜種の花が咲く時に多いね。子を持って上がってくるのよ。産卵しに」

松尾「ヨシ地に？」

TM氏「そうそう。だから内湖にいっぱいになるのは卵を産みにくるときの春。銀色のきれいな魚やった」

松尾「ワタカはどのようにして食べてはりましたか？」

OY氏「揚げてすぐの活のいいのは、カツオのタタキのように骨切りにしてな。そうじゃなかったら煮付けやね」

TM氏「塩焼きにもしたかな。あれは小骨が多いのよ」

OY氏「そうよ。それで食べにくい」

松尾「他のコイとかフナはどのようにして食べてはりましたか？」

OY氏「それも煮付け」

TM氏「コイのぶつ切りで煮付けや」

OY氏「筒切りや」

松尾「モロコは？」

OY氏「モロコは白焼きと煮付けやね。白焼きは酢味噌でいただく。白焼きやったらものすごく美味しい」

TM氏「コイは刺身にしはったでしょ？」

OY氏「そうそう、フナもコイもね」
TM氏「それも普通の刺身じゃなくて、子をつける」
OY氏『子付けの御造り』って言ってね、子を蒸して切り身につけるんです。それはお醤油でもいいし、酢味噌でもいいし」
TM氏「貝は炊かれましたか？」
OY氏「そうやね、貝は人参と炊いた」
TM氏「ヌカエビは？」
OY氏「エビにウロリ」
松尾「ウロリとは？」
TM氏「何かの子やと思うわ、何やろな？」
松尾「そのウロリも弁天内湖にいたのですか？」
OY氏「いた、川にでも上がってきますんや」
松尾「年中？」
OY氏「年中ではない、春から夏くらいやな」
松尾「夏になるといなくなってしまうから結局なんの魚か分からない？」
TM氏「そうじゃないかと思う、本職の漁師さんに聞いたら分かるかも」
松尾「ウロリも煮付けですか？」
OY氏「そうそう山椒入れてね、飴炊き」
松尾「ヌカエビもですか？」
OY氏「そうそうヌカエビも」
TM氏「そして大豆と一緒に炊いたり」
松尾「貝はどのような貝がみられましたか？」
OY氏「ダブ貝」
TM氏『カラス貝』って言うたり『ダブ貝』って言うたりな」
松尾「それも食べたんですか？」
OY氏「そう、炊いて、殻を取って実を食べた」
TM氏「大きな鍋で外で炊いたんや」
OY氏「昔は川のところに『貝炊き小屋』って言うて、藁でこしらえて小屋を作っておかあった、小屋の中に壁土でかまどを作ってそれに大きい釜を乗せて」
松尾「各家にあったんですか？」
OY氏「いやいや、漁師さんのお家だけ、貝とりをしはる家だけ、浜で炊いて、その小屋で殻を全部だしてしもうて、身だけにして、そして市場に持って行ってはった、活やったらもたへん」
TM氏「お父さんはギギはとってましたか？」
OY氏「うん、昔はギギはたくさんとれましたで」
TM氏「ナマズもな」
OY氏「ナマズも、そうやったな」

松尾「ギギもナマズも食べるんですか？」

OY氏「うん」

TM氏「そうそうそう。ギギは黒焼きにして」

松尾「黒焼きとは普通に焼くんですか？」

TM氏「うん。普通に焼くの」

OY氏「開いてくしに刺して蒲焼きにしたり。ナマズはだいたい味噌汁」

TM氏「味噌炊きが多かったね」

OY氏「生きたままを水の中に入れて炊きかける。そして頭をお箸で摘んでほぐすと身が下へ落ちて、そこにお味噌をいれて味噌汁にしたり。美味しいんです。お水を少なくしたら味噌炊きやし、多くしたら味噌汁やし。ナマズは美味しいんですよ白身やし」

松尾「ナマズもいたんですか？」

OY氏「いましたよ。みんなこの辺でとれました。コイやとかそんなのと一緒に」

TM氏「コイやとかナマズやとかギャングやとかそう言ったのはだいたい一緒にね。大きさがそうだから」

松尾「その中でも一番多くとれたのはコイですか？」

OY氏「そう。コイとフナやね」

松尾「ギャングとかナマズはまれにですか？」

OY氏「そうやね」

TM氏「ヒガイは食べはりました？」

OY氏「そんなに食べなかった。網のなかには一緒に入ってきましたけどな」

松尾「あまり多くはなかったですか？」

OY氏「そうやな」

TM氏「ボテジャコはぎょうさんいましたやろ？」

OY氏「ボテは多くいました」

TM氏「ドジョウは川でしたか？」

OY氏「川でした」

TM氏「ハイは？」

OY氏「ハイもコイとかと一緒にとれました。投網で」

松尾「鳥はどのようなものが見られましたか？」

OY氏「カイツブリと、冬はカモやね」

松尾「カイツブリは年中ですね」

OY氏「一年中」

TM氏「白サギもおったわね」

OY氏「そうそうそう」

松尾「これも年中ですね」

OY氏「それからヨシキリやね」

松尾「季節はいつ頃ですか？」

OY氏「春から夏にかけてやね。ヨシの芽が出てきてから」

TM氏「時々大きい青サギがね」

松尾「特に見られた場所がありましたか？ 全体的でしたか？」

OY氏「全体的やね」

TM氏「スッポンは捕まえたことありますか？」

OY氏「ありましたで」

松尾「スッポンもいたんですか？」

OY氏「スッポンも内湖にいますで。スッポンも時々あげてきまりましたわ。このごろは田んぼにいたみたい。スッポンのことを『マル』って言いますねん」

松尾「この辺では『マル』って言うんですか？」

TM氏「うん」

OY氏「漁師さんがとってきはると、黒板に〇って書かかりますねん。大きさも決まってますんよ。小さすぎたら逃がさはるし」

松尾「大きさは大体どれくらいですか？」

OY氏「直径 20 cm くらい。それ以上大きかったら高く売れるのよ。金額はしっかり知らんけど。それくらい貴重でした」

松尾「スッポンは食べたりするんですか？」

OY氏「食べたりはしません。市場に出してしまうから」

OY氏「芦刈あたりにあった『神さん柳（かみさんやなぎ）』の辺りが一番風が強かったらしい」

TM氏「神さん柳？」

OY氏「『神さん柳』って言うて大きい柳があったみたい」

TM氏「結婚してからのことを教えてください。お祭りの時はどのようなことをしていたとか、特徴的なことを教えてください」

OY氏「婦人会は母親がずっと入ってて、それに私が続いて入ったんやけど」

松尾「だいたいいつくらいまで入ってるんですか？」

OY氏「お嫁さんが来はるまで」

松尾「結婚されてから婦人会に入って、次にお嫁さんが来はるまで入ってる」

OY氏「だいたいそうですね。婦人会の行事はこれとってないんですけど、親睦会とか旅行とか、そういった時にちょっと動くくらい。色々行事をやるのは主に老人会に入ってからやね。サロンですけど」

松尾「『老人会』と言うのは、お嫁さんが来て婦人会を出た後に入るんですか？」

OY氏「いやいや、60歳になったら。60歳からこの町は必ず入るようになってますねん」

TM氏「それから、若奥さんが来はるとおばあさんは仏教にちなんだ『尼講』と言って女性だけの講があるのよ。それでお寺とかのお世話をする」

OY氏「丁度3月から6ヶ月間ありますねん。3月にお釈迦さんが亡くなって、4月はお釈迦さんが生まれて」

松尾「それはお嫁さんが来はってから？」

OY氏「お嫁さんをもらった人は全部尼講に入りますねん。それはだいたい老人会と一緒にあります。『尼講』と言うのはお寺の用事です。年に6回」

松尾「『婦人会、尼講、老人会』と言うのは、小中の湖があった当時からありますか？」

OY氏「はい、ありました」

TM氏「百万遍してはります」

OY氏「はい。百万遍してます」

松尾「百万遍とは？」

OY氏「6帖の間いっばいくらいの大きさの数珠をまわしますねん。月に1回、各家をまわりますねん。お寺の組の各家を月一軒ずつまわるんです」

松尾「それは年齢問わず？」

OY氏「そうです。町内の天台宗の行事やね。3月はお釈迦さんがなくなった月。4月は忙しいから5月にお花祭りをします。7月は大般若。8月はお盆でお墓参りします」

OY氏「尼講は年6回行事がある」

TM氏「そして行事をして一緒に会食しはる」

松尾「その時の料理は決まっていたか？」

OY氏「昔はお重箱に一重ずつ。『下』と言うて動いてくれはる人が7人いますねん、その7人が一重ずつこしらえてくれてはった。今は幕の内になりました」

松尾「下とは？」

OY氏「お嫁さんをもらって尼講にはいったばかりの人たち」

1-7 TH氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005年4月25日

対象者：TH氏

場所：TH氏宅

対象者データ：1931年生まれ。小中の湖があった当時、下豊浦の農家の娘だった。

ヒアリング概要：TH氏には干拓される以前の小中の湖周辺に住んでいた人々の暮らしの様子を中心に聞いた。

松尾「弁天内湖のことを何と呼んでいましたか？」

TH氏「『弁天さんの湖（うみ）』って言ってた。内湖とか難しい言い方はしてなかった」

松尾「伊庭内湖の方は？」

TH氏「私らが子どもの時は伊庭内湖とは呼んでなかったな。何にも呼んでなかった」

TM氏「何も呼んでなかったな」

TH氏「行き来がなかったもん」

TM氏「せいぜい、『山東の方は』っていうようなことは言ってたけど」

松尾「内湖の方には行きましたか？」

TH氏「内湖の方にはあんまり行かんかった。舟で出るっていうことは危ないから。行ったらあかんって言われて、うちらは行かせてもらえなんだ。風が吹いてくるやろ。そうすると波が高くなるから、絶対に行ったらあかんってな」

松尾「危ないからって行かせてもらえなかったんですね」

TH氏「そうや。大人の人がいはるんやったら行ってもいいけど、子どもたちだけでは行ったらあかんて。うちらは女子やさかいにお母さんが行かしてはくれんかった。そのかわり冬には凍った家の裏の川の上を親に内緒でよく歩いた。そうするとよく怒られてな」

松尾「長靴のような靴で歩くんですよね？」

TH氏「そうやそうや長靴はいて。そしてから冬ではない時、川が流れている時にタライとご飯のシャモジを2つ持って堀とか川でよく一寸法師をした。湖ではしなんだけど」

松尾「風とか波があるからですか」

TH氏「そう。風が吹くと怖いでな」

松尾「では、あまり内湖の方には出はらへんかったんですか？」

TH氏「そうやな。シジミとったり、泳ぐの教えたるって言わはったら行ったり。それくらいのこと。湖の方へは親が危ないって言うて行かんかったな」

松尾「では、弁天さんの湖では遊んでなかった？」

TH氏「小さい時は上の兄さんや姉さんたちに連れ行ってもらってた。一枚の板を持って行くねん。急に深くなるところがあるやろ。そういうところは背負ってくれはるねん。そして浅いところへ行ったらそこで板を持って泳ぐの」

松尾「板はビート版のようなもの？」

TH 氏「そうやそうや」

松尾「どの辺で泳いではりましたか？」

TH 氏「石垣のところへんやな. その辺は浅かった」

TM 氏「そこからも少し行ったら深かったんや. 岸辺は浅かったんやけど, 弁天さんの方へ行くとゴソッと深かった」

松尾「みなさんが『ツボ』って呼ばれていた辺りですね」

松尾「湖底の様子はどんな感じでしたか？」

TH 氏「下は砂利みたいな感じ. そこにシジミがおった. 『通し』を持って行ってシジミをつかんだりしてた」

TH 氏「でも大きくなってからは泳ぎに行かなかったでな」

TM 氏「いつまで泳いだ？」

TH 氏「いつまで泳いだやろ」

TM 氏「女学校行ってからはどうやった？」

TH 氏「もう全然してへんな. ま, 5~6年生までやろか」

松尾「深さとしてはだいたいどれくらいでしたか？」

TH 氏「60~70 cm くらいの深さやったやろか. 浅いところやったら湖底まで見えた. 美しかった」

松尾「藻まで見えてましたか？」

TH 氏「そら藻までみんな見えてた」

松尾「魚や貝まで見えたりとか？」

TH 氏「大きい貝（ダバ貝と呼んでいた）はその辺にはおらなんだけど, 石とか小石とかシジミやらじっと見てたら見えたわ. 『まんすけさんの浜』の方は石がたくさんあったから, 石をのけたらカニが沢山出た. カニをつかんで, 袋に入れて持って帰って, 鍋に油ひいて焼くねん. それを塩つけて食べたことがあるわ. ぱりぱりと美味しかった」

松尾「どれくらいの大きさのカニですか？」

TH 氏「甲羅が2~3 cm くらいの小さいカニ」

松尾「カニつかみは遊びの一種でしたか？」

TH 氏「そうやそうや. 遊びの一種や. そしておやつにもなる」

松尾「弁天島の方には行かはりませんでしたか？」

TH 氏「ちょっと深かったから危ないし, 弁天島の方にはお参りだけ. 8月のお祭りの時には舟で行った. 親戚の舟に乗せてもらって, すき焼きの準備してな. そして弁天さんに参って. それが楽しいでな」

松尾「すき焼きはかしわ中心ですか？」

TH 氏「そうやそうや. 鶏や」

TM 氏「それは8月1日の千日祭の時のやね？」

TH 氏「うん. なんでか知らんけど弁天さんの周りを3周まわらんと上がれなかった. 時計回りに3周まわってから島に上がったんや. なんかあったんやろな. その上（弁天島）ですき焼きをしてはる人もいた. うちらは舟の上やったけどな」

松尾「そのすき焼きは鶏以外には何が入っていましたか？」

TH 氏「ネギと麩よ。今みたいに色んな物は入れなんだな」
松尾「味付けは砂糖と醤油で？」
TH 氏「そう、砂糖と醤油」
松尾「その時は親戚の皆さんを呼んでご馳走したと聞いているのですが？」
TH 氏「そうやそうや」
松尾「泳いだり、カニつかみ以外に女の子たちはどのような遊びをしていましたか？」
TH 氏「壱浜川（もくべがわ）っていう川があって、その川でもよく遊んだ。船着場では舟をひっくり返したり、飛び込んだりしてな。面白かった。その時は川でもわりきれいやったんやわ。その川の入り江の縁には石垣があって、その石垣のところを歩くと、下に貝がいるのが見える。そうすると潜って貝をとるねん。そんなことしてた」
TM 氏「タニシとりはしてなかった？」
TH 氏「タニシとりはしてなかったな」
TM 氏「エビは？」
TH 氏「エビすくいのはしてたわ。川でな。藻がいっぱいあってな、ちょうどお祭りのある5月ごろやろかな、そのころに舟でエビすくい」
松尾「その舟は子どもたちだけで出すんですか？」
TH 氏「お母さんもいはったときもあるし、自分たちだけでも出せるし。竿でこいで行って、大きいトオシ（金網のざるのこと）で藻のところをがばってすくうとエビがびちびちおるねんわ。たくさんとると親が喜んでな。おかずに炊いてやろうか、って親がよく言ってくれたわ」
松尾「エビすくいに使った道具って、網みたいになっててエビだけをすくえるようになっているやつですか？」
TH 氏「そうやそうや」
松尾「とってきたエビはどのような料理にされていましたか？」
TH 氏「大根と炊いたり、それだけで炊いたり。てんぷらにしても美味しかった。『ヌカエビ』って言うねんな？」
TM 氏「そうや、ヌカエビや」
松尾「内湖の方ではとりませんでしたか？」
TH 氏「あっちの方はウロリをつかみに行ってた。川の流りにそって上がってきよるねんわ」
松尾「手でつかむんですか？」
TH 氏「ううん。金網の小さいので受けて。ウロリもな、豆で炊いたり色々よ」
TM 氏「あれは何の子やってんやろな？ ウロリ、ウロリって言うてた。季節は春やったやろか？」
TH 氏「そうやな。春から夏にかけて出てきよった」
TM 氏「魚の図鑑を調べてもウロリって魚の名前はない」
TH 氏「イサダとウロリはよく似たようなものや。イサダの方がもう少し大きい」
TM 氏「イサダはヨシノボリのこと」
TH 氏「『ドチマン』って言うのもいたしな。石のところにぺたんってくっついててな」
TM 氏「ドチマンって言うてるけど、わしもよう知らん」
松尾「ウロリっていうのもこのへんだけの呼び名かもしれないですか？」
TH 氏「沖ノ島もウロリって言わはるやろ」

松尾「沖ノ島も同じものをウロリって呼んでるんですか」

※後にウロリはヨシノボリの稚魚，ドチマンはドンコのことだと判明した

TM氏「とにかくそんなんがいっぱい来よったんや」

松尾「ウロリは美味しかったですか？」

TH氏「ウロリは美味しかったな．ドチマンは食べなかったけど」

TH氏「タニシは，よく田を刈った後に出てきた．それもとったことがある」

TM氏「わしは川でタニシとると，エビとりと両方ともしてた」

松尾「よく食べたものとかありますか？」

TH氏「百姓でとれた物ばかりや」

松尾「田んぼとか畑とかでとれた物ですか？」

TH氏「そうやそうや．ここは人参とネギの本場や．ネギ洗いの時期になったら，おつゆに浮かしたり．人参も炊いた．人参にネギ，野菜はみんなとれた．キャベツやら白菜やらみんなとれるで，だいたい野菜物が主やな．ジャコは魚屋さんがあったからそこへ時々買いに行っただな．そして魚は炊いてた」

松尾「魚はジャコが多かったですか？」

TH氏「そうやそうや．おじいさんが八日市に野菜売りに行った帰りに、『カマスゴ』って言う魚を買ってきてくれると，よばれたりしたな．でも野菜が主やったな昔は．盆と正月にかしわのすき焼きがあたるくらいで，肉はそんなに食べなかった」

松尾「やっぱりご馳走と言えば，かしわのすき焼きなどを正月に食べること」

TH氏「そうやそうや」

TM氏『『かしわのジュンジュン』やな．戦前は牛の肉ってあまりなかった」

TH氏「戦争中は配給があったから鯨はあったな．店でも鯨がようけ売ってあった．学校のお弁当にもよく持ってきてはったでな．そして鶏は家で卵を産みよるさかいにな．卵はいつも食べてたわ」

松尾「鶏を飼ってたんですか？」

TH氏「1軒で20羽くらい飼ってはった．家で卵をひよこに孵してね．ほんで卵は充分食べてよ．その後はかしわにして食べた」

TM氏「海の魚なんかは，干したニシンを食べたり，ホッケを食べたり．そういったものはあったけど，今のようなマグロの刺身やとかはなかった」

TH氏「御造りはあたらなかったな．その代わり，コイの御造りやワタコ（ワタカのこと）の御造りやらそういうものは食べたな」

松尾「この辺でとれた物？」

TH氏「そうやそうや．琵琶湖でとれる魚でな．そういったものはようけ食べたな．コイの御造りとか『ジャコ汁』とかな．コイのジャコ汁とか美味しかったんやで」

松尾「コイのジャコ汁？」

TH氏「コイを味噌汁で炊くの」

TM氏『『コイこく』って言うて美味しい』

TH 氏「ウナギの蒲焼もよく食べたな。ウナギを買ってきて家で焼くねん。焼いたのは買わへん。家でタレをこしらえてばたばたうちわを扇ぎながら食べるの。よう食べた」

松尾「ウナギは買ってきはるんですね」

TH 氏「うん。ウナギを裂いてもらってな」

松尾「そのウナギっていうのはここの内湖でとれたウナギですか？」

TH 氏「うん。ここでとれたウナギを魚屋さんで買ってきて」

TH 氏「ギギもおったな。でもギギはわりと食べなかったな。あれは刺しよるで。ナマズやらおるけどな。ナマズは蒲焼にして一度食べたことがあるけどな」

松尾「どのような鳥がいましたか？」

TH 氏「カイツブリ、カモ、そして白サギ、ウもいたし、ヨシキリスズメもいた。今とそんなにかわらへんな」

TM 氏「うん。今とかわらへんな」

TH 氏「ツバメやら。このごろやったら山鳩がよう来るわ」

TM 氏「来るな。山鳩、キジバト」

TH 氏「そしてウグイスがたまに来て鳴きよる」

松尾「その他の生き物とかは何がいましたか？ 田んぼでこういうのがいたとか。モグラとか見かけましたか？」

TH 氏「モグラはようけ畑とかで見かけたな。今でもおるで。昔は田シジミとか食べられたわな。除草剤まかへんかったから」

TM 氏「タニシもいたし、シジミもいた。そしてトンボのヤゴもおった」

TH 氏「トンボつかみした」

松尾「どのようにしてですか？」

TH 氏「竹の棒に紐をつけて、紐の先にトンボの雌をつけて。それを振っていると雄が寄ってきよる」

TM 氏「絡みよるわけ。雌は紐がついているから逃げられへん。そして降ろしてとって。それとか糸の両端に石をくり付けて、トンボが飛んできよる前に投げる。そしたらそれがエサやと思って寄ってきて糸が絡む。そうすると落ちよる」

TH 氏「そんなんしてた？」

TM 氏「したした」

TM 氏「赤トンボとか、シオカラトンボとかがいっぱい飛んでいる中にオニヤンマとかギンヤンマが交じって飛んできよるわけや。それを狙ってその前にほってやるわけ。そうやってとってた。秋になったらそれくらいトンボが多かった」

TM 氏「それからドジョウもおったな？」

TH 氏「ドジョウもおったな。水の流れている水路の底におった。よくつかんだな」

松尾「女の子はケンケンパして遊んだってお聞きしたんですけど？」

TH 氏「そうやそうや、やった。それから、男の子にまじって釘を使った陣とりみたいな遊びをようした」

松尾「それは何をして遊ぶうって言うてはったんですか？」

TH 氏 「『陣とり』って言うてたな」

TM 氏 「『陣とり』やな」

TH 氏 「それは釘を持って遊ぶから、女の子はしたらあかんってよく言われたな」

松尾 「男の子も女の子も一緒に？」

TH 氏 「男の子も女の子も一緒に。そして、『母艦・水雷』っていうのもしたよ」

松尾 「それも女の子がまじってしてましたか？」

TH 氏 「それも女の子もしてたな。そしてメンコもしてたな。夏休みになると」

松尾 「それも女の子も男の子も一緒ですか？」

TH 氏 「そうやそうや。あと、長いカードに兵隊さんの絵が書いてあって、メンコみたいに投げるんじゃなくて、いちにのさんで出して、鉄砲持った兵隊さんと平の兵隊さんやったら鉄砲持った兵隊さんの方が勝つねん。ほんで、鉄砲持ったひとが勝つで、負けた人の方のカードをもらってたな」

松尾 「今のカードゲームみたいなやつですね」

TH 氏 「そうやな。そういうこともしてたな」

TH 氏 「かくれんぼもしたやろ。よその軒に入って隠れて。そして男の子と女の子と着物を変えてな。そうすると間違えはるやろ。男の子やと思って呼びやると女の子やったりしてな。着物変えるねん。そうすると間違えはるやん」

松尾 「間違えたらだめなんですか？」

TH 氏 「そうやそうや。『ケッタ』って言うてたかな。どこかの柱とか電信柱とかに鬼が探しに行っている間に手を着きにいくと勝ちになるんや」

TM 氏 「缶蹴りやな」

TH 氏 「缶蹴りではないけど近いな。『ケッタ』って言ってた」

TM 氏 「山には行かんへんかった？」

TH 氏 「山にも行った。オケスイとか山桃とかが安土山には沢山あったのよ。そういったものをとりに行った」

松尾 「オケスイとは実ですか？」

TH 氏 「そう実。赤い実でな。色々あったで。山桃にオケスイ、それからイバナシ。そういうなんも食べてた」

松尾 「とりに行って食べてはったんですか？」

TH 氏 「おやつがあらへんかったからな。食べてこんと。それに親もほっとかはるから」

松尾 「子どもたちだけで山に行って、とって食べて帰ってきてたんですか？」

TH 氏 「そうや食べて帰ってくるんや。そして秋がすむと、小さいイチコをこしらえてもらって、柴をとりに行った。木の葉かき。木の葉をとりに行くねん」

松尾 「それは秋ですか？」

TH 氏 「そうやそうや。秋がすんだら松葉がたくさん落ちるやろ。それをイチコの中に入れて持って帰る。山に行つて木の葉かきをせいって親が言って」

松尾 「先ほど言われた、オケスイ、ヤマモモ、イバナシを食べに行ったのも秋ですか？」

TH 氏 「それは春や。スイバイやらも食べたな」

TM 氏 「イタドリもスカンボもあったな」

TM氏「小さいときからずっと大きくなるまで何してた」

松尾「子ども会とか，婦人会とかありました？」

TH氏「子ども会ってのはあらへん．年頃になってくると青年団ってのがあった．けど，うちらは学校あがってからしか入れてもらえなかった．娘さんらは15～16才くらいかな．それくらいから青年団に入らる．男の人やったらお嫁さんもらうとか，女の人やったらお嫁に行くとか，それくらいまでは皆青年団に入ってはったな」

松尾「結婚されるまで」

TH氏「そうやそうや」

松尾「男の人も女の人も皆一緒に」

TH氏「そうやそうや．皆一緒に．ほんで昔はそういうことがあったから縁組が多かった」

松尾「縁組って？」

TH氏「お嫁さんに行ったり，もろたり」

TM氏「近くでな」

松尾「青年団ではどういったことをするんですか？」

TH氏「京都まで映画に連れて行ってもらったことがあるわ」

松尾「遊ぶようなことがあったんですか？」

TH氏「遊ぶようなこともあった．それから夏にお宮さんとかそういうところで，素人演劇とかしはるねん．それに青年団の人らがみんな芝居とか考えてしてはったわ」

松尾「お祭りの時に？」

TH氏「お祭りとは関係ないわ．だいたい夏やな」

TM氏「お盆の頃かな」

TH氏「そうやなお盆の頃やな」

TM氏「ちょっと田仕事が暇になったころ」

松尾「演劇を発表する場所はどういった所？」

TH氏「お宮さんかな．お寺の中でも一回しはったことがあったな」

TM氏「たいていは青年団には高等科が終わってから入らはったけども，女学校に行かはった人は女学校卒業してから入る」

松尾「処女会って言うのもありましたか？」

TH氏「あった」

松尾「青年団とは別に？」

TH氏「処女会て言うのは女子だけやな．青年団て言うのは女も男も一緒に」

松尾「処女会はいくつくらいから入るんですか？」

TH氏「15～16才かな」

松尾「年齢的には中学生くらいですか？」

TH氏「そうやな」

松尾「これも結婚されるまで？」

TH氏「うん，そう．結婚するまではみんなそうやって楽しんではったな」

松尾「処女会ではどういふことされたんですか？ 青年団と同じようなことですか。遊んだり」

TH氏「そうやそうや」

松尾「青年団とか処女会では、遊び以外ではどのようなことを？」

TH氏「いろんなことしてはったやろな。ちょっと大きくなったら田もできるんやし。田堀とか、そういうことをしてはったんと違うかな」

松尾「青年団とか処女会とか終わった後、結婚されて地元にはる人は何かまたその次の婦人会とかに上がったりはるんですか？」

TH氏「女の人は婦人会やな」

松尾「男の人は？」

TM氏「神明講があるわ」

松尾「これは男の人だけですか？」

TM氏「うん、そう」

松尾「婦人会も神明講も結婚後ですか？」

TM氏「神明講は結婚後と言うよりも、元服しはってから」

TH氏「15歳で元服しはるや。それから」

松尾「元服後ですか？」

TM氏「元服しはると、年齢の近い2〜3学年何人かで組を組もうかと言うわけや。それが神明講や。何のために組んだかと言うたら、代表してお伊勢さんにお参りに行くのに。それを代参と言う。お伊勢さんに行くにはまとまったお金があるわけや。講でお金を積み立てといて、今度この人が代表で行くとなったらその人の旅行代をみんなで調達をして出してあげるわけや」

松尾「神明講はいくつくらいまでやるんですか？」

TM氏「ずっと」

松尾「年をとってもずっとですか？」

TH氏「十人衆に入らるまでや」

TM氏「十人衆って言うのは、男子の長老から十人のこと。長老会やね。そこに入るようになったら初めて、神明講を解散しようってなる。女の人の尼講はずっと死ぬまで続く。そして男女が数えて60歳になったら今度は老人会に入るわけ」

松尾「十人衆や尼講とは別にですか？」

TM氏「うん」

TM氏「お祭りの時は男は祭りに出たけど、女子はどうしてた？」

TH氏「お祭りの時はお客さんが来はるからご馳走をこしらえてた」

松尾「お祭りにも行かないで、ご飯の用意をしていた」

TM氏「ほんまにお百姓で手が抜けるっていうのは盆が終わった後しばらくやな」

TH氏「盆の時期になると洗濯せなあかんかった。昔は皆着物着てたんやで、着物と布団と全部縫いかえなあかん。着物は着物でまた洗って、板にはって縫い直して。そういうことしてた」

TM 氏「衣替えや」

松尾「お盆の時期に衣替え」

TH 氏「うん、衣替えや」

TM 氏「盆踊りには行ったやろ？」

TH 氏「盆踊りは行ったな」

松尾「盆踊りはいつあるんですか？ お祭りの時に一緒にあるとか？」

TH 氏「違う」

松尾「盆踊りだけがあるんですか？」

TH 氏「そうや、盆踊りだけがあるねん」

松尾「お風呂の水とか、水はどうされていましてか？」

TH 氏「井戸があったんや、家の中に井戸が掘ってあったん」

松尾「各家に井戸があったんですか？」

TH 氏「各家にあった」

TM 氏「うちなんかは3本掘ってあった」

松尾「必ず一つはある」

TH 氏「そうやそうや」

松尾「井戸水は飲み水用とかですか？」

TH 氏「そうやそうや、何もかも一緒やわな、お風呂にお湯を入れるのも一緒よ」

松尾「川の水とかじゃなくて？」

TH 氏「川の水はお風呂とかには使わへん」

松尾「では井戸水は、飲み水、お風呂、料理用」

TH 氏「そうやそうや」

松尾「川から水は引っ張ってなかったですか？」

TH 氏「それはない」

松尾「水屋みたいに家の中に引っ張ってあったとか？」

TH 氏「それはないな、ここらではないな」

TM 氏「うん、ないな」

松尾「すべて井戸の水ですか？」

TH 氏「うん、常楽寺あたりやったら川から水を引っ張ってあった家があったけどな」

TM 氏「常楽寺は湧き水があったからそれを家の中に引っ込んでる家はあった、でもこちらは川がないから、あっても内湖に通じてる入り江のようなものやったから、湖に面した家は水が豊富やったから湖から引っ張ってあった」

TH 氏「お風呂のお水とかに使ってあったって言ってた」

TH 氏「どこのお家でも井戸はあった」

松尾「井戸の深さはどれくらいですか？」

TH 氏「大分あるで、深かった」

TM 氏「深かったな」

TM 氏「でも家の外にある井戸のほうは浅井戸やった。せいぜい3~4 m くらい。そうすると横から水が入ってきよる。田植えの時期になると水位が上がるんよね。その水はきれいやけども飲めなんだ。家の中の井戸は水位がそんなに変わらへんわけ」

松尾「家の中の井戸ということは、お家の中にあるってことですか？ 庭にあるって意味じゃなくて？」

TM 氏「そうそうそう」

松尾「建物の中に？」

TM 氏「建物の中に」

TH 氏「台所の端に必ずあるねん」

TM 氏「台所が土間やったでな。そこを掘って。かなり深かったで。深いところは砂地を通して、そしてろ過されたのが湧いて出る。だからその水はきれいやった」

TH 氏「美味しかったで。甘いって言うのかな」

TM 氏「甘かったな」

松尾「町民のみなさんで使う井戸っていうのもありましたか？」

TH 氏「なかった」

松尾「では、共同の井戸はなくて各家に一つは必ずあった」

TH 氏「そして今やったら冷蔵庫があるけど、冷蔵庫がなかったやろ。だから痛むものは紐につけて、桶の中に入れて井戸の中につるしておくの。冷蔵庫代わりにもした。そして夏になるとお盆の頃にはスイカ浸けてな」

松尾「お風呂に入った後の余ったお湯はどうされてましたか？」

TH 氏「お風呂のお湯の溜めがあったねん。お風呂のお湯はそこに溜まるようにしてある。またそれが一杯になると次はしし投げって言うところに上げてた」

松尾「それじゃあお湯を溜めるところが2箇所あるんですね。お風呂のお湯を溜めるやつを何と言うのですか？」

TH 氏「湯殿」

松尾「湯殿に溜まったお湯を『しし投げ』に移す」

TH 氏「そうやそうや」

TM 氏「下肥を湯殿のお湯で薄めて、そして肥を増やして、それを畑に肥料として使っていた」

1-8 FM氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005年8月2日

対象者：FM氏

場所：FM氏宅

対象者データ：1931年生まれ。小中の湖があった当時、伊庭のお寺の息子だった。

ヒアリング概要：FM氏には、伊庭内湖全般の様子を聞いた。

松尾「皆さんは伊庭内湖のことを何んと呼んでましたか？」

FM氏「私の方では伊庭内湖のことを『能登川内湖』と呼んでたんですわ。そして大中の湖の方を『伊庭内湖』と言うてた。伊庭内湖という呼び名はね、色々と言があって、昔の古い地図を見ると大中の湖のことを伊庭内湖と書いてある。それがいつの間にか大中の湖になって、こちら側が小中の湖になった。そしたら伊庭内湖はどこにも無くなってしまった。大中の湖の呼び名がいつからいわれるようになったんか私には分からん」

松尾「水質はどうでしたか？水はきれいでした？湖底が見えたとか」

FM氏「昔はきれいやった。特にシジミ場がきれいな砂と小石とでね」

松尾「深さはどうでしたか？」

FM氏「だいたい1～2mくらいと違うかな。そやけど伊庭内湖の方はだいたいヘドロというか泥が溜まった。そして藻がいっぱい生えとった。だから『藻とり』ができたわけや」

松尾「特に深い所とかはなかったですか？」

FM氏「そんなに深い所がなかった。それにだいたい藻が多くて、足に絡みつくからあんまり岸から遠いところまで泳ぎに行かんかった。ほんで、私らは大中の湖の金比羅さん方によく泳ぎに行ってた」

松尾「波はやっぱり大中の湖の方が高かったですか？」

FM氏「波と言っても普段はあまりなかった。風によってはあったけどね」

松尾「冬は凍りましたか？」

FM氏「一度だけ凍ったことがあった。凍ってずっと沖合まで歩いて行けた。昭和十何年ごろかな」

松尾「毎年ではなくて？」

FM氏「毎年ではなくて私の経験では一回だけ」

TM氏「伊庭内湖におった魚や漁のことは知りませんか？」

FM氏「漁のことは私は知りませんねんや。それでもそんなにめずらしいのはなかったんと違うかな」

松尾「どの辺でやられていたとか場所も分からないですか？」

FM氏「伊庭内湖の真ん中ではしてなかったと思うよ」

TM氏「ヨシ地に沿うてやってたんと違うかな。魚がヨシの中に卵を産みに来よったから」

FM 氏「そうだと思う」

松尾「子どもの頃よくしていた遊びは？」

FM 氏「泳ぎで『航空母艦』っていうのをやってたわ。昔の田舟は底がぺったんこやったやろ。田舟をひっくり返して、ひっくり返った舟底の上を走って湖に飛び込むの。その舟の持ち主のおじさんが漁に出ようと思って来たのに、子どもたちが舟を使って遊んどるからよく怒られた」

松尾「その舟は適当に停めてある舟？」

FM 氏「うん。この遊びが一番印象に残ってるな」

松尾「他には？ 貝つかみとか魚つかみとか」

FM 氏「貝はね、シジミやダバ貝がいっぱい。『ダバ貝とり』っていうのは、足で探るねん。そうすると硬い物が足に当たるでしょ。それで潜ってダバ貝、カラス貝とも言うな、それをとる。それから『イシ貝』といってダバ貝よりも小さいもとの。田んぼではタニシ」

松尾「魚つかみとかは手でつかんでありましたか？」

FM 氏「魚つかみは私はあんまりせなんだけど、川上から毛の付いた道具で追いたてて川下の方で受けとる。魚は鳥が来たと思って逃げるんだわ。それを追うて魚をつかむ。それが細い川やと草を刈りよるねん。草を刈って、刈った草を水中に沈めてゴロゴロと川下に押していく。そして川下の方で網で受ける。その時に、魚の中には草の中に入り込みよるのがいよる。だから草を水からあげるのと同時に、網で受ける。草の中に頭を突っ込んでいる魚もとり、網でも魚をとってたな」

TM 氏「ここの川にはモロコが菜種のころ上がってきませんでしたか？」

FM 氏「そうやそうや。田んぼの中へフナやらが上がってきたりした」

YM 氏「僕らが子どものころ、三つ橋（YM 氏の家の前の川）のところにモロコがいっぱい上がってきた。舟の下に入りよるんや。夜にカーバイトを照らして、手づかみでたくさんモロコをつかんだことがある」

TM 氏「それだけ魚影がこかったんや」

YM 氏「セリの根っこのところにモロコがいっぱい卵を生みに来た。田舟で行ってセりごと引き上げるんですわ。そうすると、モロコがいっぱい入った。それに、柳の根っこを束ねて沈めておかはるところがあるんやけど、その柳の根っこと網とを一緒にあげはるんや。そうするとね、その中にもモロコがいっぱい入ってるねん」

松尾「遊びは男の子も女の子も一緒でしたか？」

FM 氏「それは別やろうな。水泳も別やね。昔は水泳は上級生の許可を得なんたらできなかつたんや。だから上級生の家に『今日泳がして』って言いに行くんや。そこであかんって言わはったら、その日は泳げへん」

松尾「田舟を使って安土の下豊浦の弁天島（福島弁財天）とかに行くのにも許可が必要だったんですか？」

FM 氏「それはもっと後やわ。小学生ではそんなことでできへん。成人してからやな。すき焼きやらしもって行くのは二十歳超えてからやね」

TM 氏「安土の方では上級生の許可が必要ってことはなかったけど、泳ぎ始めの頃は必ず上級生を誘って行って、上級生から泳ぎを教えてもろた」

FM 氏「そうやった、そうやった。そして、舟で行って泳げへんと突き落としよった。突き落とされて、そして、泳

げるようになった」

FM 氏「伊庭から舟を漕いで弁天さんの竿飛びに行った。同い年の仲間で、七輪やら鶏肉やらタマネギやらジャガイモやらを舟に乗せてみんなで交代で舟を漕いで行った。竿から飛んで、そしてすき焼きして食べた」

松尾「お祭りの日ですか？」

FM 氏「そうよ。8月1日って決まってた。そして弁天さん以外にも伊崎（伊崎不動）の竿飛びにも行った。ここは弁天さんのよりも高かった」

松尾「伊崎に行くのに大中の湖を舟を漕いで遊びに行ってたんですか？」

FM 氏「そう。大中の湖を横切って、栗見新田地先から外湖へ出て行った」

TM 氏「それが、小中の湖に比べて大中は波が高かったんや。ほんで伊崎に行くのが大変やった」

FM 氏「そうやった、そうやった」

松尾「境界みたいなのは無かったですか？」

FM 氏「それはあった」

松尾「安土の人は伊庭内湖の方には行けなかったって言ってはったのですが」

FM 氏「それは知らんな」

TM 氏「伊庭内湖の方でコイの養殖をやってはったから？」

FM 氏「戦争中はコイの養殖をした。伊庭の有力者がコイの養殖をして軍に食料を納めようといっって、猫ヨシの近くを囲ってしていた。そのことを言うてはるんやわ。だから伊庭内湖に入ってきたら、コイを取りに来たんと違うかって言って警戒するわけや」

松尾「それで入ってきたらあかんって言われてた」

FM 氏「そうかもしれんね。そのことははっきりと知らんけどね」

松尾「でも FM 氏は普通に弁天島まで来ていた？」

FM 氏「うん。囲ってる魚とかとらなかつたら湖上の境界なんてない」

FM 氏「それで、ここで養殖したコイをすくっては金比羅さんの下にあったコイの販売所へ持っていく。そこに市が立つの。ほんで周囲から販売所へ買いに来はる。そして、それを『ボテふり』って言うて、買ったコイやフナやジャコを売って歩く」

松尾「コイだけ売ってるんですか？」

FM 氏「フナやらも一緒よ。貝やらもあった。でも戦争が厳しくなって無くなって、そこの近くに捕虜収容所ができた」

FM 氏「私らが子どもの時は『シジミ場』って言うのがあった。シジミ場は浅くて洲になっって、玉砂利やらがあった」

FM 氏「そして『スクモ地（ぢ）』があった。生えているヨシのところに北風が吹きつけて、ヨシが溜まるんだわ。ここは北風しか入ってこないからね」

松尾「どの辺がヨシ地ですか？」

FM 氏「伊庭内湖の縁は全部ヨシが生えてた。そして『猫ヨシ』と言う小島があった」

松尾「スクモ地はどの辺ですか？」

FM 氏「どこでもとれた。スクモをとってきて団子にする。炭やら練炭のかすやら、籾殻を混ぜて、それを天日で乾かす。それを風呂を炊くときに使った」

松尾「安土の方はスクモには何も入れないとお聞きしてたんですが」

TM 氏「入れないな。でも色々な人が工夫をしてはったと思う。だいたい燃えやすいように籾殻は入れてはったやろうけどな」

FM 氏「わりと火力が弱いんや。風呂を炊く時に藁の上に乗せて真っ赤するんやわ」

YM 氏「豆炭の代わりや。それを行火（あんか）の中に入れて暖をとらはるわけや」

FM 氏「そうやそうや」

TM 氏「ちょうど焚き火の匂いと同じような匂いが出るわけや」

松尾「スクモとおっしゃっていますが、『スクモとりに行く』って言ってはりましたか？」

FM 氏「そうそう。そして、舟に乗ってとりに行った。それから『藻とり』と『スクモとり』とは違うんや。『藻とり』は藻をとってきて、川下の田んぼの縁へ、ひと夏積み上げておくんや。そうすると、それが腐って土になる。その土を四角く切り取ってそれを舟に積んで田んぼへ持って行く。それを細かく砕いて肥料にするんや」

松尾「藻はどこでとってましたか？」

FM 氏「場所は決まってるな。そこらじゅうでとれた。藻だらけやった」

松尾「藻とりとおっしゃいましたが、『モラとり』とは言いませんでしたか？」

FM 氏「うちは『藻とり』と言っていた」

TM 氏「ちょうどお盆が過ぎた頃から、安土では『モラとり』に行こうって言ってとりに行っていました」

FM 氏「そうやったそうやった。でも、伊庭では『藻とり』と言っていた」

FM 氏「『伊庭の金比羅浜』には西江州から物資を運んできてね。私らが子どもの頃には、柴、石なんかを降ろしてはった。ほんで常夜灯があって、そこに金比羅さんがあった」

松尾「では逆に、どこかに持って行くことはなかったんですか？」

FM 氏「伊庭には『八幡通い』といって、近江八幡に行くぼんぼん船があった。八幡は物資の集積所で問屋街があるんや。ここらへんの集積所は八幡やった。そこへ伊庭の村から買い付けに行かはるんや」

松尾「航路は？」

FM 氏「円山から北之庄沢へ入って八幡堀に入るんや。今の観光の水郷めぐりが大体の航路だと思う」

<その他>

FM 氏「伊庭にはね、山の上から神様を降ろして伊庭まで持って来て、さらに湖辺までおねりをする『卯の時祭』と言う祭りがある。卯の時（今の午前6時前後）に舟に神輿を乗せて川を下るんや。その時は邪魔になる木の橋をとるの。昔は伊庭では川下の方は石の橋はなかったから。舟に神輿を乗せて、今の大中の遺跡の北端までいった」

1-9 MI氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005年8月9日

対象者：MI氏

場所：YM氏宅

対象者データ：1922年生まれ。小中の湖があった当時、伊庭に住む農家の息子だった。

ヒアリング概要：MI氏には、伊庭内湖全般の様子を聞いた

松尾「昔は内湖のことを何と呼んでいましたか？」

MI氏「現在の大中の湖を『キタノ』、伊庭内湖を『ミナミノ』と言ってた。伊庭（地名）には、湖の畔やったから、漁師の家がたくさんあった。大中の湖も伊庭内湖も魚をつかむ場所やった。漁師は天候の具合を見て、今日は『キタノ』へ行ってくるわとか、『ミナミノ』の方へ行ってくるわ、とか言ってはった」

松尾「別の方は、伊庭内湖のことを『能登川内湖』って呼んでたとおっしゃっていたんですけど、『ミナミノ』って呼んでたんですか？」

MI氏「うん。年寄りみんな『ミナミノ』って言ってたな」

YM氏「それはこの伊庭だけの呼び方かもしれへんな。伊庭からみて『北』と『南』やから」

TM氏「ヨシはどのあたりに生きてましたか？」

MI氏「伊庭内湖の周辺はだいたいどこでも生きてましたな」

松尾「水はきれいでしたか？」

MI氏「きれいやったな。天気によって濁ってた時もあったけど。風が吹いたときは、内湖のところどころに木の破片などがたまってた。そうするとそれを拾って帰って炊き物の燃料にした。昔は藁やらでお風呂を沸かしてたから、お風呂をたくのに助かった」

松尾「波は高かったですか？」

MI氏「天気によって違った。風向きによってもね」

松尾「水の流れは憶えてはりますか？ 大中の湖から入ってきて弁天内湖の方に流れてたとか」

MI氏「川の水が内湖の方に流れてきてたから、内湖の水は逆に大中の湖の方に出ていったな」

TM氏「弁天内湖の方に流れてたと言うのは、北風に押されたときやな」

MI氏「そうやな」

松尾「冬は湖面が凍ったりしてました？」

MI氏「あまり凍らなかつたけど、一度だけ凍ったことがあった。湖面一面ね。凍った湖の上を滑ったのを憶えてる。

そしたら母親に叱られてね、スキーで乙女浜（地名）まで行かかった人もいた」

松尾「内湖の深さはどうでしたか？」

MI氏「やっぱり深い所とかあった。飛び込んだら足がつかなくなったり」

松尾「どの辺でしたか？」

MI氏「子どもやったし背が低かったからな。伊庭内湖の中は深かった」

松尾「2 m くらいありましたか？」

MI氏「湖の端はわりと浅かったけど、中に進むにつれてだんだん深くなった。だんだんと深くなっていて、極端に深くなったってことはなかったな。でも平均して深かった」

松尾「子どもたちが遊ぶのには深くて遊べなかった？」

MI氏「そうやね。それに平均して泥深かった」

TM氏「どの辺で遊んでましたか？」

MI氏「金比羅さんがあった辺り。風が穏やかな日はよく水泳やらして遊んでた」

TM氏「湖岸は石垣か何かしてありましたか？ それともヨシだけが生えてた？」

MI氏「石がたくさんありましたな」

MI氏「5月になって雨が降ると、産卵期で魚がたくさん上がってくる。そうすると田んぼやらにフナやナマズやらが群れて入ってくる。小学校に行ってる頃やったから、学校から帰ってきたら鞆を放り投げて、バケツ持ってよくとりに行った。それでバケツに沢山とって帰ると親が料理してくれて、食べてました」

TM氏「砂地でしたか？」

MI氏「砂地やったけど、ゴミ（木材など）も寄ってきてた」

MI氏「8月1日になると弁天さん参りといって、安土の弁天島に参りに行った」

松尾「お参りには舟で行ってましたか？」

MI氏「うん。島になってたからね」

MI氏「伊庭川は途中でも水が湧出た。昔は井戸もない。だからバケツを持って川まで汲みに行ってた。あと、昔はカワトというのがずいぶんあった。朝一番に川に汲みに行って、一日の生活水として家の瓶に入れて溜めておかはる。そのまま汲んで飲んであったくらい川がきれいやったからな。透けてた。モロコやら魚が群れて上がってきた。ハリヨもいた。家庭の排水も直接そこへは流さないようにしてた。下肥と言って、お風呂の残湯も必ずトイレに流し込んで、ほんでそれを畑にまいてた。川には絶対流さんかった。そういう習慣やった。カワトは水を汲んだり、舟を着けたり生活と関わっていた。舟と言うのは、田んぼに行くために道具を積んだり、田んぼからの収穫物を運んで帰ってきたりするのに使っていた。自動車もなにもなかったからね。舟の利用が非常に多かったし、川の利用も多かった。お祭りの神輿も川で運ぶんや」

TM氏「伊庭の人は舟はどういうところに置いてました？」

MI氏「川の中。カワトがあるから」

TM 氏「では、村の中の細かい水路や川を通して内湖に出ていたわけですか？」

MI 氏「はい。村中に川が多かったんです」

TM 氏「そうすると、昔の伊庭の風景っていうのは、水路が縦横に入り組んでいて、交通手段は舟やったんですな」

MI 氏「そうそうそう。480 艘もあったんや。交通は全部舟。舟が物を運ぶ交通機関ですわ」

MI 氏「田舟をどうやって川上の伊庭の田んぼまで上げてたかと言うと、引っ張ってあげるのよ。二人くらいで。一人は引っ張って、もう一人は舟が水路の縁に当たらないように竹の竿で押して」

松尾「一人は水路に入って引っ張るんですか？」

MI 氏「そうではなくて、水路の周りの岸で引っ張るのよ。だから、引っ張ると舟がどうしても岸によってくる。だからもう一人の人が後ろから竿で岸に当たらないように舟を押すの」

TM 氏「この辺で、漁師をされていた方でお元気な方はおられますか？」

MI 氏「漁師していた人はみんな亡くなったな。昔はこの村には魚市場が3箇所もあった。魚市場といっても買いに行くんじゃない。とれた魚を漁師が持ってきてはるんや。ほんで入札して、小売の業者さんが買って売りにまわらはる。そんな市場や」

TM 氏「浜能登川の港には市場はなかったんですか？」

MI 氏「なかったな。みんな伊庭やった。浜能登川は交通機関の港やった」

松尾「浜能登川とは？」

MI 氏「現在の能登川町に港があって、そこにたくさん舟がついてあったのを憶えている。『浜能登川』って言うてた」

TM 氏「浜能登川へ琵琶湖汽船が寄ってたことはなかった？」

MI 氏「琵琶湖汽船ではない。田舟でなくて少し大きい中舟が入ってたな。柴を乗せてたから『柴舟』と呼んでた」

松尾「どのような魚がいましたか？」

MI 氏「モロコとかね。それを金網でつかんだりしたな」

MI 氏「フナやコイ、ナマズが多かったな」

TM 氏「ギギはいましたか？」

MI 氏「いましたな。石垣に入り込んでね。ボテジャコとかメダカとかそれぞれにかたまっていたな」

TM 氏「ウナギはいましたか？」

MI 氏「ウナギもいましたな。ヌルヌルしててなかなか上手にとれない。漁師の人は上手に道具をヨシの縁に仕掛けてはった」

TM 氏「アユとかモロコとかも来ましたか？」

MI 氏「モロコとアユは一つの集団になってあがってきた。停めておいた舟の下に隠れとる。それを『サデ網』と言うのでとったり、投網でとってはる人がいた。たくさんとれた」

松尾「特に季節限定で見られた魚は？」

MI 氏「フナは5月の梅雨時やったわ。ナマズも梅雨時が多かった。コイは年中いるのかな。モロコは春にきてたな」

松尾「産卵に来るんですか？」

MI 氏「産卵にくるの。ナマズも産卵にくるのよ。雨が降るとみんな田んぼの中に入り込んできた。そうすると、田ん

ぼに水が入ってくるところに『モジ（竹かごのこと）』っていうのを受けておく」

松尾「ナマズをとるために？」

MI氏「そうよ。ほんで昔の田んぼは鋤で掘ってたから溝ができる。学校から帰ってきたらバケツを持ってその溝に入ってるナマズをとりに行ってた。ナマズで不思議なのがね、産卵するために田んぼに上がってくる時に、大きいやつが先頭になって行列で上がってくるのよ」

MI氏「色々な魚が群で内湖の方へあがってきた。水路やら川やらの上の方へも上がってきたわ。それで魚釣りやらしてた」

松尾「ウナギやギギも年中見れました？」

MI氏「ウナギはなかなかつかめないから分からないな」

MI氏「ワタコ（ワタカのこと）はちょっと産卵期がずれて梅雨明けにあがってきた」

YM氏「梅雨の一番大雨のときやな」

MI氏「その時期に上手に群れて、そればかりが上がってきた」

MI氏「ボテジャコやらきれいな魚もおったな」

TM氏「ハイ（ハヤのこと）もいましたか？」

MI氏「ええハイもオイカワもいましたな。そしてここらにもドチマンがおったからよくとった」

TM氏「安土の下豊浦の人は伊庭内湖の方にはコイの養殖をしていたから入れなかったと言っておられたんですか？」

MI氏「魷はあったけどな」

松尾「どの辺に？」

MI氏「大中の湖のほうは数箇所あったな。伊庭内湖の方はちょっとわからへん」

TM氏「貝やシジミがとれたのはどの辺ですか？」

MI氏「金比羅さんがあった辺り（現在の大中の湖）。そこで貝とりやらしてたな」

松尾「大中の湖は深かったですか？」

MI氏「深かった。でも、伊庭内湖の方は良い砂地がなかったから遊ぶところがあまりなかった」

TM氏「貝が沢山とれたのはどの辺でしたか？」

MI氏「子どもやったからあんまり憶えてないけど、『北の』の辺りでとってたのは覚える」

松尾「遊びながらとってたんですか？」

MI氏「そう。田舟で行ってね」

松尾「どのようにしてとってたんですか？」

MI氏「そんなに道具がないから、金網でとったりしてた」

MI氏「夏になると『藻とり』と言って金比羅さんの近く（大中の湖）で藻をとって干して、そして田んぼに持って行って肥料にした」

松尾「伊庭内湖の方では藻とりはしてませんでしたか？」

MI氏「どこかではやってたやろうと思う。スクモはやってたけどな」

TM氏「『藻とり』って言ってました？」

MI 氏「ええ」

TM 氏「安土の下豊浦の方では『モラとり』って言ってたんです」

MI 氏「スクモと言って、湖底から泥をとってきて、練って乾かしてこたつの中に入れてた。贅沢はできないから、少しでもお金を使わないように、そんなことを考えた暮らしをしてた」

松尾「『スクモ』と呼んでましたか？」

MI 氏「うん、『スクモ』って呼んでた」

TM 氏「獅子鼻のところには安土城のお姫さんに絡んだ伝説があるんですけど、伊庭の方には何か残ってませんか？」

MI 氏「獅子鼻のことも聞いたな」

TM 氏「亡霊が出たって言ってたけど、あれはメタンガスではなかったかと」

MI 氏「私も一度火の玉を見たことがあるんです。それだけは忘れられん」

YM 氏「確かに、干拓後の小中で井戸水をしてはったところがあって、そこからガスが出てくるから集めてはった人がいたわ」

1-10 OS 氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005 年 10 月 13 日

対象者：OS 氏

場所：OS 氏宅

対象者データ：1925 年生まれ。小中の湖があった当時，下豊浦の漁師だった。

ヒアリング概要：OS 氏には，二度目のヒアリングとして年間の漁の様子について聞いた

松尾「漁の一年の流れを教えてください」

OS 氏「1 月の寒い時は、『ヨシ巻き漁』と言ってヨシを取り巻いて魚をつかむ。1 月だから産卵期ではない。産卵期やったらヨシのところに来て産卵するからよくわかるんやけど。産卵期でもないのに何でそんなに浅いところに魚があがってくるのかは分からない。」

OS 氏「そのヨシ巻き漁でたくさんとれた魚はワタカやフナ。フナは，今のようなニゴロブナではなくて，ゲンゴロウブナが多かった。ワタカやゲンゴロウブナは植物性のプランクトンを食べる。同じフナでも，ニゴロブナは動物性プランクトンを食べる。そういう植物性プランクトンを食べるフナとかワタカやらがヨシ巻き漁でつかめるわけや。藻やらも食べよるから，田んぼが水で浸かった時とかは田んぼに入って稲まで食べてしまいよる」

OS 氏「ヨシ巻き漁はどこでもできるわけではない。だいたい 2 箇所くらい。西の湖の宮葎の所と地下葎の所。弁天内湖ではできる所が少なかった。というのは，ヨシ巻き漁はヨシ地で遠浅になってる所でないとできないが，そんな場所が弁天内湖では少なかった。やったとすると，芦刈あたりでやってたくらい」

OS 氏「ヨシ地に行ったら一番最初に魚が逃げへんように，ヨシ地と湖の境目に 100 m くらいの網を張る。そして，張った網に対して垂直に網の両端を簾で仕切ってしまう。そして，中の魚を一方へ追って行って，魚がいなくなってきたら切り網を張っていく。そしてまた，同じように追って行って切り網を張っていく。そして最後は 8 畳よりも大きいおおきさまでに追い込んで，明るいところにツボをこしらえる」

松尾「それは魚が明るいところに逃げる習性があるからですか？」

OS 氏「そうよ。そしてツボをこしらえたら，網と簾で囲った中に生えているヨシを全部刈ってしまう。そして，四つ網で魚をつかむ」

松尾「1 回のヨシ巻き漁でどれくらいとれたんですか？」

OS 氏「だいたい 150 貫くらい」

TM 氏「600 kg やな」

TM 氏「ヨシ巻き漁をしている場所は，ヨシ地で砂地のところやったな？」

OS 氏「砂地ではないねん。ヨシ巻き漁は遠浅でないとできないけど，砂地ではできない。魚がよってこない。大中の湖のヨシ地がそうやった」

松尾「どうして砂地だったらヨシ巻き漁ができないんですか？」

OS 氏「魚が寄りよらんのだ」

TM 氏「ヨシの密度が少ないから魚が寄ってこないや」

OS 氏「西の湖や弁天内湖の方では砂地ではなく密度も多いし、遠浅になってるから寄ってきよる」

松尾「ヨシ巻き漁ができるところの土質は？」

OS 氏「泥地というか、砂地ではないけれどヨシの根の多い硬い土」

TM 氏「ヘドロではないな。泥というよりか土やな」

TM 氏「冬は他にどんな漁してた？」

OS 氏「他には、漬柴漁」

松尾「先にお聞きしたときは大中の湖でやっていたと聞いたのですが、弁天内湖ではやってなかったのですか？」

OS 氏「うち個人で一つやってた。個人でやってたけど、あげる時は皆に頼んでやってた。一人や二人ではできひん。大中の湖の方は5軒の組合でしていた。西の湖の方で『コイ寝屋』と言って桑や柿の大きい根っこをいれてた所があった。そこにはコイやフナが寄ってきよるの。だから私たちは『コイ寝屋』と呼んでた」

松尾「漬柴漁は何月くらいですか？」

OS 氏「だいたい正月にあげてた。一度あげると次の年まで魚がほとんど入ってこない。でも、大中の湖の漬柴には3月の中ごろに琵琶湖からモロコが上がってくる。上がってきて、ものすごく天気がいい日が続いて霜が降りた時、水が冷え込んだ時にモロコがこの漬柴の中に入ってくる。だから大中の湖の漬柴は正月頃と3月・4月頃の2回、あげることができた」

松尾「お正月明けくらいに漬柴をやって、それからヨシ巻き漁ですか？」

OS 氏「いやいや。先にヨシ巻き漁をやって、そのあと漬柴漁やね。漬柴漁はお正月とは限ってないよ。だいたいお正月頃。あれは天気が一日良くないとできないから。舟で行って、そして4枚の簾でまわりを囲ってツボをこしらえる。それから中の柴をすくって舟越しに隣に移す。その移動した所が次の漬柴の場所になる。簾で囲うと言ったけど、4枚のうちの1枚の簾は高さが低い。水面から出てる高さを1尺ほどの船縁と同じ高さにするんや。そうすると柴を舟にあげやすい。それ以外の簾は水面から出てる高さが2尺くらい。そうやって先に柴をあげてしまってから四つ網で魚をつかまえる」

松尾「漬柴は晴れた天気の日じゃないとできない？」

OS 氏「そう。一日穏やかな日でないとな、風が吹いたら舟の上にはいられない。風が舟の横向きにあたったら、漁ができなくなり魚もつかめないで終わってしまう。だからよっぽど良い日を選んで行かないといけなかった」

OS 氏「漁師は朝の天気を見て、今日は風がない、あると言うのがよくわかる。なんぼ良い天気の日でも明日は風が出るな、とか前の日からわかるんや」

松尾「どうして分かるんですか？何か知恵とかあるんですか？」

OS 氏「それは比良山の様子をみたらよく分かる。山がすっきり見えてたら、明日はいい日やから漬柴をあげようか、となる」

TM 氏「それだけやなしに、風向きやとか五感で分かるんや」

OS 氏「経験やな」

松尾「漬柴ではどんな魚がとれましたか？」

OS 氏「漬柴はあまり大きな魚はとれない。一番多いのがテナガエビ。次はギギやとかナマズが入ってた。子ジャコ

とか、ボテジャコもいた。4艘の舟で囲むようにして四つ網でとったり、投網でとったりした。四つ網はヨシ巻き漁の時よりも細かい目の網やね」

松尾「漬柴漁で使っていた道具は？」

OS氏「柴をあげるのには一本鍬と二本鍬を使う。一本鍬の方に二本鍬を使って柴を寄せてくる。そして、一本鍬と二本鍬とで挟んで引き上げると、柴をあげることができた。それからさっき言った、四つ網とか投網を使って魚をあげていた。魚をつかむのは寒いけど手で」

松尾「漬柴漁は天気がいい日。ではヨシ巻き漁は？」

OS氏「ヨシ巻き漁も天気の良い日。でも漁はヨシの端でするし、ヨシ巻き漁をするヨシは北側にあったから風が少し吹いても風が当たるといことはなかった。魚がヨシの中にいるのを確認すると、明日行こうかと言って天気にはそれほど関係なく行ってた。風があるとヨシ地に行くまでが大変なだけ」

松尾「では、行くのに支障がない天気の日？」

OS氏「そうそう」

OS氏「寒い時の漁はまだある。『タタキ』と言って刺し網（『小糸』と呼んでいた）を張って、網につくように魚を追う。コイやフナがとれた。私らは『タタキに行こうか』って言った」

松尾「いつごろやってたんですか？」

OS氏「12月から3月頃までかな。冬の寒い時でも、水が澄んでたらつかめない。水が澄んでたら魚は小糸が見えるから絶対に逃げる。冬の湖は北風が吹いてよく荒れる。吹いたら大中の湖や西の湖は濁る。魚は冬は冬眠してじっとしてるんや。それが、そういう嵐になると水が濁ってくるから自然と水面に浮いてくるの。そんな湖が荒れた後に漁に出る。それで、目の粗い網（1尺に7つの目があるもの）を70mほど張る。そして、『追い金』または『ガバンコ』といって竹の竿の先にラップみたいなのがついてるものでガバンガンと追う」

松尾「荒れた後に出るんですか？」

OS氏「荒れた後でないとかあんの。濁ってるうちがいいの。濁ってないとつかめない。冬の荒れた後は2日から3日は漁に出れた。2月頃が一番寒いときは1匹が10kgくらいのコイがつかめた。寒いときは大きい魚がたくさんとれたんや。1回あげると5〜6匹はあがった。1日に7回〜8回できる」

松尾「小中の湖でどのような魚がとれるんですか？」

OS氏「コイとかフナ。大きい魚。でも大中の湖に比べたら平均して小ぶりやった」

松尾「どの辺でできたんですか？」

OS氏「どこでもできた。タタキは荒れ方によっては魚の集まる場が違う。それも分かる。西風がきつくて濁った場合はどういう所に魚がいる、とか」

松尾「それも感覚ですか？」

OS氏「そうそう。今までの経験。北風が吹いた時やったら真ん中よりかは南側。やっぱり濁りが多い所。ただし、全面濁るときがある。西風が吹いて『北返し』と言って、西風やったのが北風に変わる。その時湖は全面が濁った」

OS氏「3月頃になると魚の勢いきつからタタキの網ではなかなかとれない。そのかわり、夜に網を仕掛けておいで翌朝あげる。暖かくなってくると、追わなくて網をはめるだけでとれた。その時は水が濁ってなくても魚がつく」

松尾「それは何と呼んでましたか？」

OS氏「それは『ネバイ』っていった。『ネバイに行こう』って言った。1枚が20mくらいの長さの網を30くらい持って行くの。それをはめておいて朝にあげに行く。ネバイはどこでもできた」

松尾「だいたい3月やったら毎晩のようにネバイを仕掛けてた？」

OS氏「毎晩のように行くけど、今晚は風が吹くって分かっていたり、夜中に西風が吹いて荒れる時は行かないだ。夜にだけ吹く西風を『夜西』と言って、夜西の時はよっぽど考えないといけなかった。風が吹くと藻でいっぱいになって魚どころではない」

松尾「では、風がきつくない日だったら毎晩ですね」

OS氏「4月になれば今度はモロコがとれる。早い時は3月15日にあった近江八幡の左義長祭の時にもモロコがつかめた時がある」

OS氏「ほんとと言うたら4月からが一番のモロコの時期」

TM氏「わたらの記憶では春休みにモロコを釣りに行った。菜種の花が咲く頃やな」

松尾「では3月下旬くらいから？」

OS氏「そうやそうや」

TM氏「3月の下旬くらいから4月の中旬くらいまでかな」

OS氏「4月になったらモロコをつかむために細かい網の目の小糸にかえてネバイをしていた」

TM氏「狙う魚によって網をかえるわけやな」

松尾「3月はどんな魚がとれましたか？」

OS氏「ネバイはフナにコイ、ナマズ、モロコやら」

OS氏「ほんで、モロコはそういう網で大中でつかむんやけど、みんな子を持つてるんや。脂がのって、子をぎっしり持って、子持ちのモロコは網で焼いたら美味しいんや」

松尾「では小中の湖にこの時期に入ってくるモロコは？」

OS氏「小中の湖に入ってくるのは遅い。やっぱり大中の方が早い。モロコは産卵するために内湖に入ってくる。ヨシの際で産卵するんや。でもヨシの際でも遠浅になっている所は駄目」

松尾「小中の湖ではネバイでモロコはつかまなかったんですか？」

OS氏「いやいややってた。そやけど、大中の湖の方が収穫がいいから大中の方へ行ってた」

松尾「どの辺に産卵に来るんですか？」

OS氏「どこでも。ヨシの中を伝ってね、朝の10時ごろになると柳の根っこの所に群れてる。真っ黒というか、真っ白になって産卵が始まる。そう言うときを狙って『サデ』という網を使ってモロコをあげる。一回でかなりの量をつかめた」

TM氏「常楽寺のあたりの田はこの時期になると水が入ってくるのよ。そうするとモロコが音を立ててその田んぼに上がってくる。そして田んぼで産卵して卵が孵化すると稚魚はヨシの中に逃げ込みよる」

OS氏「そうやったそうやった。ここらへんは割りと土質が硬い」

松尾「4月下旬からは？」

OS 氏「4月下旬まではまだモロコがいてる。5月に入れば今度は別の魚の産卵期。モロコが一番産卵が早い。5月になったら一雨あるごとに、産卵のために魚がものすごく琵琶湖から入ってくる。だから漁師としては一番忙しい時期」

TM 氏「フナとコイや」

OS 氏「5月から6月にかけてはそういう産卵に入ってきた魚をつかむ」

松尾「どのような方法でつかんでたんですか？」

OS 氏「方法は何種類かあった。雨が降ったら魚がヨシの端の浅瀬で産卵する。そういう魚の産卵の通り道を自分で考えてつかむ。『タツベ』といって竹で編んである仕掛けをこしらえて30~40個ほどはめる。はめっきり。毎朝魚が入ってないか見に行く。入っているタツベもあつたら入ってないタツベもある。雨が降って濁りがまわったときには魚の動きが活発になるんや」

OS 氏「タツベの網目の間隔がマッチ箱を横にしたくらい幅がないとあかんという規制もあった。狭すぎると小さい魚もつかむということで、3~4cmの間隔で編んでいく」

松尾「だいたいどの辺に仕掛けるんですか？」

OS 氏「苔あたりが一番多かった。それ以外でもあらゆるところで仕掛けてた。山本川の川筋とかね」

松尾「5月はタツベ以外では？」

OS 氏「5月は『モンドリ』とかでヨシ地近くに魚がくるのをつかむ。ただしタツベでも少し鎌でヨシを刈って場所をこしらえておくこともあった」

TM 氏「魚がヨシ地にあがってくるときに投網をよく見かけたんやけどな」

OS 氏「投網もうってのはった。でも漁師としては投網だけでは絶対に生活できない」

TM 氏「そうや。そう言ったら遊びや。遊びか漁師以外の人が好きでやってた」

OS 氏「うん。専門でやってた人やったら大きい魚もつかんできてはったけど。それでもなかなか毎日ということはないしね。われわれは投網だけでは生活できひん。それから、こういう時期にフナやコイはたくさんとれる。とれるけど、この時期につかんだ魚は子を産む前やから魚を持っただけで子がだらだらと落ちよる。だからフナ寿司とかには間に合わない。その時の魚が一番値打ちがないの。だからネバイやとかでつかんだフナは子がしっかりしてて値ははったけど、タツベでつかんだ魚は二束三文。目方はたくさんつかめるけど商品価値はない」

松尾「モンドリは何箇所くらい？」

OS 氏「たくさん持ってる人はたくさん仕掛ける。タツベとよく似たような所に仕掛けた」

OS 氏「モンドリ、タツベは6月の梅雨くらいまでやね。ほんで、最後になってくると大きいコイが入る。5月から6月にかけてはフナが多いけど、それ以降はコイが一番最後に入ってくる。コイは大きいのが多かった」

松尾「では7月は？」

OS 氏「7月になったら今度はウナギつかみ。これがまた楽しみになるんやわ。8月いっぱいまではウナギつかみ」

松尾「節を抜いた竹の筒を使うんですか？」

OS 氏「そうそう。そしてこのあたりは1本を紐でくくってるけど、琵琶湖は3本を紐でくくったヤツを使ってる。何でここは1本なんかという、一日に何回もエサを入れたらつかめることができるからや。夜、『まぐれ時期(たそがれ時)』になったら魚の活動が激しい。そう言うときに竹筒にエサを入れてつけておく。エサはシジミ。シジミは舟の上からすくってたら竹のまるかご(直径40cmくらいのかご)に30分もしないうちにいっぱいになってくるんや。」

それを2杯ほどとる。それから日が暮れかけたら竹筒を沈める。竹筒に紐がくくってあるやろ。その紐の先にヨシがくくり付けてあって、竹筒を沈めると浮きの代わりになって浮いてくる。竹も浮くけど、何年も使って沈むようにしておく。皮が薄くなった古い竹筒ほどウナギが入る率がいいの」

松尾「使い込んでの方がいいんですか？」

OS氏「そうやそうや。そして夜になったらあげる。あげに行くときは一人は船頭、もう一人はあげる人というように二人いないとね。湖底からあげるときは考えてあげないと。静かにあげないと、傾いたりしたらウナギが出てきていしまう。でも10本か7本に1匹くらいしかつかめへんかった。だいたい4列に並べて200本くらいはめる。向きも風向きに合わせて並べる。南西の風やとか伊吹から吹いている風とかが多い。横当たりにならないようにね。風に向かって船が行けるように、真っ直ぐ風に向かってたら船も曲がって進むこともないし、仕事がしにくくなることはない。一度すくってウナギが入ってるか入ってないか確認したら、またすぐにエサを入れてつけておく。それを次から次へやっていく。そうすると1時間くらいかかる。それをやって一服してまた同じところをみる。そうすると、もうエサだけ食べてたりしてる。エサのシジミを小さくつぶすと早いこと食べてしまいよるから、つぶす時に貝殻に小さい穴が開くくらいでやめておく。そうすると食べるのに時間がかかって長いことウナギが中に入ってる。すると、つかんだ魚は口の周りが血だらけになつとる。つかんだウナギの大きさもまちまちやった。ウナギにも種類があって中でも腹の黄色いウナギが皮がやわらかくて一番美味しい。次は白いやつ。銀色のやつもおった。アユモドキとかも入ってることがあった」

松尾「ウナギの筒はだいたいどの辺りにはめてましたか？」

OS氏「だいたい大中の湖も西の湖も一面やった。大中の湖のほうがたくさんつかめた。西の湖もつかめたけど、場所がそんなに広くなかった」

松尾「弁天内湖の方は？」

OS氏「あんまり覚えがない」

OS氏「下豊浦にはウナギの漁師さんが5~6人いた。それ以外に堅田の方からウナギをつかみに舟で寝泊りして来てはった。舟の中に道具全部積んできて、一本針と言うのかな、長い針を流してそして朝になってあげてた」

OS氏「ウナギの漁は7月、8月までできた。9月、10月になってきたら、3月ごろにやってたネバイをまた繰り返す。コイやらフナを目の粗い小糸でつかんでた。それから11月頃になってきたらまた、1月にやったタタキをした。同じ網の目でも大きいやつはつかめなかった。小さいコイやフナ。大きいやつがかかっても勢いがあるから網を破って逃げてしまいよる。小さいと言っても普通のサイズ、500gとかのね」

松尾「12月になってもタタキ？」

OS氏「そやそや」

OS氏「漁師さんが65人いたけど、みんな小糸やタツベだけでなしに、田んぼが終わってから（正月前）『貝引き』といって貝をつかんでた」

松尾「どの辺で？」

OS氏「これはこの辺全体に貝がおった。いくらつかんでもつかみきれないくらい。ただし、小中の湖の貝と西の湖の貝と大中の貝とは全部色が違う」

松尾「身の色が？」

OS氏「殻の色から身の色まで。主に西の湖やとか小中の湖での貝引きは、『イザ』と言って金で貝が入るのをこしらえて、舟からはめて、そして舟を動かしてロクロというので湖底をかいて貝をつかむ。そういう組合員が多かった。百姓のあいまに片手間に小遣い稼ぎにしてはった貝引きが多かった。ほんで組合員が65名もいたわけ」

松尾「田んぼが終わってからというのは10月くらいから貝引きをしてたってということですか？」

OS氏「そうそう。田んぼが終わったのはもっと遅い。11月の下旬から12月になってしまうくらい。ほんで3月頃まではそういう貝引きができたわけ」

OS氏「イザの他に舟の上からとらはる『マンガン』というのもあった。シジミやらをとるのはこのイザの目(刃)が小さいマンガンを使う」

OS氏「シジミは専門の人がやってはった。貝引きはたいがい目の粗いのを使ってやってはる。そう言うのを舟に積んでやってた」

松尾「組合にお百姓さんも入っていたということですか？」

OS氏「そうそう。だから65人も組合員がいた」

松尾「漁師さんで貝引きはしてはりました？」

OS氏「漁師さんは動力(船舶)を使って貝引きをしてはった。本当言うたら内湖では動力で貝引きをしたらあかんの。でも今から40年ほど前はここらへんでも動力で貝引きをしてはった」

TM氏「ギギは漁しなかった？」

OS氏「つかめたつかめた。ネバイの小糸にものすごく付いてくる。網につくギギは大きい。そういうギギが沢山いた。ギギは本当は美味しい魚。でも私らがつかんで売りに行くと安くたたかれる。魚はフナやコイだけじゃなくてギギやナマズもつく。そやけど、商品価値がないから、ナマズなんかやったらその場で捨ててた。ギギだけは持って帰って売ってたりした」

TM氏「ギギは体にいいとか言うしな。黒焼きにして食べるといい」

TM氏「それから、ヒガイはどうやった？」

OS氏「ヒガイは石垣のところではなかったらつかめなかった。細かい目の網を西の湖やら大中の湖の真ん中で仕掛けても、なかなかつかめなかった。ヒガイは網でも短い網(30cmくらい)でないととれない。石がいっぱいある所にいよるからな。そしてあんまり深いところにはめるよりも浅いところに網をはめた方がたくさんとれる。そのかわり、あげていると、ゴロ(重り)が石の間に引っかかったりして網が破れてしまったりすることがよくあった。つかむ所が少なかった。本当に石垣じゃなかったらあかん」

松尾「ヒガイをとるのはいつくらいですか？」

OS氏「小糸網でとるからいつでもつきよることはつきよる」

松尾「年中？」

OS氏「そう年中ね。でも、ここは石が沢山ある所やから風吹いたらそれこそかなわんし、それに編みも沢山持っていないし、だから良い晩にたまにはめにいく程度」

松尾「良い晩というのは風が吹いていない」

OS氏「そうそう風の吹いてない晩。そうでなかったら網がくしゃくしゃになる」

OS 氏「それとね、琵琶湖の小糸は下まで沈めないで途中で止めて固定してしまうけど、西の湖や大中の湖でわれわれが使うのは、下まで沈めてしまって、そして魚があたったら魚に小糸が付くようなもの。それは、重りが重すぎると、付いた魚が網を破って逃げてしまう。魚が網に当たっても網が魚に付いていってしまうようにはめる。だから網もびんと張らんとなくゆるくはめておく。重りが重すぎると魚の付きが悪い。だからあんまり重い石をつけないで、ただ沈んでいく程度のもをつける」

TM 氏「オイカワはどうやった？」

OS 氏「オイカワは西の湖では少なかったんや。ハイジャコの方が多かった」

TM 氏「ハイジャコ全体の名前を『オイカワ』と言うけど、わしらが言うオイカワはハイの雄のことを言った」

OS 氏「だからハイジャコとは雌のこと」

TM 氏「ハイジャコはおったけどもオイカワは少なかったんや」

OS 氏「そう。でも琵琶湖の方ではよくオイカワをつかんで持ってきてはった」

TM 氏「ボテジャコは漬柴の時にとるぐらいのものやった？」

OS 氏「そんなぐらいのものやった。でも4月のモロコの網にもかかる。しかしその時は手間がかかっても全部はずしてた。それは冬につかんだボテジャコのほうが商品価値があるから。寝屋（漬柴のこと）にはたくさんボテジャコがいた」

TM 氏「そしたら寝屋の時にとったということやね」

OS 氏「そうや寝屋の時にボテジャコが多かった。網にもかかる。ボテはボテで商売にして売ってた」

TM 氏「ボテは旬はいつや？」

OS 氏「旬は冬。寒ボテと言って、寝屋でつかんだ小さいボテやったらそのまま炊いても大丈夫やっせん。寒ボテとは普通のボテやねんけど、冬の寒い時期にとったボテは美味しいぞ、ということ」

<その他>

松尾「伊庭内湖には入れなっただけですか？」

TM 氏「伊庭内湖には入れなかったことはないのよ。そこに田んぼをしに行ってた人は入ってた」

松尾「漁師は行けなかったけど漁師じゃない人は行けた？」

OS 氏「私らはコイを養殖してる人がいはるから入らなかった。わざわざ山越して田んぼへ行っただけ人もいたんやで」

松尾「伊庭内湖を通らないように？」

OS 氏「うん」

TM 氏「だから NM 氏は普通の手入れの時は山越して行って、収穫の時は舟で行ったって言ってはった」

松尾「田仕事に行く時はどこの田んぼに行くにも田舟で行ってたんですか？」

OS 氏「そうよ。遠いところの田んぼはな」

TM 氏「陸でいける田んぼは歩いて行ってた。江ノ島や巴なんかは舟で行かな行けなかった」

松尾「スクモがとれるところは、スクモの上は砂地ですか？」

TM 氏「砂地じゃないのよ。かと言って泥地でもない。半分炭化した木やとかヨシの細かくわれたものとかが交じっ

たような土なんや」

OS 氏「その土をのけた下にスクモがある」

松尾「では砂地ではないんですね」

OS 氏「砂地ではない」

松尾「モラとりのところは泥？」

OS 氏「モラとりの下は砂ではなくて土，コウガイモという藻が 30 cm ほど伸びてた。ほんでモラとりといって藻をとって田んぼの藻塚場にあげる。ほんで乾燥してから暇な時に鋤で切り取ってモッコで田んぼに運んだ」

OS 氏「全体的に内湖は泥地だった」

松尾「柳の木があったと聞いたんですが，いくつくらいあったんですか？」

OS 氏「柳の木は沢山あった。何で沢山あったのかと言ったら，田んぼに行くには子連れで弁当持ち。6月20日ごろからが田植え。暑い最中や。それで日陰になるように柳の木を植えてたんや。そこで子どもを寝かしたり，ご飯食べたりした。暑い時やから柳の木の枝が影になるように考えて植えてた」

TM 氏「だから柳の木が1本2本あったということではなく，田んぼの周りに沢山あった」

OS 氏「暑い時に田仕事やから日陰がなかったらいられへんかった」

TM 氏「だから水辺に植わってる柳の根っこが水の中に出てる。そういったところにモロコが卵を産みにくる」

OS 氏「そうやったそうやった。だから何本も何本もあった。一軒に1本くらい植えてるんや。何本も柳の木はあったけど、『神さん柳』は呼び名があった。なんで呼び名があったのかは知らんけど，私らもその名前は聞いたことがあった」

松尾「小中の湖の干拓のどこをお聞きしたいのですが」

OS 氏「小中の湖の堤防は，作った所の端の土を盛って作ってた。そこに朝鮮の人が住んでた。家のない人が堤防に穴を開けて寝泊りしてはったんや。そしたら堤防が燃えてね。スクモみたいな土やったから，きっと乾ききってたんやろ。私も消しに行ったので覚えてる」

松尾「それは干拓してしまった後ですよ？」

OS 氏「後のこと」

TM 氏「干拓をした時は当時，戦時下やったために，若い人たちは全部兵隊に徴兵されてはったんや。だから干拓工事に当たった人たちは，高等小学校出たてで，まだ徴兵検査にかからないくらい若い人と，40歳以上の兵隊に徴兵されていない人たち。それくらいしか残っていなかった。そのために，朝鮮の人を連れてきて，そして今の松原（下豊浦の村の中にある旧朝鮮人街道）と言うてるところに飯場（はんば）をこさえて，それから工事をしてもらう。それからオランダ人の捕虜を伊庭のところに收容所を作って。なんでオランダ人なんかと言うたら，オランダの土地は干拓地やし，よく知ってるやろうと言うことで連れて来たんやと思う」

OS 氏「捕虜を使ったということは聞いていた」

TM 氏「そういったことで，工事をしたわけ」

松尾「航路について聞きたいのですが」

OS 氏「円山のお宮さんと伊庭の金比羅さんには密接な関係があった。その間行き来が絶えなかった」

TM 氏「明治 23 年に東海道線ができた。それまでは舟は主な交通手段やったんや。だから能登川港から伊庭内湖に入ってそれから弁天内湖に入って豊浦港、そして常楽寺港によって八幡口を通っていくのと、八幡堀を通っていく航路があった」

松尾「それは明治以前ですか？」

TM 氏「それ以前もそうやし、太湖汽船があったのが明治 16 年からやから」

松尾「冬の風向きについてもう一度教えてください」

OS 氏「冬に西風は吹くけど、『北返し』と言って、西風が吹いててちょっと緩やかになったなと思ったら今度は北風がすごく吹いていく。西風が吹いて北返しになった時がものすごくひどいし、雪も持ってくる。そういうことを知ってないと、皆遭難してしまう」

1-11 MI氏ヒアリング結果

ヒアリング実施日：2005年12月28日

対象者：MI氏

場所：滋賀県立大学

対象者データ：1922年生まれ。小中の湖があった当時、伊庭に住む農家の息子だった。

ヒアリング概要：MI氏には、二度目のヒアリングとして伊庭内湖全般の様子について再度聞いた

松尾「現在の大中の湖と西の湖のことを何と呼んでいましたか？」

MI氏「大中の湖の方は『キタノ』って言ってたな。琵琶湖のことは『外湖（そとうみ）』」

松尾「では西の湖は？」

MI氏「『南豊浦の湖（うみ）』と呼んでた」

松尾「弁天内湖のことは？」

MI氏「『西の湖』と言ってた」

松尾「伊庭内湖は真ん中に進むにつれて段々と深くなっていたという事でしたが、特に深くなっていた所はなかったですか？」

MI氏「舟に乗ってたから分からなかったな」

松尾「伊庭には舟がたくさんあったとおっしゃっていましたが、それは漁師をしている家が多かったからですか？」

MI氏「いやいや。昔は車がない時代やったから田んぼへ荷物を持ち運びするのに使ってた。舟は一種の運搬用具やったのよ。多い家は2〜3艘くらい持ってた。1艘だけの家はまれだった。昔、伊庭だけで400艘以上あった」

松尾「田んぼが村から離れた所にあったから、荷物を運ぶために舟が多かったということですか？」

MI氏「そうそう。隣の村でもみんな舟は大事な運搬用具だったのよ」

松尾「田んぼに行くのは常に舟で？」

MI氏「歩いてでも行っていた。細い野良道を。道具を持っていくとか、収穫物を家に持って帰ってくるときとかはみんな舟を利用した。だからカワトがたくさんあった」

松尾「カワトは田舟を停める以外にどのような使い方をしていましたか？」

MI氏「伊庭になんでたくさんの川があるのかといたら、昔伊庭氏の殿さんがお城を構えたのよ。平地に構えたから簡単に攻めてこられないように碁盤の目のように堀を作った。だから川が沢山できたんや。そして、そこに住民が住むようになった。舟で物を運ぶようになると自分の家の端の川から荷物を揚げたり降ろしたり、水を汲み上げたりするのに必要やからカワトを作ったの。各家に1つか、2軒に1つか。デガワトとかウチガワトとかイリガワトとか作られていた」

松尾「デガワト？ ウチガワト？」

MI氏「川があって道を挟んで家がある。川の方へ階段を付け足したような形のものを『デガワト』，そうでないのを『ウチガワト』と言う。そして，階段が二つあるのを『リョウガワト』。また，家によっては家の中に川の流れを取り込んだところもあって，それを『イリガワト』と言ってた」

松尾「カワトは水を汲むために使っていましたか？」

MI氏「昔は飲み水や洗面用，畑用にカワトで水を汲んでいた。他にも，田舟に乗ったり，荷物を運んだりすることに使っていた。ウチガワトは舟が家のそばに着いた。ただし，イリガワトは，舟は停められない」

松尾「イリガワトは水の利用に使ってましたか？」

MI氏「イリガワトは洗物とかね。朝一番に水を汲んでつぼに入れたりしてた」

松尾「井戸はありましたか？」

MI氏「井戸と言っても掘りぬきで湧き出る井戸。金気（鉄分）が多かった。昔井戸のない時代は川の水を飲んでいた」

松尾「1軒に1つずつあったんですか？ それとも共有井戸？」

MI氏「共有井戸もあったけど，各家に1つが多かった。そうでないと，共有やったら自由に使いへんことがあるから。中には金気の問題で2軒で掘りおうたりしてた家もあったけどな」

MI氏「汲み上げた水をろ過してた家もあった。ろ過は砂でやってはった」

松尾「使い終わった水はどうしてはりましたか？」

MI氏「昔は絶対に川には流さへん習慣があった。お風呂の使い終わった水は，みんなトイレに流れ込むようになってた」

松尾「お風呂の水を汲んでトイレに運ぶんじゃなくて？」

MI氏「お風呂からトイレに水が流れるように筒があったのよ。家の裏など堀穴がしてあり，流し込んだり畑にまいたり」

松尾「お風呂の栓を抜いたらトイレに流れ込むような感じ？」

MI氏「そう」

松尾「湯殿とかには溜めなかったですか？」

MI氏「どこにも溜めず直接トイレに流してた。そして水と混ざった下肥をとって，畑やら田んぼにまいて肥料にしていた。畑が近くにない家は舟に下肥の大樽を乗せて運んでた」

松尾「では洗濯物をした後の水は？」

MI氏「洗濯物は家の外に洗濯場があって，使い終わった後の水は畑とかにまいてはったり，トイレに流している家もあった」

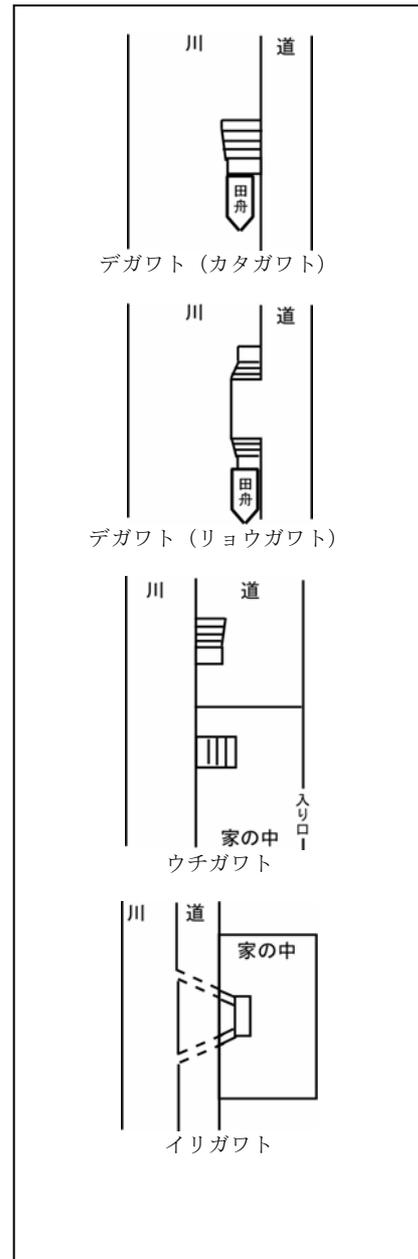


図1 伊庭のカワト

松尾「川に洗濯場があるのではなくて？」

MI氏「川のところではしてない。家の裏とかそういうところでした」

MI氏「そして、みんな水を汲むのは朝してはった。お風呂の水もみんな川の水をバケツで汲んで日当たりの良い所であたためて、少しでも燃料が助かるようにしている家もあった」

松尾「水がきれいやったとおっしゃいましたが、湖底は見えましたか？」

MI氏「水はきれいやったな。きれいやったから湖底まで見えてた。浅いと思って飛び込んだら深くてビックリすることがあった」

松尾「前回、梅花藻が咲いていたと言っはりましたが、咲いていたのは川ですか？」

MI氏「伊庭川の川筋に咲いてたのよ」

松尾「小中の湖ではどのような植物が生えてましたか？」

MI氏「藻が生えてた。花のきれいな藻は記憶にないけど、伊庭川には梅花藻が咲いてたな。ヨシが生えていた場所は、安土山のふもとはなかったけど、だいたいの湖岸にあった」

松尾「伊庭内湖に流れ出てた川はありましたか？」

MI氏「伊庭内湖に流れ出てた川は『妙金剛寺川』やな。大中の湖の方へは『名古川』やったな」

MI氏「モロコとアユは5月になると群れてあがってくる。学校が終わったらバケツ持っ取りに行っった。伊庭川へはフナやコイよりも他の魚が群れをなして遡上してきた。魚つかみの人が投網やサデでつかんでた」

松尾「ヨシ地辺りに上がってきましたか？」

MI氏「郷頭野の田んぼとかに上ってきてた。モジで受けると、モジがいっぱいになった。それくらいすごかった。ワタコ（ワタカのこと）も季節には群れて上がってきてたし、ナマズも上がってきた。フナが一番多く、みんな腹いっぱいの子持ちだった」

松尾「内湖でやってた遊びはどんなのがありましたか？」

MI氏「昔は遊ぶ道具がそんなになかったから、かくれんぼとかコマ回しとか、カルタとりとか。お宮さんや安土城のお城跡にもよく遊びに行っった。湖へは舟に乗って行っった。安土山の近くの石垣に行っって魚つかみとか、金比羅さん近くで水泳とか、浜辺で貝とかシジミをとっった。親が田んぼや畑で働いてて田舟を使っっていない時、高学生が遊びに使っった。8月1日近くになると親に弁天さんに連れて行ってもらっって竿飛を見に行っった」

松尾「弁天島に行っったんですか？」

MI氏「弁天島へは親に連れて行ってもらっった。遠いし深かったから子どもだけでは行けなかった。伊崎不動にも連れて行ってもらっった。あとは家の近くの川で魚つかみとか魚釣りとかしてた」

松尾「遊びでとっった魚とかはどのように調理をして食べてましたか？」

MI氏「親が刻んで炊いたりして、小魚をよく食べてたな」

松尾「御造りとかはしてませんでしたか？」

MI氏「御造りは大きい魚でないとしてもらえないから、子どもがつかんだような小さい魚はしてもらえなかった」

松尾「砂利だったりとか砂地だった湖岸はありましたか？」

MI氏「金比羅さんの辺りは砂地やったな。そこで遊んだりした。幼少の頃は水泳にたくさんの方が来ていた。駅の日清防積工場の人たちがたくさん来てた」

松尾「『藻とり』はやってはりましたか？」

MI氏「父親がやってた」

松尾「どの辺でとってましたか？」

MI氏「『キタノ』でとってた」

松尾「金比羅さん辺りで？」

MI氏「うん。その辺は藻が多かった。いっぱい生えてて舟が動かなかったくらい。でも藻はあまり深い所はなかった。それをとって舟の中に入れて。舟が沈みそうになるくらいとってた。畑の低い場所へだんだん高くなるまで積み上げて。秋になると硬くなった藻土を田へ切って運んだ。田畑の肥料にしてた」

松尾「伊庭内湖ではやってませんでしたか」

MI氏「伊庭内湖に近い家の人はやってはったけど、うちはそっちは遠いから『キタノ』の金比羅さんのほうでやってた」

松尾「藻とりは競技になってませんでしたか？ 当時の新聞に書いてあるんですけど」

MI氏「それはなかったんじゃないかな。記憶にない」

松尾「メタンガスが発生していた所はなかったですか？」

MI氏「あまり聞いてないな。競技というより、早く舟が沈むほどに取れば帰宅できる、と心の内で他の人よりはと気が走っていたのだろう」

松尾「下豊浦の方でヒアリング調査をしてたら『獅子鼻の亡霊』とかの伝説をお聞きしたんですけど、伊庭の方ではそういった伝説とか言い伝えとかはないですか？」

MI氏「そうやな。獅子鼻は安土落城の時お姫様たちが湖へ身を投じたと聞いている。亡霊というより、そこから八丁くらいのところに金の鶏がうずまっっていて、まだそのままだという伝説もあった」

松尾「伊庭にはお祭りがあると聞いているんですが？」

MI氏「坂下し祭（さかくだしまつり）」

松尾「いつ頃ですか？」

MI氏「5月のだいたい2・3・4日ごろに5日間やってたな」

松尾「どういったお祭ですか？」

MI氏「伊庭には織山の上に3社、大浜神社に1社、望湖神社に1社、全部で5社の神社と5基のお神輿がある。それをお迎えする祭りや。3日間あるお祭の1日目は『坂下し祭』といって、神様を村にお迎えする。山の上にある3基のお神輿を村まで持って降ろすんや。そして2日目に『卯の時祭』、そして3日目が本祭り。坂下し祭の前日に若い人が出て神輿を山頂の神社まで担ぎ上げる」

松尾「一日目の『坂下し祭』の時は山の上のお神輿を舟に乗せて降りてくるんですか？」

MI 氏「舟は使わない。神輿の飾りもみんな取ってしもて、当たっても大丈夫なようにして持って降りてくる。村に降ろしてきたらまた飾りをつけるのよ。降ろしてくるのは大変な作業で、けが人や死人がでたこともある。そして大浜神社で5基の神輿をお供え物とかしてお迎えする」

松尾「『卯の時祭』の時は何をするんですか？」

MI 氏「昔は夜中に大浜神社から舟で村の中を通過して、金比羅さんの郷頭野のところに神輿を運ぶ。普通の田舟では乗らないから大きな舟を八幡とかで借りてきてた」

松尾「では本祭は何をするんですか？」

MI 氏「本祭は、その郷頭野で式をする。字内を廻り、一年の無事を祈願する」

松尾「8月の弁天祭りのときは、MIさんも弁天内湖の弁天島までお参りに行ったんですか？」

MI 氏「弁天さんの日は関係ない。遊びに行っただけ」

松尾「関係ないんですか？」

MI 氏「全然関係はなかった」

松尾「では関係があるのは下豊浦の人だけ？ お参りにも行かなかった？」

MI 氏「竿飛びしてはったからその見物に行っただけ。伊庭の坂下しをみんな見に来はると同じ感じよ」

松尾「小中の湖が干拓される前の伊庭村には家は何軒ありました？」

MI 氏「何軒やったやろ。戦後は500くらいあったな。疎開者があったから」

松尾「伊庭は漁師が多かったと聞いたのですが？」

MI 氏「漁師は何軒もありました。漁師が何軒もあって、販売所に漁業者が魚を持っていく。そうすると、仲介人が来て買う。一般の人は買えへんよ。商売屋さんが入札して買って、そしてまた売りに出さるんやわ。そういう市場があった」

松尾「伊庭には漁師さんの家は何軒ありましたか？」

MI 氏「10軒くらいはあったんちがうかな」

松尾「伊庭村には漁業や農家をやってはる人以外にどんな職業の人がいましたか？」

MI 氏「商売屋さんがたくさんあった。料理屋（仕出屋）さんが4軒、菓子屋が3軒ほど。呉服屋と酒屋も3軒ほどあった。電気屋さんも1軒、豆腐屋も2~3軒くらいあったな」

松尾「浜能登川は能登川の港の名前ですか？ MIさんは『浜能登川』と呼んでいた？」

MI 氏「『浜能登川』と呼んでた」

松尾「その浜能登川に太湖汽船が入ってきたと前回言っていました、MIさんは直接見たことありますか？」

MI 氏「みたわけではないけど。汽船ではなくて『柴舟』といって柴とか燃料を運んできていた中舟が入ってきた」

MI 氏「昔は現在の安土山のトンネルの近くまで水があって、小波が押し寄せていた。安土山の北は1軒も家がなかった。安土山の地先には小島が1つあったな。安土山の地先を『獅子鼻』と呼んでたんやけど、その先にぽつんと小島

があった」

松尾「その離れ小島は何と呼んでましたか？」

MI氏「何と呼んでたかな、『獅子飛び』やったかな」

MI氏「そして湖岸は浅くて波に洗われて大石小石の砂浜もあった。その石垣の辺りに小魚がうろついていて石の中へ入ったり出たりしていた」

松尾「その石垣はどの辺ですか？」

MI氏「安土山のふもと。そこで小魚が石に入ったり出たりしていたのよ。そこへ舟で近づいて網ですくいあげたりしてたけど、フナとかコイとか大きい魚は深い所にいるから、小魚しか寄り付かなかった」

松尾「石に入ったり出たりっておっしゃいましたが石って何ですか？」

MI氏「石垣というか、波で洗われて石垣とまでは言わないけどね」

以下は本研究で作成した×トリックス表である。

分類	小中の湖								
カテゴリー	物理的								
要素	大きさ	深さ	水質	土質	水の流れ	湖底の地形	風向き (時期)	気温	波の高さ
TK 氏		せいぜい 2~3 m くらいであり深くなかった	舟から下を覗くと藻や湖底の貝がだいたいい見えた。				西風 (?)		
OS 氏		・弁天内湖は平均して浅かった ・弁天島まで行くまでに『ツボ』と呼ばれる深い所があった					・南西 (夏の朝) ・北東 (夏の夕方) ・西風 (冬) 3 日から 1 週間後に北風が変わる (『北返し』と呼んでいた)	・冬になると川やらが全部凍ってしまう	
NM 氏		・弁天さんへ行く途中ちょっとだけ浅くて、もうしばらく行くと深くなった ・浅くて 60 cm ~70 cm	湖底が見えるほどきれいだった		極端に入ってきて流れていたと言っているのは見られなかったが、ヨシ田には所々大中に出る切り通しがあった。	地形図に記載			・伊庭内湖の方が高かった
ZK 氏									
ME 氏		2 m ~2 m 50 くらい	魚や藻が見えた						・弁天内湖...白波が立つときもあった。 ・伊庭内湖...高かった

分類	小中の湖												
カテゴリー	自然環境												
要素	景観	流入河川	内湖生態系（植物，魚，貝）						湖辺生態系（植物，動物）				
			植物		魚		貝		その他の動物		植物		
			名前	時期	名前（方言）	時期	名前	時期	名前	時期	名前	時期	場所
TK 氏													
OS 氏		小中の湖が干拓される以前はたくさん川があった			①ワタカ（ワタコ） ②ホンモロコ ③ギギ ④ナマズ ⑤ヒガイ	①年中 ②春 ③年中 ④年中 ⑤年中	①シジミ						
NM 氏					①ボテジャコ ②コイ ③フナ ④ギギ ⑤ナマズ ⑥ワタカ（ワタコ） ⑦ハヤ（ハイ） ⑧ヒガイ ⑨ドジョウ		①シジミ		①小エビ		①ヨシ		①田んぼのまわり
ZK 氏													
ME 氏					①フナ ②ゲンゴロウ ③ワタカ（ワタコ）	①春 ②春 ③春			①スカエビ	①春先			

分類	小中の湖							
カテゴリー	自然環境			周辺の地名				
要素	湖辺生態系（植物，動物）			小中の湖の呼び名				
	動物			琵琶湖	大中の湖	西の湖	弁天内湖	伊庭内湖
	名前	時期	場所					
TK 氏	ヒヨドリ	12月	ヨシ地	外湖 (がいこ)		弁天内湖と合わせて 『内湖（うちうみ）』	弁天	
	ヨシキリスズメ（ヨシ原スズメ）	6月	ヨシ地					
OS 氏				外の湖 (そとのうみ)	中の湖 (なかのうみ)	・西の湖 ・八幡の人は『常楽寺湖（じょうらくじうみ）』と呼んでいた	・大舟戸（おおぶなど） ・弁天内湖べんてんないこ	
NM 氏	①カモ ②カイツブリ ③ヨシキリスズメ ④白サギ ⑤アオサギ ⑥ミズスマシのよう な大きなもの（タガメかドロガメと呼んでいた）		①ヨシ地 ②ヨシ地 ③ヨシ地 ④田んぼ ⑤田んぼ ⑥田んぼ			西湖（にしうみ）	弁天湖（べんてんうみ）	
ZK 氏					中の湖（なかのうみ）	西の湖	弁天湖（べんてんうみ）	伊庭湖（うみ）
ME 氏					中の湖（なかのこ）	西湖（にしうみ）	弁天湖（べんてんうみ）	伊庭内湖

分類	小中の湖周辺の人びとの暮らしぶり						
カテゴリー	生業						
要素	漁業（漁法・漁具・場所・時期）						
	名前	漁法	漁具	場所	時期	とれた魚の種類（方言）	量
TK 氏	①ヨシ巻き	①魚のいるヨシを囲うて舟から手でつかまえる		①ヨシ地で遠浅になっているところ	①北風がものすごく吹いたあくる日（冬）	①ワタカ（ワタコ）が主	①1回 200～300 kg
OS 氏	①ヨシ巻き漁 ②灯漁（とぼしりょう） ③魴（エリ） ④漬柴（つけしば），寝屋 ⑤貝引き ⑥コイの養殖	① ②カーバイトに火をともしてその光で舟の上から魚を照らしてとる ④柴を水の中につけておいて冬になったらあげる ⑤	①簾（す），切り網，四つ網 ②カーバイト，押し網 ④柴（200束）	①ほとんどが西の湖で遠浅になっているヨシ地. 小中の湖は3箇所くらい ②ヨシ地で遠浅 ③（地形図に記載） ④大中の湖，江ノ島，安土山の川尻 ⑤大中の湖全域と小中の湖全域 ⑥伊庭内湖	①12月から2月 ②夏（夜） ③年中 ④柴は年中浸けておく. あげるのは冬	①フナ，ワタカ，コイ ⑤ダブ貝，イケチョウ貝 ⑥コイ	①1回 150 貫（600 kg）年2回
NM 氏							
ZK 氏							
ME 氏	①ヨシ巻き漁 ②漬柴漁	① ②夏に柴刈りをして湖に漬けた柴を杭で囲っておく. そして冬にその柴をあげる		① ②どこでもしていた	①冬 ②冬	① ②ボテジャコ，ハイ，ガンゾウ，ナマズ，ギギ	①一回で 100 貫（400 kg）以上

分類	小中の湖周辺の人々の暮らしぶり						
カテゴリー	暮らし						
要素	年間行事	水位保持	水利用	遊び			
				名前	内容	場所	男の子だけか 女の子だけか
TK 氏					ヨシの先を尖らせて、水中で開いている貝の口へ持っていき、貝を釣り上げる		
OS 氏				①『弁天さんの竿飛び』 ②水泳 ③スケート	①弁天島から出てる竿から飛び降りる ②板を胸に当てて頭にパンツや服とか色々紐でくくって弁天さんまで泳いでいった ③冬の川が凍ったときにスケートができる	①弁天島	
NM 氏				①シジミとり ②水泳 ③貝釣り ④弁天島の竿飛び	①スコップで泥と一緒にかき、トオシ（篩）で貝だけをとる ②田舟をひっくり返してみんなその上に乗って踏み台にして飛び込んだ ③先の尖らしたヨシを貝の口にちょっともって行く、そうすると貝がヨシを噛みよる。そして釣り上げる。 ④弁天島にある竿から飛び込んで水泳した	①現在やすらぎホールが建っているところ ②江ノ島あたり ③ヨシ地 ④弁天島	④男の子だけ
ZK 氏				①魚つかみ		①弁天内湖	
ME 氏			・お風呂の水...内湖の水をバケツに汲んで、日向水にして使っていた。 ・洗濯物の水...内湖の水	①貝つかみ（8月～9月） ②水泳（夏） ③弁天島の竿飛び ④スケート（冬） ⑤貝引き	①足で湖底を探して、潜って手づかみでイケチョウ貝などをとった ②水泳 ③弁天島の竿飛び ④江ノ島まで行けたことがあった ⑤	①弁天内湖一面 ②	④女の子も男の子も

分類	小中の湖周辺の人々の暮らしぶり				
カテゴリー	暮らし				
要素	天然資源（スクモ、モラなど）				料理
	名前	内容	方法	時期	
TK 氏					
OS 氏					
NM 氏	①モラ ②スクモ ③メタンガス	①藻をとってきて田んぼや畑の肥料にしていた ②亜炭が泥炭化したもので燃料につかう	①モラをかくイザのようなもの（こまざらいと言う）を舟から降ろして湖の底をかく。多い人や一日に舟3杯くらいとる。田んぼに入れるのには、藻塚というものをこしらえておいて、舟から藻塚に放り上げる。しばらくするとだんだんとモラが腐る。そうすると泥ばかりになり、それを細かく砕いて田んぼへ入れる。 ②木が腐って泥と一緒にしたものをもって、石垣の上に丸めては干す。	①夏のお盆すぎくらい ②夏から秋にかけて	・小エビを大根と炊いた ・貝を湯がいて食べたり、人参と一緒にたいたり
ZK 氏	①メタンガス				
ME 氏	①モラ ②スクモ	①取ってきたモラを乾かして畑と田んぼに入れていた ②スクモをとって乾かして代用燃料として使った。「スクモ取りに行く」と言っていた	①モラが取れたところは泥地でやわらかい所だった ②取れる場所は2箇所あり、大きい木が倒れていた。何年掘っても同じくらい取れた	①8月1日～9月いっぱいまで ②夏ごろ（9月1日から）	

分類	小中の湖								
カテゴリー	物理的								
要素	大きさ	深さ	水質	土質	水の流れ	湖底の地形	風向き（時期）	気温	波の高さ
OY氏			足元や下にある小石やジャリがあるのがすっきり見えるくらいきれいだった。舟の上からみても見えた。				芦刈の神さん柳があったあたりが強かった		
TH氏		弁天さんのところあたりで急に深くなるところがあった（ツボと呼ばれていたところ）。浅くて60～70センチくらい	石とか小石が見えて美しかった	石垣付近はジャリ					
FM氏		伊庭内湖はだいたい2mくらい	昔はきれいで、特にシジミ場が砂と小石できれいやった	伊庭内湖はヘドロという泥が溜まっていた		・シジミ場があって、浅くて洲になっていた。ジャリがあった ・スクモ地があって、伊庭内湖のどこでもスクモがとれた	伊庭内湖は北風しか入ってこない	冬に一度だけ湖面が凍ったことがある	大中の湖は小中の湖と比べて波が高かった
MI氏		・大中の湖は深かった ・伊庭内湖は、陸の端はわりと浅かったけど、中に進むにつれてだんだん深くなった	きれいやった	砂地	伊庭内湖...大中の湖の方に出ていった。北風に押されたときは弁天内湖の方に流れてた			一度だけ湖面が凍ったことがある	波は高かった

分類	小中の湖												
カテゴリー	自然環境												
要素	景観	流入河川	内湖生態系（植物，魚，貝）								湖辺生態系（植物，動物）		
			植物		魚		貝		その他の動物		植物		
			名前	時期	名前（方言）	時期	名前	時期	名前	時期	名前	時期	場所
OY氏							①ドブ貝（カラス貝）		①ヌカエビ ②スッポン				
TH氏					①？（ウロリ） ②ドチマン ③コイ ④ワタカ（ワタコ） ⑤ギギ ⑥ウナギ	①春～夏 ② ③	①シジミ（石垣付近） ②ヌカエビ ③田シジミ						
FM氏	伊庭内湖の縁はヨシで囲まれていた						①シジミ ②ダワ貝						
MI氏		伊庭川			①フナ ②コイ ③ナマズ ④ギギ ⑤ボテジャコ ⑥メダカ ⑦ウナギ ⑧アユ ⑨モロコ ⑩ワタカ（ワタコ） ⑪ハヤ（ハイ） ⑫オイカワ ⑬ドチマン	①梅雨時 ②年中 ③梅雨時 ④年中 ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨春 ⑩梅雨明け							

分類	小中の湖							
カテゴリー	自然環境			周辺の地名				
要素	湖辺生態系（植物，動物）			小中の湖の呼び名				
	動物			琵琶湖	大中の湖	西の湖	弁天内湖	伊庭内湖
	名前	時期	場所					
OY 氏	①カイツブリ ②カモ ③白サギ ④ヨシキリスズメ ⑤青サギ	①年中 ②冬 ③年中 ④春～夏			外湖（そとうみ）			
TH 氏	①カイツブリ ②カモ ③白サギ ④ヨシキリスズメ ⑤カニ ⑥モグラ ⑦ヤゴ	⑤田んぼ ⑥田んぼ ⑦田んぼ					弁天さんの湖（うみ）	※行き来がなかったため呼んでいなかった。 せいぜい『山東（やまひがし）の方』と呼んでいた
FM 氏	①タニシ ②モロコ	①田んぼ ②川			伊庭内湖			能登川内湖
MI 氏	①モロコ ②ハリヨ	①川 ②川			北の			南の

分類	小中の湖周辺の人びとの暮らしぶり						
カテゴリー	生業						
要素	漁業（漁法・漁具・場所・時期）						
	名前	漁法	漁具	場所	時期	とれた魚の種類（方言）	量
OY 氏	①ウナギの筒上げ ②投網 ③ヨシ捲き漁 ④魷	①明け方の3時ごろに行く ④魷かきと言って、魷のツボの中に入った魚を大きな網ですくう。朝の8時ごろに行く。田舟の8分目くらいまでとれる。	①竹の節を抜いた筒	①ヨシ地のそば一帯 ②大中の湖		②ハイ、フナ、コイ、ワタカ、モロコ、ハス ④ワタカ（夏）、コイ、フナ（年中）、モロコ（冬～春にかけて）	
TH 氏							
FM 氏	①コイの養殖			①伊庭内湖	①戦争中		
MI 氏							

分類	小中の湖と人々の暮らしぶり											
カテゴリー	生業											
要素	農業（歳時記）											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
OY氏												
TH氏												
FM氏												
MI氏												

分類	小中の湖と人々の暮らしぶり											
カテゴリー	生業											
要素	ヨシ産業（歳時記）											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
OY氏												
TH氏												
FM氏												
MI氏												

分類	小中の湖周辺の人々の暮らしぶり							
カテゴリー	生業	湖上交通					言い伝え	
要素	その他の生業	水路	港	航路	交易	境界	伝説	知恵
OY氏								
TH氏								
FM氏			伊庭には港があった	『八幡通い』の航路は円山から北の庄へ入って八幡彫りに入る	・伊庭の港には西豪州から物資を運んできた ・伊庭からは『八幡通い』という八幡に行く舟があった	境界はあったが、安土の人が伊庭内湖に入れなかったということはない		
MI氏		水路が縦横に入り組んでいた	能登川町に港があった。『浜能登川』と呼んでいた...交通機関の港		能登川町の『浜能登川』には琵琶湖汽船が寄ってた		獅子鼻	

分類	小中の湖周辺の人々の暮らしぶり						
カテゴリー	暮らし						
要素	年間行事	水位保持	水利用	遊び			
				名前	内容	場所	男の子だけか 女の子だけか
OY氏	①8月1日千日会... 親戚を呼んで舟の上でカシワのすき焼きをした。			①シジミとり, 貝とり ②貝釣り ③水泳 ④川すべり ※・弁天島...波があったため女の子は行かなかった。	②ヨシを食わしてドブ貝を取った. ③着替えの下着と板切れを持っていた. ④冬の凍った川の上をすべる	①まんすけさんの浜 (遠浅で砂地)	
TH氏	8月1日の千日祭... 弁天島のまわりを舟で3周時計回りにまわらないとお参りに行けなかった。そして、親戚を呼んで舟の上でカシワの入ったすき焼きを食べた。すき焼きには、鶏、ネギ、フが入っていた。		・お風呂の水, 飲み水...家の中にある井戸水 ・入った後のお風呂の水...湯殿にためて、そこがいっぱいになったらしし投げに移す。そして、下肥とまぜて肥を増やして、肥料として畑にまく。	①水泳 ②シジミつかみ ③カニつかみ ④貝とり ⑤エビすくい ⑥ウロリつかみ ⑦スケート ※弁天島...深くて危なかったことから遊びには行かなかった	①石垣のところあたりで、板を持って行って遊んだ ②トオシをもってつかんだ ③ ④ ⑤道具はトオシ ⑥手づかみでとっていた ⑦冬の凍った川の上を長靴のような靴をはいて歩いた	①石垣 ②石垣付近 ③まんすけさんの浜 ④空浜川 (もくべがわ) ⑤川 ⑥弁天内湖 ⑦川の上	
FM氏				①弁天さんの竿飛び ②伊崎不動の竿飛び ③航空母艦 ④ダワ貝とり ⑤魚つかみ	③田舟を裏返して、その上を走って湖に飛び込む ④足で貝を探して、潜ってとる ⑤川上から毛の付いた道具で追いたてて、川下で受け取る	①弁天島 ②伊崎不動 ③川	男女別々
MI氏			井戸水はなく、川の水を汲んで使っていた(川戸とか)	①スケート	①湖面が凍ったときに湖面の上を滑った		

分類	小中の湖周辺の人々の暮らしぶり				
カテゴリー	暮らし				
要素	天然資源（スクモ、モラなど）				料理
	名前	内容	方法	時期	
OY氏					<ul style="list-style-type: none"> ・ヌカエビと大根を一緒に炊いた ・カシワのジュンジュン...ウナギの白焼きしたのを砂糖と醤油をつけて食べる ・ワタカは新鮮なやつはカツオのたたきのようにして、取ってきて時間がたったものは煮付け. ・モロコは白焼きと煮付け ・フナとコイは子付けの御造り ・貝は人参と一緒に炊く ・ウロリは三歳と一緒に炊いて飴炊き ・ドブ貝は貝炊き湖やで炊いた ・ギギは開いて蒲焼 ・ナマズは味噌汁
TH氏					<ul style="list-style-type: none"> ・エビ...大根と炊いたり、てんぷらにしたりした. ・カニ...焼いて塩をつけて食べた ・ネギ...味噌汁 ・すき焼き...ご馳走だった ・コイのジャコ汁...コイを味噌汁で炊く ・ウナギの蒲焼
FM氏	<ul style="list-style-type: none"> ①スクモとり ②藻とり 	<ul style="list-style-type: none"> ①スクモをとってきて団子にして、炭やら練炭のかすやら、籾殻を混ぜて、それを天日で乾かして、そして風呂を炊くときに使った ②藻をとって川下の田んぼの淵へひと夏積み上げておくんや。そうすると、それが腐ってもうて土になるんや。その土を四角く切ってそれを舟に積んで田んぼへ持って行って、細かく砕くと肥料になる 	<ul style="list-style-type: none"> ①舟に乗ってとりに行った ②舟で藻をとりにいく. 	<ul style="list-style-type: none"> ① ②夏 	
MI氏	<ul style="list-style-type: none"> ①スクモ ②藻とり 	<ul style="list-style-type: none"> ①湖底から泥をとってきて、練って乾かしてこたつの中に入れてた ②藻をとって干して、そして田んぼに持って行って肥料にした 	<ul style="list-style-type: none"> ①湖底から泥をとってきた 		

Appendix3 参考 web ページ

3-1 琵琶湖博物館の画像（写真）データベース「湖と人のくらし写真アルバム」

<

http://www2.lbm.go.jp/scripts/STrieve.exe?S=S52030510421131&L=0&M=%8E%CA%90%5E%82%C5%8C%A9%82%E9%90%B6%8A%88%8E%6A&DtWORD=>

滋賀県立琵琶湖博物館 LAKE BIWA MUSEUM
写真の収蔵庫によろこそ

目次 アルバムの目次にもどる 用語集検索

一覧表(全体) 全体を表示します(写真で見る生活史, 6428件)

前のページ 先頭へ

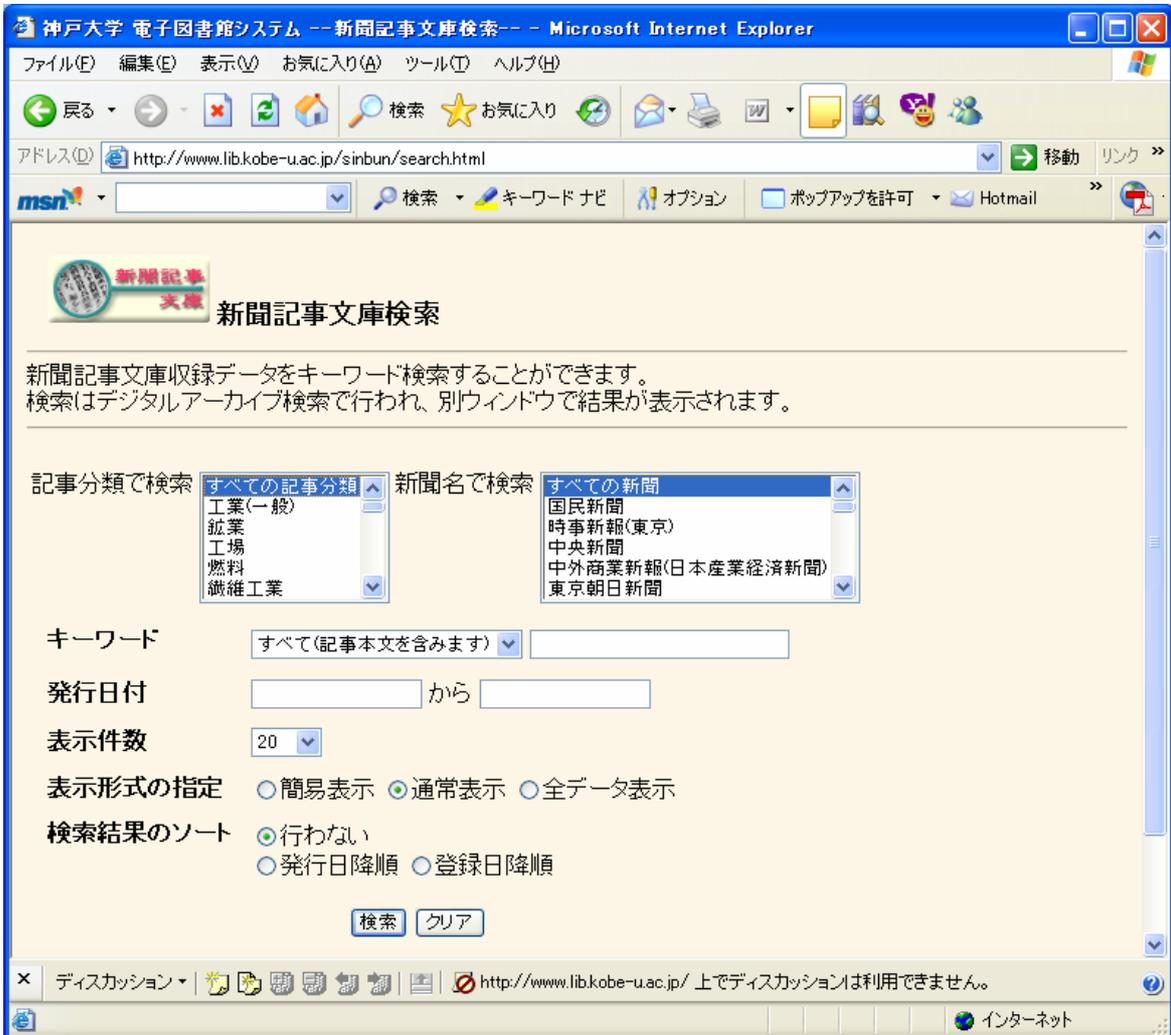
番号	内容
013372	漁業 湖西地域 昭和40年代 江若鉄道廃止の最終記念列車に乗りし、白鬚駅まで来た
013373	漁業 湖西地域 昭和40年代 江若鉄道廃止の最終記念列車に乗りし、白鬚駅まで来た
013374	交通・乗物 湖西地域 昭和40年代 昭和44年(1969年)11月1日、江若鉄道は廃止とな
013375	交通・乗物 湖西地域 昭和40年代 昭和44年(1969年)11月1日、江若鉄道は廃止とな
013376	交通・乗物 湖西地域 昭和40年代 昭和44年(1969年)11月1日、江若鉄道は廃止とな
013377	交通・乗物 湖西地域 昭和40年代 江若鉄道最終日。走行する列車と鉄道の廃止をつ
013378	交通・乗物 湖西地域 昭和40年代 江若鉄道最終日。走行する列車と鉄道の廃止をつ
013379	漁業 湖西地域 昭和40年代 江若鉄道廃止の最終記念列車に乗りし、白鬚駅まで来た
013380	漁業 湖西地域 昭和40年代 江若鉄道最終日、白鬚神社前の浜でモロコ漁のコアミを
013381	風景・景観 大津・湖南地域 昭和40年代 名神高速道路より三上山をのぞむ。大津公
013382	風景・景観 大津・湖南地域 昭和40年代 名神高速道路より三上山をのぞむ。大津公
013392	祭り 大津・湖南地域 昭和40年代 三井寺の千団子祭。植木や野菜の苗が並び、地元
013393	祭り 大津・湖南地域 昭和40年代 三井寺の千団子祭。今も植木の市が立ちにぎわう
013394	風俗 大津・湖南地域 昭和40年代 三井寺の千団子祭。この年ミスカー트가はやり
013395	祭り 大津・湖南地域 昭和40年代 三井寺の千団子祭。植木や野菜の苗が並び、地元
013410	祭り 大津・湖南地域 昭和50年代 琵琶湖ホテル庭で踊りが披露された江州音頭。

× ディスカッション http://www2.lbm.go.jp/ 上でディスカッションは利用できません。

インターネット

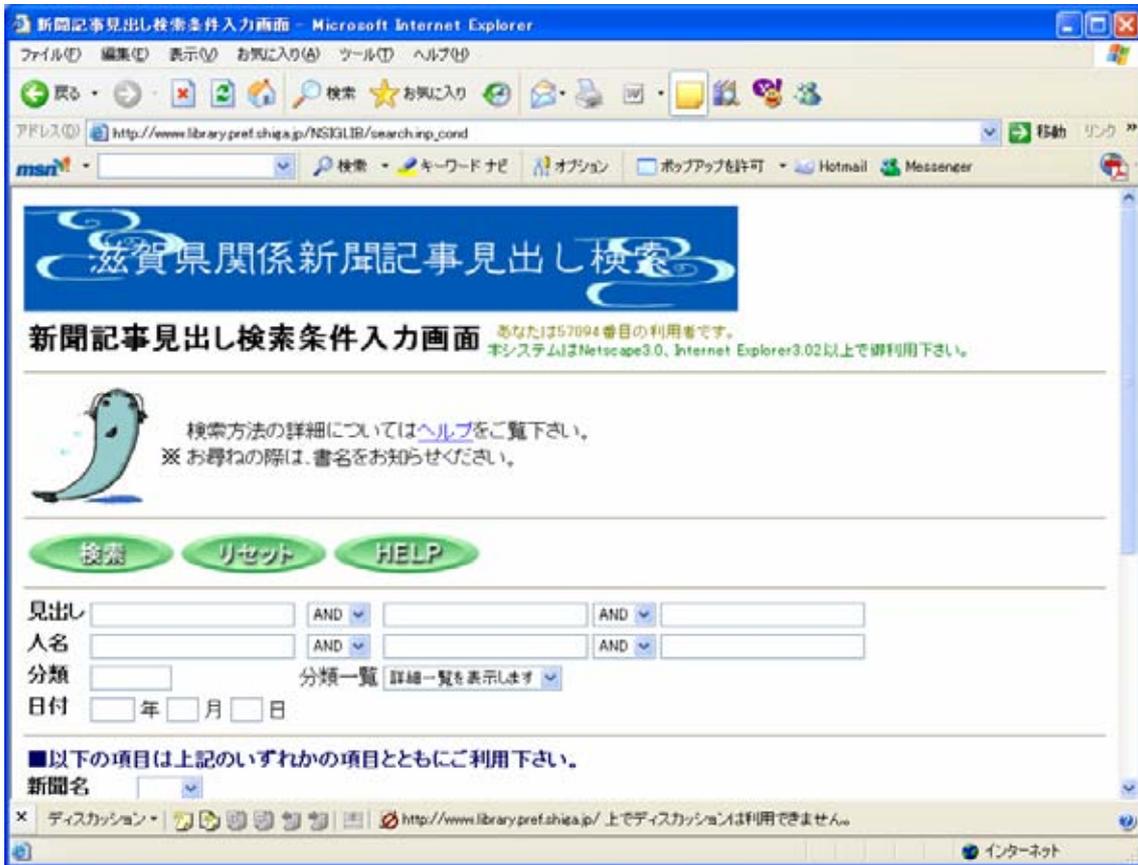
3-2 神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」

< <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/search.html> >



3-3 滋賀県立図書館「滋賀県関係新聞記事見出し検索」

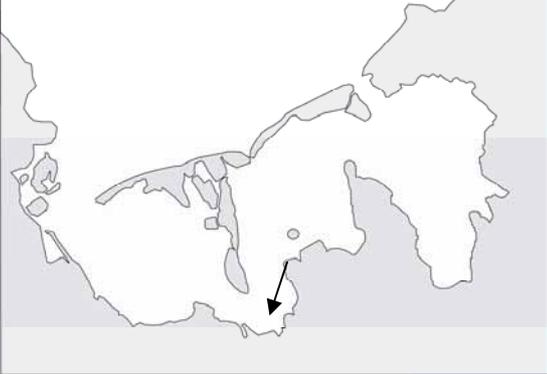
< http://www.library.pref.shiga.jp/NSIGLIB/search.inp_cond >

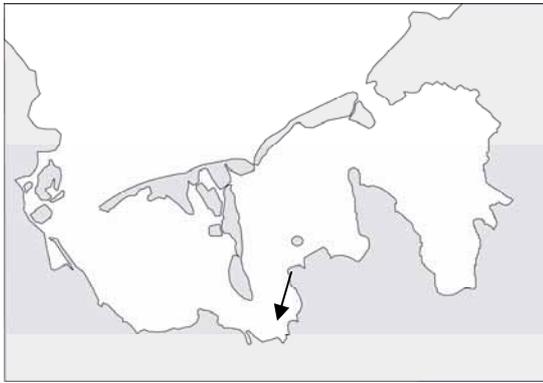


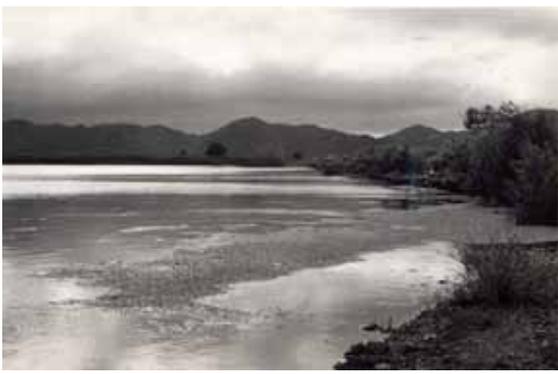
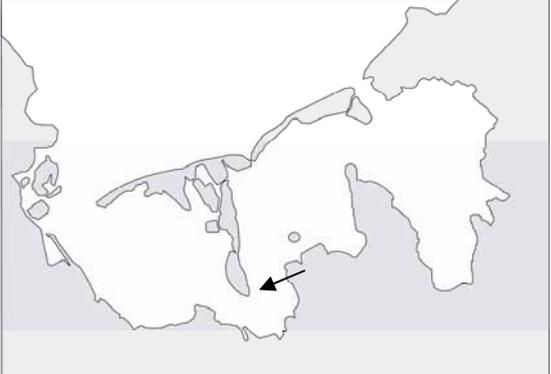
Appendix4 小中の湖写真集

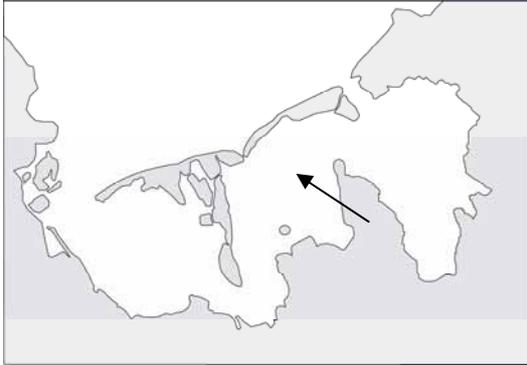
以下は本研究で収集した写真をまとめたものである．

本研究で使用している写真の著作権はそれぞれ、写真の撮影者にある．本研究では村瀬永太郎氏，奥田修三氏から
 使用権をいただいた．また，本研究で使用している 2 氏の写真の使用権は井手研究室にある．

4-1	写真名：小中の湖ポンプ場前
入手先：村瀬永太郎	撮影日：昭和 28 年 9 月 13 日
撮影者：村瀬永太郎	撮影地，撮影方向：
	
解説：	

4-2	写真名：現在の小中の湖のポンプ場
入手先：村瀬永太郎	撮影日：平成 17 年
撮影者：村瀬永太郎	撮影地，撮影方向：
	
解説：4-1 の写真とほぼ同じ位置から撮影した．現在のポンプ場周辺の様子．	

4-3	写真名：江ノ島方向に向かって
入手先：村瀬永太郎	撮影日：昭和 28 年 9 月 13 日
撮影者：村瀬永太郎	撮影地，撮影方向：
	
解説：	

4-4	写真名：安土山からみた大中の湖
入手先：村瀬永太郎	撮影日：昭和20年
撮影者：村瀬永太郎	撮影地，撮影方向：
	
	
<p>解説：既に小中の湖は干拓されており，奥に見える水面が大中の湖．</p>	

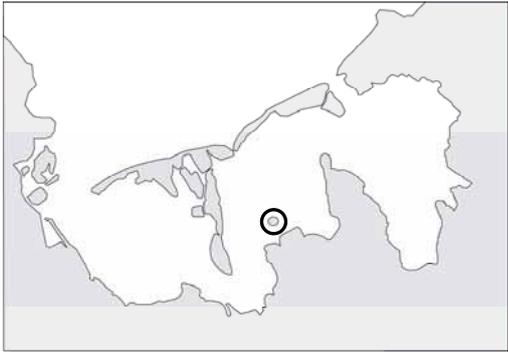
4-5	写真名：弁天島
入手先：奥田修三	撮影日：昭和5年ごろ
撮影者：安居槌次郎	撮影地，撮影方向：
	
<p>解説：冬の弁天島．湖面が凍っている．舟の上から撮影．</p>	

写真2

写真名：弁天さん



解説

小中の湖に福之島と言う小島があり海上安全の守護神として弁才天（弁天さん）が祀られていた。写真は船上から弁天さんを撮影したもの。

写真データ

入手先：奥田修三

撮影日：1933年頃

撮影者：奥田修三

撮影地：小中の湖中央付近

写真3

写真名：弁天さん



解説

小中の湖に福之島と言う小島があり海上安全の守護神として弁才天（弁天さん）が祀られていた。写真は船上から弁天さんを撮影したもの。

写真データ

入手先：奥田修三

撮影日：1933年頃

撮影者：奥田修三

撮影地：小中の湖中央付近

写真 4

写真名：昭和 33 年頃の船着場



解説

現在の永町公民館の近くまで入り江が入りこんでいた。写真はその入り江から西の湖の方向を撮影したもの。

写真データ

入手先：村瀬永太郎

撮影日：1958 頃

撮影者：不明

撮影地：永町公民館前

写真 5

写真名：昭和 47 年以降の船着場



解説

昭和 47 年以降の永町公民館前。公民館より西の湖を望む。写真 4 と同じアングルで写したもの。

写真データ

入手先：村瀬永太郎

撮影日：1972 年以降

撮影者：不明

撮影地：永町公民館前

Appendix5 文献から引用した写真

以下の写真は本学フィールドワークの報告書「環境フィールドワーク2 報告書」(2004, 2005)から引用した写真である。

5-1 環境フィールドワーク2 報告書(2004)

写真1

写真名：オオヨシキリの巣



解説

西の湖のヨシ地につくられたオオヨシキリの巣を上から撮影したもの。中には雛がいる。

写真データ

入手先：奥田修三

撮影日：2003年6月末日

撮影者：奥田修三

撮影地：西の湖

5-2 環境フィールドワーク2 報告書(2005)

写真1

写真名:



解説

写真データ

入手先: 荒川良作

撮影日:

撮影者:

撮影地:

写真2

写真名:



解説

写真データ

入手先: 荒川良作

撮影日:

撮影者:

撮影地:

写真3

写真名：



解説

写真データ

入手先：荒川良作

撮影日：

撮影者：

撮影地：

写真4

写真名：



解説

写真データ

入手先：荒川良作

撮影日：

撮影者：

撮影地：

写真5
写真名：



解説
写真データ
入手先：西孫兵衛
撮影日：
撮影者：
撮影地：

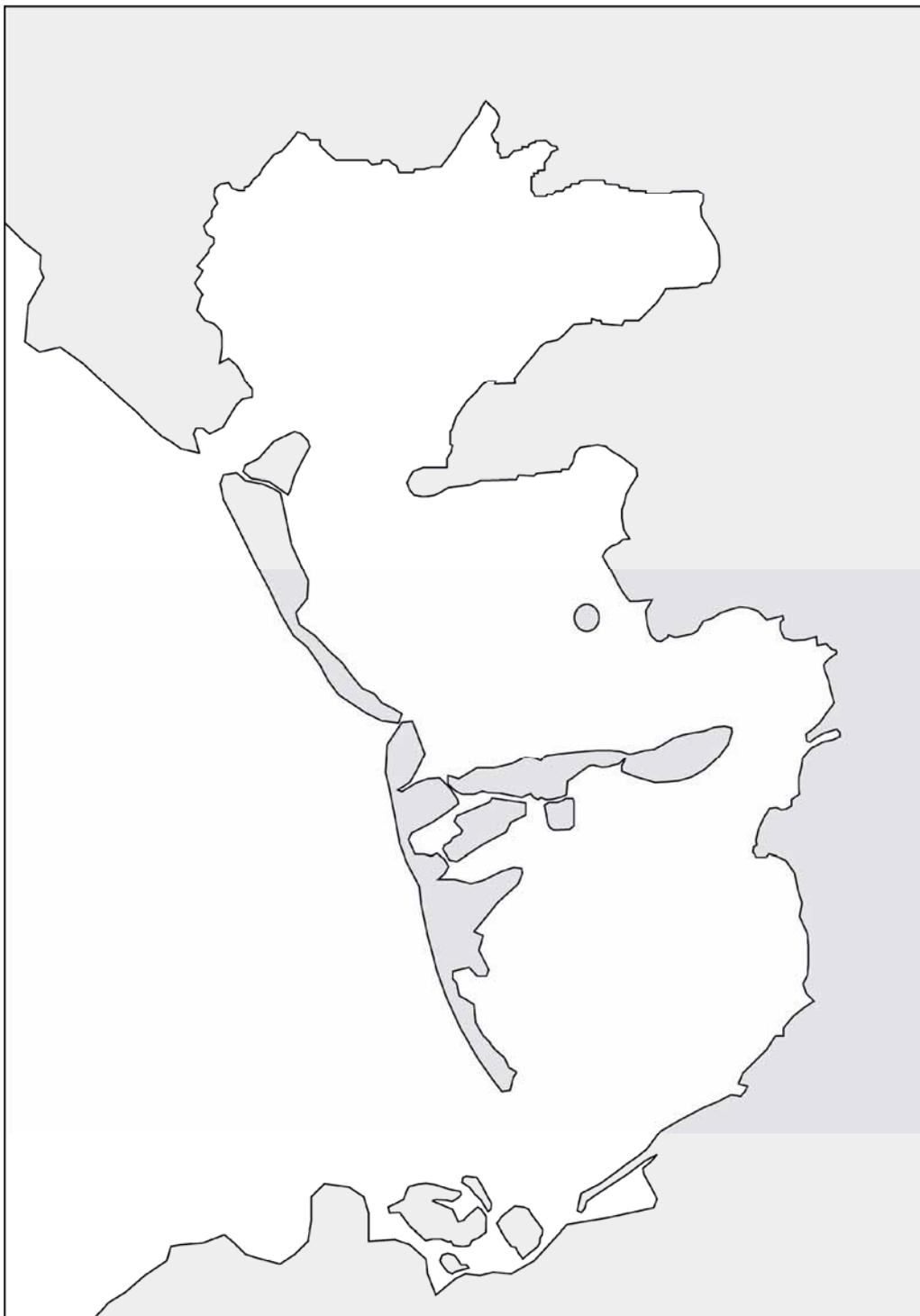
写真6
写真名：



解説
写真データ
入手先：西孫兵衛
撮影日：
撮影者：
撮影地：

Appendix6 小中の湖の白地図

以下の白地図は、漁場、水深などヒアリング調査で明らかになったことを書き込んでいくのに使用した。



Appendix7 動物確認表

ヒアリング調査で小中の湖で見ることのできた動物を以下の表は、「琵琶湖干拓史」に載っている大中の湖の動植物を基にして作成した。なお、近畿大学農学部水産学科の藤田朝彦氏に助言をもらいながら作成した。

鳥類

通し番号	科名	標準和名	方言	呼んでいた名称	チェック欄	備考
No.1	カラス科	ハシブトガラス				
No.2		ハシボソガラス				
No.3		カケス				
No.4	ムクドリ科	ムクドリ				
No.5		コムクドリ				
No.6	ハタオリドリ科	スズメ				
No.7		ニュウナイスズメ				
No.8	アトリ科	アトリ				
No.9		ウソ				
No.10		マヒワ				
No.11		シメ				
No.12		オオカワラヒワ				
No.13		イカル				
No.14		コイカル				
No.15		イスカ				
No.16		ベニバラウソ				
No.17	ホオジロ科	ホオジロ				
No.18		アオジ				
No.19		ホオアカ				
No.20		カシラダカ				
No.21		オオジュリン				
No.22		ミヤマホオジロ				
No.23		クロジ				
No.24	ヒバリ科	ヒバリ				
No.25	セキレイ科	セグロセキレイ				
No.26		ハクセキレイ				
No.27		キセキレイ				
No.28	メジロ科	メジロ				
No.29	モズ科	モズ				
No.30	ウグイス科	ウグイス				
No.31		オオヨシキリ				
No.32		コヨシキリ				
No.33	ツグミ科	ツグミ				
No.34		イソヒヨドリ				
No.35		ノゴマ				
No.36		トラツグミ				
No.37	ヒタキ科	ジョウビタキ				
No.38		オオルリ				
No.39	ヒヨドリ科	ヒヨドリ				

通し番号	科名	標準和名	方言	呼んでいた名称	チェック欄	備考
No.40	シジュウカラ科	ヤマガラ				
No.41		コガラ				
No.42		ヒガラ				
No.43	エナガ科	エナガ				
No.44	ツバメ科	ツバメ				
No.45		コシアカツバメ				
No.46	レンジャク科	ヒレンジャク				
No.47		キレンジャク				
No.48	キツツキ科	アカゲラ				
No.49		アオゲラ				
No.50		コゲラ				
No.51	カラセミ科	カワセミ				
No.52	ヨタカ科	ヨタカ				
No.53	フクロウ科	オオコノハズク				
No.54		コノハズク				
No.55		トラフズク				
No.56		コミミズク				
No.57		アオバズク				
No.58		フクロウ				
No.59	カッコウ科	カッコウ				
No.60	ハト科	キジバト				
No.61		アオバト				
No.62	カモメ科	コアジサシ				
No.63		ユリカモメ				
No.64	シギ科	タシギ				
No.65		クサシギ				
No.66		キアシシギ				
No.67		アオアシシギ				
No.68		オオソリハシシギ				
No.69		ホウロクシギ				
No.70		タカブシギ				
No.71		オオジシギ				
No.72		チュウジシギ				
No.73		シギ科	ヤマシギ			
No.74	タマシギ科	タマシギ				
No.75	チドリ科	ケリ				
No.76		タゲリ				
No.77		イカルチドリ				
No.78		コチドリ				
No.79		メダイチドリ				
No.80		シロチドリ				
No.81	クイナ科	クイナ				
No.82		ヒメクイナ				
No.83		ヒクイナ				
No.84		バン				
No.85		オオバン				

通し番号	科名	標準和名	方言	呼んでいた名称	チェック欄	備考
No.86	キジ科	ウズラ				
No.87		コジュケイ				
No.88		キジ				
No.89		ヤマドリ				
No.90	ハヤブサ科	ハヤブサ				
No.91		チゴハヤブサ				
No.92		チョウゲンボウ				
No.93	タカ科	ノスリ				
No.94		チュウヒ				
No.95		オオタカ				
No.96		ツミ				
No.97		トビ				
No.98	カモ科	オオハクチョウ				
No.99		マガンビシクイ				
No.100		マガモ				
No.101		カルガモ				
No.102		オカヨシガモ				
No.103		コガモ				
No.104		ヨシガモ				
No.105		シマアジ				
No.106		ハシビロガモ				
No.107		オシドリ				
No.108		ホシハジロ				
No.109		キンクロハジロ				
No.110		ホオジロガモ				
No.111		ミコアイサ				
No.112		ウミアイサ				
No.113	カワアイサ					
No.114	サギ科	アオサギ				
No.115		チュウダイサギ				
No.116		チュウサギ				
No.117		コサギ				
No.118		アマサギ				
No.119		ササゴイ				
No.120		ヨシゴイ				
No.121		ゴイサギ				
No.122	ウ科	カワウ				
No.123	ミズナギドリ科	オオミズナギドリ				
No.124	カイツブリ科	アカエリカイツブリ				
No.125		カイツブリ				
No.126		ハシジロアビ				

貝類

通し番号	科名	標準和名	方言	呼んでいた 名称	チェック 欄	備考
No.127	カワニナ科	ヤマトカワニナ				
No.128		カワニナ				
No.129	モノアラガイ科	モノアラガイ				
No.130	タニシ科	オオタニシ				
No.131		マルタニシ				
No.132	シジミ科	マシジミ				
No.133		セタシジミ				
No.134	イシガイ科	ドブガイ				
No.135		マルドブガイ				
No.136		カタハガイ				
No.137		カワシンジュガイ	カラスガイ			
No.138		イシガイ	カラスガイ			
No.139		ササノハガイ				
No.140		イケチョウガイ				
No.141		メンカラスガイ				
No.142	ヒラマキガイ科	カワネジガイ				
No.143		ビワコヒラマキガイ				
No.144	カワコザラガイ科	カワコザラガイ				
No.145	オカモノアラガイ科	カンサイオカモノアラガイ				

魚類

通し番号	科名	標準和名	方言	呼んでいた 名称	チェック 欄	備考
No.146	ヤツメウナギ科	スナヤツメ				
No.147	サケ科	アメノウオ				
No.148		イワナ				
No.149	アユ科	アユ				
No.150	ナマズ科	ビワコオオナマズ				
No.151		イワトコナマズ				
No.152		ナマズ				
No.153	ギギ科	ギギ	ギバチ			
No.154	アカザ科	アカザ	チョッキリ, サソリ			
No.155	ドジョウ科	ドジョウ				
No.156		ホトケドジョウ	オカメドジョウ			
No.157		シマドジョウ	ササノハドジョウ, タカノハ			
No.158		アユモドキ	ウミドジョウ			
No.159	コイ科	ニッポンバラタナゴ				
No.160		カネヒラ				
No.161		シロヒレタビラ				
No.162		ヤリタナゴ				
No.163		アブラボテ				
No.164		イチモンジタナゴ				

通し番号	科名	標準和名	方言	呼んでいた 名称	チェック 欄	備考
No.165	コイ科	イタセンバラ	ビワタナゴ			
No.166		ニゴイ	ミゴイ,マジカ, アラメゴイ,サイ			
No.167		タモロコ				
No.168		ホンモロコ				
No.169		イトモロコ				
No.170		デメモロコ				
No.171		スゴモロコ				
No.172		カマツカ	スナホリ			
No.173		ビワヒガイ				
No.174		ツチフキ	ドロモロコ,キ ツネモロコ, スナモロコ			
No.175		ムギツク				
No.176		ゼゼラ	ムギワラバエ, ボウズ			
No.177		モツゴ	イシモロコ,ク チボソ			
No.178		ウグイ	アカハラ,アカ ウオ			
No.179		アブラハヤ	ドロバエ			
No.180		オイカワ	シラハエ,ハヤ			
No.181		カワムツ	ムツ,モツ,ア カムツ,センダ イ			
No.182		ヌمامツ				
No.183		ハス	ケタ			
No.184	ワタカ	ワタコ,ウマウ オ,ゴオナ				
No.185	カワバタモロコ	キンタジャコ, キンタロバエ				
No.186	コイ					
No.187	フナ					
No.188	タウナギ科	タウナギ				
No.189	ウナギ科	ウナギ				
No.190	メダカ科	メダカ				
No.191	トゲウオ科	ハリヨ	ハリウオ,ハリ ンサバ			
No.192		ミナミトミヨ	サバジャコ			
No.193	タイワンドジ ョウ科	タイワンドジョウ	タイワン,ライ ギョ,ライヒー			
No.194		カムルチー				
No.195	カジカ科	カジカ				
No.196		ウツセミカジカ				
No.197	ハゼ科	ドンコ	ドチマン			
No.198		カワヨシノボリ	ウロリ			
No.199		トウヨシノボリ	ウロリ			
No.200		ウキゴリ	ゴリ			
No.201		イサザ				
No.202		ヌマチチブ				